

京間遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書VI

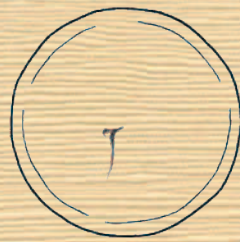
第89集

二〇〇四・三

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

京間遺跡

土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書VI



2004.3

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

# 序

土佐市バイパスにおける発掘調査は平成7年度の試掘調査に始まり、以来8年間に亘って光永・岡ノ下遺跡や天神遺跡など多くの発掘調査を行ってきました。土佐市では埋蔵文化財の発掘調査はほとんど行われておりませんでした。それら一連の発掘調査によってこれまで知られていなかった歴史が少しずつ明らかになってきています。

京間遺跡は平成12年度に行われた土佐市バイパス建設工事に伴う試掘調査によって初めて確認された遺跡で、平成15年度までの4年間に亘って調査を行いました。本遺跡は土佐市バイパス関連遺跡では仁淀川に最も近い場所に位置し、発掘調査では屋敷跡を確認したほか、県外からの搬入品など多くの遺物が出土しています。当地域の発展と共に、中世・近世の交易や文化の流れなど、新たな歴史を知る手がかりとなり、大変貴重な成果をあげることができました。今後とも本書が地域の埋蔵文化財への益々の理解を深めるものとなり、また広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、高知河川国道事務所、土佐市都市計画課、地元関係者の方々、発掘調査に従事して下さった方々には多大な御理解と御協力を頂き、心より感謝いたします。

平成16年3月

財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 島内 靖

# 例言

1. 本書は土佐市バイパス建設に伴い平成12年度から平成15年度にかけて発掘調査を実施した京間遺跡の発掘調査報告書である。なお、土佐市バイパス建設に伴う調査の経緯と経過、確認調査、調査の方法及び遺跡の地理的・歴史的環境については平成12年度に刊行した『光永・岡ノ下遺跡』－土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－に記している。
2. 本調査は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から受託し、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。
3. 京間遺跡は高知県土佐市高岡町に所在する中世から近世にかけての複合遺跡で、屋敷跡に関連するとみられる溝跡や掘立柱建物跡などが確認された。発掘調査は第Ⅰ調査地区から第Ⅲ調査地区の3区に分けて行い、発掘調査面積は、第Ⅰ調査地区が2,823㎡、第Ⅱ調査地区が3,670㎡、第Ⅲ調査地区が1,777㎡であった。
4. 発掘調査は次の体制で行った。

## 平成12年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 門田伍郎  
総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 大原裕幸  
調査総括：同調査課長 重森勝彦  
調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 高橋厚彦・岩本繁樹，同主任調査員 伊藤強・江戸秀輝，同調査員 下村裕・田中涼子，技術補助員 大原直美  
臨時職員：原真由美，福留美穂

## 平成13年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 門田伍郎  
総務：同総務課長 島内信雄，同主任 山本三津子，同主幹 中城英人  
調査総括：同調査課長 重森勝彦  
調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同主任調査員 中山真司・籠尾泰輔，同調査員 下村裕・田中涼子，技術補助員 大原直美  
臨時職員：福留美穂，坂本由美，馬場洋子

## 平成14年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 島内靖  
総務：同総務課長 久川清利，同主幹 中城英人・金子晃子  
調査総括：同調査課長 重森勝彦  
調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 堅田至・田中耕輔，同主任調査員 中山真司・籠尾泰輔，同調査員 下村裕・田中涼子，技術補助員 大原直美  
臨時職員：馬場洋子，西田佐知子

平成15年度

総括：財団法人埋蔵文化財センター所長 島内靖

総務：同総務課長 久川清利，同主任 池野かおり，同主幹 金子晃子・長谷川明生  
調査総括：同調査課長 横山耿一

調査担当：同調査第四班長 廣田佳久，同専門調査員 堅田至・田淵瑞世，同主任調査員  
中山真司，同調査員 下村裕・田中涼子，技術補助員 大原直美

臨時職員：西田佐知子，丸岡宜子

5. 本書の執筆は調査日誌抄を中山，籠尾，田淵，大原，それ以外を田中が担当し，編集等は廣田の指導のもと田中が行った。現場写真は江戸，中山，籠尾，田中が撮影し，遺物写真は廣田の指導のもと田中が撮影した。
6. 遺構については，SB(掘立柱建物跡)，SA(塀・柵列跡)，SK(土坑・土坑墓)，SD(溝跡)，SE(井戸跡)，P(ピット)等の略号も併用した。遺構番号は調査区ごと(第Ⅰ調査地区1001～，第Ⅱ調査地区2001～，第Ⅲ調査地区3001～)に通し番号とした。また，掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており，方位Nは旧日本座標系におけるGNであり，遺跡付近(国土基本図Ⅳ-ID18)の真北はGNに対し東に $0^{\circ}1'6''$ ，磁北はGNに対し東に $5^{\circ}48'35''$ 振っている。ただし，報告書抄録の緯度・経度は世界測地系で記してある。なお，掘立柱建物跡は縮尺1/200で模式図を掲載し，確認した柱穴は●，未検出の柱穴は○で表記している。
7. 遺物については原則として縮尺1/3で記載し，一部の遺物については縮尺を変えているが，各挿図にはスケールを表示している。遺物番号は遺構番号と同様，調査区ごと(第Ⅰ調査地区1001～，第Ⅱ調査地区2001～，第Ⅲ調査地区3001～)に通し番号とした。
8. 整理作業は下記の方々に行って頂いた。また，同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。  
石元清香，岩井涼子，島村加奈，岸本洋子，元木恵利子，坂本エリ，竹村小百合，土居江里子，森田直美，松田美香，宮地邦代，吉野絵里，森川歩，森沢美紀，原真由美，西村美喜
9. 調査にあたっては，建設省四国地方建設局(現国土交通省四国整備局)，高知工事事務所(現高知河川国道事務所)，土佐市バイパス監督官詰所，土佐市都市計画課のご協力を頂いた。また，地元住民の方々に，遺跡に対する深いご理解とご援助を頂き，厚く感謝の意を表したい。
10. 出土遺物は平成12年度が「00-10TK」，平成13年度が「01-2TK」，平成14年度が「02-4TK」，平成15年度が「03-2TK」と注記し，財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

# 本文目次

## 第I章 序章

1. はじめに .....	1
2. 調査の契機と経過 .....	2
(1) 契機と経過 .....	2
(2) 確認調査 .....	4

## 第II章 調査の概要

1. 調査の概要 .....	5
2. 調査日誌抄 .....	5

## 第III章 調査区の概要

1. 第I調査地区 .....	15
(1) 概要 .....	15
(2) 層序 .....	15
(3) 堆積層出土遺物 .....	16
(4) 遺構と遺物 .....	21
① 中世 .....	21
② 近世以降 .....	31
2. 第II調査地区 .....	54
(1) 概要 .....	54
(2) 層序 .....	54
① A・B区 .....	54
② C区 .....	56
(3) 堆積層出土遺物 .....	56
① A・B区 .....	56
② C区 .....	69
(4) 遺構と遺物 .....	72
① 中世 .....	72
② 近世以降 .....	119
3. 第III調査地区 .....	136
(1) 概要 .....	136
(2) 層序 .....	136
(3) 堆積層出土遺物 .....	138
(4) 遺構と遺物 .....	147
① 中世 .....	147

② 近世以降.....	170
第IV章 考察	
1. 中世について.....	177
2. 近世について.....	178
3. 井戸跡について.....	179
4. 窯跡について.....	179
5. まとめ.....	180

## 挿図目次

Fig. 1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図.....	1
Fig. 2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図 (S=1/100,000).....	2
Fig. 3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図 (S=1/10,000).....	2
Fig. 4 調査対象区域図及び調査区設定図 (S=1/2,500).....	3
Fig. 5 第I調査地区発掘調査風景.....	5
Fig. 6 SE-1001測量風景.....	7
Fig. 7 第II調査地区発掘調査風景.....	9
Fig. 8 第II調査地区空中撮影風景.....	10
Fig. 9 第III調査地区発掘調査風景.....	13
Fig. 10 第I調査地区中央部セクション図.....	16
Fig. 11 第I・II・V層出土遺物実測図 (土師質土器・備前焼・青磁ほか).....	17
Fig. 12 第V層出土遺物実測図 (近世陶器).....	18
Fig. 13 第V層出土遺物実測図 (近世磁器).....	18
Fig. 14 第VI層出土遺物実測図 (土師質土器).....	19
Fig. 15 第VI層出土遺物実測図 (青磁・土製品・石製品).....	20
Fig. 16 その他の出土遺物実測図 (瀬戸・美濃系陶器・近世陶器・近世磁器).....	21
Fig. 17 SB-1001.....	22
Fig. 18 SB-1002.....	22
Fig. 19 SB-1003.....	22
Fig. 20 SB-1004.....	22
Fig. 21 SB-1005.....	22
Fig. 22 SB-1006.....	23
Fig. 23 SB-1007.....	23
Fig. 24 SB-1008.....	23
Fig. 25 SB-1009.....	23

Fig. 26	SB-1010.....	23
Fig. 27	SB-1011.....	23
Fig. 28	SK-1009.....	26
Fig. 29	SK-1017.....	27
Fig. 30	SK-1003・1017・1022出土遺物実測図.....	27
Fig. 31	SK-1024.....	28
Fig. 32	SD-1001.....	29
Fig. 33	P-1001~1003出土遺物実測図.....	30
Fig. 34	SB-1012.....	31
Fig. 35	SB-1013.....	31
Fig. 36	SB-1014.....	31
Fig. 37	SB-1015.....	31
Fig. 38	SB-1016.....	32
Fig. 39	SB-1017.....	32
Fig. 40	SB-1018.....	32
Fig. 41	SB-1019.....	32
Fig. 42	SB-1020.....	32
Fig. 43	SB-1021.....	33
Fig. 44	SB-1022.....	33
Fig. 45	SB-1023.....	33
Fig. 46	SB-1024.....	33
Fig. 47	SB-1025.....	34
Fig. 48	SB-1026.....	34
Fig. 49	SB-1027.....	34
Fig. 50	SB-1028.....	35
Fig. 51	SB-1029.....	35
Fig. 52	SB-1015~1029出土遺物実測図.....	35
Fig. 53	SA-1003出土遺物実測図.....	37
Fig. 54	SK-1033.....	37
Fig. 55	SK-1038.....	37
Fig. 56	SK-1039.....	38
Fig. 57	SK-1041.....	39
Fig. 58	SK-1042.....	39
Fig. 59	SK-1045.....	40
Fig. 60	SK-1041・1044・1046出土遺物実測図.....	41
Fig. 61	SK-1050.....	42

Fig. 62	SK-1053.....	43
Fig. 63	SK-1060.....	44
Fig. 64	SK-1050・1053・1058～1060出土遺物実測図.....	45
Fig. 65	SD-1008・1009.....	46
Fig. 66	SD-1007・1008出土遺物実測図.....	47
Fig. 67	SD-1010・1011.....	47
Fig. 68	SD-1011出土遺物実測図.....	48
Fig. 69	SE-1001.....	50
Fig. 70	SE-1001出土遺物実測図.....	51
Fig. 71	P-1004・1005・1008・1009出土遺物実測図.....	53
Fig. 72	第Ⅱ調査地区A区セクション図.....	55
Fig. 73	第Ⅱ調査地区C区セクション図.....	56
Fig. 74	第Ⅰ層出土遺物実測図（青磁・近世磁器）.....	57
Fig. 75	第Ⅳ層出土遺物実測図（土師質土器・瓦質土器・青磁ほか）.....	57
Fig. 76	第Ⅳ層出土遺物実測図（近世陶器）.....	58
Fig. 77	第Ⅳ層出土遺物実測図（近世磁器・土製品）.....	60
Fig. 78	第Ⅴ層出土遺物実測図（須恵器・東播系須恵器）.....	61
Fig. 79	第Ⅴ層出土遺物実測図（土師質土器）.....	62
Fig. 80	第Ⅴ層出土遺物実測図（常滑焼・備前焼）.....	63
Fig. 81	第Ⅴ層出土遺物実測図（瓦質土器）.....	64
Fig. 82	第Ⅴ層出土遺物実測図（青磁・近世陶器）.....	64
Fig. 83	第Ⅴ層出土遺物実測図（土製品）.....	64
Fig. 84	第Ⅴ層出土遺物実測図（石製品・古銭）.....	65
Fig. 85	その他の出土遺物実測図（近世陶器）.....	66
Fig. 86	その他の出土遺物実測図（近世磁器1）.....	68
Fig. 87	その他の出土遺物実測図（近世磁器2）.....	69
Fig. 88	第Ⅳ層出土遺物実測図（青磁・近世陶器）.....	70
Fig. 89	第Ⅳ層出土遺物実測図（近世磁器）.....	71
Fig. 90	SB-2001.....	72
Fig. 91	SB-2002.....	72
Fig. 92	SB-2003.....	73
Fig. 93	SB-2004.....	73
Fig. 94	SB-2005.....	73
Fig. 95	SB-2006.....	73
Fig. 96	SB-2007.....	74
Fig. 97	SB-2008.....	74



Fig. 98	SB-2009.....	74
Fig. 99	SB-2010.....	75
Fig.100	SB-2011.....	75
Fig.101	SB-2012.....	75
Fig.102	SB-2013.....	75
Fig.103	SB-2014.....	75
Fig.104	SB-2015.....	76
Fig.105	SB-2016.....	76
Fig.106	SB-2017.....	76
Fig.107	SB-2018.....	76
Fig.108	SB-2019.....	76
Fig.109	SB-2020.....	77
Fig.110	SB-2021.....	77
Fig.111	SB-2022.....	77
Fig.112	SB-2023.....	77
Fig.113	SB-2024.....	77
Fig.114	SB-2025.....	78
Fig.115	SB-2026.....	79
Fig.116	SB-2027.....	79
Fig.117	SB-2006・2007・2024・2026出土遺物実測図.....	79
Fig.118	SK-2003.....	81
Fig.119	SK-2014.....	83
Fig.120	SK-2001~2018出土遺物実測図.....	83
Fig.121	SK-2021・2022.....	84
Fig.122	SK-2030.....	86
Fig.123	SK-2032.....	86
Fig.124	SK-2027~2029・2040出土遺物実測図.....	87
Fig.125	SK-2041.....	88
Fig.126	SK-2043.....	88
Fig.127	SK-2044.....	88
Fig.128	SK-2051.....	90
Fig.129	SK-2055.....	91
Fig.130	SK-2056.....	91
Fig.131	SK-2044~2065出土遺物実測図.....	93
Fig.132	SK-2068・2069.....	94
Fig.133	SK-2071・2072.....	95

Fig.134	SK-2075.....	96
Fig.135	SK-2079.....	97
Fig.136	SK-2084.....	98
Fig.137	SK-2087.....	98
Fig.138	SK-2092.....	99
Fig.139	SK-2072~2097出土遺物実測図.....	100
Fig.140	SD-2003・2004.....	101
Fig.141	SD-2001・2004出土遺物実測図.....	102
Fig.142	SD-2011・2022~2027.....	104
Fig.143	SD-2018~2020.....	105
Fig.144	SD-2011~2019出土遺物実測図.....	106
Fig.145	P-2001~2010出土遺物実測図.....	108
Fig.146	P-2011~2020出土遺物実測図.....	112
Fig.147	P-2021~2034出土遺物実測図.....	115
Fig.148	P-2035~2042出土遺物実測図.....	118
Fig.149	SB-2028.....	119
Fig.150	SB-2029.....	119
Fig.151	SB-2030.....	120
Fig.152	SB-2031.....	120
Fig.153	SK-2103.....	122
Fig.154	SK-2098~2103出土遺物実測図.....	122
Fig.155	SK-2104.....	123
Fig.156	SK-2107.....	123
Fig.157	SK-2106・2107出土遺物実測図.....	124
Fig.158	SK-2115.....	126
Fig.159	SK-2117.....	127
Fig.160	SK-2110・2111・2116・2118出土遺物実測図.....	127
Fig.161	SK-2119出土遺物実測図.....	128
Fig.162	SK-2120・2121出土遺物実測図.....	129
Fig.163	SD-2024・2025・2027.....	130
Fig.164	SD-2024出土遺物実測図.....	131
Fig.165	SD-2026.....	132
Fig.166	SD-2025・2027出土遺物実測図.....	133
Fig.167	SD-2028, SK-2121.....	134
Fig.168	P-2043~2046出土遺物実測図.....	135
Fig.169	第Ⅲ調査地区南西部セクション図.....	137

Fig.170	第Ⅰ層出土遺物実測図（近世磁器・石製品・古銭）	138
Fig.171	第Ⅳ層出土遺物実測図（須恵器・土師質土器・青花ほか）	139
Fig.172	第Ⅴ層出土遺物実測図（土師器・須恵器・瓦器）	141
Fig.173	第Ⅴ層出土遺物実測図（東播系須恵器）	142
Fig.174	第Ⅴ層出土遺物実測図（土師質土器）	143
Fig.175	第Ⅴ層出土遺物実測図（土師質土器・手づくね土器）	144
Fig.176	第Ⅴ層出土遺物実測図（瓦質土器）	145
Fig.177	第Ⅴ層出土遺物実測図（白磁・青磁）	145
Fig.178	第Ⅴ層出土遺物実測図（近世陶器・土製品・石製品ほか）	146
Fig.179	その他の出土遺物実測図（土師質土器・古銭・銅製品）	147
Fig.180	SB-3001	147
Fig.181	SB-3002	147
Fig.182	SB-3003	148
Fig.183	SB-3004	148
Fig.184	SB-3005	148
Fig.185	SB-3006	148
Fig.186	SK-3002	149
Fig.187	SK-3011	151
Fig.188	SK-3007～3016出土遺物実測図	152
Fig.189	SK-3020～3025出土遺物実測図	154
Fig.190	SK-3031	156
Fig.191	SK-3035・3036	157
Fig.192	SK-3049	159
Fig.193	SK-3031～3051出土遺物実測図	161
Fig.194	SD-3001～3003	162
Fig.195	SD-3004	162
Fig.196	SD-3010	163
Fig.197	SD-3015	164
Fig.198	SD-3017	165
Fig.199	SD-3019・3020	165
Fig.200	SD-3022	166
Fig.201	SD-3002～3022出土遺物実測図	166
Fig.202	P-3001～3006出土遺物実測図	167
Fig.203	P-3007～3013出土遺物実測図	169
Fig.204	SB-3007	170
Fig.205	SB-3007出土遺物実測図	170

Fig.206	SB-3008	170
Fig.207	SB-3009	171
Fig.208	SK-3052	171
Fig.209	SK-3052出土遺物実測図	172
Fig.210	SK-3057	173
Fig.211	SK-3058	173
Fig.212	SK-3061	174
Fig.213	SK-3057・3062出土遺物実測図	174
Fig.214	SK-3063	174
Fig.215	SU-3001	175
Fig.216	SU-3001出土遺物実測図	175
Fig.217	P-3014・3015出土遺物実測図	176

## 表目次

Tab. 1	第Ⅰ調査地区中世掘立柱建物跡計測表	24
Tab. 2	第Ⅰ調査地区中世塀・柵列跡計測表	24
Tab. 3	第Ⅰ調査地区近世掘立柱建物跡計測表	36
Tab. 4	第Ⅰ調査地区近世塀・柵列跡計測表	37
Tab. 5	第Ⅱ調査地区中世掘立柱建物跡計測表1	78
Tab. 6	第Ⅱ調査地区中世掘立柱建物跡計測表2	79
Tab. 7	第Ⅱ調査地区中世塀・柵列跡計測表	80
Tab. 8	第Ⅱ調査地区近世掘立柱建物跡計測表	120
Tab. 9	第Ⅱ調査地区近世塀・柵列跡計測表	120
Tab.10	第Ⅲ調査地区中世掘立柱建物跡計測表	149
Tab.11	第Ⅲ調査地区中世塀・柵列跡計測表	149
Tab.12	第Ⅲ調査地区近世掘立柱建物跡計測表	171

## 図版目次

PL. 1	第Ⅰ調査地区画像平面図 (S=1/500)	(南より)
PL. 2	第Ⅰ調査地区調査前風景 (南より)	
	第Ⅰ調査地区調査前風景 (北より)	
PL. 3	第Ⅰ調査地区北西部遺構検出状態 (南より)	
	第Ⅰ調査地区北西部遺構完掘状態	
PL. 4	第Ⅰ調査地区西部遺構完掘状態 (南より)	
	第Ⅰ調査地区西部遺構完掘状態 (南より)	
PL. 5	第Ⅰ調査地区中央部遺構検出状態	

- (南より)  
第Ⅰ調査地区中央部遺構完掘状態  
(南より)
- PL.6 第Ⅰ調査地区北西部遺構完掘状態  
(真上より)  
第Ⅰ調査地区西部遺構完掘状態  
(西上空より)
- PL.7 第Ⅰ調査地区下層確認トレンチ  
(南より)  
第Ⅰ調査地区北壁セクション(南より)
- PL.8 SB-1027・1028(北より)  
SK-1042(南東より)
- PL.9 SK-1053集石検出状態(北より)  
SD-1010・1011(南より)
- PL.10 SE-1001完掘状態(真上より)  
SE-1001半掘状態(北より)
- PL.11 SK-1023(東より), SK-1024(東より), SK-1042(南西より), SK-1045(東より), SD-1001(西より), SD-1010・1011(南より), SD-1012(南より), P-1006・1007(西より)
- PL.12 SB-1015柱穴古銭(1045)出土状態(南より), SB-1022柱穴鉄製品(1047)出土状態(南西より), SK-1017土師質土器(1038)出土状態(西より), SK-1022土師質土器(1039)出土状態(南より), SK-1060古銭(1068)出土状態(北より), SD-1007近世陶器(1071)出土状態(北より), SD-1011近世陶器(1078)出土状態(北より), SD-1011近世陶器(1080)出土状態(北より)
- PL.13 第Ⅱ調査地区(A区)画像平面図(S=1/400)
- PL.14 第Ⅱ調査地区調査前風景(南より)  
第Ⅱ調査地区調査前風景(北より)
- PL.15 第Ⅱ調査地区A区(北部)遺構検出状態(南より)  
第Ⅱ調査地区A区(北部)遺構完掘状態(北より)
- PL.16 第Ⅱ調査地区A区(南部)遺構検出状態(北より)  
第Ⅱ調査地区A区(南部)遺構完掘状態(北より)
- PL.17 第Ⅱ調査地区A区(北部)遺構完掘状態(北上空より)  
第Ⅱ調査地区A区(南部)遺構完掘状態(北上空より)
- PL.18 第Ⅱ調査地区B区(東部)遺構検出状態(南より)  
第Ⅱ調査地区B区(東部)遺構完掘状態(真上より)
- PL.19 第Ⅱ調査地区B区(西部)遺構検出状態(南東より)  
第Ⅱ調査地区B区(西部)遺構完掘状態(東上空より)
- PL.20 第Ⅱ調査地区C区遺構検出状態(南より)  
第Ⅱ調査地区C区遺構完掘状態(南より)
- PL.21 第Ⅱ調査地区東壁セクション1(西より)  
第Ⅱ調査地区東壁セクション2(西より)
- PL.22 SD-2004(南より)  
SD-2011(北より)
- PL.23 SK-2032(西より), SK-2037(東より), SK-2053(南より), SK-2055(西より), SK-2079(西より), SK-2092(西より), SK-2098(南より), SK-2104(南より)
- PL.24 SK-2105(東より), SK-2106(西よ

- り), SK-2114 (南より), SD-2024・2025・2027 (南より), SD-2026 (南より), SD-2018・2019 (西より), SB-2006柱穴土師質土器 (2097) 出土状態 (南より), SK-2098近世陶器 (2202) 出土状態 (南より)
- PL.25 SK-2106土師質土器 (2209) 出土状態 (西より), SK-2107石製品 (2211・2212) 出土状態 (南より), P-2001土師質土器 (2154) 出土状態 (西より), P-2009土師質土器 (2164) 出土状態 (北より), P-2014瓦質土器 (2170) 出土状態 (東より), P-2022古銭 (2180) 出土状態 (東より), P-2037土師質土器 (2195) 出土状態 (東より), P-2041土師質土器 (2200) 出土状態 (南東より)
- PL.26 第Ⅲ調査地区北西部遺構検出状態 (東より)  
第Ⅲ調査地区北西部遺構完掘状態 (東より)
- PL.27 第Ⅲ調査地区北東部近世遺構検出状態 (南東より)  
第Ⅲ調査地区北東部近世遺構完掘状態 (西より)
- PL.28 第Ⅲ調査地区北東部中世遺構検出状態 (西より)  
第Ⅲ調査地区北東部中世遺構完掘状態 (西より)
- PL.29 第Ⅲ調査地区北東部中世遺構完掘状態 (西上空より)  
第Ⅲ調査地区遠景 (西上空より)
- PL.30 第Ⅲ調査地区南部近世遺構検出状態 (東より)  
第Ⅲ調査地区南部近世遺構完掘状態 (東より)
- PL.31 第Ⅲ調査地区南部近世遺構完掘状態 (西より)
- 第Ⅲ調査地区南部近世遺構完掘状態 (南西上空より)
- PL.32 第Ⅲ調査地区下層確認トレンチ (東より)  
第Ⅲ調査地区南壁セクション (北より)
- PL.33 SB-3008・3009 (東より)  
SK-3035・3036 (東より)
- PL.34 SK-3031 (東より), SK-3049 (北より), SK-3063 (南より), SD-3010 (南より), SK-3011礎板出土状態 (南東より), SK-3025青磁 (3084) 出土状態 (南より), P-3004土師質土器 (3107) 出土状態 (東より), P-3007石製品 (3110) 出土状態 (南東より)
- PL.35 近世陶器 (皿), 近世陶器 (碗)
- PL.36 近世陶器 (皿), 備前焼 (播鉢)
- PL.37 土師質土器 (鍋・羽釜), 青磁 (碗)
- PL.38 土師質土器 (羽釜), 備前焼 (播鉢), 青磁 (碗・稜花皿), 青花 (皿), 近世陶器 (皿), 石製品 (砥石・五輪塔)
- PL.39 備前焼 (播鉢), 瀬戸・美濃系陶器 (天目茶碗), 近世陶器 (碗・皿), 近世磁器 (小杯・皿・仏飯器)
- PL.40 土師質土器 (鍋), 瓦質土器 (羽釜), 青磁 (碗), 近世陶器 (皿・甕), 近世磁器 (碗), 石製品 (五輪塔)
- PL.41 須恵器 (甕), 常滑焼 (甕), 瓦質土器 (羽釜・播鉢), 近世磁器 (碗), 土製品 (土錘)
- PL.42 近世磁器 (碗・皿・猪口)
- PL.43 東播系須恵器 (片口鉢), 手づくね土器 (皿), 備前焼 (播鉢), 瓦質土器 (播鉢), 白磁 (碗), 青磁 (碗), 近世磁器 (碗・蓋・皿), 土製品 (土錘), 石製品 (石鍋)
- PL.44 瓦器 (椀), 土師質土器 (羽釜), 備前焼

- (鉢), 青磁 (碗), 青花 (皿), 近世陶器 (皿), 近世磁器 (碗), 土製品 (土錘)
- PL.45 土師器 (甕), 土師質土器 (羽釜), 白磁 (碗・皿), 近世陶器 (碗・杯), 近世磁器 (碗), 石製品 (石鍋)
- PL.46 東播系須恵器 (片口鉢), 常滑焼 (甕), 備前焼 (播鉢), 白磁 (碗・杯), 青磁 (碗), 石製品 (砥石)
- PL.47 土師質土器 (杯), 近世磁器 (小杯), 土製品 (土錘)
- PL.48 土師質土器 (杯), 近世磁器 (碗), 古錢, 鉄製品 (刀子)
- PL.49 土師質土器 (杯・小皿), 瀬戸・美濃系陶器 (皿), 青磁 (盤), 青花 (皿), 近世陶器 (皿), 石製品 (砥石)
- PL.50 土師質土器 (小皿・炮烙), 青磁 (盤), 近世陶器 (碗), 古錢
- PL.51 土師質土器 (杯・小皿), 瓦質土器 (羽釜), 土製品 (土錘), 石製品 (硯), 古錢
- PL.52 土師質土器 (杯・小皿), 瀬戸・美濃系陶器 (皿), 近世陶器 (皿), 近世磁器 (皿), 古錢, 鉄製品 (刀子)
- PL.53 土師質土器 (杯・小皿), 青花 (碗), 近世磁器 (紅皿), 土製品 (土錘), 古錢
- PL.54 東播系須恵器 (碗), 土師質土器 (杯・小皿), 青磁 (皿), 古錢, 銅製品 (簪・煙管), 鉄製品 (釘)

## 付図目次

- 付図1 京間遺跡第Ⅰ調査地区遺構平面図 (S=1/200)
- 付図2 京間遺跡第Ⅱ調査地区遺構平面図 (S=1/200)
- 付図3 京間遺跡第Ⅲ調査地区中世遺構平面図 (S=1/200)
- 付図4 京間遺跡第Ⅲ調査地区近世以降遺構平面図 (S=1/200)

### 第Ⅰ調査地区調査概要

調査地区	日付	実働	調査面積	延べ面積	主な遺構	備考
中央部	2001.1.19 ~ 2.20	18日	996m <sup>2</sup> (1面)	996m <sup>2</sup>	土坑79基, 溝跡5条 ピット554個	
北西部	2001.2.26 ~ 3.8	7日	265m <sup>2</sup> (1面)	265m <sup>2</sup>	土坑8基, 溝跡4条 ピット12個	
南西部	2001.5.21 ~ 6.18	12日	267m <sup>2</sup> (1面)	311m <sup>2</sup>	土坑3基, ピット55個	下層確認TR 44m <sup>2</sup>
西部1	2001.6.4 ~ 7.2	13日	122m <sup>2</sup> (1面)	122m <sup>2</sup>	土坑4基, 溝跡5条 ピット15個	
西部2	2001.6.19 ~ 7.3	7日	171m <sup>2</sup> (1面)	171m <sup>2</sup>	土坑6基, 溝跡1条 ピット22個	
西部3	2001.7.3 ~ 7.10	6日	141m <sup>2</sup> (1面)	141m <sup>2</sup>	土坑3基, ピット55個	
北東部	2001.7.5 ~ 7.10	4日	81m <sup>2</sup> (1面)	81m <sup>2</sup>	溝跡1条, ピット7個	
東部	2001.6.28 ~ 7.10	6日	459m <sup>2</sup> (1面)	544m <sup>2</sup>	土坑1基, 溝跡2条 ピット57個	下層確認TR 85m <sup>2</sup>
南東部	2001.5.24 ~ 6.26	17日	321m <sup>2</sup> (2面)	525m <sup>2</sup>	土坑11基, 溝跡3条 ピット62個, 井戸跡1基	
合計		55日	2,823m <sup>2</sup>	3,156m <sup>2</sup>	土坑115基, 溝跡21条 ピット849個, 井戸跡1基	

### 第Ⅱ調査地区調査概要

調査地区	日付	実働	調査面積	延べ面積	主な遺構	備考
A区北部	2001.7.30 ~ 9.25	32日	1,216m <sup>2</sup> (1面)	1,293m <sup>2</sup>	土坑58基, 溝跡4条 ピット805個	下層確認TR 77m <sup>2</sup>
A区南部	2001.9.27 ~ 11.9	23日	839m <sup>2</sup> (1面)	889m <sup>2</sup>	土坑180基, 溝跡11条 ピット1,210個	下層確認TR 50m <sup>2</sup>
B区東部	2002.9.5 ~ 9.24	11日	460m <sup>2</sup> (1面)	521m <sup>2</sup>	土坑70基, 溝跡7条 ピット320個	下層確認TR 61m <sup>2</sup>
B区西部	2003.5.6 ~ 6.12	21日	1,002m <sup>2</sup> (1面)	1,083m <sup>2</sup>	土坑6基, 溝跡4条 ピット564個	下層確認TR 81m <sup>2</sup>
C区	2003.6.25 ~ 6.30	4日	153m <sup>2</sup> (1面)	153m <sup>2</sup>	土坑3基, 溝跡1条 ピット23個	
合計		91日	3,670m <sup>2</sup>	3,939m <sup>2</sup>	土坑317基, 溝跡27条 ピット2,992個	

### 第Ⅲ調査地区調査概要

調査地区	日付	実働	調査面積	延べ面積	主な遺構	備考
北西部	2002.6.26 ~ 7.3	5日	557m <sup>2</sup> (1面)	594m <sup>2</sup>	土坑4基, 溝跡3条 ピット36個	下層確認TR 37m <sup>2</sup>
北東部	2002.7.5 ~ 9.6	32日	662m <sup>2</sup> (2面)	1,385m <sup>2</sup>	土坑115基, 溝跡17条 ピット482個, 畝状遺構1群	下層確認TR 61m <sup>2</sup>
南部	2002.9.26 ~ 10.28	20日	558m <sup>2</sup> (2面)	1,167m <sup>2</sup>	土坑55基, 溝跡9条 ピット534個	下層確認TR 51m <sup>2</sup>
合計		57日	1,777m <sup>2</sup>	3,146m <sup>2</sup>	土坑174基, 溝跡29条 ピット1,052個, 畝状遺構1群	



# 第 I 章 序章

## 1. はじめに

本書は、高知県教育委員会が国土交通省四国整備局から業務委託を受けた土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査について、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成12年度から15年度にかけて実施した京間遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。この一連の調査は国土交通省四国整備局高知工事事務所が実施している土佐市バイパス建設工事に伴い工事区域内に所在する遺跡(埋蔵文化財)の内、工事の影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い、記録保存を図ることを目的としている。

京間遺跡は平成12年度に実施した土佐市バイパス建設に伴う試掘調査によって確認された遺跡で、仁淀川右岸の自然堤防上に立地する。試掘調査では字摺木、北京間、京間、南京間を中心に中近世の遺構が検出され、遺跡は南北約300m、東西約100mの範囲に拡がることが確認された。試掘調査の結果を受けて平成12年度から実施した本調査では、12世紀から17世紀にかけての遺構・遺物が出土しており、長期間にわたり集落が形成されていたと考えられ、比較的安定した土地であったことが窺える。また、調査対象地は現在の仁淀川堤防に近接しており、高岡親王が船で着いたという伝説が残る大銀杏も見える位置である。出土遺物には多くの搬入品もみられ、水利にも恵まれた土地であったといえる。



Fig.1 高知県土佐市及び土佐市バイパス関連遺跡位置図

## 2. 調査の契機と経過

### (1) 契機と経過

平成8年度から土佐市バイパス建設に伴って市道都市計画道路1号線以西について本調査を実施しており、平成11年はそれ以降についても土佐市バイパスが建設されることとなり、平成11・12年度に確認調査を行った。平成12年度に実施した確認調査では、周知の遺跡である野田遺跡の端を確認するとともに、新たに京間遺跡の存在が明らかになった。両遺跡とも仁淀川右岸の自然堤防上に立地する遺跡で、両遺跡間は約200mあり、自然堤防が南北に延びていること

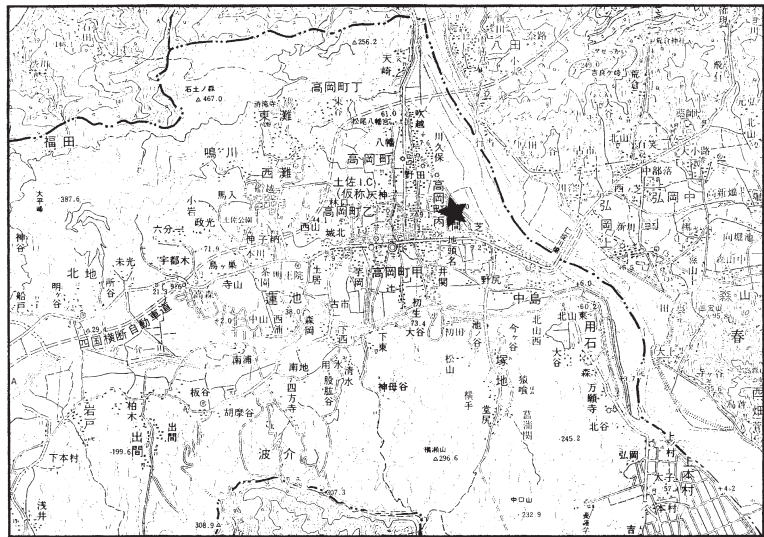


Fig.2 土佐市バイパス関連遺跡群位置図 (S=1/100,000)

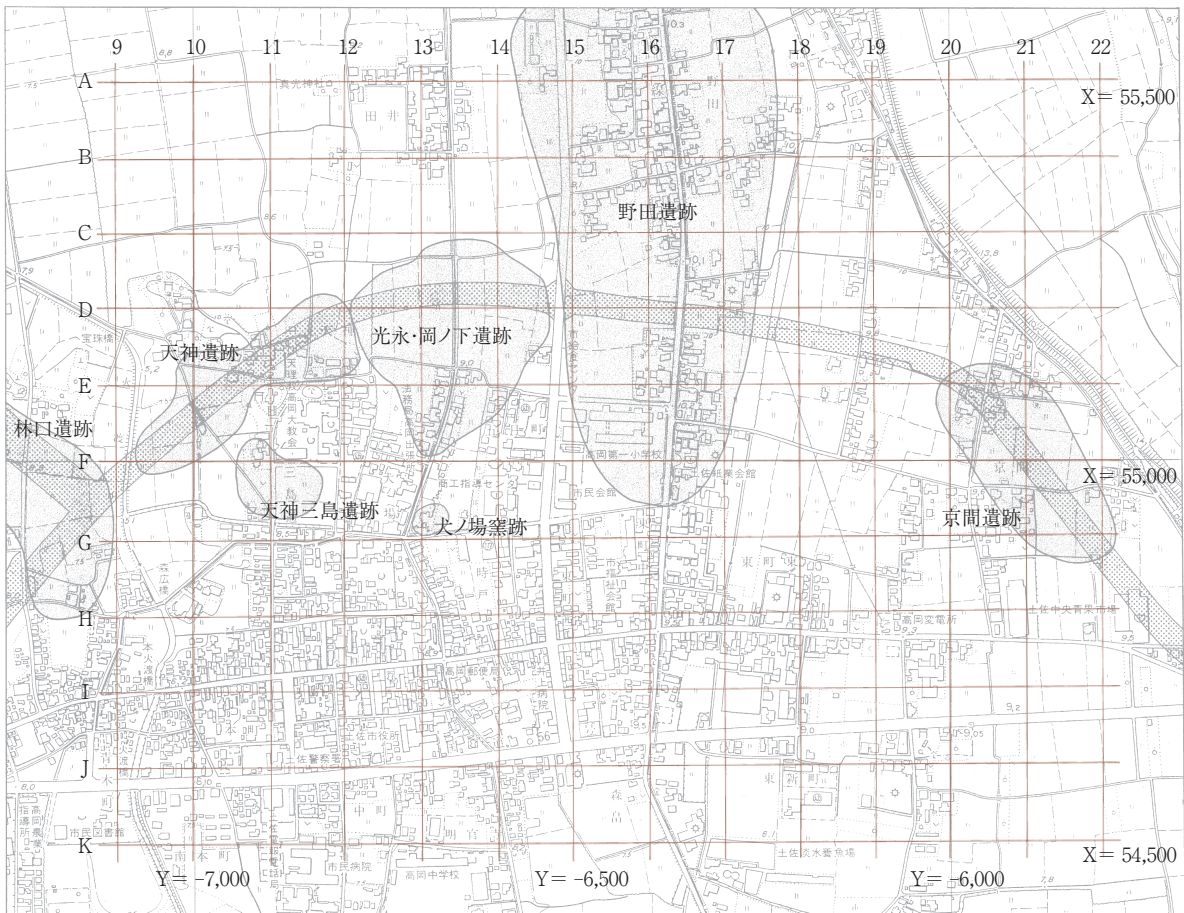


Fig.3 土佐市バイパス関連遺跡及びグリッド設定図 (S=1/10,000)

から遺跡もそれに沿った形となっている。また、地形の高い自然堤防頂部には江戸時代に造られた水路が走っている。

京間遺跡の調査は平成12年度から15年度の4年に互って実施した。また、調査区は市道によって分けられ、南から順に第I調査地区、第II調査地区、第III調査地区と呼称した。平成12年度には京



Fig.4 調査対象区域図及び調査区設定図 (S=1/2,500)

間遺跡南部(第Ⅰ調査地区)の工事用道路部分(幅約10m, 延長90m), 平成13年度には第Ⅰ調査地区の残りの部分と京間遺跡中央部(第Ⅱ調査地区)の南部の調査を行った。続く平成14年度に京間遺跡北部(第Ⅲ調査地区)と第Ⅱ調査地区の北部の調査を行い, 更に平成15年度にも残っていた第Ⅱ調査地区の北部の調査を行い, すべての調査を完了した。

遺構は特に第Ⅱ調査地区で多く検出されたが, 第Ⅱ調査地区北部と第Ⅲ調査地区は調査前は宅地であったため, 攪乱や削平を受けている部分も多くみられた。

## (2) 確認調査

確認調査は平成12年度に3回に分けて行われ, いずれも5×5mのトレンチを設定した。第1次は平成12年9月26日に京間地区の地下道建設部分を対象に3ヶ所, 第2次は9月25・26日に京間地区の残りの部分を対象に7ヶ所, 第3次は12月19日～22日にかけて北京間・南京間地区を対象に8ヶ所, 合計18ヶ所にトレンチを設定して行った。その結果18ヶ所のトレンチのうち13ヶ所のトレンチから遺物包含層並びに遺構が確認された。遺構が検出されたのは主に地形の高い調査対象地の北側の部分で, 遺物包含層はシルト層または砂質シルト層で, 仁淀川に近接している様相がみられるものの, 13～16世紀にかけての比較的長期間にわたる遺物が出土した。また, 南端に設定した2ヶ所のトレンチでは遺構が検出されず, 地形は国道56号線のある南に向かって下がっていくものとみられ, これらの南端に設定した2ヶ所のトレンチ以北が遺跡の範囲であると考えられる。

以上の結果から北京間地区, 京間地区と南京間地区の南端部を除く部分が本調査の必要な箇所と判断された。

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 1. 調査の概要

京間遺跡では、中世と近世以降の遺構を検出した。遺物包含層は削平を受けていた部分も多く、一部遺存していないところもあったが、遺構は調査区全面で検出された。特に、第Ⅱ調査地区では遺構の密度が高く、掘立柱建物跡や溝跡、土坑など多くの遺構を検出し、野田遺跡と同様の溝で囲まれた屋敷跡と推察される。遺物は12世紀から16世紀にかけての土師質土器を中心に、東播系須恵器、瓦器、石鍋、瓦質土器、古瀬戸、常滑焼、備前焼、白磁、青磁、青花など多様なものがみられた。

また、近世以降についても掘立柱建物跡や溝跡、土坑などを検出している。これらの掘立柱建物跡や溝跡の主軸方向は中世のものとはほとんど変わっておらず、集落が長期にわたって存在していたものと考えられ、仁淀川に近接していながらも比較的安定していた土地であったことが窺える。遺物は17世紀初めの肥前系陶磁器や18世紀から19世紀にかけての肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器、能茶山窯製品などがみられる。

一方、京間遺跡北西部にあたる第Ⅲ調査地区は宅地であったこともあり、近代以降の攪乱を多くの部分で受けていたものの、中世と近世の遺物包含層を確認した。また、西に向かって地形が大きく下がっており、西端部では遺構の密度は低く、畝状遺構または水田耕作に伴うと考えられる溝跡などが検出され、遺跡の縁辺部とみられる様相を呈していた。

### 2. 調査日誌抄

#### 第Ⅰ調査地区中央部 2001.1.19～2.20 .....

- |                                       |                                     |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1.19 調査区の周囲に安全柵を設置する。                 | 調査を開始する。                            |
| 1.22 調査区北部より重機による土層掘削を開始する。           | 2.8 調査区北部の遺構の調査を行う。土坑より陶磁器類が多く出土する。 |
| 1.23 重機による土層掘削と併行して、遺構検出を行う。          | 2.9 調査区南部の遺構の調査を行う。                 |
| 1.24 調査区北部の重機による土層掘削を行う。              | 2.13 引き続き調査区南部の遺構の調査を行い、併           |
| 1.26 調査区南部の重機による土層掘削を行う。              |                                     |
| 1.29 引き続き南部の重機による土層掘削を行い、併行して遺構検出を行う。 |                                     |
| 1.30 引き続き南部の重機による土層掘削と遺構検出を行う。        |                                     |
| 1.31 重機による土層掘削を終了する。                  |                                     |
| 2.2 グリッド杭の設定と遺構検出状態の写真撮影を行う。          |                                     |
| 2.5 遺構配置図を作成し、調査区北部から遺構の              |                                     |



Fig.5 第Ⅰ調査地区発掘調査風景

- 行して平面測量を行う。
- 2.14 調査区北部の遺構を中心に調査を行い、併せて平面測量を行う。
- 2.15 調査区南部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 2.16 遺構の調査を終了する。
- 第Ⅰ調査地区北西部 2001.2.26～3.8** .....
- 2.26 調査区北部より重機による土層掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。
- 2.27 重機による土層掘削を終了し、遺構検出を行う。
- 3.1 遺構検出状態の写真撮影と遺構配置図の作成を行い、調査区北部より遺構の調査を開始する。
- 2.19 平面測量を終了し、調査区北部からレベル実測を行う。
- 2.20 遺構完掘状態の写真撮影とレベル実測を終了し、第Ⅰ調査地区中央部の調査を完了する。
- 3.2 引き続き調査区北部の遺構の調査を行う。
- 3.5 調査区南部の遺構の調査を行う。
- 3.7 遺構の調査と平面測量を終了する。
- 3.8 遺構完掘状態の写真撮影とレベル実測を行い、第Ⅰ調査地区北西部の調査を完了する。
- 第Ⅰ調査地区南西部 2001.5.21～6.18** .....
- 5.21 安全柵を設置し、調査区南部より重機による土層掘削と遺構検出を開始する。
- 5.22 雨天のために作業を中止する。
- 5.23 雨天のために作業を中止する。
- 5.24 重機による土層掘削、遺構検出、グリッド杭の設定を行い、遺構配置図の作成を開始する。西壁セクションの写真撮影を行う。
- 5.25 遺構配置図の作成、遺構検出状態の写真撮影及び平板測量を行う。
- 5.28 遺構の調査を開始し、ほぼ完了する。併せてセクション図を作成する。
- 5.29 遺構完掘状態の写真撮影を行い、平面測量を終了する。
- 5.30 南壁セクション図を作成する。
- 5.31 レベル実測を行う。
- 6.5 雨天のために作業を中止する。
- 6.6 雨天のために作業を中止する。
- 6.12 東壁セクション図の作成を行う。
- 6.13 引き続き東壁セクション図の作成を行う。
- 6.14 雨天のために作業を中止する。
- 6.15 明日の航空写真撮影に備えて精査を行い、引き続き東壁セクション図の作成を行う。
- 6.16 航空写真撮影を行う。
- 6.18 下層確認トレンチを設定し、セクション図の作成を行う。第Ⅰ調査地区南西部の調査を完了する。
- 第Ⅰ調査地区南東部 2001.5.24～6.26** .....
- 5.24 水路を確保し、調査区南部より重機による土層掘削を開始する。併行してグリッド杭の設定と遺構配置図を作成する。
- 5.25 重機による土層掘削を終了する。
- 5.28 遺構検出、グリッド杭の設定及び近世遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図を作成し、調査区北部より遺構の調査を開始する。
- 5.29 引き続き調査区北部の遺構の調査を行う。ピットより寛永通宝が出土する。
- 5.30 調査区中央部の遺構の調査を行い、併せてSE-1001の平面図を作成する。
- 5.31 引き続き調査区中央部の遺構の調査を行う。
- 6.1 調査区南部の遺構の調査を行い、併せて平板測量、平面測量及びレベル実測を行う。
- 6.4 調査区の精査を行い、近世遺構完掘状態の写真撮影を行う。平面測量とレベル実測を終了し、北東隅より中世遺物包含層の人力掘削を開始する。

- 6.5 雨天のために作業を中止する。
- 6.6 雨天のために作業を中止する。
- 6.7 SE-1001の調査を行う。中世遺物包含層の人力掘削がほぼ終了する。
- 6.8 グリッド杭の設定ならびに遺構検出を行い、中世遺構検出状態の写真撮影、遺構配置図の作成を行う。また東壁セクションの写真撮影を行う。
- 6.11 中世の遺構の調査を開始する。東壁セクション図を作成する。
- 6.12 中世の遺構の調査をほぼ終了する。引き続きSE-1001の調査を行い、火輪と石臼が出土する。北壁セクション図の作成と写真撮影を行う。
- 6.13 遺構の調査と精査を終了し、中世遺構完掘状態の写真撮影を行い、平面測量を開始する。SE-1001を完掘し、底で井筒を確認する。
- 6.14 雨天のために作業を中止する。
- 6.15 明日の航空写真撮影に備えて精査を行う。平

面測量、レベル実測及び北壁セクション図の作成を行う。

- 6.16 航空写真撮影を行う。
- 6.18 SE-1001の測量を行う。
- 6.20 雨天のために作業を中止する。
- 6.21 雨天のために作業を中止する。
- 6.22 雨天のために作業を中止する。
- 6.26 SE-1001を半裁し、写真撮影とセクション図の作成を行い、第Ⅰ調査地区南東部の調査を完了する。



Fig.6 SE-1001測量風景

第Ⅰ調査地区西部 2001.6.4~7.2 .....

- 6.4 重機による土層掘削を開始し、ほぼ終了する。
- 6.5 雨天のために作業を中止する。
- 6.6 雨天のために作業を中止する。
- 6.8 遺構検出を行う。
- 6.11 遺構検出を終了し、遺構検出状態の写真撮影、遺構配置図の作成を行う。
- 6.12 平板測量を行う。
- 6.13 遺構の調査を開始し、併せて平面測量を行う。
- 6.14 雨天のために作業を中止する。
- 6.15 引き続き遺構の調査を行う。
- 6.19 西壁セクション図を作成する。
- 6.20 雨天のために作業を中止する。
- 6.21 雨天のために作業を中止する。

- 6.22 雨天のために作業を中止する。
- 6.25 遺構の調査と平面測量を行う。
- 6.26 引き続き遺構の調査を行う。
- 6.27 遺構の調査と併行して、セクション図を作成する。
- 6.28 引き続き遺構の調査と併行して、平面測量及びレベル実測、セクション図の作成を行う。
- 6.29 遺構の調査を終了し、平面測量及びレベル実測を行う。
- 7.2 調査区を精査し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。西壁セクション図を作成し、第Ⅰ調査地区西部の調査を完了する。

第Ⅰ調査地区西部 2001.6.19~7.3 .....

- 6.19 重機による土層掘削を開始する。
- 6.20 雨天のために作業を中止する。

- 6.21 雨天のために作業を中止する。
- 6.22 雨天のために作業を中止する。

- 6.25 重機による土層掘削を終了し、遺構検出を開始する。
- 6.26 遺構検出とグリッド杭の設定を行う。
- 6.27 グリッド杭の設定を終了し、平板測量、遺構配置図の作成及び遺構検出状態の写真撮影を行う。
- 6.28 遺構の調査を開始し、併せて平面測量、レベル実測及び西壁セクション図を作成する。
- 6.29 引き続き遺構の調査、平面測量、西壁セクション図の作成を行い、終了する。
- 7.2 調査区を精査し、遺構完掘状態と西壁セクションの写真撮影を行う。
- 7.3 航空写真撮影を行い、第Ⅰ調査地区西部の調査を完了する。

第Ⅰ調査地区東部 2001.6.28～7.10 .....

- 6.28 調査区北部より重機による土層掘削を開始する。併行して遺構検出を開始し、北壁・東壁セクション図の作成を行う。
- 6.29 調査区南部の重機による土層掘削を行う。
- 7.2 重機による土層掘削を終了し、遺構検出を行う。併行してグリッド杭の設定と遺構配置図の作成を開始する。
- 7.3 引き続き遺構検出を行う。その後、遺構検出状態の写真撮影及び遺構配置図の作成を行い、調査区北部より遺構の調査を開始する。
- 7.4 調査区南部の遺構の調査、平面測量及びレベル実測を終了する。調査区を精査し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 7.10 航空写真撮影を行い、第Ⅰ調査地区東部の調査を完了する。

第Ⅰ調査地区西部 2001.7.3～7.10 .....

- 7.3 重機による土層掘削を開始する。
- 7.4 重機による土層掘削を終了し、遺構検出を開始する。
- 7.5 遺構検出と併行して、グリッド杭の設定、平板測量及び遺構配置図の作成を行う。遺構検出状態の写真撮影を行った後、遺構の調査と平面測量を開始する。
- 7.6 引き続き遺構の調査と平面測量を行う。
- 7.9 遺構の調査と調査区の精査を行う。
- 7.10 遺構の調査とレベル実測を終了し、遺構完掘状態の写真撮影及び航空写真撮影を行う。第Ⅰ調査地区西部の調査を完了する。

第Ⅰ調査地区北東部 2001.7.5～7.10 .....

- 7.5 重機による土層掘削を開始する。
- 7.6 引き続き重機による土層掘削を行い、遺構検出を開始する。
- 7.9 重機による土層掘削と遺構検出を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構の調査を開始する。
- 7.10 遺構の調査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影及び航空写真撮影を行う。その後レベル実測を行い、第Ⅰ調査地区の調査をすべて完了する。

第Ⅱ調査地区—A区北部 2001.7.30～9.25 .....

- 7.30 調査前風景の写真撮影及び、調査区の周囲に安全柵の設置を行う。その後、調査区北西部より重機による土層掘削を開始し、併せてグリッド杭の設定を行う。
- 7.31 調査区北西部の重機による土層掘削と遺構検出を行う。
- 8.1 調査区西部の土層掘削と併行して、グリッド杭の設定及び遺構検出を行う。
- 8.2 調査区中央部の土層掘削と遺構検出、グリッド杭の設定及び遺構配置図の作成を行う。



- 8.3 引き続き調査区中央部の重機による土層掘削と遺構検出，グリッド杭の設定及び遺構配置図の作成を行う。
- 8.6 調査区東部の重機による土層掘削と併行して，遺構検出，グリッド杭の設定，遺構配置図の作成及び平板測量を行う。その後，遺構検出状態の写真撮影とベルトコンベアの設置を行う。
- 8.7 調査区北東部より遺構の調査を開始する。
- 8.8 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.9 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。午後から，雨天のために作業を中止する。
- 8.10 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.16 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.17 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。台風に向けて排水ポンプを設置し，ベルトコンベアの移動及びローリングタワーとテントの屋根の取り外しを行う。
- 8.20 台風接近のため作業を中止する。
- 8.21 台風接近のため作業を中止する。
- 8.22 調査区内の排水作業を行った後，調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.23 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.24 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。週末の雨に備えて水中ポンプを設置する。
- 8.27 引き続き調査区北東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.28 調査区東部の遺構の調査を行う。
- 8.29 引き続き調査区東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.30 引き続き調査区東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.31 引き続き調査区東部の遺構の調査と平面測量を行った後，東壁セクション図の作成と写真撮影を行う。
- 9.3 雨天のために作業を中止する。
- 9.4 調査区中央部の遺構の調査，平面測量及びレベル実測を行う。
- 9.5 引き続き調査区中央部の遺構の調査，平面測量及びレベル実測を行う。調査区南東部の中世遺物包含層の掘削と遺構検出を行う。
- 9.6 雨天のために作業を中止する。
- 9.7 雨天のために作業を中止する。
- 9.10 調査区南部の遺構の調査，平面測量及びレベル実測を行う。
- 9.11 引き続き調査区南部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 9.12 遺構の調査と併行して，調査区南西部の中世遺物包含層の掘削を行う。
- 9.13 引き続き調査区南部の遺構の調査を行う。平板測量を行った後，西壁セクション図の作成を行う。
- 9.14 雨天のために作業を中止する。
- 9.17 調査区南西部の中世遺物包含層の掘削と，調査区南部の遺構の調査を行う。西壁セクション図の作成を行う。
- 9.18 西壁セクション図の作成と写真撮影を終了し，平面測量を行う。
- 9.19 遺構の調査を終了し，精査を行う。平面測量，レベル実測を終了する。



Fig.7 第Ⅱ調査地区発掘調査風景

- 9.20 中世遺構完掘状態の写真撮影と航空測量・写真撮影を行った後、調査区南東部に下層確認トレンチを設定して調査する。
- 9.21 下層確認トレンチのセクション図の作成及び

写真撮影を行う。

- 9.25 下層確認トレンチのセクション図の作成を行い、第Ⅱ調査地区A区北部の調査を完了する。

第Ⅱ調査地区一A区南部 2001.9.27～11.9 .....

- 9.27 調査区北西部より重機による土層掘削を開始し、併行して遺構検出を行う。
- 9.28 調査区中央部の重機による土層掘削を行い、併行して遺構検出を行う。
- 10.1 昨夜の雨のために現場作業を中止する。
- 10.2 調査区東部の重機による土層掘削と併行して、遺構検出、南壁・東壁の調査及びグリッド杭の設定を行う。
- 10.3 重機による土層掘削をほぼ終了し、遺構検出を行う。併行してグリッド杭の設定と遺構配置図の作成を行う。
- 10.4 重機による土層掘削、遺構検出、グリッド杭の設定が終了し、遺構検出の写真撮影及び平板測量を行う。
- 10.5 調査区西部より遺構の調査を開始する。ピットより石臼が出土する。
- 10.9 引き続き調査区西部の遺構の調査を行い、ピットより出土した遺物の写真撮影を行う。
- 10.10 昨日の雨のため排水作業を行う。
- 10.11 調査区西部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 10.12 引き続き調査区西部の遺構の調査、遺物の写真撮影、東壁・南壁セクションの写真撮影及び平面測量を行う。
- 10.15 調査区南西部の遺構の調査、遺物の写真撮影及び平面測量を行う。
- 10.16 雨天のために作業を中止する。
- 10.17 雨天のために作業を中止する。
- 10.18 昨日までの雨のために作業を中止する。
- 10.19 調査区南西部の遺構の調査、平面測量及び遺物の写真撮影を行う。
- 10.22 雨天のために作業を中止する。
- 10.23 昨日までの雨のために作業を中止する。

- 10.24 調査区南部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 10.25 引き続き調査区南部の遺構の調査、平面測量及び遺物の写真撮影を行う。
- 10.26 引き続き調査区南部の遺構の調査、平面測量及び遺物の写真撮影を行う。
- 10.29 昨日の雨のために作業を中止する。
- 10.30 調査区南部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 10.31 引き続き調査区南部の遺構の調査、遺物の写真撮影及び平面測量を行う。
- 11.1 調査区東部の遺構の調査、遺物の写真撮影及び平面測量を行う。
- 11.2 引き続き調査区東部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 11.5 調査区北東部の遺構の調査、平面測量及び遺物の写真撮影を行う。
- 11.6 引き続き調査区北東部の遺構の調査、平面測量及び調査区の精査を行う。
- 11.7 調査区北部の遺構の調査、平面測量、レベル実測及び調査区の精査を行う。
- 11.8 引き続き調査区北部の遺構の調査を行い、平面測量及びレベル実測を行う。
- 11.9 遺構完掘状態の写真撮影と航空測量・写真撮



Fig.8 第Ⅱ調査地区空中撮影風景

影を行う。その後、調査区南東部に下層確認トレンチを設定し、セクション図の作成と写

真撮影を行う。第II調査地区A区南部の調査を完了する。

第II調査地区—B区東部 2002.9.5～9.24 .....

- 9.5 安全柵と排水路を設置し、調査区北部より重機による土層掘削を開始する。
- 9.6 調査区南部の重機による土層掘削を行う。
- 9.9 重機による土層掘削を終了し、遺構検出、グリッド杭の設定、平板測量及び遺構配置図の作成を行う。
- 9.10 遺構検出状態の写真撮影を行い、調査区北部より遺構の調査を開始する。
- 9.11 引き続き調査区北部の遺構の調査を行う。
- 9.12 調査区北部・中央部の遺構の調査を行う。
- 9.13 調査区中央部の遺構の調査を行う。
- 9.17 雨天のために作業を中止する。
- 9.18 調査区南部の遺構の調査を行う。
- 9.19 調査区東部の遺構の調査を行い、併せて平面測量を行う。
- 9.20 遺構の調査と精査を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。その後平面測量、レベル実測を行う。
- 9.24 下層確認トレンチを設定し、セクション図の作成を行う。第II調査地区B区東部の調査を完了する。

第II調査地区—B区西部 2003.5.6～6.12 .....

- 5.6 調査区の周囲に安全柵を設置し、建物の基礎をクラッシャーで除去する。
- 5.9 調査区北西部より重機による土層掘削を開始し、併せて遺構検出を行う。
- 5.12 調査区中央部の重機による土層掘削を行う。
- 5.13 引き続き調査区中央部の重機による土層掘削を行い、併せてグリッド杭の設定及び遺構配置図の作成を行う。
- 5.16 調査区東部の重機による土層掘削を行い、引き続きグリッド杭の設定と遺構配置図の作成を行う。
- 5.19 重機による土層掘削を終了し、遺構検出、グリッド杭の設定及び遺構配置図の作成を行う。
- 5.20 引き続き遺構検出と遺構配置図の作成を行う。
- 5.21 遺構検出と遺構配置図の作成を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。調査区北西部より遺構の調査を開始する。
- 5.22 調査区北西部の遺構の調査を行う。ピットより土師質土器の杯がほぼ完形で出土し、写真撮影を行う。
- 5.23 調査区西部の遺構の調査を行い、併せて平面測量とセクション図の作成を行う。
- 5.27 調査区中央部の遺構の調査を行い、併せて平面測量を行う。
- 5.28 引き続き調査区中央部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 5.29 調査区東部の遺構の調査を行い、併せて平面測量を行う。
- 6.2 引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。
- 6.3 調査区南東部の遺構の調査を行う。
- 6.4 調査区南部の遺構の調査を行う。
- 6.5 引き続き調査区南部の遺構の調査を行い、調査区西部より精査を開始する。
- 6.6 調査区の精査、平面測量及びレベル実測を終了し、遺構完掘状態の写真撮影と航空写真撮影を行う。
- 6.9 調査区南部の人力による下層確認調査及び遺構検出を行う。
- 6.11 調査区南東部の人力による下層確認調査と遺構の調査を行う。
- 6.12 調査区中央部の人力による下層確認調査及び

南部の遺構の調査を行う。調査区南西部に下層確認トレンチを設定し、セクション図を作

成する。第Ⅱ調査地区B区西部の調査を完了する。

第Ⅱ調査地区一C区 2003.6.25～6.30.....

- |      |                               |      |  |
|------|-------------------------------|------|--|
| 6.25 | 重機による土層掘削を開始し、ほぼ終了する。         | 6.30 | 遺構の調査と精査、遺構完掘状態の写真撮影を終了し、平面測量、レベル実測、下層確認調査を行う。第Ⅱ調査地区の調査をすべて完了する。 |
| 6.26 | 遺構検出状態の写真撮影を行い、遺構配置図の作成を終了する。 |      |  |
| 6.27 | 遺構の調査と平面測量を開始する。              |      |  |

第Ⅲ調査地区北西部 2002.6.26～7.3.....

- |      |  |     |  |
|------|--|-----|--|
| 6.26 | 安全柵を設置し、調査区南西部より重機による土層掘削と遺構検出を開始する。           | 7.2 | グリッド杭の設定を終了し、遺構検出状態の写真撮影を行う。遺構配置図の作成を行い、調査区西部より遺構の調査を開始する。                             |
| 6.27 | 調査区中央部の重機による土層掘削を行い、併せてグリッド杭の設定と遺構配置図の作成を開始する。 | 7.3 | 遺構の調査と平面測量、北壁セクション図の作成を終了し、遺構完掘状態の写真撮影を行う。その後、北部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。第Ⅲ調査地区北西部の調査を完了する。 |
| 6.28 | 重機による土層掘削を終了し、遺構検出を行う。                         |     |  |
| 7.1  | 雨天のために作業を中止する。                                 |     |  |

第Ⅲ調査地区北東部 2002.7.5～9.6.....

- |      |   |      |   |
|------|---|------|---|
| 7.5  | 調査区南東部より重機による土層掘削を開始する。                                   | 7.26 | 引き続き調査区中央部の遺構の調査を行う。  |
| 7.8  | 調査区中央部の重機による土層掘削を行い、併せてグリッド杭の設定を行う。                       | 7.29 | 調査区西部の遺構の調査を行い、併せて平面測量を行う。  |
| 7.9  | 雨天のために作業を中止する。  | 7.30 | 調査区南部の遺構の調査を行い、併せて調査区東部より精査を始める。  |
| 7.10 | 雨天のために作業を中止する。  | 7.31 | 遺構の調査と精査を終了し、平面測量、レベル実測及び近世遺構完掘状態の写真撮影を行う。その後、調査区東部より中世遺物包含層の人力掘削を開始する。 |
| 7.11 | 重機による土層掘削を終了し、遺構検出とグリッド杭の設定を行う。                           | 8.1  | 引き続き調査区東部の中世遺物包含層の人力掘削を行う。  |
| 7.12 | 遺構検出とグリッド杭の設定を終了し、近世遺構検出状態の写真撮影を行う。その後、遺構配置図の作成及び平板測量を行う。 | 8.5  | 引き続き調査区東部の中世遺物包含層の人力掘削を行う。  |
| 7.15 | 雨天のために作業を中止する。  | 8.6  | 調査区中央部の中世遺物包含層の人力掘削を行う。   |
| 7.16 | 雨天のために作業を中止する。  | 8.7  | 引き続き調査区中央部の中世遺物包含層の人力掘削を行う。   |
| 7.17 | 調査区東部より遺構の調査を開始する。  | 8.8  | 調査区西部の中世遺物包含層の人力掘削を行い、石鍋が出土する。  |
| 7.18 | 引き続き調査区東部の遺構の調査を行い、併せて平面測量を行う。                            |      |   |
| 7.22 | 引き続き調査区東部の遺構の調査と平面測量を行う。                                  |      |   |
| 7.25 | 調査区中央部の遺構の調査を行う。  |      |   |

- 8.9 雨天のために作業を中止する。
- 8.15 調査区西部の中世遺物包含層の人力掘削を終了し、遺構検出を行う。
- 8.16 中世遺構検出状態の写真撮影、遺構配置図の作成及び遺構埋土の調査を終了し、調査区東部より遺構の調査を開始する。
- 8.19 調査区東部の遺構の調査を行う。
- 8.20 引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。
- 8.21 調査区中央部の遺構の調査を行う。
- 8.22 引き続き調査区中央部の遺構の調査と南壁セクション図の作成を行う。
- 8.23 調査区北部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.26 調査区西部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 8.27 遺構の調査と精査を終了し、中世遺構完掘状態の写真撮影及び、航空測量・写真撮影を行う。
- その後、平面測量とレベル実測を行う。
- 8.28 調査区東部の人力による下層確認調査を行う。
- 8.29 調査区西部の人力による下層確認調査及び遺構の調査を行う。
- 8.30 雨天のために作業を中止する。
- 9.2 雨天のために作業を中止する。
- 9.3 引き続き下層確認調査及び遺構の調査を行う。
- 9.4 引き続き遺構の調査を行う。
- 9.5 人力による下層確認調査を終了し、写真撮影を行う。調査区北部に下層確認トレンチを設定し、調査を行う。
- 9.6 下層確認トレンチの調査を行い、セクション図を作成し、第Ⅲ調査地区北東部の調査を完了する。

第Ⅲ調査地区南部 2002.9.26～10.28 .....

- 9.26 調査区西部より重機による土層掘削を開始し、併行して遺構検出、グリッド杭の設定及び遺構配置図の作成を行う。
- 9.27 雨天のために作業を中止する。
- 9.30 調査区東部の重機による土層掘削と遺構検出を行う。
- 10.1 調査区東部の重機による土層掘削を終了し、遺構検出、グリッド杭の設定及び遺構配置図の作成を行う。
- 10.2 遺構検出、遺構配置図の作成及び遺構埋土の調査を終了し、近世遺構検出状態の写真撮影を行う。調査区東部より遺構の調査を開始する。
- 10.3 引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。
- 10.4 引き続き調査区東部の遺構の調査を行う。
- 10.7 調査区中央部の遺構の調査と併せて平面測量を行う。
- 10.9 引き続き調査区中央部の遺構の調査と平面測量を行う。
- 10.10 調査区西部の遺構の調査と併せて平面測量を行う。
- 10.11 引き続き調査区西部の遺構の調査と平面測量及びレベル実測を行う。
- 10.15 引き続き調査区西部の遺構の調査と平面測量及びレベル実測を行う。
- 10.16 引き続き調査区西部の遺構の調査と併せて精査を開始する。
- 10.17 遺構の調査と精査を終了し、近世遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 10.18 航空測量・写真撮影を行った後、調査区中央部より中世遺物包含層の人力掘削を開始する。
- 10.21 引き続き調査区中央部の中世遺物包含層の人力掘削を開始する。



Fig.9 第Ⅲ調査地区発掘調査風景

- 力掘削を行う。
- 10.22 中世遺物包含層の人力掘削を終了し、遺構検出、遺構配置図の作成及びグリッド杭の設定を行う。
- 10.23 遺構検出を終了し、中世遺構検出状態の写真撮影を行う。その後、調査区東部より遺構の調査を始める。
- 10.24 調査区中央部・西部の遺構の調査と併せて南壁セクション図の作成を行う。
- 10.25 遺構の調査を終了し、中世遺構完掘状態の写真撮影を行う。
- 10.28 平面測量、レベル実測、南壁セクション図の作成を行う。併せて下層確認トレンチの調査を行い、第Ⅲ調査地区の調査をすべて完了する。

## 第Ⅲ章 調査区の概要

### 1. 第Ⅰ調査地区

#### (1) 概要

本調査区は京間遺跡の南部に位置し、字南京間にあたる。確認調査では本調査区以南で遺構が検出されておらず、地形が南に向かって下がっていくものと推定される。調査は平成12・13年度の2年に互って行った。平成12年度は仮設道部分を幅約10mで南側と北側の2回に分けて調査し、さらに調査区北西部の調査を行った。平成13年度には水路や土置き場の関係から仮設道部分の東側と西側を7回に分けて調査を行った。

本調査区では中世と近世の2層の遺物包含層が認められたが、南部では中世の遺物包含層は見られなかったものの、遺構は全面で検出された。遺構は溝によって東部、中央部、西部に分けられ、溝で囲まれていた屋敷跡とみられる。また、東部の屋敷跡では石組の井戸も確認された。調査期間は平成13年1月19日から3月8日、5月21日から7月10日で実働55日、調査面積は2,823㎡であった。

#### (2) 層序

第Ⅰ調査地区の層序は、基本的に耕作土、旧耕作土の下に近世の遺物包含層、中世の遺物包含層が認められた。調査区南部では中世の遺物包含層は見られず、地表下約1.2mで砂礫層の堆積が確認された。また、遺物包含層はわずかに起伏しており、調査区中央部の東側では中世の遺物包含層と近世の遺物包含層の間に間層が認められる箇所もあった。なお、調査区西壁中央部 (Fig.10) では以下の土層が認められた。

第Ⅰ層 灰色 (N6/0) 粘土質シルト層

第Ⅱ層 浅黄橙色 (7.5YR8/4) 砂質シルト層 (マンガンの堆積)

第Ⅲ層 灰白色 (2.5YR7/1) 砂質シルト層

第Ⅳ層 橙色 (5YR7/6) 砂質シルト層 (マンガンの堆積)

第Ⅴ層 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘土質シルト層で酸化鉄を多く含む (近世の遺物包含層)

第Ⅵ層 黄灰褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト層 (中世の遺物包含層)

第Ⅶ層 明黄褐色 (10YR7/6) 粘土質シルト層

第Ⅷ層 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘土質シルト層

第Ⅰ層は現耕作土、第Ⅲ層は旧耕作土で、第Ⅱ層と第Ⅳ層はそれらに伴う床土でありマンガンを多く含んでいた。また、第Ⅲ層は調査区北東部では見られず、調査区南部では旧耕作土が2層認められる箇所もあった。

第Ⅴ層は近世の遺物包含層で、調査区全面で見られた。厚さ10～20cmを測り、北から南に向って緩やかに傾斜し、調査区の北端と南端では約20cmの比高差が認められた。

第Ⅵ層は中世の遺物包含層で、調査区南部では認められなかった。厚さ0.20～0.50mを測り、小

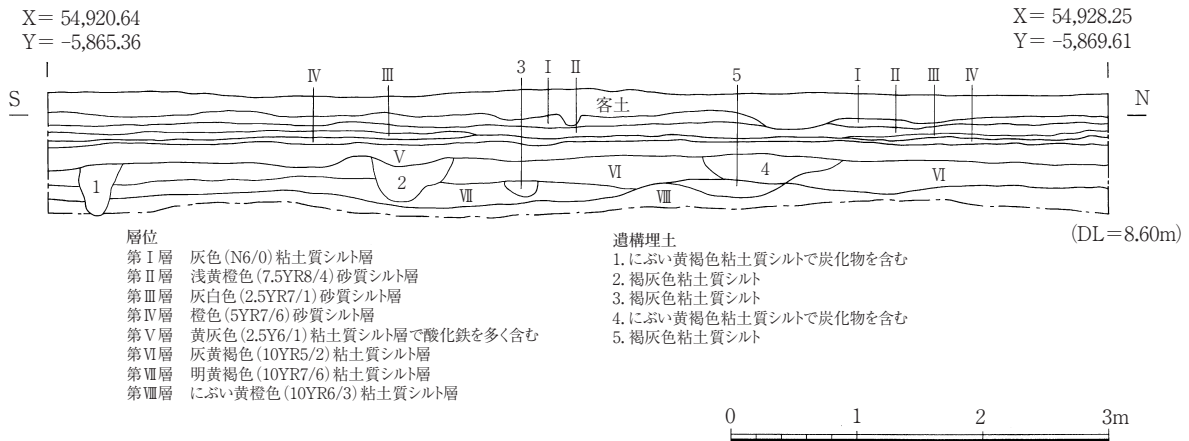


Fig.10 第Ⅰ調査地区中央部セクション図

さな起伏がみられるものの、第Ⅴ層同様に北から南に緩やかに傾斜し、調査区の北端と南端の比高差は約20cmを測る。

第Ⅶ層は基盤層で、調査区中央部の西側でのみ認められた。

第Ⅷ層も基盤層で、ほぼ全面で認められた。

### (3) 堆積層出土遺物

#### 第Ⅰ層出土遺物

青磁 (Fig.11-1001)

1001は龍泉窯系の碗で、底部の約1/3が残存し、底径5.7cmを測る。底部の器壁が厚く、直立する削り出し高台を有する。内面から高台の内側までオリブ色の釉を約1mmの厚さに施す。胎土は密で、焼成は良好である。

#### 第Ⅱ層出土遺物

土師質土器 (Fig.11-1002)

1002は羽釜で、口縁部と胴部の約1/4が残存し、口径22.2cmを測る。胴部は内湾して口縁部に至り、口縁端部は肥厚する。口縁部外面には断面台形を呈する鏝がめぐり、体部内面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整、鏝下半にはナデ調整、胴部外面には斜め方向にタタキを施す。また、外面には煤が付着する。胎土はやや粗く砂粒を含み、焼成はやや良好で、色調は、内面が橙色または灰褐色、外面が浅黄橙色を呈する。

#### 第Ⅴ層出土遺物

土師質土器 (Fig.11-1003・1004)

1003・1004は杯である。1003は底部が完存し、口径9.6cm、器高2.9cm、底径4.0cmを測る。底部の器壁は厚く、体部は底部から屈曲して立ち上がり、口縁部まで真っすぐ伸びる。体部には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切り調整とみられるが、著しく摩耗するため不明瞭である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。1004は底部が完存し、底径4.8cmを測る。体部は底部からやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。



胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

備前焼 (Fig.11-1005)

1005は播鉢で、口縁部の一部が残存し、口径24.6cmを測る。口縁部はやや厚く、顎状の張り出しがみられる。調整は体部が回転ナデ、口縁部がヨコナデで、体部内面には放射状と斜め方向の摺り目が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい褐色を呈する。

青磁 (Fig.11-1006)

1006は龍泉窯系の碗で、底部が完存し、底径4.7cmを測る。底部の器壁は厚く、直立する削り出し高台を有する。内面から高台の外周までオリーブ色の釉を薄く施し、見込は釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成は良好である。

青花 (Fig.11-1007)

1007は華南系の皿で、底部が完存し、底径4.1cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、見込には花文の染付がみられる。内面から外面の高台まで透明釉を施すが、釉には光沢がみられない。胎土はやや粗く、焼成は不良である。

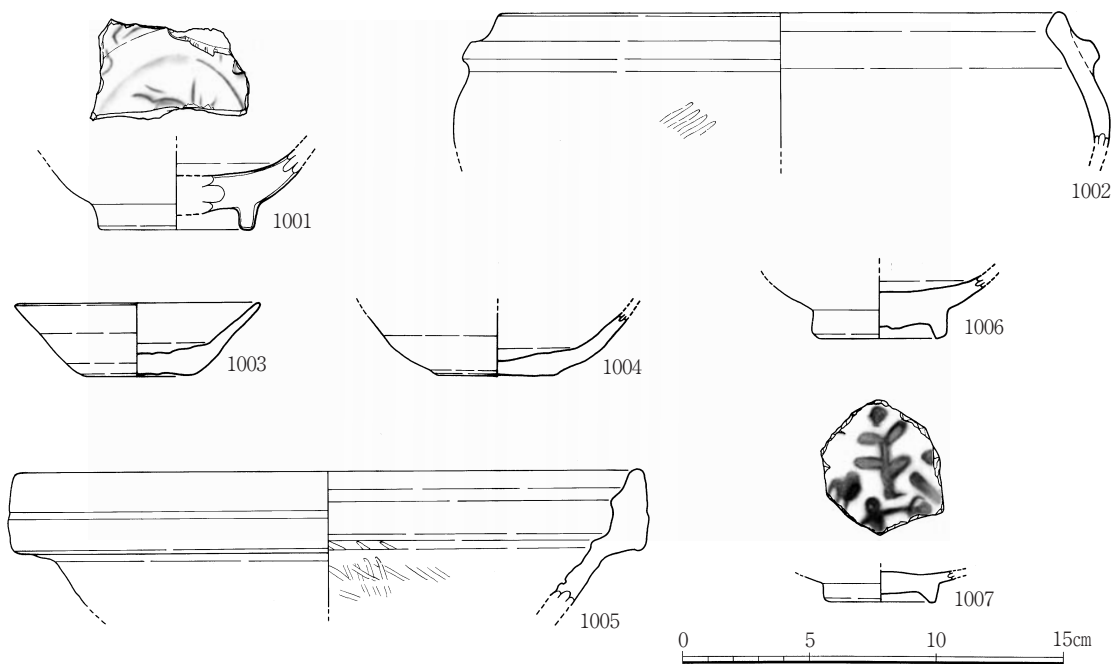


Fig.11 第I・II・V層出土遺物実測図 (土師質土器・備前焼・青磁ほか)

近世陶器 (Fig.12-1008~1012)

1008・1009は碗である。1008は底部の約3/4が残存し、底径4.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部はやや内湾して立ち上がる。内面から外面の高台まで灰釉を薄く施す。胎土は密で、焼成はやや悪く、釉調は黄緑色、生地は灰白色を呈する。1009は底部が完存し、底径5.4cmを測る。底部には高く直立する削り出し高台を有する。全面に灰釉を薄く施し、見込は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰黄色、生地は灰白色を呈する。

1010~1012は唐津焼の皿で、いずれも見込に砂目が残る。1010は約1/3が残存し、口径11.8cmを測る。底部には削り出し高台を有し、体部から若干屈曲して口縁部に至り、口縁端部は肥厚する。内

面から外面の高台付近まで灰釉を施し、見込には砂目が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、釉調は灰白色、生地は灰褐色を呈する。1011は約1/2が残存し、底径4.4cmを測る。底部には低い削り出し高台を有し、高台脇の削りは甘く、体部は緩やかに立ち上がる。内面から外面の高台付近まで灰釉を薄く施し、見込には砂目が残る。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰黄色、生地は灰白色を呈する。1012は底部が完存し、底径4.6cmを測る。底部には断面台形を呈する細い削り出し高台を有し、体部は器壁が薄く、中位で屈曲して直線的に伸びる。全面に灰釉を薄く施し、見込と畳付には砂目が残る。胎土は精良で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。

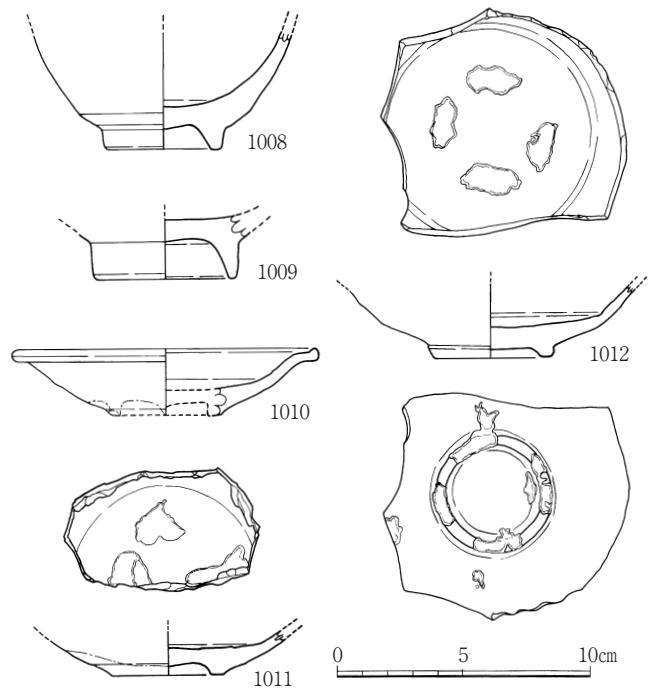


Fig.12 第V層出土遺物実測図 (近世陶器)

近世磁器 (Fig.13-1013~1019)

1013は肥前系の筒形碗で、底部の約1/2が残存し、底径4.2cmを測る。底部には小さな削り出し高台を有し、体部は水平に伸びた後、屈曲して上方に立ち上がる。外面には3条の圈線、内面には2条の圈線、見込には五弁花の染付がみられる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。

1014は肥前系の皿で、底部の約1/2が残存し、底径6.2cmを測る。底部には断面半円形を呈する低い削り出し高台を有し、見込には風水雁文と2条の圈線の染付がみられる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良好である。1015~

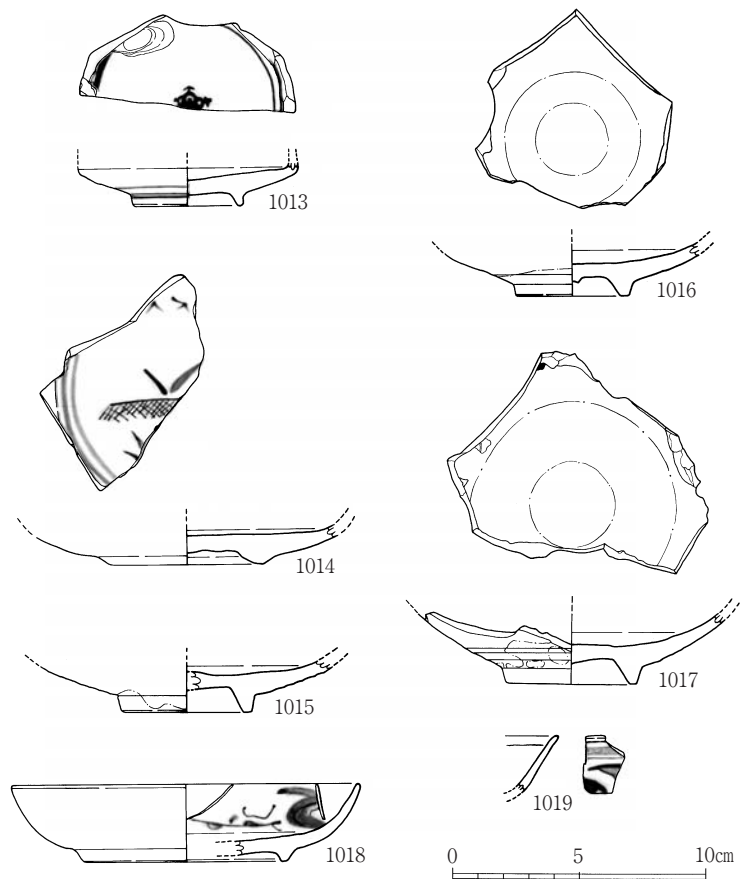


Fig.13 第V層出土遺物実測図 (近世磁器)

1018は肥前系(波佐見)とみられる皿である。1015は底部の約1/2が残存し、底径4.4cmを測る。底部には断面台形を呈する高い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がり、外面にはロクロ目が顕著に残る。内面から高台付近まで青味を帯びた釉を薄く施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良好である。1016は底部が完存し、底径4.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。内面から外面の高台付近まで透明釉を施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。1017は底部の約2/3が残存し、底径5.1cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。内面から外面の高台付近まで透明釉を施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。1018は約1/8が残存し、口径13.6cm、器高3.0cm、底径8.0cmを測る。底部には断面台形を呈する低い削り出し高台を有し、体部は器壁が薄く、内湾して立ち上がる。内面には草花文の染付がみられる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギ、見込は蛇の目釉ハギを行い、釉ハギした部分には砂が付着する。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は灰白色を呈する。

1019は華南系の色絵の小杯で、口縁部の一部が残存する。器壁は薄く、口縁は端反形となる。全面に透明釉を薄く施した後に、外面には茶色の色絵の内側に光沢のある緑色の色絵を施し、内面には茶色の圈線がみられる。胎土は密で、焼成は比較的良好である。

#### 第VI層出土遺物

##### 土師質土器 (Fig.14-1020~1027)

1020~1026は杯である。1020は底部が完存し、底径4.2cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸びる。体部の調整は器面が著しく摩耗するため不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。1021は底部が完存し、口径11.8cm、器高

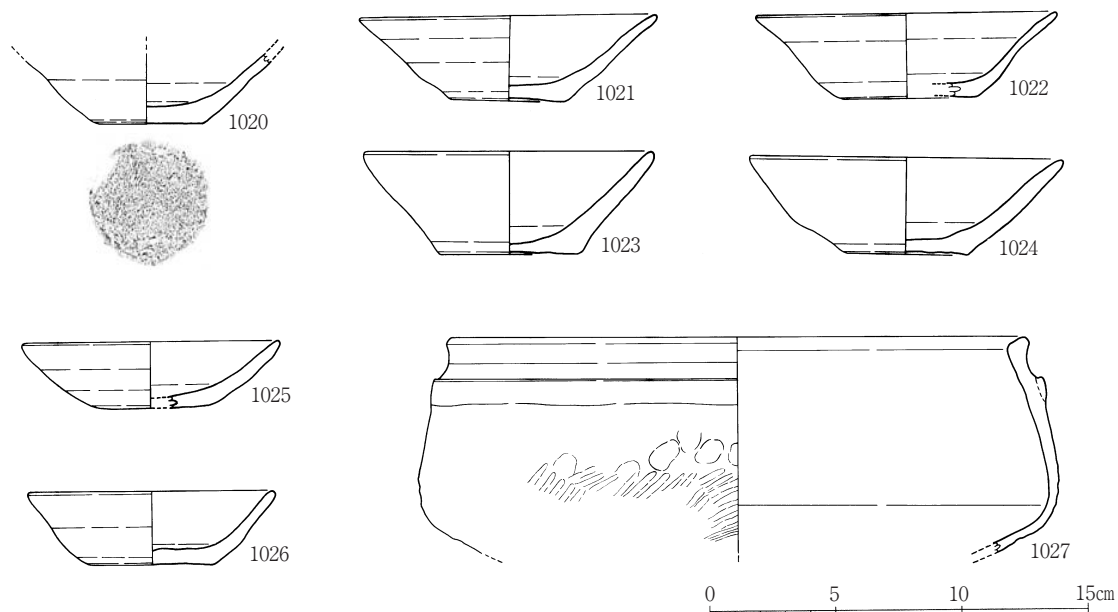


Fig.14 第VI層出土遺物実測図(土師質土器)

3.5cm, 底径4.5cmを測る。体部は小さな底部から直線的に伸びて口縁部に至る。体部には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは著しく摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。1022は約1/2が残存し、口径11.9cm, 器高3.3cm, 底径5.2cmを測る。成形はロク口水挽きとみられる。器壁が薄く、体部は外上方に真っすぐ伸びる。体部には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。1023は約1/2が残存し、口径11.4cm, 器高4.0cm, 底径5.4cmを測る。体部は器壁が厚く、外上方へ真っすぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため、調整は不明である。胎土はやや粗く、礫と砂粒を含み、焼成は不良で、色調は内外面とも橙色を呈する。1024は約1/2が残存し、口径12.4cm, 器高3.8cm, 底径4.8cmを測る。体部は若干内湾して立ち上がり口縁部に至る。器面は著しく摩耗するため、調整は不明である。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。1025は約3/4が残存し、口径10.0cm, 器高2.6cm, 底径4.6cmを測る。器高が低く、底部から緩やかに立ち上がり、体部はやや内湾して口縁部に至る。器面は著しく摩耗するため、調整は不明である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。1026は底部が完存し、口径9.6cm, 器高2.9cm, 底径4.8cmを測る。体部は底部から屈曲して立ち上がり、口縁部まで真っすぐ伸びる。体部には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

1027は羽釜で、約1/6が残存し、口径22.4cmを測る。胴部は腰が張り、直線的に立ち上がって口縁部に至り、口縁端部を外上方につまみ上げる。口縁部外面には断面台形を呈する小さな鍔がめぐる。調整は体部内面がヨコ方向のナデ調整、口縁部から鍔の下半がヨコナデ、体部外面がナデまたは指頭圧調整の後、斜め方向にタタキを施す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は、内面が明赤褐色、外面が暗赤灰色を呈する。

青磁 (Fig.15-1028・1029)

1028・1029は龍泉窯系の腰折れの稜花皿である。1028は口縁部の約1/5が残存し、口径13.9cmを測る。体部は短く、外反して立ち上がり、口縁端部は丸く収める。内面には片彫の草花文がみられ、

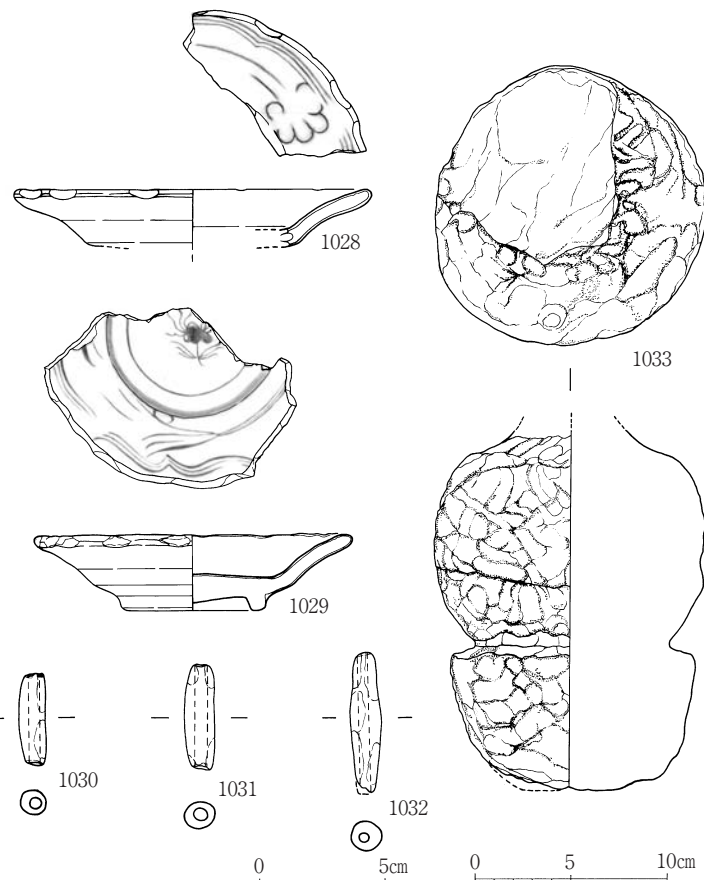


Fig.15 第VI層出土遺物実測図 (青磁・土製品・石製品)

全面にオリーブ色の釉を約1mmの厚さに施す。胎土はやや密で、焼成は良好である。1029は約1/3が残存し、口径12.2cm、器高3.0cm、底径5.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は底部から屈曲して立ち上がり、やや外反して伸びる。内面には体部に片彫の草花文、見込には花文のスタンプを施す。内面から畳付までオリーブ色の釉を約1mmの厚さに施し、高台内は露胎である。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

土製品 (Fig.15-1030~1032)

1030~1032は紡錘形の土錘で、いずれも全面にナデ調整を施す。1030は完形で、全長3.6cm、全幅1.1cm、孔径0.5cm、重量2.5gを測る。1031も完形で、全長4.2cm、全幅1.2cm、孔径0.5cm、重量4.1gを測る。1032は一部が欠損し、全長5.5cm、全幅1.3cm、孔径0.4cm、重量5.6gを測る。

石製品 (Fig.15-1033)

1033は五輪塔の空風輪で、一部が欠損する。高さ18.8cm、全幅14.2cmを測る。石材は砂岩で、表面は著しく磨耗する。

#### その他の出土遺物

攪乱を受けた遺構から出土したもので、いずれも近代の遺物と伴出した。

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.16-1034)

1034は天目茶碗で、底部がほぼ完存し、底径3.6cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、内面には鉄釉を施し、外面は露胎である。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成はやや不良で、釉調は黒褐色、生地は灰白色を呈する。

近世陶器 (Fig.16-1035)

1035は皿で、一部が残存し、口径12.9cm、器高2.8cm、底径4.8cmを測る。底部には断面方形を呈する小さい削り出し高台を有し、体部は器壁が薄く、内湾する。残存部には全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込には砂目痕が残る。胎土は精良で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。

近世磁器 (Fig.16-1036)

1036は肥前系の紅皿で、約1/3が残存し、口径4.6cm、器高1.4cm、底径1.6cmを測る。型成形で、貝殻状を呈し、口縁端部は水平な面を有する。内面から口縁部の外面まで透明釉を施し、体部外面は露胎である。胎土は密で、焼成は良好である。

### (4) 遺構と遺物

#### ① 中世

##### i 掘立柱建物跡

SB-1001 (Fig.17)

調査区中央部で確認した梁間2間 (3.50m)、桁行5間 (9.30~9.45m) の東西棟建物で、棟方向は方眼東を向く。SB-1002・1016と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が1.50~2.00m、桁行 (東西) が1.70~2.20mである。柱穴は径0.30~

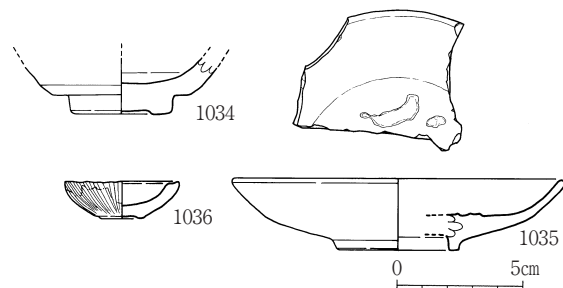


Fig.16 その他の出土遺物実測図  
(瀬戸・美濃系陶器・近世陶器・近世磁器)

1.00mの円形または楕円形で、柱径は約15cmとみられ、埋土はにぶい黄褐色シルトまたは褐灰色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

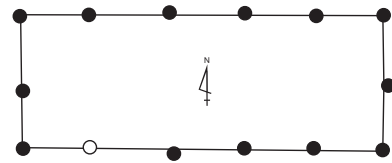


Fig.17 SB-1001

**SB-1002** (Fig.18)

調査区中央部で確認した梁間1間 (2.90~3.00m)、桁行2間 (3.15~3.25m) の南北棟建物で、棟方向はN-3°-Eである。SB-1001・1003・1004・1016と重なる。柱間寸法は梁間 (東西) が2.90~3.00m、桁行 (南北) が1.50~1.75mである。柱穴は径約30cmの円形で、埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

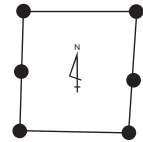


Fig.18 SB-1002

**SB-1003** (Fig.19)

調査区中央部で確認した梁間1間 (3.55~3.65m)、桁行2間 (4.60~4.65m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。SB-1002・1004・1005と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が3.55~3.65m、桁行 (東西) が2.20~2.45mである。柱穴は径約0.30~0.70mの円形または楕円形で、埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

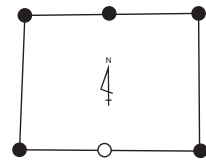


Fig.19 SB-1003

**SB-1004** (Fig.20)

調査区中央部で確認した梁間2間 (3.70m)、桁行2間 (3.90~3.95m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。SB-1002・1003・1005と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が1.80~1.90m、桁行 (東西) が1.80~2.15mである。柱穴は径0.40~0.95mの円形または楕円形で、柱径は約15cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

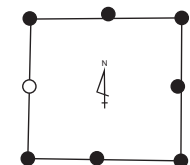


Fig.20 SB-1004

**SB-1005** (Fig.21)

調査区中央部で確認した梁間1間 (4.20~4.30m)、桁行5間 (10.20~10.40m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Eである。SB-1003・1004・1006・1007と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が4.20~4.30m、桁行 (東西) が1.85~2.45mである。柱穴は径0.30~0.80mの円形または楕円形で、埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片20点、銅製品1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

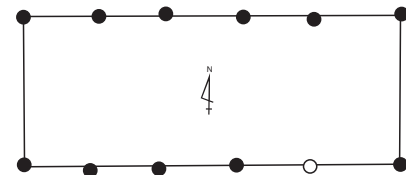


Fig.21 SB-1005

**SB-1006** (Fig.22)

調査区中央部で確認した梁間1間 (2.90~2.95m)、桁行3間 (6.20~6.25m) の東西棟建物で、棟方向は方眼東を向く。SB-1005と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が2.90~2.95m、桁行 (東西) が2.00

～2.25mである。柱穴は径約0.35～1.00mの円形または楕円形で、柱径は約15cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片26点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

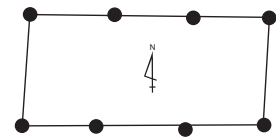


Fig.22 SB-1006

**SB-1007** (Fig.23)

調査区中央部で確認した梁間1間 (2.05～2.10m), 桁行2間 (5.15～5.20m) の身舎に下屋が南側に付く, 南北2間 (3.00～3.15m), 東西2間 (5.15～5.20m) の東西棟建物で, 棟方向はN-89°-Wである。SB-1005と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が2.05～2.10m, 桁行 (東西) が2.30～2.90m, 下屋の出が0.95mである。柱穴は径20～40cmの円形で, 埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

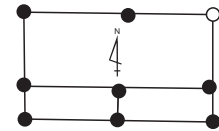


Fig.23 SB-1007

**SB-1008** (Fig.24)

調査区中央部で確認した梁間1間 (2.50～2.80m), 桁行3間 (4.20～4.45m) の南北棟建物で, 棟方向はN-4°-Eである。柱間寸法は梁間 (南北) が2.50～2.80m, 桁行 (東西) が1.10～1.75mである。柱穴は径0.40～0.60mの円形または楕円形で, 埋土は黄灰褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点, 鉄釘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

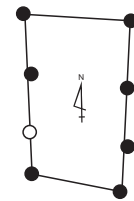


Fig.24 SB-1008

**SB-1009** (Fig.25)

調査区北部で確認した梁間1間 (2.35～2.50m), 桁行3間 (5.15～5.30m) の身舎に南庇が付く, 梁間2間 (4.05～4.25m), 桁行3間 (5.15～5.30m) の東西棟建物で, 南西隅の柱穴は調査区外にあるものとみられる。棟方向はN-84°-Wである。柱間寸法は梁間 (南北) が1.70mと2.05～2.50m, 桁行 (東西) が1.65～1.90m, 庇幅が1.70mである。柱穴は径20～40cmの円形または楕円形で, 埋土は褐灰色砂質シルトで, 黄橙色粘土質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

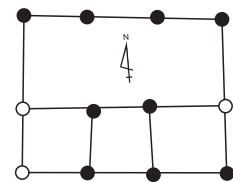


Fig.25 SB-1009

**SB-1010** (Fig.26)

調査区北部で確認した梁間1間 (3.75～3.85m), 桁行4間 (5.70～5.75m) の東西棟建物で, 棟方向はN-85°-Wである。SB-1011と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が3.75～3.85m, 桁行 (東西) が1.15～1.90mである。柱穴は径0.35～0.50mの円形で, 埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

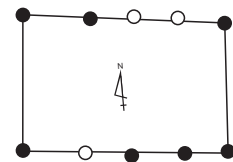


Fig.26 SB-1010

**SB-1011** (Fig.27)

調査区北部で確認した梁間2間 (4.20～4.40m), 桁行3間 (6.15～6.25m) の東西棟建物で, 西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-88°-Wで, SB-1010・1023～1025と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が

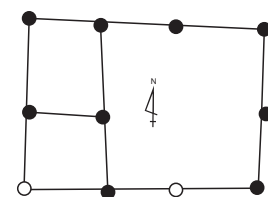


Fig.27 SB-1011

2.00～2.30m, 桁行（東西）が1.90～2.30mである。柱穴は0.25～0.55mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は褐灰色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

Tab.1 第I調査地区中世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備 考
	梁間 × 桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁間(m)	桁行(m)			
SB-1001	2×5	3.50 × 9.30～9.45	1.50～2.00	1.70～2.20	32.81	N-90°-E	
SB-1002	1×2	2.90～3.00 × 3.15～3.25	2.90～3.00	1.50～1.75	9.44	N-3°-E	
SB-1003	1×2	3.55～3.65 × 4.60～4.65	3.55～3.65	2.20～2.45	16.65	N-89°-W	
SB-1004	2×2	3.70 × 3.90～3.95	1.80～1.90	1.80～2.15	14.52	N-89°-W	
SB-1005	1×5	4.20～4.30 × 10.20～10.40	4.20～4.30	1.85～2.45	43.78	N-89°-E	
SB-1006	1×3	2.90～2.95 × 6.20～6.25	2.90～2.95	2.00～2.25	18.21	N-90°-E	
SB-1007	2×2	3.00～3.05 × 5.15～5.20	2.05～2.10	2.30～2.90	15.93	N-89°-W	下屋
SB-1008	1×3	2.50～2.80 × 4.20～4.45	2.50～2.80	1.10～1.75	11.48	N-4°-E	
SB-1009	(2×3)	4.05～4.25 × 5.15～5.30	1.70・ 2.05～2.50	1.65～1.90	21.69	N-84°-W	南庇
SB-1010	1×4	3.75～3.85 × 5.70～5.75	3.75～3.85	1.15～1.90	21.76	N-85°-W	
SB-1011	2×3	4.20～4.40 × 6.15～6.25	2.00～2.30	1.90～2.30	26.67	N-88°-W	間仕切柱

## ii 塀・柵列跡

### SA-1001

調査区北部で確認した東西塀（N-88°-W）で、SB-1011と重なる。4間分（6.30m）を検出し、柱間は1.40～1.90mである。柱穴は径0.30～0.50mの円形で、柱径は約15cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかつた。

Tab.2 第I調査地区中世塀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備 考
	柱穴数(個)	全長(m)	柱間距離(m)		
SA-1001	5	6.30	1.40～1.90	N-88°-W	

## iii 土坑

### SK-1001

調査区南部で検出した楕円形の土坑である。長径1.30m, 短径1.15m, 深さ21cmを測り、長軸方向はN-22°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、瀬戸・美濃系陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかつた。



**SK-1002**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.67m、短辺0.99m、深さ16cmを測り、長軸方向はN-30°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄色粘土質シルトで、炭化物を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

**SK-1003**

調査区南部で検出した不整楕円形の土坑である。長径2.58m、短径1.63m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-53°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点、石製品1点がみられ、石製品(1037)が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.30-1037)

1037は砥石で、一部が残存し、半円形を呈するものとみられる。全長5.7cm、全幅4.3cm、全厚1.5cmを測る。石材は細粒花崗岩で、3面を使用し、1面は沈線状の深い使用痕が残る。

**SK-1004**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.43m、短辺1.03m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-4°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SK-1005**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.80m、短辺1.55m、深さ19cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SK-1006**

調査区南部で検出した溝状を呈する土坑で、SK-1040に切られる。全長5.11m、幅1.38m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-2°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、赤褐色シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

**SK-1007**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.27m、短辺0.72m、深さ29cmを測り、長軸方向はN-68°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、青花片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-1008**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-1009を切る。長辺1.62m、短辺1.08m、深さ35cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

**SK-1009** (Fig.28)

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-1008に切られる。長辺2.06m、短辺1.08m、深さ38cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈する。埋土は3層に分かれ、上からマンガンを含む灰白色粘土質シルト、炭化物とマンガンを含む灰色粘土質シルト、灰白色砂質シルトで

あった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

#### SK-1010

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.06m、短辺0.73m、深さ15cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

#### SK-1011

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.20m、短辺0.66m、深さ14cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

#### SK-1012

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、SD-1004を切る。長辺2.15m、短辺1.78m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-76°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-1013

調査区南部で検出した溝状を呈する土坑で、SK-1014に切られる。全長6.13m、幅2.30m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-50°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

#### SK-1014

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-1013を切る。長辺1.87m、短辺1.05m、深さ20cmを測り、長軸方向はN-31°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-1015

調査区南部で検出した楕円形の土坑である。長径1.13m、短径1.06m、深さ34cmを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片25点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-1016

調査区南部で検出した不整形の土坑である。長辺1.56m、短辺1.50m、深さ28cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片9点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-1017 (Fig.29)

調査区南部で検出した長方形の土坑で、SK-1018に切られる。長辺1.21m、短辺0.86m、深さ25cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトであった。出

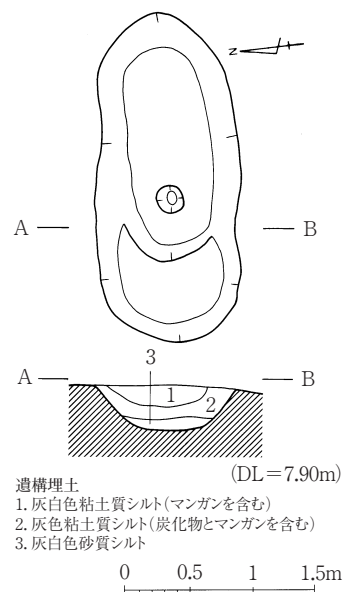


Fig.28 SK-1009

土遺物には土師質土器片9点がみられ、土師質土器1点(1038)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.30-1038)

1038は杯で、約1/2が残存し、口径10.1cm、器高2.9cm、底径5.0cmを測る。器高が低く、体部は短く直線的に伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭であるが、体部は回転ナデ調整とみられ、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

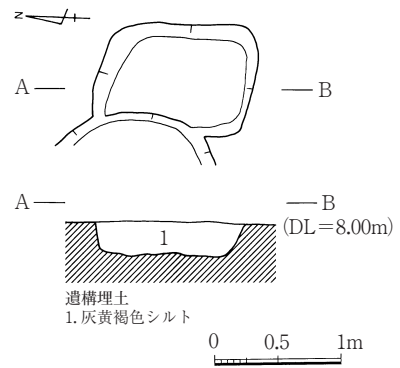


Fig.29 SK-1017

SK-1018

調査区南部で検出した楕円形の土坑で、SK-1017を切る。長径2.17m、短径1.63m、深さ35cmを測り、長軸方向はN-77°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗灰黄色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-1019

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.23m、短辺1.38m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-18°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-1020

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.01m、短辺1.97m、深さ19cmを測り、長軸方向はN-3°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-1021

調査区南部で検出した不整円形の土坑で、径1.43m、深さ16cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-1022

調査区南部西端で検出した隅丸方形の土坑で、西は調査区外へ続く。東半分を検出し、長辺1.25m、短辺0.51m、深さ20cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が炭化物とマンガンを含む灰黄褐色粘土質シルト、下層が黄灰色シルト質粘土であった。出土遺物には土師質土器片4点がみられ、土師質土器2点(1039・1040)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.30-1039・1040)

1039・1040は杯で、いずれも小型であり、体部は短く、内湾して立ち上がる。1039はほぼ完存し、口

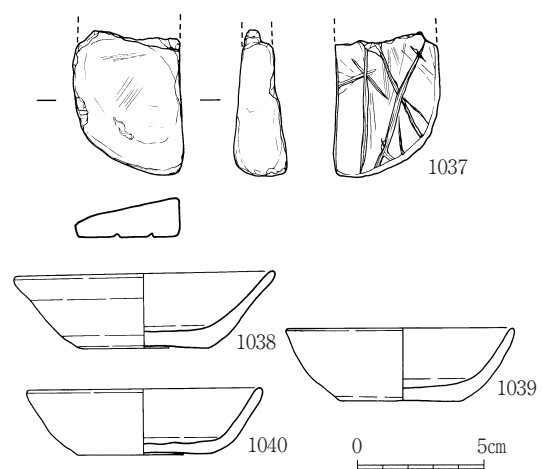


Fig.30 SK-1003・1017・1022出土遺物実測図

径8.8cm，器高2.8cm，底径4.8cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明瞭であるが，体部は回転ナデ調整とみられ，底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で，焼成は比較的良く，色調は内外面とも橙色を呈する。1040は完存し，口径9.0cm，器高2.6cm，底径5.2cmを測る。体部は回転ナデ調整で，底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で，焼成はやや不良，色調は内外面とも橙色を呈する。

### SK-1023

調査区北部南端で検出した隅丸方形の土坑で，東はSD-1012に切られる。検出した西半分は，長辺1.12m，短辺33cm，深さ14cmを測り，長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形を呈し，埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで，炭化物を非常に多く含み，若干の焼土を伴っていた。検出時には10~15cm大の河原石の集石が確認され，焼けているものもみられた。また，集石の下より骨片も出土しており，墓とみられる。その他の出土遺物は皆無であった。

### SK-1024 (Fig.31)

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径1.92m，短径1.76m，深さ49cmを測り，長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形を呈し，埋土は4層に分かれ，埋土1は褐灰色粘土質シルト，埋土2は灰色粘土質シルトで，にぶい黄褐色シルトのブロックを含んでいた。埋土3はにぶい黄橙色シルト質粘土，埋土4は褐灰色粘土質シルトで，埋土3・4にはにぶい黄褐色シルトのブロックが若干含まれていた。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

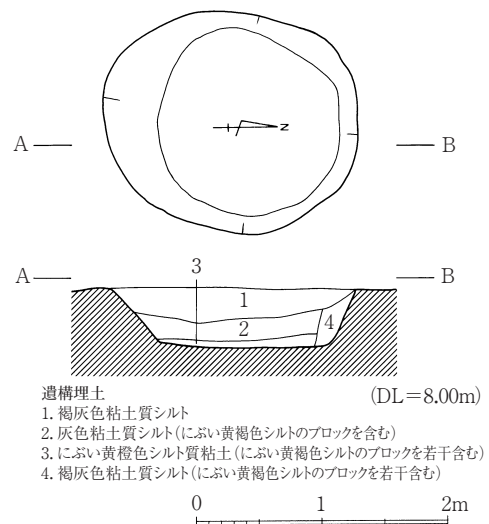


Fig.31 SK-1024

### SK-1025

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径2.72m，短径2.38m，深さ22cmを測り，長軸方向はN-24°-Eを示す。断面は舟底形を呈し，埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点，瓦質土器片2点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

### SK-1026

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.69m，短辺1.66m，深さ14cmを測り，長軸方向はN-62°-Eを示す。断面は舟底形を呈し，埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが，復元図示できなかった。

### SK-1027

調査区北部で検出した不整形の土坑である。長辺1.45m，短辺1.33m，深さ37cmを測り，長軸方向はN-58°-Wを示す。断面は舟底形を呈し，埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

**SK-1028**

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺1.08m、短辺0.61m、深さ8cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

**SK-1029**

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.24m、短辺1.68m、深さ39cmを測り、長軸方向はN-31°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片32点、瓦質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-1030**

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺0.92m、短辺0.77m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-84°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

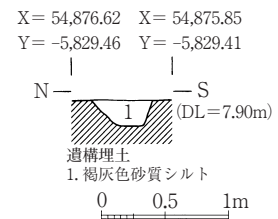
**SK-1031**

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺1.86m、短辺0.87m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

iv 溝跡

**SD-1001** (Fig.32)

調査区南端で検出した東西溝跡で、東は調査区外へ続く。溝跡は西 (N-82°-E) に向いた後、北西 (N-76°-W) に方向を変える。幅0.23~0.88m、深さ4~29cmを測り、基底面は西 (7.949m) から東 (7.569m) に向かって緩やかに傾斜し、10.43mを検出した。断面は逆台形で、埋土は褐灰色砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。



**Fig.32** SD-1001

**SD-1002**

調査区南部で検出した南北溝跡 (N-2°-W) で、南は調査区外へ続く。幅0.40~1.45m、深さ4~24cmで、基底面は北 (7.786m) から南 (7.570m) に向かって緩やかに傾斜し、11.73mを検出した。断面は舟底形で、埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

**SD-1003**

調査区南部で検出した南北溝跡 (N-5°-E) で、SD-1002とほぼ並走する。南は調査区外へ続く。幅0.82~1.06m、深さ5~6cmを測り、基底面は南 (7.892m) から北 (7.860m) に向かって緩やかに傾斜し、4.98mを検出した。断面は舟底形で、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SD-1004**

調査区西部で検出した東西溝跡で、西端は調査区外へ続く。溝跡は方眼東に向いた後、北東 (N-78°-E) に方向を変える。幅0.42~0.85m、深さ4~11cmを測り、基底面は西 (7.628m) から東 (7.563m)

に向かって緩やかに傾斜し、5.56mを検出した。断面は舟底形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

#### SD-1005

調査区北東部で検出した南北溝跡（N-28°-E）で、両端は調査区外へ続く。幅0.35~0.59m、深さ6~11cmを測り、基底面は7.500m前後とほぼ平坦で、3.55mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、黄褐色粘土質シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

#### SD-1006

調査区北西隅で検出した東西溝跡（N-82°-W）で、西は調査区外へ続く。幅42cm以上、深さ11~23cmを測り、基底面は西（7.952m）から東（7.866m）に向かって緩やかに傾斜し、9.29mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### v ピット

#### P-1001

調査区中央部で検出した楕円形のピットで、長径36cm、短径33cm、深さ22cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には図示した備前焼（1041）のみがみられた。

#### 出土遺物

##### 備前焼（Fig.33-1041）

1041は小杯で、約1/8が残存し、口径9.2cm、器高2.5cm、底径5.6cmを測る。体部はやや内湾して短く立ち上がり、口縁端部には自然釉が付着する。見込には放射線状に2条の沈線がみられる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は内外面とも灰赤色を呈する。

#### P-1002

調査区北部で検出した楕円形のピットで、長径31cm、短径28cm、深さ38cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器（1042）のみがみられた。

#### 出土遺物

##### 土師質土器（Fig.33-1042）

1042は杯で、約1/4が残存し、口径11.1cm、器高2.3cm、底径6.0cmを測る。器高が低く、皿状を呈し、口縁端部を細く仕上げる。器面は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### P-1003

調査区北東部で検出した楕円形のピットで、長径27cm、短径22cm、深さ21cmを測る。埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土製

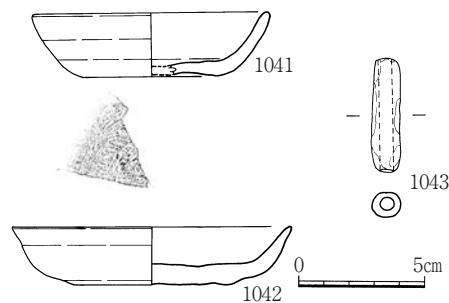


Fig.33 P-1001~1003出土遺物実測図

品 (1043) のみがみられた。

出土遺物

土製品 (Fig.33-1043)

1043は土錘で、円筒形を呈する。全長4.5cm、全幅1.1cm、孔径0.5cm、重量4.2gを測る。ナデ調整とみられるが、器面は著しく摩耗するため不明である。

② 近世以降

i 掘立柱建物跡

SB-1012 (Fig.34)

調査区南部で確認した梁間1間 (3.70m)、桁行3間 (6.40m) の南北棟建物で、棟方向はN-3°-Eである。柱間寸法は梁間 (東西) が3.70m、桁行 (南北) が1.90~2.40mである。柱穴は径0.50~0.55mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物は皆無であった。

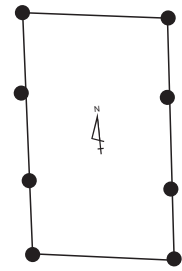


Fig.34 SB-1012

SB-1013 (Fig.35)

調査区南部で確認した梁間1間 (3.50~3.70m)、桁行4間 (7.50~7.60m) の南北棟建物で、棟方向はN-4°-Eである。SB-1014・1015と重なる。柱間寸法は梁間 (東西) が3.50~3.70m、桁行 (南北) が1.80~1.95mである。柱穴は径0.30~0.50mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は黄灰色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物は皆無であった。

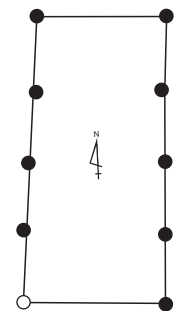


Fig.35 SB-1013

SB-1014 (Fig.36)

調査区南部で確認した梁間1間 (3.10~3.15m)、桁行3間 (5.75~5.85m) の身舎に下屋が東側に付く、東西2間 (4.35m)、南北3間 (5.70~5.90m) の南北棟建物で、棟方向はN-4°-Eである。SB-1013・1015と重なる。柱間寸法は梁間 (東西) が3.10~3.15m、桁行 (南北) が1.80~2.10mで、下屋の出が1.20~1.25mである。柱穴は径0.30~0.55mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は黄灰色砂質シルトまたは灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片3点、近世陶器片1点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

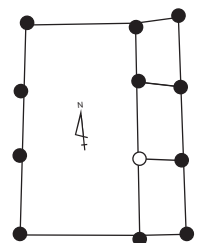


Fig.36 SB-1014

SB-1015 (Fig.37)

調査区南部で確認した梁間1間 (2.90~3.00m)、桁行2間 (4.65~4.70m) の南北棟建物で、棟方向はN-4°-Eである。SB-1013・1014と重なる。柱間寸法は梁間 (東西) が2.90~3.00m、桁行 (南北) が2.30~2.40mである。柱穴は径0.35~0.60mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は黄灰色シルト質砂または灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には青磁片1点、近世陶器片2点、古銭2点、鉄釘1点がみられ、古銭2点 (1044・1045) が図示できた。

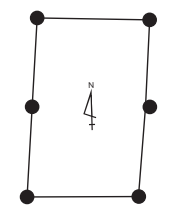


Fig.37 SB-1015

出土遺物

古銭 (Fig.52-1044・1045)

1044・1045はいずれも完形の寛永通寶で、古寛永である。1044は銭径2.46cm、内径1.95cm、穿径0.56cm、銭厚0.14cm、重量3.2g、1045は銭径2.47cm、内径1.96cm、穿径0.60cm、銭厚0.14cm、重量2.4gを測る。

**SB-1016** (Fig.38)

調査区中央部で確認した梁間1間 (3.30~3.40m)、桁行2間 (3.90~4.25m) の東西棟建物で、棟方向はN-88°-Wである。SB-1001・1002と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が3.30~3.40m、桁行 (東西) が1.90~2.20mである。柱穴は径30~45cmの円形または楕円形で、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

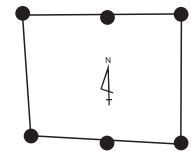


Fig.38 SB-1016

**SB-1017** (Fig.39)

調査区中央部で確認した梁間1間 (3.70~3.80m)、桁行5間 (9.80~9.90m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。柱間寸法は梁間 (南北) が3.70~3.80m、桁行 (東西) が1.70~2.20mである。柱穴は径0.35~0.50mの円形で、柱径は約15cmとみられる。埋土は灰黄色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

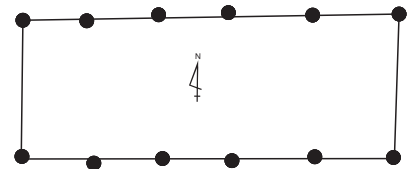


Fig.39 SB-1017

**SB-1018** (Fig.40)

調査区中央部で確認した梁間1間 (3.65~3.75m)、桁行4間 (7.55m) の東西棟建物で、棟方向はN-84°-Wである。柱間寸法は梁間 (南北) が3.65~3.75m、桁行 (東西) が1.80~2.00mである。柱穴は径20~40cmの円形で、埋土は灰黄褐色シルトまたは暗灰黄色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

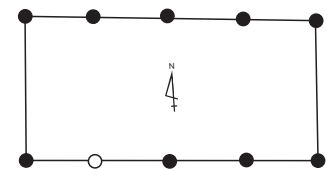


Fig.40 SB-1018

**SB-1019** (Fig.41)

調査区中央部で確認した梁間1間 (2.15~2.30m)、桁行2間 (3.10~3.15m) の南北棟建物で、棟方向はN-3°-Eである。柱間寸法は梁間 (東西) が2.15~2.30m、桁行 (南北) が1.45~1.70mである。柱穴は径20~45cmの円形または楕円形で、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

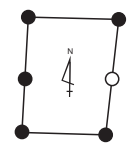


Fig.41 SB-1019

**SB-1020** (Fig.42)

調査区北部で確認した梁間1間 (3.80~4.00m)、桁行4間 (8.10~8.20m) の東西棟建物で、棟方向はN-86°-Wである。SB-1021と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が3.80~4.00m、桁行 (東西) が1.85~2.45mである。柱穴は径0.30~0.50mの円形または楕円形で、埋土は褐灰色粘土質シルトまたは灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片14点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

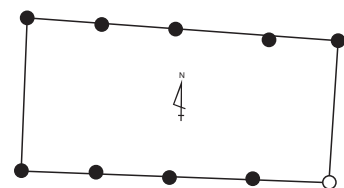


Fig.42 SB-1020



**SB-1021** (Fig.43)

調査区北部で確認した梁間1間 (2.30~2.55m)、桁行2間 (4.15~4.30m) の身舎に下屋が東側に付く、東西2間 (3.30~3.55m)、南北2間 (4.15~4.30m) の南北棟建物で、棟方向はN-6°-Eである。SB-1020と重なる。柱間寸法は梁間(東西)が2.30~2.55m、桁行(南北)が1.95~2.30mで、下屋の出が1.00mである。柱穴は径30~40cmの円形で、埋土はオリーブ褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

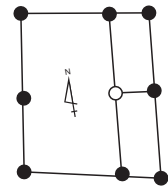


Fig.43 SB-1021

**SB-1022** (Fig.44)

調査区北部で確認した梁間1間 (3.90~4.00m)、桁行4間 (8.70m) の東西棟建物で、棟方向はN-87°-Wである。柱間寸法は梁間(南北)が3.90~4.00m、桁行(東西)が2.00mと2.70mである。柱穴は径0.30~0.50mの円形または楕円形で、埋土はオリーブ褐色シルトまたはにぶい黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点、近世陶器片2点、近世磁器片2点、鉄製品1点、鉄滓がみられ、近世陶器1点 (1046)、鉄製品 (1047) が図示できた。

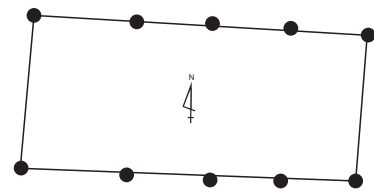


Fig.44 SB-1022

出土遺物

近世陶器 (Fig.52-1046)

1046は肥前系(内野山)の皿で、底部が完存し、底径4.6cmを測る。底部は削り出し高台で、砂が付着する。外面は畳付付近まで灰釉、内面は銅緑釉を施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土は精良で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。

鉄製品 (Fig.52-1047)

1047は刀子で、一部が欠損し、全長13.0cm、刃部長11.1cm、厚さ0.2cmを測る。刃部はほぼ直線的に伸びて関に至る。

**SB-1023** (Fig.45)

調査区北部で確認した梁間1間 (3.35~3.60m)、桁行2間 (5.45~5.65m) の東西棟建物で、棟方向はN-88°-Wである。SB-1011・1024と重なる。柱間寸法は梁間(南北)が3.35~3.60m、桁行(東西)が2.70~2.85mである。柱穴は径約0.35~0.70mの円形または楕円形で、埋土はオリーブ褐色シルトまたは暗灰黄色シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

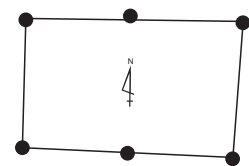


Fig.45 SB-1023

**SB-1024** (Fig.46)

調査区北部で確認した梁間1間 (2.60~2.90m)、桁行4間 (5.90~5.95m) の身舎に下屋が北側に付く、南北2間 (3.90~4.10m)、東西4間 (5.90~5.95m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。SB-1011・1023・1025と重なる。柱間寸法は梁間(南北)が2.60~2.90m、桁行(東西)が

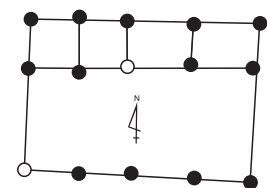


Fig.46 SB-1024

1.25～1.80mで、下屋の出が1.20～1.30mである。柱穴は径0.30～0.90mの円形または楕円形で、柱径は15～20cmとみられる。埋土はオリブ褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片30点、瓦質土器片1点、近世陶器片1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SB-1025 (Fig.47)

調査区北部で確認した梁間1間 (2.70～2.80m)、桁行3間 (5.60～5.70m) の東西棟建物で、棟方向はN-88°-Eである。SB-1011・1024と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が2.70～2.80m、桁行 (東西) が1.80～2.00mである。柱穴は径約0.25～0.55mの円形または楕円形で、埋土はオリブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片8点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

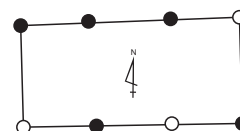


Fig.47 SB-1025

#### SB-1026 (Fig.48)

調査区北部で確認した梁間1間 (4.00m)、桁行5間 (10.00～10.20m) の東西棟建物で、棟方向はN-83°-Wである。SB-1027・1028・1029と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が4.00m、桁行 (東西) が1.80～2.20mである。柱穴は径0.45～0.75mの円形または楕円形で、埋土はオリブ褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片18点、近世陶器片4点、近世磁器片5点、鉄釘1点、鉄滓がみられ、近世陶器1点 (1048) が図示できた。

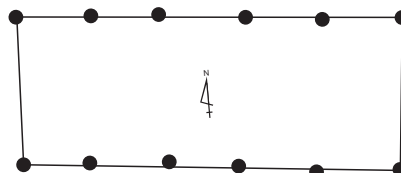


Fig.48 SB-1026

#### 出土遺物

##### 近世陶器 (Fig.52-1048)

1048は唐津焼の皿で、底部が完存し、底径3.4cmを測る。底部には削り出し高台を有し、露胎である。体部は底部から滑らかに立ち上がり、内面と外面の高台付近まで灰釉を薄く施す。見込には砂目痕が4ヶ所残る。胎土はやや粗く、焼成はやや不良で、釉には光沢がなく、色調はにぶい赤褐色を呈する。

#### SB-1027 (Fig.49)

調査区北部で確認した梁間1間 (4.25m)、桁行4間 (7.65～7.70m) の東西棟建物で、棟方向はN-84°-Wである。SB-1026・1028・1029と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が4.25m、桁行 (東西) が1.80～2.00mである。柱穴は径0.40～0.70mの円形または楕円形で、柱径は約15cmとみられる。埋土はオリブ褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片8点、瓦質土器片1点、近世陶器片2点、近世磁器片1点、石製品1点がみられ、石製品 (1049) が図示できた。

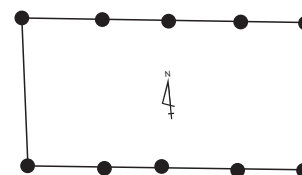


Fig.49 SB-1027

#### 出土遺物

##### 石製品 (Fig.52-1049)

1049は砥石で、板状を呈し、全長13.4cm、全幅4.0cm、全厚0.6cmを測る。1面に使用痕が残り、中央部は磨耗し、厚さ0.3cmを測る。また、側面には加工痕が残る。石材は粘板岩である。

**SB-1028** (Fig.50)

調査区北部で確認した梁間1間 (2.90m)、桁行4間 (6.75~6.95m) の東西棟建物で、棟方向はN-86°-Wである。SB-1026・1027・1029と重なる。柱間寸法は梁間 (南北) が2.90m、桁行 (東西) が1.40~2.10mである。柱穴は径約25~40cmの円形または楕円形で、埋土はオリブ褐色シルトまたははぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

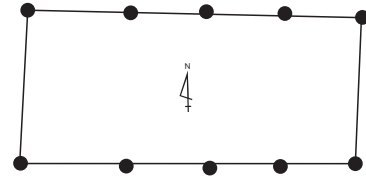


Fig.50 SB-1028

**SB-1029** (Fig.51)

調査区北部で確認した梁間2間 (2.70~2.90m)、桁行4間 (5.20~5.30m) の南北棟建物で、南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-3°-Eで、SB-1026・1027・1028と重なる。柱間寸法は梁間 (東西) が1.30~1.50m、桁行 (南北) が1.20~1.40mである。柱穴は径0.25~0.65mの円形または楕円形で、柱径は15~

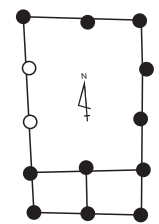


Fig.51 SB-1029

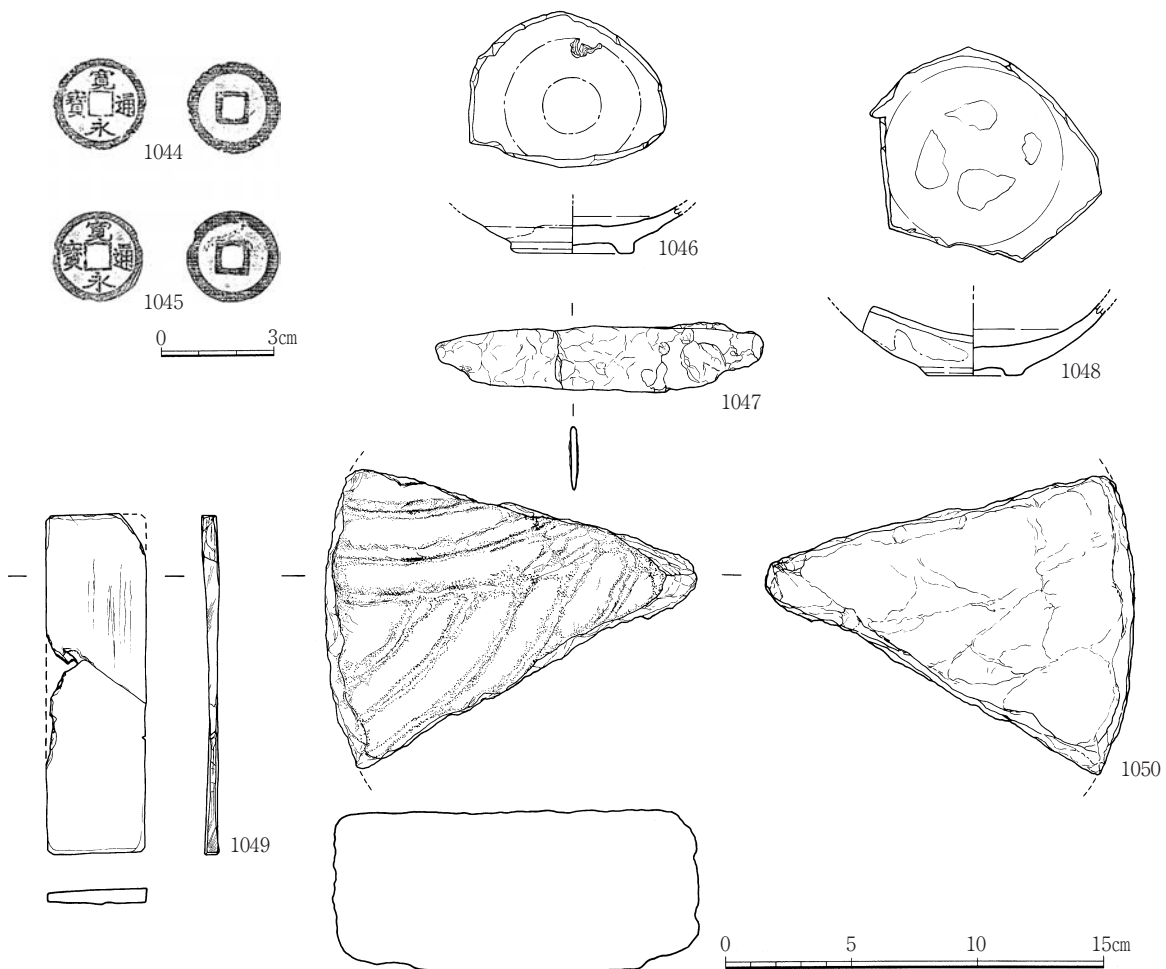


Fig.52 SB-1015~1029出土遺物実測図

20cmとみられる。埋土はオリーブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片17点、近世磁器片1点、石製品1点、鉄釘1点、鉄滓がみられ、石製品（1050）が図示できた。

#### 出土遺物

石製品 (Fig.52-1050)

1050は石臼の下臼部分で、約1/8が残存する。径32cmとみられ、厚さ6.5cmを測る。摺り目は4~5本の斜行する条線が残存し、磨耗する。石材は砂岩である。

Tab.3 第I調査地区近世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備 考
	梁間 × 桁行	梁間(m)×桁行(m)	柱間寸法				
			梁間(m)	桁行(m)			
SB-1012	1×3	3.70 × 6.40	3.70	1.90~2.40	23.68	N-3°-E	
SB-1013	1×4	3.50~3.70 × 7.50~7.60	3.50~3.70	1.80~1.95	27.19	N-4°-E	
SB-1014	2×3	4.35 × 5.70~5.90	3.10~3.15	1.80~2.10	25.23	N-4°-E	下屋
SB-1015	1×2	2.90~3.00 × 4.65~4.70	2.90~3.00	2.30~2.40	13.79	N-4°-E	
SB-1016	1×2	3.30~3.40 × 3.90~4.25	3.30~3.40	1.90~2.20	13.66	N-88°-W	
SB-1017	1×5	3.70~3.80 × 9.80~9.90	3.70~3.80	1.70~2.20	36.94	N-89°-W	
SB-1018	1×4	3.65~3.75 × 7.55	3.65~3.75	1.80~2.00	27.94	N-84°-W	
SB-1019	1×2	2.15~2.30 × 3.10~3.15	2.15~2.30	1.45~1.70	6.96	N-3°-E	
SB-1020	1×4	3.80~4.00 × 8.10~8.20	3.80~4.00	1.85~2.45	31.79	N-86°-W	
SB-1021	2×2	3.30~3.55 × 4.15~4.30	2.30~2.55	1.95~2.30	14.48	N-6°-E	下屋
SB-1022	1×4	3.90~4.00 × 8.70	3.90~4.00	2.00~2.70	34.37	N-87°-W	
SB-1023	1×2	3.35~3.60 × 5.45~5.65	3.35~3.60	2.70~2.85	19.30	N-88°-W	
SB-1024	2×4	3.90~4.10 × 5.90~5.95	2.60~2.90	1.25~1.80	23.70	N-89°-W	下屋
SB-1025	1×3	2.70~2.80 × 5.60~5.70	2.70~2.80	1.80~2.00	15.54	N-88°-E	
SB-1026	1×5	4.00 × 10.00~10.20	4.00	1.80~2.20	40.40	N-83°-W	
SB-1027	1×4	4.25 × 7.65~7.70	4.25	1.80~2.00	32.62	N-84°-W	
SB-1028	1×4	2.90 × 6.75~6.95	2.90	1.40~2.10	19.87	N-86°-W	
SB-1029	2×4	2.70~2.90 × 5.20~5.30	1.30~1.50	1.20~1.40	14.71	N-3°-E	間仕切柱

#### ii 塀・柵列跡

##### SA-1002

調査区中央部で確認した東西塀（N-89°-W）である。SB-1016・1017の北隣に位置する。3間分（7.50m）を検出し、柱間は2.05~2.90mである。柱穴は径15~30cmの円形で、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

##### SA-1003

調査区北部で確認した東西塀（N-83°-W）である。SB-1023~1025の南隣に位置する。3間

分 (5.95m) を検出し、柱間は1.80~2.05mである。柱穴は径0.40~0.70mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点、近世陶器片4点、鉄釘1点、鉄滓がみられ、近世陶器1点 (1051) が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.53-1051)

1051は唐津焼の皿で、底部が完存し、底径4.8cmを測る。底部は器壁が厚く、削り出し高台を有し、露胎である。体部は底部から滑らかに立ち上がり、内面と外面の高台付近まで灰釉を薄く施す。見込には砂目痕が4ヶ所残る。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は灰白色またはにぶい褐色を呈する。

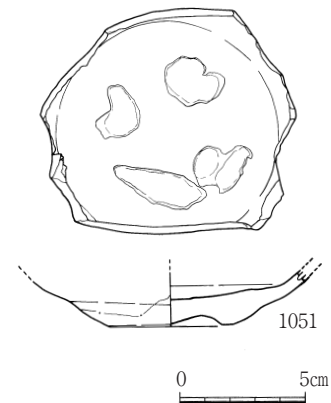


Fig.53 SA-1003  
出土遺物実測図

Tab.4 第Ⅰ調査地区近世堀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備 考
	柱穴数 (個)	全長 (m)	柱間距離 (m)		
SA-1002	4	7.50	2.05~2.90	N-89°-W	
SA-1003	4	5.95	1.80~2.05	N-83°-W	

iii 土坑

SK-1032

調査区南部で検出した円形の土坑で、径1.37m、深さ22cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄色砂質シルトで、灰色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

SK-1033 (Fig.54)

調査区南部で検出しただるま形の土坑である。全長1.11m、幅0.72m、深さ11cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。埋土は浅黄色シルト質砂で、その下に炭化物の堆積と焼土が認められた。天井部は削平されたとみられるが、簡易な窯とみられる。出土遺物には土師質土器片1点、近世陶器片 (唐津焼) 1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SK-1034

調査区南部で検出した長方形の土坑である。長辺1.33m、短辺1.20m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-68°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が炭化物を含む黄灰色砂質シルト、下層が灰黄色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

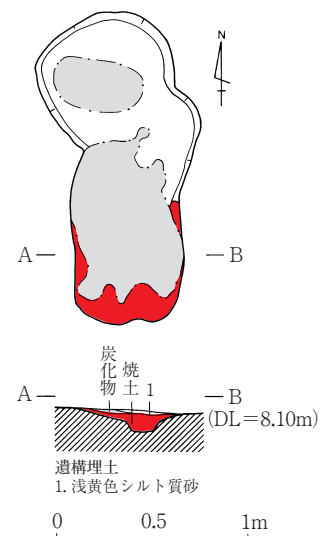


Fig.54 SK-1033

### SK-1035

調査区南部で検出した円形の土坑で、径1.30m、深さ39cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色砂質シルトで、灰色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

### SK-1036

調査区南部で検出した不整円形の土坑で、径1.68m、深さ0.52mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点、近世陶器片3点、近世磁器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかつた。

### SK-1037

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺0.93m、短辺0.78m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-86°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、焼土を含んでいた。また、その下には炭化物の堆積がみられ、基底面と壁面には焼土がみられた。天井部は削平されたとみられるが、簡易な窯とみられる。出土遺物は皆無であった。

### SK-1038 (Fig.55)

調査区中央部で検出しただるま形の土坑である。全長1.71m、幅0.77m、深さ17cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、焼土を含んでいた。また、その下より炭化物の堆積がみられ、西側の円形を呈する部分では壁面に焼土が認められた。天井部は削平されたとみられるが、簡易な窯とみられる。出土遺物には土師質土器片3点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかつた。

### SK-1039 (Fig.56)

SK-1038の西側で検出しただるま形の土坑である。全長2.05m、幅1.03m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-89°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物が含まれており、その下には焼土が認められた。また、東側の円形を呈する部分では壁面にも焼土が認められた。SK-1038と同様な窯とみられ、東側の円形を呈する部分には南側に突出する箇所があり、煙道とみられる。出土遺物は皆無であった。

### SK-1040

調査区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-1006を切

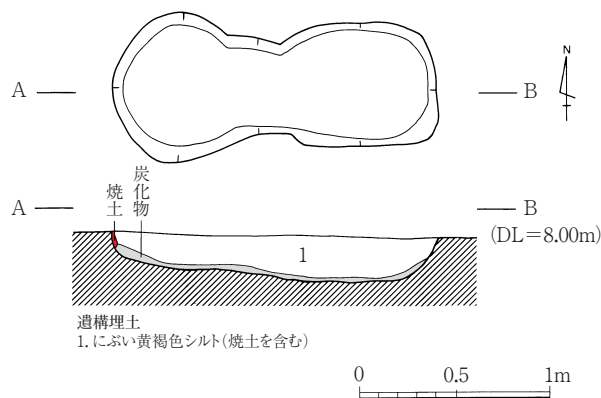


Fig.55 SK-1038

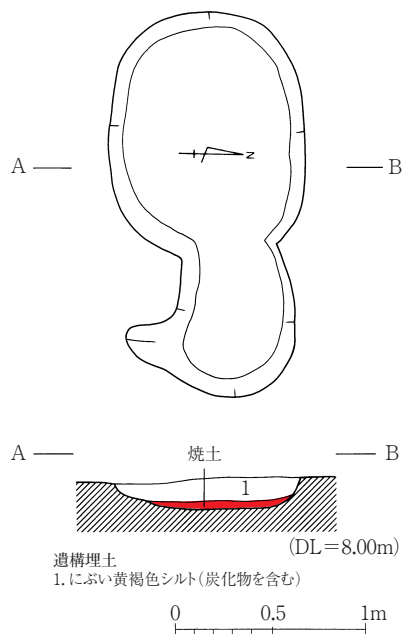


Fig.56 SK-1039

る。長辺1.01m, 短辺0.71m, 深さ24cmを測り, 長軸方向はN-52°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトで, その下には炭化物と焼土がみられた。出土遺物は皆無であった。

**SK-1041** (Fig.57)

調査区北部で検出した楕円形の土坑で, 西半分は調査区外へ続く。検出した東半分は長径2.15m, 短径1.45m, 深さ0.68mを測り, 長軸方向はN-41°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は3層に分かれ, 埋土1は炭化物を含む灰黄褐色粘土質シルト, 埋土2はにぶい黄橙色粘土質シルトのブロックと炭化物を含む灰黄褐色粘土質シルト, 埋土3は褐色シルト質粘土であった。出土遺物には土師質土器片12点, 青磁片1点, 近世陶器1点がみられ, 近世陶器 (1052) が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.60-1052)

1052は天目形の碗で, 約1/2が残存し, 底径5.2cmを測る。底部には断面逆台形を呈する削り出し高台を有し, 露胎である。体部は高台から内湾して立ち上がり, 内外面に黄緑色の釉を薄く施す。胎土は砂粒を含み, やや粗く, 焼成は良好で, 色調は灰白色を呈する。

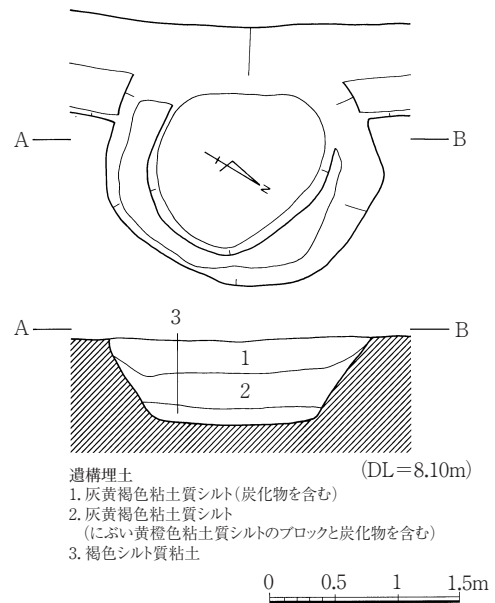


Fig.57 SK-1041

**SK-1042** (Fig.58)

調査区北部で検出した不整楕円形の土坑で, 他の土坑に切られる。検出した北半分は長径0.82m, 短径0.70m, 深さ22cmを測り, 長軸方向はN-14°-Eを示す。断面は舟底形を呈する。埋土は褐灰色粘土質シルトで, その下には炭化物の堆積がみられた。また, 壁面と床面には焼土がみられ, 壁面はオーバーハングしている箇所も認められた。SK-1038等と同様な簡易な窯とみられる。出土遺物には土師質土器片3点, 青磁片1点, 近世陶器片 (唐津焼) 1点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

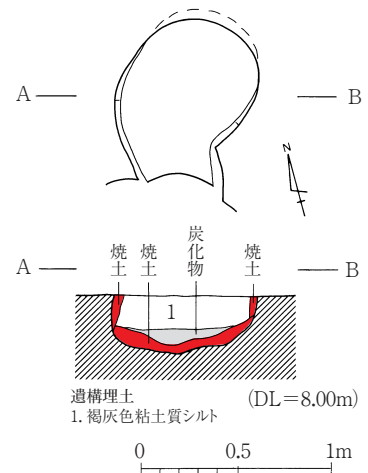


Fig.58 SK-1042

**SK-1043**

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径2.94m, 短径1.74m, 深さ19cmを測り, 長軸方向はN-66°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は褐灰色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片10点, 近世陶器片1点, 近世磁器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-1044**

調査区北部東端で検出した隅丸方形の土坑で, 東半分は調査区外へ続く。SD-1010とSD-1011を切る。長辺2.56m, 短辺1.35m, 深さ0.54mを測り, 長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形

を呈し、埋土は4層に分かれ、埋土1はマンガン粒と炭化物を多く含む灰色粘土質シルト、埋土2はマンガン粒を多く含む灰色粘土質シルト、埋土3は炭化物を含む灰オリーブ色シルト質粘土、埋土4は3cm大の礫を少し含む灰色シルト質粘土であった。出土遺物には土師質土器片12点、瓦質土器片1点、青磁片3点、近世陶器片10点、近世磁器片4点、土錘1点、砥石1点がみられ、近世陶器3点（1053～1055）、近世磁器3点（1056～1058）が図示できた。

## 出土遺物

### 近世陶器 (Fig.60-1053～1055)

1053は半球形の碗で、約2/3が残存し、口径10.0cm、器高5.9cm、底径4.0cmを測る。胴部が膨らんでおり、胴径は10.5cmを測り、体部下半に削り調整を施す。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。1054は唐津焼の溝縁皿で、約1/3が残存し、口径12.4cm、器高3.7cm、底径4.0cmを測る。底部の器壁は厚く、低く直立する削り出し高台を有する。体部は内湾し、口縁部は斜め上方に伸び、内面には溝がめぐる。内面と体部外面には灰釉を薄く施し、見込には砂目痕が1ヶ所残る。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は灰白色を呈する。1055は播鉢で、約1/6が残存し、口径は28.8cmを測る。体部は外上方に立ち上がり、口縁部は上下に肥厚し、外縁帯には2条の凹線がめぐる。器面は回転ナデ調整で、口縁部はヨコナデ調整を行い、内面には8本単位の摺り目が残る。胎土には白色の砂粒を含み、焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

### 近世磁器 (Fig.60-1056～1058)

1056は肥前系の小型の丸碗で、約1/2が残存し、口径9.4cm、器高5.5cm、底径3.4cmを測る。体部は内湾し、外面には草花文と圏線、高台内に圏線の染付がみられる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、砂が付着する。胎土はやや密で、焼成はやや不良となり、釉には光沢がなく、色調は灰白色を呈する。1057は肥前系(波佐見)の皿で、約1/2が残存し、口径14.8cm、器高3.4cm、底径7.8cmを測る。底部は削り出し高台で、体部は内湾して口縁部に至る。体部内面には唐草文と2条の圏線、見込には五弁花の染付がみられる。全面に透明釉を施し、畳付と見込は釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は灰白色を呈する。1058は仏飯器で、杯部の一部が欠損する。口径7.2cm、器高4.9cm、底径4.2cmを測る。杯部は平らな底部から、湾曲して直立する口縁に至る。脚部は削り出しで、脚柱部は短く、裾部は水平に伸びる。杯部と脚柱部には灰釉を薄く施し、脚内面にも一部釉の付着がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

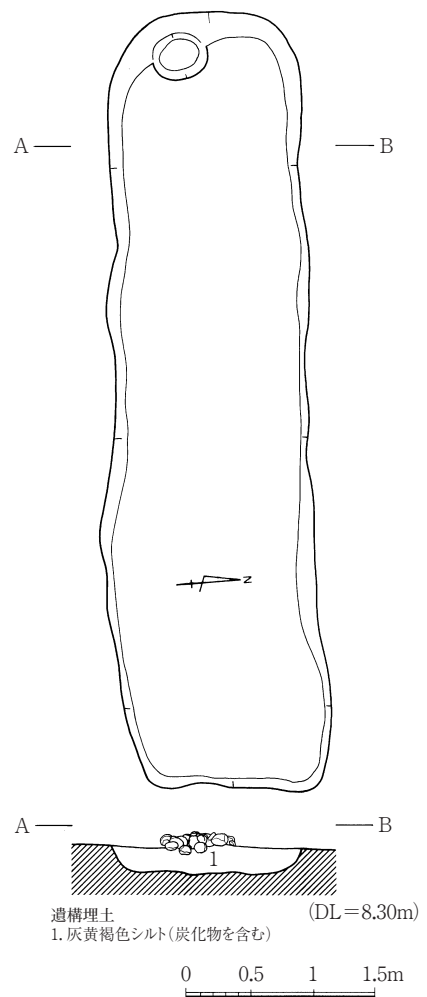


Fig.59 SK-1045



SK-1045 (Fig.59)

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺3.09m, 短辺1.50m, 深さ33cmを測り, 長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。また, 検出時には10cm大の河原石の集石がみられた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片4点, 瓦質土器片1点, 近世磁器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-1046

調査区北部で検出した円形の土坑で, 径0.86m, 深さ10cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点, 瓦質土器1点, 土錘2点, 古銭1点がみられ, 瓦質土器 (1059), 古銭 (1060) が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.60-1059)

1059は鍋で, 口縁部の一部が残存し, 口径は33.3cmを測る。体部はやや内湾気味に立ち上がり, 口縁部は大きく内湾し, 端部は肥厚して水平な面を有する。調整は体部外面がヨコ方向のヘラ削り, 口縁部はヨコナデ, 体部内面はナデを施し, 内外面に炭素が吸着する。また, 外面には煤が付着す

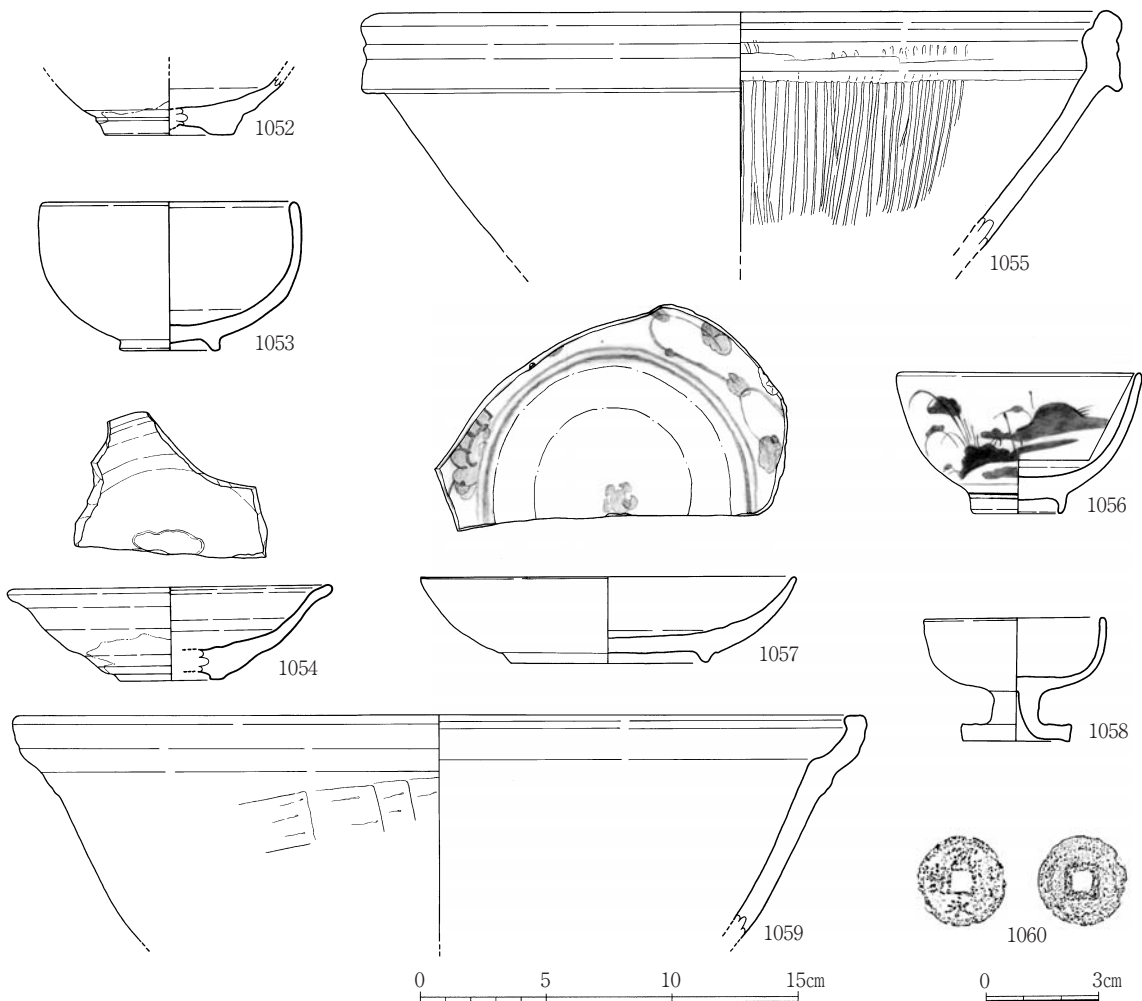


Fig.60 SK-1041・1044・1046出土遺物実測図

る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は暗灰色または黒色を呈する。

#### 古銭 (Fig.60-1060)

1060は寛永通寶で、古寛永である。完形で、全体に銹化がみられ、銭径2.42cm、内径1.99cm、穿孔0.53cm、銭厚0.16cm、重量2.9gを測る。

#### SK-1047

調査区北部で検出した不整楕円形の土坑である。長径4.34m、短径1.06m、深さ42cmを測り、長軸方向はN-37°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は4層に分かれる。埋土1は炭化物を含む灰黄褐色シルト、埋土2はにぶい黄褐色シルト、埋土3は灰黄褐色シルト、埋土4は褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-1048

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径2.14m、短径1.94m、深さ34cmを測り、長軸方向はN-9°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分かれ、埋土1は炭化物を含むにぶい黄褐色シルト、埋土2はにぶい黄橙色シルト、埋土3はオリーブ褐色シルトであった。出土遺物は皆無であった。

#### SK-1049

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径1.34m、短径49cm、深さ0.57mを測り、長軸方向はN-5°-Eを示す。断面はU字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

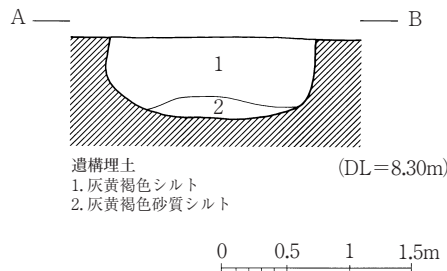
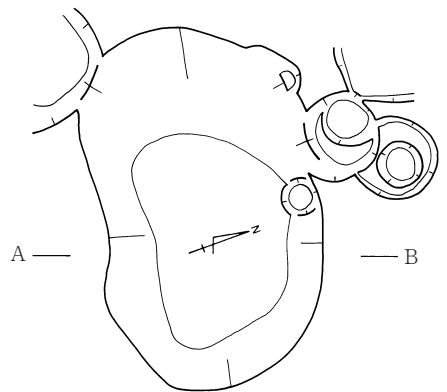
#### SK-1050 (Fig.61)

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径2.88m、短径1.64m、深さ0.67mを測り、長軸方向はN-4°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色シルト、下層が灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点、瓦質土器片1点、青磁片1点、近世陶器片7点、近世磁器片4点、鉄釘1点がみられ、近世磁器1点(1061)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 近世磁器 (Fig.64-1061)

1061は小杯で、ほぼ完形を呈し、口径6.0cm、器高3.2cm、底径3.3cmを測る。底部には低く幅の広い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は若干外反する。高台付近まで白色釉を施し、高台は露胎である。また、内面は使用時に付着したとみられる白色のものが付着する。胎土はやや粗く、焼成は不良で、釉には光沢がなく、色調は灰白色を呈する。



遺構埋土  
1. 灰黄褐色シルト  
2. 灰黄褐色砂質シルト

Fig.61 SK-1050

**SK-1051**

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺0.98m, 短辺0.90m, 深さ0.50mを測り, 長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土はオリブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点, 近世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-1052**

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.56m, 短辺1.44m, 深さ5cmを測り, 長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はオリブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点, 近世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-1053 (Fig.62)**

調査区北部で検出した円形を呈するとみられる土坑で, 北側は調査区外へ続く。検出した南半分は径1.97m, 深さ26cmを測る。断面は逆台形を呈し, 埋土はオリブ褐色シルトで, 炭化物を含み, 基底面で集石を検出した。石は河原石や角礫など10~30cm大のものがみられた。出土遺物には土師質土器片4点, 瓦質土器片1点, 近世陶器片5点, 石製品4点がみられ, 石製品3点(1062~1064)が図示できた。

**出土遺物**

**石製品 (Fig.64-1062~1064)**

1062は砥石で, 一部が欠損するが, 直方体を呈するものとみられ, 全長8.4cm, 全幅4.5cm, 全厚2.3cmを測る。残存部で表面と3側面に使用痕が残る。石材は頁岩である。

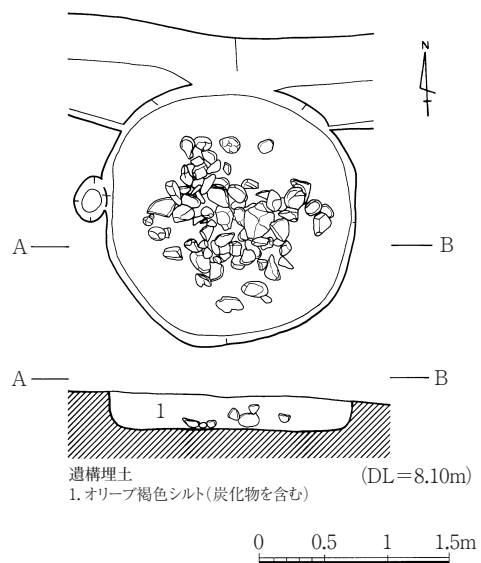
1063・1064は石臼で, いずれも下臼である。1063は約1/10が残存し, 径は26.0cmとみられ, 全厚5.0cmを測る。摺り目は2条の斜行する条線が残るが, 著しく磨耗する。石材は砂岩である。1064は約1/2が残存し, 径33.0cm, 全厚6.1cmを測る。摺り目は斜行する条線が4本単位でみられるが, 著しく磨耗する。一部被熱した箇所がみられる。石材は砂岩である。

**SK-1054**

調査区北部で検出した楕円形の土坑で, SK-1055に切られる。長径2.36m, 短径0.84m, 深さ0.58mを測り, 長軸方向はN-86°-Wを示す。断面はU字形を呈し, 埋土はオリブ褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点, 瓦質土器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-1055**

調査区北部で検出した楕円形の土坑で, SK-1054を切る。長径0.53m, 短径36cm, 深さ43cmを測り, 長軸方向はN-2°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片15点, 近世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。



**Fig.62 SK-1053**

### SK-1056

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径1.02m、短径0.87m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-10°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片7点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-1057

調査区北部で検出した円形の土坑で、径1.13m、深さ9cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色シルト、下層がオリーブ褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-1058

調査区北部で検出した楕円形の土坑である。長径1.06m、短径0.60m、深さ41cmを測り、長軸方向はN-70°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が炭化物を含むオリーブ褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片14点、近世磁器片1点、鉄滓がみられ、土師質土器1点(1065)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.64-1065)

1065は杯で、約1/4が残存し、口径13.4cm、器高4.4cm、底径8.2cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部に至る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は橙色を呈する。

### SK-1059

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.47m、短辺1.40m、深さ24cmを測り、長軸方向はN-1°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、近世磁器1点、砥石1点がみられ、近世磁器(1066)が図示できた。

#### 出土遺物

近世磁器 (Fig.64-1066)

1066は初期伊万里の丸碗で、体部の約1/5が残存する。体部下半の器壁が厚く、内湾して立ち上がる。外面には草花文の染付がみられ、内外面に透明釉を薄く施す。胎土は精良で、焼成は良く、色調は明青灰色を呈する。

### SK-1060 (Fig.63)

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺1.05m、短辺0.70m、深さ0.53mを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層はオリーブ褐色シルト、下層はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物は上層より土師質土器片3点、鉄釘1点、古銭1点、下層より古銭1点がみられ、古銭2点(1067・1068)が図示できた。

#### 出土遺物

古銭 (Fig.64-1067・1068)

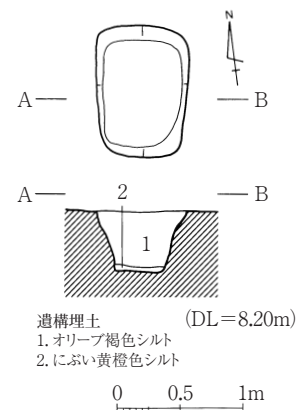


Fig.63 SK-1060

1067・1068はいずれも寛永通寶で、古寛永である。完形で、全体に銹化がみられる。1067は上層より出土したもので、錢径2.52cm，内径1.99cm，穿径0.55cm，錢厚0.11cm，重量2.2gを測る。1068は下層より出土したもので、板材の上で確認された。錢径2.44cm，内径1.94cm，穿径0.46cm，錢厚0.18cm，重量3.4gを測る。

**SK-1061**

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺1.06m，短辺0.60m，深さ7cmを測り，長軸方向はN-21°-Eを示す。断面は逆台形を呈し，埋土はオリブ褐色シルトで，炭化物と骨片を含んでおり，墓跡とみられる。出土遺物は古銭1点がみられたが，復元図示できなかった。

**SK-1062**

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺1.40m，短辺0.60m，深さ28cmを測り，長軸方

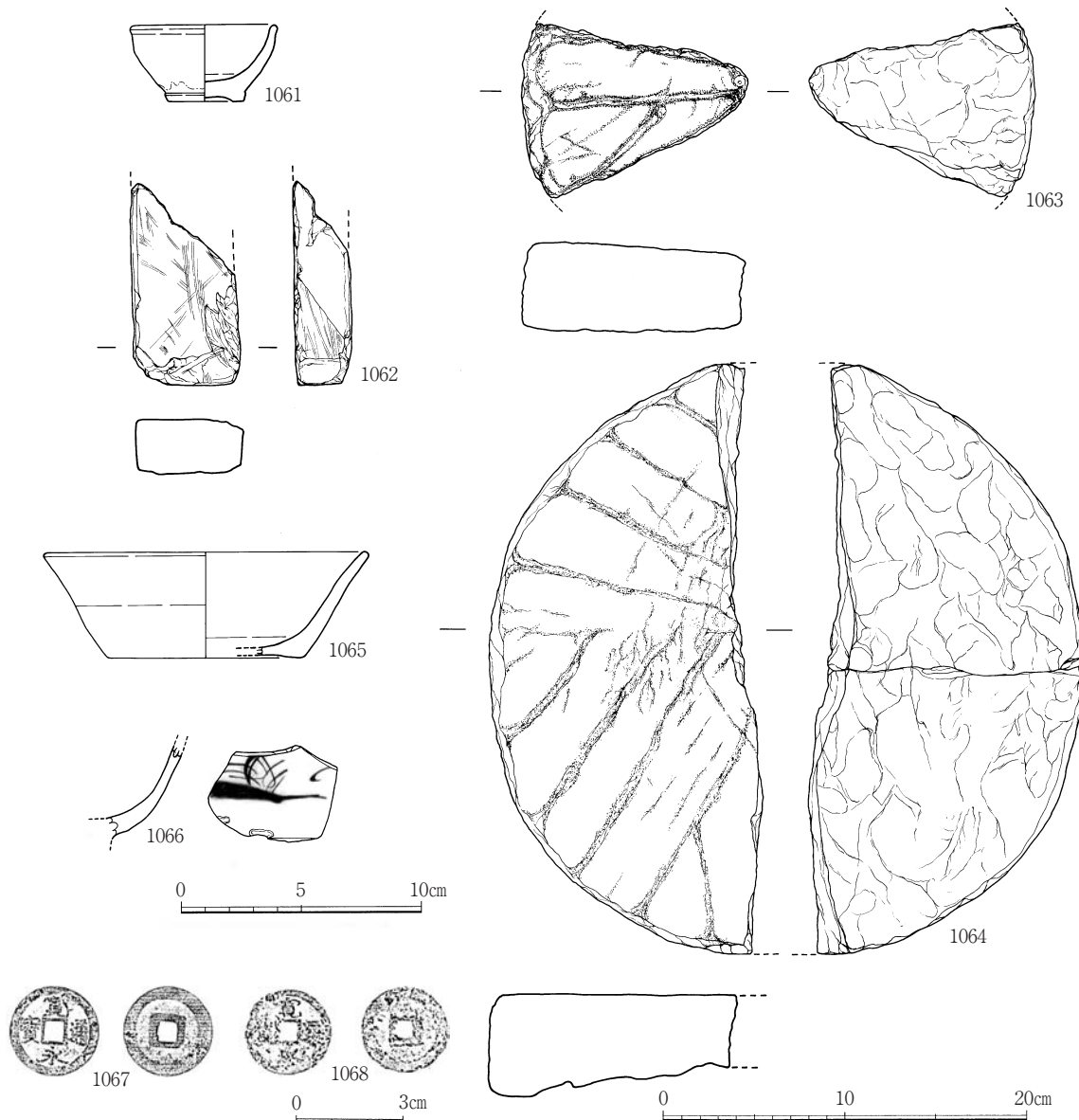


Fig.64 SK-1050・1053・1058~1060出土遺物実測図

向はN-41°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトで、炭化物と骨片を含んでおり、墓跡とみられる。出土遺物は土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

#### iv 溝跡

##### SD-1007

調査区南東部で検出した南北溝跡(N-0°)で、区画溝とみられる。SD-1008・1009と並走する。幅20~42cm、深さ10~26cmを測り、基底面は南(8.205m)から北(8.109m)に緩やかに傾斜し、13.35mを検出した。断面は舟底形で、埋土は黄灰色砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物は土師質土器片11点、近世磁器1点がみられ、土師質土器1点(1069)、近世磁器(1070)が図示できた。

##### 出土遺物

土師質土器 (Fig.66-1069)

1069は杯で、約1/3が残存し、口径10.0cm、器高2.9cm、底径4.6cmを測る。底部から緩やかに立ち上がり、体部はやや外反して、口縁部を薄く仕上げる。器面は著しく摩耗し、調整は不明である。胎土は密で、焼成は悪く、色調は橙色を呈する。

近世磁器 (Fig.66-1070)

1070は小杯で、ほぼ完存し、口径5.9cm、器高3.5cm、底径2.8cmを測る。底部には断面三角形の削り出し高台を有し、口縁部は緩やかに外反し、端反口縁となる。内面と外面の高台付近まで灰白色の釉を薄く施し、見込には砂目痕が2ヶ所残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。

##### SD-1008 (Fig.65)

調査区南東部で検出した南北溝跡で、区画溝とみられ、SD-1007・1009と並走する。溝跡は方眼北に向いた後、北東(N-8°-E)に方向を変える。幅0.37~1.33m、深さ5~40cmを測り、基底面は北(7.800m)から南(7.600m)に傾斜し、29.70mを検出した。断面は舟底形で、埋土は2層に分かれ、上層はマンガンを含む褐灰色粘土質シルト、下層は粗砂とマンガンを含む灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片22点、青磁片1点、近世陶器片6点、近世磁器片3点、石臼1点、鉄製品1点がみられ、上層より出土した近世陶器1点(1071)、下層より出土した近世陶器1点(1072)、石臼(1073)が図示できた。

調査区南東部で検出した南北溝跡で、区画溝とみられ、SD-1007・1009と並走する。溝跡は方眼北に向いた後、北東(N-8°-E)に方向を変える。幅0.37~1.33m、深さ5~40cmを測り、基底面は北(7.800m)から南(7.600m)に傾斜し、29.70mを検出した。断面は舟底形で、埋土は2層に分かれ、上層はマンガンを含む褐灰色粘土質シルト、下層は粗砂とマンガンを含む灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片22点、青磁片1点、近世陶器片6点、近世磁器片3点、石臼1点、鉄製品1点がみられ、上層より出土した近世陶器1点(1071)、下層より出土した近世陶器1点(1072)、石臼(1073)が図示できた。

##### 出土遺物

近世陶器 (Fig.66-1071・1072)

1071は唐津焼の皿で、底部が完存し、底径5.6cmを測る。底部は器壁が厚く、低く太い削り出し高台を有し、体部は緩やかに内湾する。内面と外面の暈付付近まで灰釉を施し、見込には砂目痕が

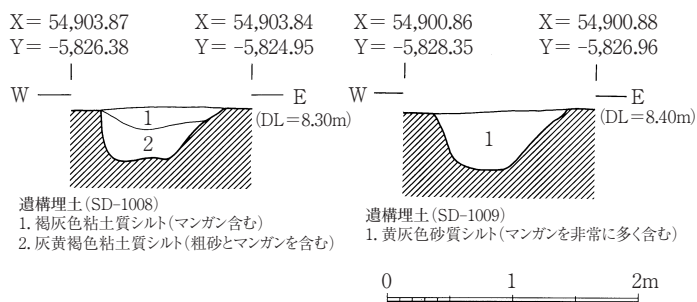


Fig.65 SD-1008・1009

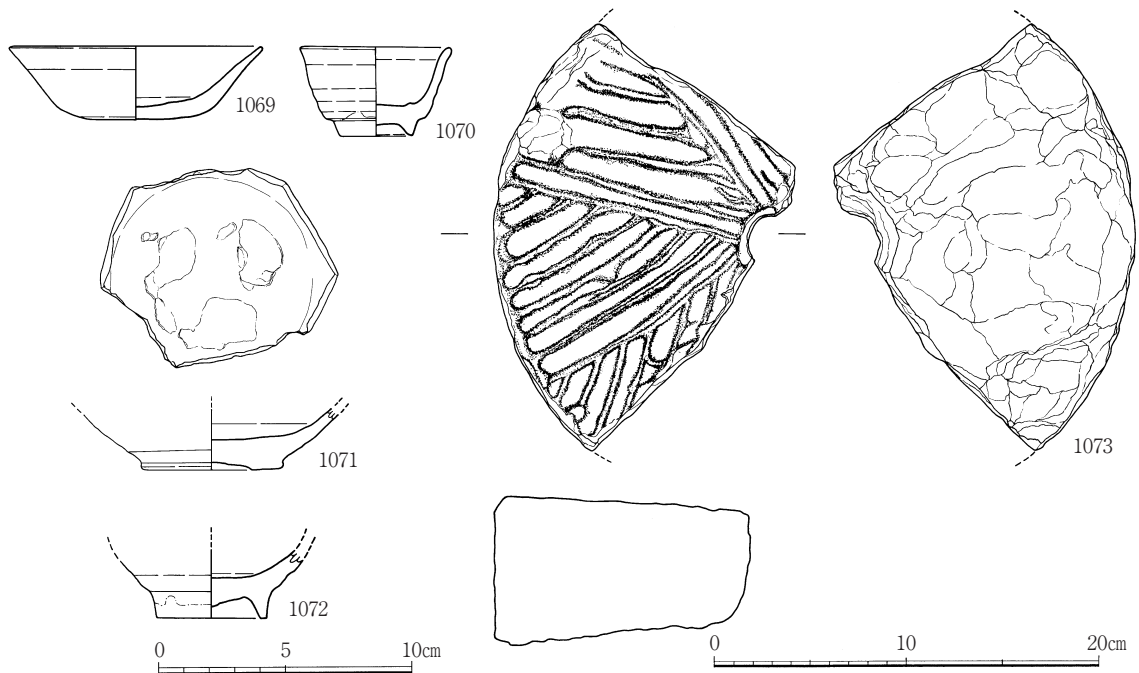


Fig.66 SD-1007・1008出土遺物実測図

残る。また、高台は露胎で、砂が若干付着する。胎土は密で、焼成はやや不良となり、釉には光沢がなく、色調は灰黄色を呈する。1072は肥前系とみられる天目茶碗で、底部が完存し、底径4.4cmを測る。細く高い削り出し高台を有し、体部はやや内湾して立ち上がる。内面と外面の高台付近まで鉄釉を施す。胎土は精良で、焼成は良く、釉調は黒色、生地は灰白色を呈する。

石製品 (Fig.66-1073)

1073は石臼で、下臼である。約1/4が残存し、径30.0cm、全厚7.9cmを測る。摺り目は8本単位の斜行する条線で、磨耗する。石材は砂岩である。

**SD-1009** (Fig.65)

調査区南東部で検出した南北溝跡 (N-5°-E) で、区画溝とみられる。SD-1007・1008と並走する。幅0.96~1.13m、深さ32~44cmを測り、基底面は南 (8.129m) から北 (7.871m) に傾斜し、5.10mを検出した。断面は舟底形で、埋土は黄灰色砂質シルトで、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物は土師質土器片6点、青磁片1点、近世陶器片2点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SD-1010** (Fig.67)

調査区中央部で検出した南北溝跡 (N-3°-E) で、区画溝とみられる。SD-1011を切る。幅0.44~0.98m、深さ12~37cmを測り、基底面は北 (7.802m) から南 (7.690m) に緩やかに傾斜し、28.75mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質粘土で、炭化物と5~10cm大の礫を多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点、近世陶器片1点がみ

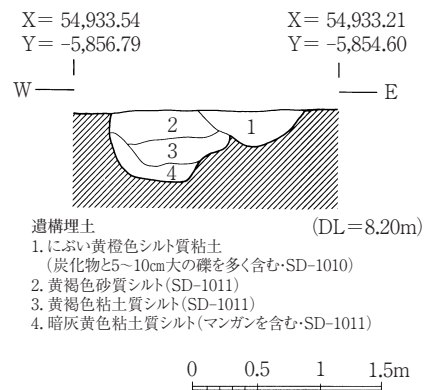


Fig.67 SD-1010・1011

られたが、復元図示できるものはなかった。

### SD-1011 (Fig.67)

調査区中央部で検出した南北溝跡で、区画溝とみられる。SD-1010とSK-1044に切られる。溝跡は北東(N-3°-E)を向いた後、方眼北に方向を変える。幅0.55~1.26m、深さ0.36~0.54mを測り、基底面は南(7.600m)から北(7.503m)に緩やかに傾斜し、40.10mを検出した。断面は舟底形で、埋土は3層に分かれ、上層から黄褐色砂質シルト、黄褐色粘土質シルト、マンガンを含む暗灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物は土師質土器片70点、瀬戸・美濃系陶器3点、瓦質土器片2点、青磁片5点、近世陶器片20点、近世磁器片7点、砥石1点、鉄釘2点、鉄滓がみられ、瀬戸・美濃系陶器3点(1074~1076)、近世陶器5点(1077~1081)、近世磁器1点(1082)が図示できた。

### 出土遺物

#### 瀬戸・美濃系陶器 (Fig.68-1074~1076)

1074~1076は天目茶碗で、いずれも底部が完存する。断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部はやや内湾して立ち上がる。内面から体部外面に鉄釉を施し、釉調は黒褐色、生地は灰白色を呈する。1074は底径4.2cmを測り、胎土には1cm大の礫を含み、焼成は良好である。1075は底径4.4cmを測り、胎土はやや密で、焼成は良好である。1076は底径5.2cmを測り、胎土はやや密で、焼成はやや良好である。

#### 近世陶器 (Fig.68-1077~1081)

1077は天目茶碗で、底部が完存し、底径4.0cmを測る。断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は底部から屈曲して直線的に伸びる。内面から体部外面にかけて灰釉を薄く施し、高台は露胎で、一部砂が付着する。胎土は精良で、焼成は良く、釉調は明オリーブ灰色、生地は灰白色を呈する。

1078・1079は唐津焼の皿である。1078は底部が完存し、底径4.6cmを測る。低い削り出し高台を

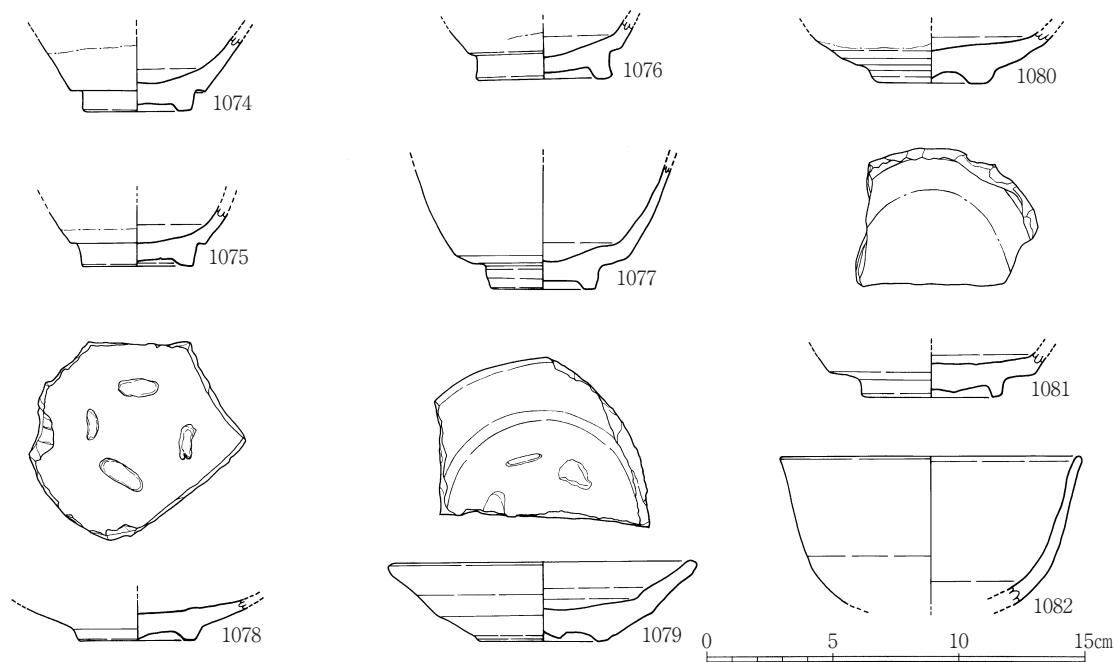


Fig.68 SD-1011出土遺物実測図



有し、体部は外上方に真っすぐ伸びる。全面に灰釉を施し、見込には砂目痕が残る。胎土は精良で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。1079は丸皿で、約1/2が残存し、口径11.1cm、器高3.2cm、底径4.9cmを測る。器壁が厚く、断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は短く直線的に伸びる。調整は回転ナデで、内面は灰釉を施し、見込には砂目痕が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや不良で、釉には光沢がなく、釉調はにぶい橙色、生地はにぶい黄橙色を呈する。1080は皿で、底部が完存し、底径4.2cmを測る。幅が太い削り出し高台を有し、体部はやや内湾して立ち上がる。内面から体部外面にかけて灰釉を施し、高台は露胎で、畳付には砂目痕がみられる。胎土はやや密で、焼成は良く、釉調は銅緑色、生地は灰白色を呈する。1081は皿とみられるもので、約1/2が残存し、底径5.1cmを測る。断面方形を呈する削り出し高台を有し、平らな底部から屈曲して体部に至る。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、釉調、生地ともににぶい橙色を呈する。

近世磁器 (Fig.68-1082)

1082は碗で、口径11.8cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は若干外反する。全面に透明釉を施し、胎土は密で、焼成は良く、釉調、生地とも色調は灰白色を呈する。

**SD-1012**

調査区北部で検出した東西溝跡 (N-90°-E) で、西は調査区外へ続く。幅0.45~0.55m、深さ23~31cmを測り、基底面は東 (7.618m) から西 (7.606m) に緩やかに傾斜し、3.07mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土はオリーブ褐色シルトで、炭化物とマンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

v 井戸跡

**SE-1001** (Fig.69)

調査区南東部で確認した石組井戸で、掘方の一部は調査区外へ続く。掘方は楕円形を呈し、検出面で長径5.04m、短径4.95m、深さ3.99mを測り、約54度から67度の角度で斜めに基底部近くまで掘り込んでいた。石組は内径0.84mを測り、20~30cm長の細長い河原石を時計回りに螺旋状に積み、裏込には10cm前後の河原石を使用していた。また、井筒には径45cmを測る曲物を用いており、その周囲には30~40cm大の河原石を配置していた。掘方の埋土は灰白色シルト質砂で、1~5cm大の礫とマンガンを含んでいた。石組の埋土は5層に分かれ、埋土1が灰黄色シルト、埋土2が炭化物とマンガンを含む灰白色シルト、埋土3が黄灰色砂質シルト、埋土4がマンガンを含む灰白色砂、埋土5が灰色砂であった。埋土1~4には石組に使われていたとみられる河原石が多く含まれていた。出土遺物は埋土1~3より土師質土器片6点、瀬戸・美濃系陶器1点、備前焼1点、近世陶器片17点、近世磁器片8点、石製品3点がみられ、埋土1より出土した瀬戸・美濃系陶器 (1083)、備前焼 (1084)、近世陶器3点 (1085・1086・1088)、近世磁器 (1093)、埋土2より出土した近世陶器3点 (1087・1090・1091)、石製品3点 (1094~1096)、埋土3より出土した近世陶器2点 (1089・1092) が図示できた。

出土遺物

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.70-1083)

1083は天目茶碗で、底部が完存し、底径5.2cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台

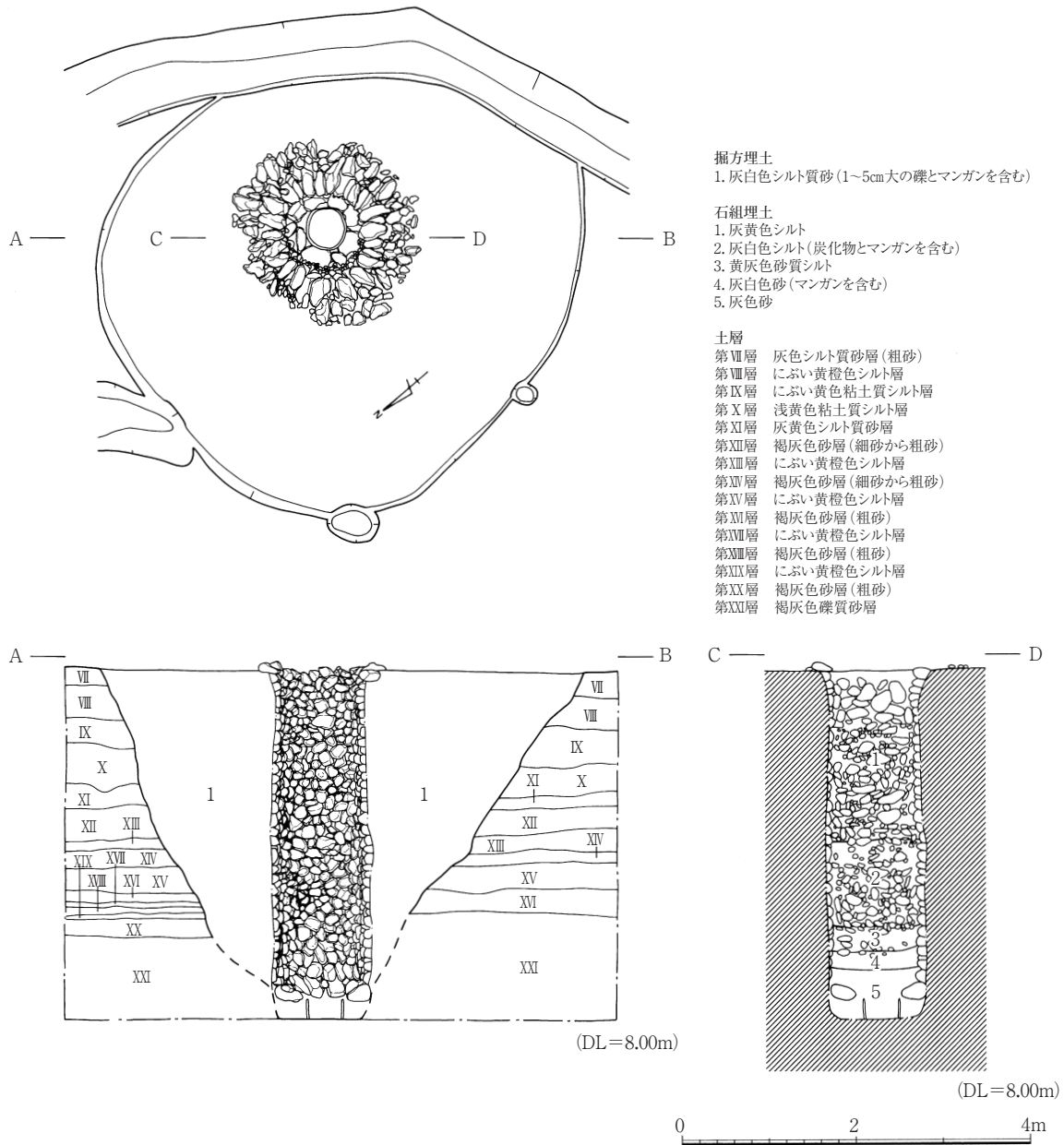


Fig.69 SE-1001

を有する。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は真っすぐ立ち上がる。内面から外面の体部まで鉄釉を施し、底部は露胎である。胎土は密で、焼成はやや悪く、釉調は黒色、生地は灰白色を呈する。

**備前焼 (Fig.70-1084)**

1084は播鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は真っすぐ外上方に立ち上がり、口縁部は若干内傾する。調整は体部が回転ナデ、口縁部がヨコナデで、内面には残存部で4条の摺り目が残存する。

**近世陶器 (Fig.70-1085~1092)**

1085~1088は碗である。1085は瀬戸・美濃系とみられる天目形の碗で、約1/2が残存し、底径7.7cmを測る。底部が大きく、断面方形を呈する削り出し高台を有し、内面にはロクロ目が顕著に残る。

内面から外面の高台付近まで鉄釉を施し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、釉調は褐色、生地は灰白色を呈する。1086は約1/2が残存し、底径4.7cmを測る。高台は低く直立し、高台内の扱りは浅く、アーチ状を呈する。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成はやや良好で、釉調は灰黄色、生地は灰白色を呈する。1087は底部が完存し、底径4.7cmを測る。高台は低く直立し、高台内の扱りは浅く、アーチ状を呈する。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行

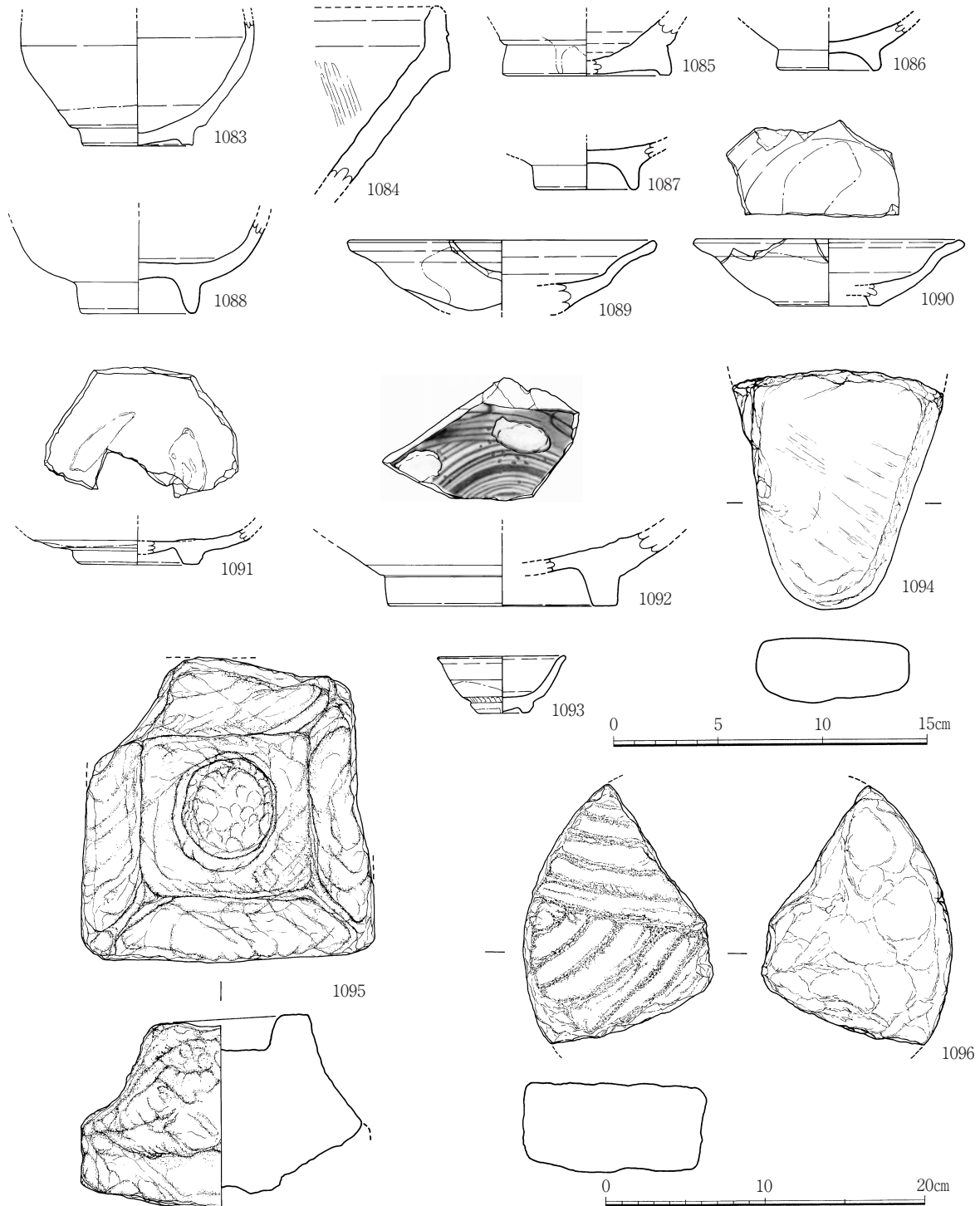


Fig.70 SE-1001出土遺物実測図

う。胎土は密で、焼成は良く、釉調はにぶい黄色、生地は灰白色を呈する。1088は約1/2が残存し、底径4.8cmを測る。高台は高く直立し、高台内の抉りはやや深く、アーチ状を呈する。全面に灰釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、釉には貫入が入り、釉調はオリーブ黄色、生地は灰色を呈する。

1089～1092は皿である。1089は唐津焼で、口縁部の一部が残存し、口径14.4cmを測る。体部は直線的に伸び、口縁部はやや外反する。調整は回転ナデで、器面の一部に灰釉を施し、体部下半は露胎である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、釉調は灰褐色、生地はにぶい橙色を呈する。1090は唐津焼の溝縁皿で、約1/3が残存し、口径12.7cm、器高3.1cm、底径4.7cmを測る。底部には低い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。口縁部は端反形となり、端部は肥厚して内面には溝がめぐる。見込の一部を除き、内面から口縁部の外面まで灰釉を薄く施すが、釉には光沢がない。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、釉調は黒褐色、生地はにぶい橙色を呈する。1091は肥前系とみられる皿で、底部の約1/2が残存し、底径5.4cmを測る。底部には断面台形を呈する太い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。内面から外面の高台付近まで灰釉を施し、底部は露胎で、見込には砂目痕が残る。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、釉調は焦茶色、生地はにぶい黄橙色を呈する。1092は武雄系の皿で、刷毛目の二彩手である。底部の一部が残存し、底径10.6cmを測る。底部には高く直立する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。内面には刷毛による文様がみられ、透明釉と銅緑釉を薄く施し、外面は露胎である。胎土はやや密で、砂粒を含み、焼成は良く、釉調はオリーブ灰色、生地はにぶい橙色を呈する。

#### 近世磁器 (Fig.70-1093)

1093は白磁の小杯で、約1/3が残存する。口径6.0cm、器高2.7cm、底径2.4cmを測る。内面から外面の高台付近まで白色釉を薄く施し、底部外面は露胎である。胎土はやや密で、焼成は良く、釉調は明緑灰色、生地は灰白色を呈する。

#### 石製品 (Fig.70-1094～1096)

1094は砥石で、一部が欠損する。全長11.3cm、全幅10.0cm、全厚3.0cmを測る。残存部で1面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

1095は五輪塔の火輪部分で、一部が欠損し、著しく磨耗する。全高12.5cm、全幅19.3cmを測り、上部には空輪を据えるための窪みが設けられる。石材は砂岩である。

1096は石臼の下臼部分で、約1/6が残存する。直径約27cm、全厚5.7cmを測る。摺り目は斜行する条線が6本残存するが、磨耗する。下面には粗い加工痕がみられるが、著しく磨耗する。石材は砂岩である。

## vi ピット

### P-1004

調査区南東部で検出した円形のピットで、径30cm、深さ18cmを測る。埋土は黄灰色シルト質砂で、マンガンを非常に多く含んでいた。出土遺物には近世陶器片2点がみられ、近世陶器1点(1097)が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.71-1097)

1097は唐津焼の皿で、口縁部の約1/4が残存し、口径13.4cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は水平に伸びる。内面には草花文の鉄絵がみられ、内外面に透明釉を施す。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は浅黄色を呈する。

P-1005

調査区南部で検出した楕円形のピットで、長径21cm、短径19cm、深さ31cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には図示した青花 (1098) のみが見られた。

出土遺物

青花 (Fig.71-1098)

1098は華南系の皿で、約1/2が残存し、底径5.0cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し、体部は器壁が薄く、直線的に伸びる。見込と外面には集点文の染付がみられる。内面から外面の高台付近まで透明釉を施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、色調は灰白色を呈する。

P-1006

調査区南部で検出した楕円形のピットで、長径0.86m、短径0.67m、深さ41cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンを含み、側面には焼土がみられた。出土遺物は皆無であった。

P-1007

調査区南部で検出した楕円形のピットで、長径0.51m、短径48cm、深さ28cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで、マンガンと炭化物を含み、側面には焼土がみられた。出土遺物は皆無であった。

P-1008

調査区北西部で検出した円形のピットで、径0.51m、深さ47cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、近世陶器1点、石製品1点がみられ、近世陶器 (1099)、石製品 (1100) が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.71-1099)

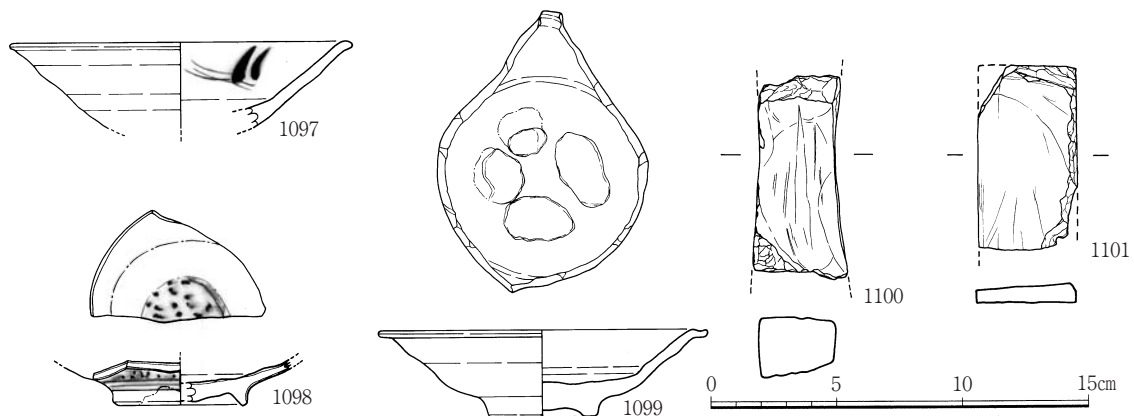


Fig.71 P-1004・1005・1008・1009出土遺物実測図

1099は唐津焼の溝縁皿で、底部が完存し、口径12.8cm、器高3.4cm、底径4.2cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は水平に伸び、内面には溝がめぐる。全面に灰釉を施し、見込には砂目痕が残る。胎土は精良で、焼成は良く、灰色またはにぶい黄褐色を呈する。

石製品 (Fig.71-1100)

1100は砥石で、両端が欠損する。直方体を呈するものとみられ、全長8.0cm、全幅3.8cm、全厚2.6cmを測る。4面に使用痕が残る。石材は細粒花崗岩である。

#### P-1009

調査区北西部で検出した楕円形のピットで、長径46cm、短径38cm、深さ40cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトで、マンガンと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した石製品(1101)のみがみられた。

#### 出土遺物

石製品 (Fig.71-1101)

1101は板状を呈する砥石で、一部が欠損する。全長7.3cm、全幅3.9cm、全厚0.7cmを測る。1面のみ使用痕が残り、側面には加工痕がみられる。石材は粘板岩である。

## 2. 第Ⅱ調査地区

### (1) 概要

本調査区は字北京間と京間にあたり、調査対象地の中央部に位置する。現道や水路等によって区分し、南部をA区、中央部をB区、北部をC区と呼称した。調査は平成13年度から15年度まで3年に亘って行い、A区は平成13年度に土置き場の関係により南北2回に分けて調査を行った。A区北部では中世の遺物包含層は削平を受けたとみられ確認できなかったが、全面で中世と近世の遺構を検出し、調査対象地の中でも特に遺構の密度が高かった。B区は平成14年度と平成15年度に調査を行った。調査前は宅地であったため著しく攪乱と削平を受けており、中世、近世の遺物包含層とも一部見られない箇所もあったが、基本層序はA区と対応しており、遺構は全面で確認された。C区は字北京間にあたり、B区とは道路を挟んだ西側に位置する。平成15年度に調査を行い、B区同様に著しく攪乱を受けており、中世の遺物包含層は確認できなかった。また、基本層序もB区とは異なり、検出された遺構は近世以降のみであった。調査期間はA区が平成13年7月30日から11月9日、B区が平成14年9月5日から9月24日、平成15年5月6日から6月12日、C区が平成15年6月25日から6月30日で実働91日、調査面積は3,670m<sup>2</sup>であった。

### (2) 層序

第Ⅱ調査地区ではA・B区とC区で堆積状況が異なっていたため、それぞれ分けて記述する。

#### ① A・B区

基本的に両区で中世と近世の遺物包含層を確認し、いずれの遺物包含層も地形に沿って北から南に向かって傾斜していた。B区では客土や近代の遺物包含層が認められたが、多くの部分で攪乱を

受け、遺物包含層も削平を受けており確認できない箇所もあった。なお、A区中央部 (Fig.72) では以下の堆積が認められた。

- 第I層 灰色 (5Y5/1) シルト質砂層
- 第II層 黄橙色 (7.5YR7/8) シルト質砂層 (マンガンの堆積)
- 第III層 にぶい赤褐色 (5YR5/4) 砂層 (マンガンの堆積)
- 第IV層 灰色 (5Y6/1) シルト層で酸化鉄を非常に多く含む (近世の遺物包含層)
- 第V層 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土質シルト層 (中世の遺物包含層)
- 第VI層 にぶい褐色 (7.5YR5/3) 粘土質シルト層
- 第VII層 にぶい黄橙色 (10YR6/4) シルト層
- 第VIII層 灰黄色 (10YR4/2) 砂質シルト層で細砂を含む
- 第IX層 灰黄褐色 (10YR6/2) シルト質砂層で粗砂を多く含む
- 第X層 にぶい黄橙色 (10YR6/3) シルト層
- 第XI層 にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト質砂層で粗砂を含む
- 第XII層 褐灰色 (10YR6/1) 砂層で粗砂と3~5cm大の礫を含む

第I層は耕作土で、第II・III層は床土である。B区西部では客土の堆積が見られ、第I層は認められなかった。

第IV層は近世の遺物包含層で、ほぼ全面で認められた。厚さ15~30cmを測り、北から南に向かって大きく傾斜しており、約0.70mの比高差が認められた。

第V層は中世の遺物包含層で、A区の南部とB区の一部で認められた。厚さ10~30cmを測り、第IV層同様北から南に向かって大きく傾斜しており、約0.60mの比高差が認められた。

第VI層はほぼ全面で認められた土層で、この層の上面で遺構が検出された。厚さは30~40cmを測る。

第VII層から第XII層はA区東部に設定した幅約2mの下層確認トレンチで確認された層である。各層

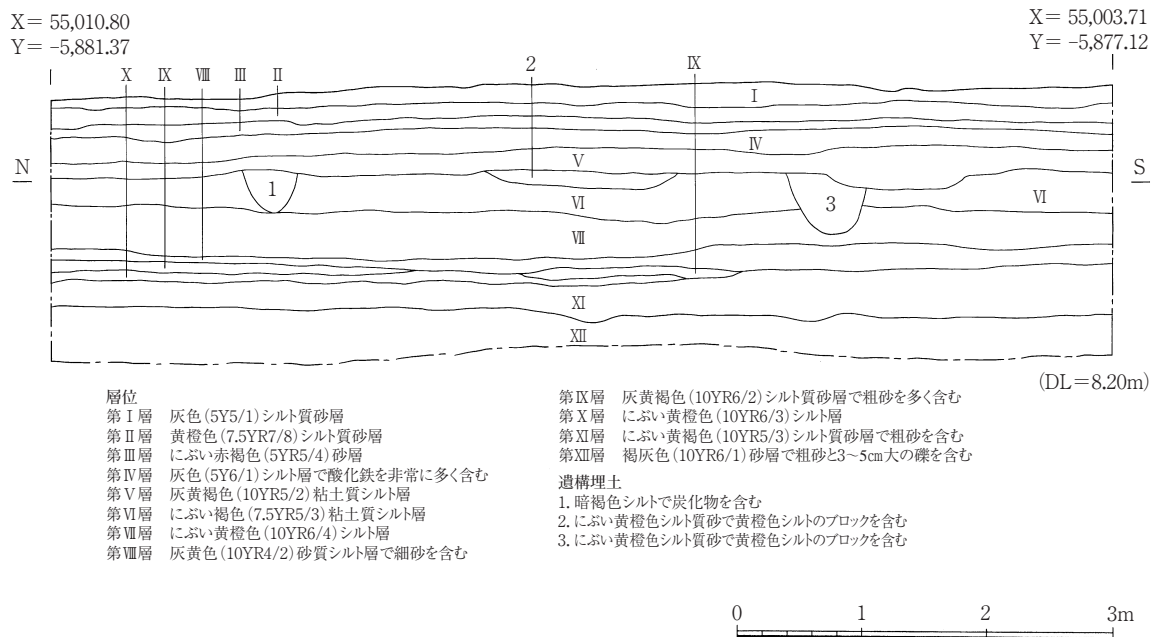


Fig.72 第II調査地区A区セクション図

は南に向かって傾斜しており，南部では砂礫層が厚くなる傾向が見られた。

第Ⅶ層は南端を除きほぼ全面で認められた土層で，厚さ10～34cmを測る。

第Ⅷ層から第Ⅹ層はごく一部で認められた土層で，厚さは第Ⅷ層が5～15cm，第Ⅸ層は約10cm，第Ⅹ層は5～10cmを測る。

第Ⅺ層は北部で認められた土層で粗砂を含み，厚さ15～30cmを測る。南部では粗砂と5cm大の礫を含む層が認められ，厚さは0.40～1.00mを測る。

第Ⅻ層はほぼ全面で認められた土層で，若干起伏していた。粗砂と3～5cm大の礫を含む。

## ② C区

C区は著しく攪乱を受けており，客土直下に近代の遺物包含層がみられた。また，近世の遺物包含層も多く，多くの部分が攪乱と削平を受けていた。本調査区 (Fig.73) においては中世の遺物包含層は認められず，地表下約0.70mで砂層を確認した。

第Ⅰ層 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土質シルト層

(近代の遺物包含層)

第Ⅱ層 灰白色 (N7/0) シルト層

第Ⅲ層 におい黄褐色 (10YR5/3) シルト質砂層で灰白色 (10YR7/1) シルト質砂のブロックとマンガンを含む (近世の遺物包含層)

第Ⅳ層 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂質シルト層で細砂を含む

第Ⅴ層 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂層 (細砂)

第Ⅵ層 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂層 (細砂)

第Ⅰ層は近代の遺物包含層で，全面で見られた。客土直下で確認され，著しく攪乱を受けており，一部粘土化している箇所も見られた。厚さは約5～10cmを測る。

第Ⅱ層はほぼ全面で認められた土層で，厚さ約10cmを測る。

第Ⅲ層は近世の遺物包含層で，ほぼ全面で見られた。灰白色シルト質砂のブロックとマンガンを含んでいた。厚さは15～25cmを測る。

第Ⅳ層は自然堆積層で，ほぼ全面で見られ，若干起伏し，厚さは5～20cmを測る。

第Ⅴ・Ⅵ層は下層確認トレンチで確認された土層である。いずれも砂層で，細砂を多く含んでいた。

## (3) 堆積層出土遺物

### ① A・B区

#### 第Ⅰ層出土遺物

青磁 (Fig.74-2001)

2001は龍泉窯系の碗で，底部が完存し，底径5.0cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台

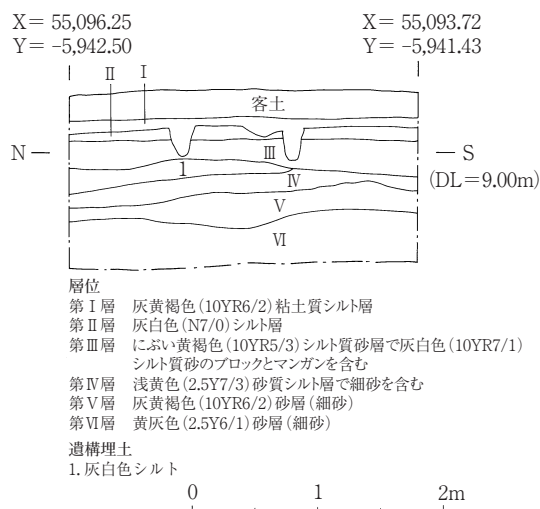


Fig.73 第Ⅱ調査地区C区セクション図



を有し、体部の器壁は薄く、内湾して立ち上がる。内面と外面の高台付近までオリーブ色の釉を約0.5mmの厚さに施し、高台内は露胎である。見込には花文のスタンプがみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

近世磁器 (Fig.74-2002)

2002は白磁の小杯で、底部の約1/2が残存し、底径3.5cmを測る。底部は平らで、直立する削り出し高台を有する。全面に白磁釉を施し、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成は良好である。

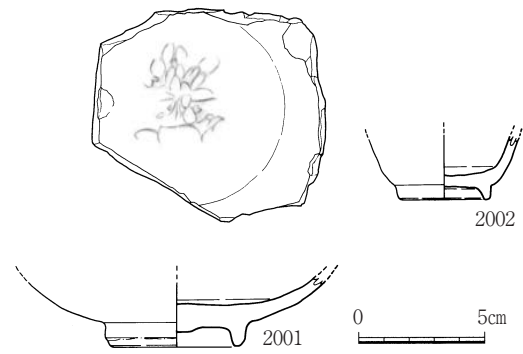


Fig.74 第I層出土遺物実測図 (青磁・近世磁器)

第IV層出土遺物

土師質土器 (Fig.75-2003)

2003は鍋で、口縁部の一部が残存し、口径22.9cmを測る。口縁部は内湾し、端部を丸く収める。調整は胴部がナデ、口縁部がヨコナデを施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。

瓦質土器 (Fig.75-2004)

2004は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径21.0cmを測る。口縁部は内湾し、外面には凹線状の段がめぐり、その下には幅約1.2cmの鐙が付く。調整は内面がヨコ方向の板ナデ、口縁部がヨコナデ、体部外面がヨコ方向のヘラ削りを施す。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は、内面が灰色、外面が暗灰黄色を呈する。

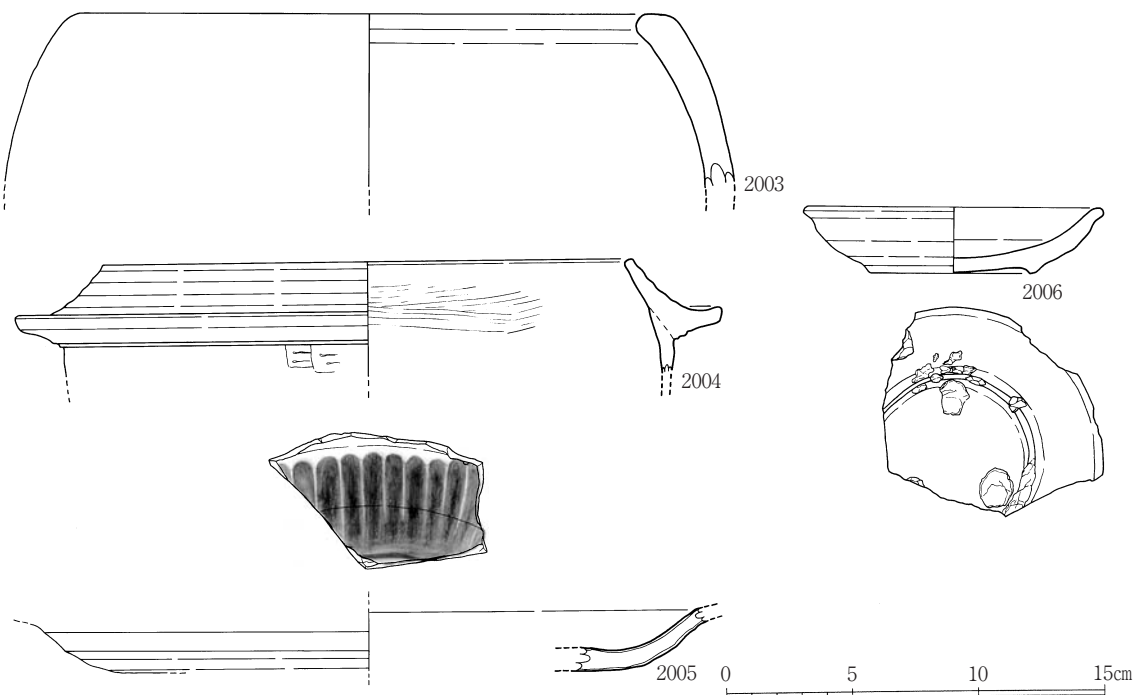


Fig.75 第IV層出土遺物実測図 (土師質土器・瓦質土器・青磁ほか)

青磁 (Fig.75-2005)

2005は龍泉窯系の盤で、体部の一部が残存する。全面にオリーブ色の釉を施し、内面には蓮弁文がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.75-2006)

2006は丸皿で、約1/3が残存し、口径11.5cm、器高2.6cm、底径6.5cmを測る。底部には小さな削り出し高台を有し、体部は内湾して口縁部は短く外反する。全面に浅黄色の釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。高台内には胎土目痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は不良で、釉調は浅黄色、生地は灰白色を呈する。

近世陶器 (Fig.76-2007~2011)

2007~2010は皿である。2007は唐津焼で、底部が完存し、底径3.8cmを測る。底部には低く幅の太い削り出し高台を有する。内面から体部外面には灰釉を薄く施し、見込には胎土目痕が4ヶ所みられる。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、釉調と生地はにぶい黄橙色を呈する。2008は肥前系で、底部が完存し、底径5.0cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、高台脇の削りは明瞭である。全面に灰釉を薄く施し、見込には砂目痕が残り、畳付には砂が付着する。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、釉調と生地はにぶい黄橙色を呈する。2009も肥前系で、底部の約1/2が残存し、底径5.2cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有する。全面に灰釉を薄く施し、高台には砂が付着する。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。2010は能茶山焼で、約1/4が残存し、口径12.4cm、器高5.0cm、底径4.8cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は端反形となる。内面と体部外面に鉄釉を薄く施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰黄褐

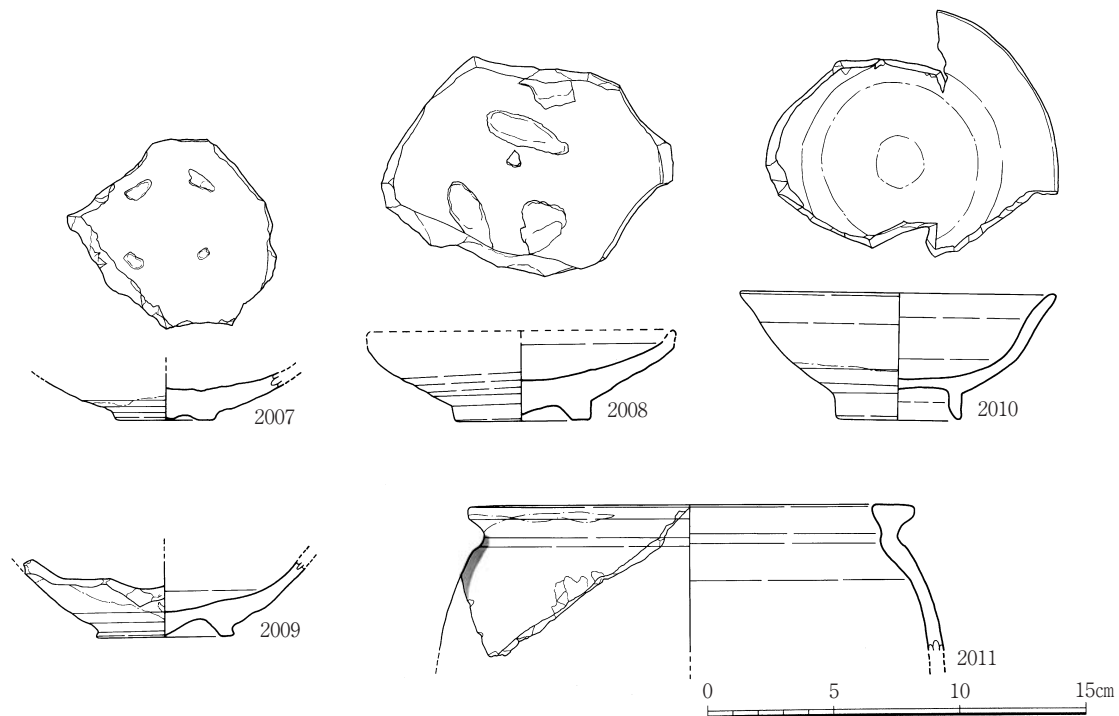


Fig.76 第四層出土遺物実測図 (近世陶器)

色、生地は褐灰色を呈する。

2011は丹波焼の甕で、口縁部の約1/5が残存し、口径14.7cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は直立して端部を大きく肥厚させ、水平な面を有する。胴部外面は鉄釉、口縁部と内面には銅緑釉を施す。胎土はやや粗く、焼成は良く、釉調はオリーブ色または暗赤褐色、生地は灰白色を呈する。

近世磁器 (Fig.77-2012~2021)

2012~2014は肥前系の碗である。2012は広東碗で、底部の約1/2が残存し、底径6.0cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には草花文、内面には圏線、見込には鷺文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2013も広東碗で、底部の約1/3が残存し、底径6.6cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込には砂が付着する。外面には草花文と圏線、内面には圏線、見込には文様不明の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2014は端反碗で、底部が完存し、口径10.1cm、器高5.7cm、底径4.0cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には圏線と帯線、蛍手とみられる染付、内面には圏線、見込には文様不明の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

2015は瓶とみられ、底部の約1/4が残存し、底径6.1cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。外面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、内面は回転ナデ調整を施し、露胎である。高台の外面には圏線の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

2016~2020は能茶山焼の広東碗である。2016は小型で、底部が完存し、底径4.8cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には草花文と圏線、内面には圏線、見込には寿字の染付、高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。胎土はやや粗く、焼成は不良である。2017も底部が完存し、底径5.8cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込には三足ハマ痕が残る。外面には草文と圏線、内面には圏線、見込には亀の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2018は底部の約1/2が残存し、底径6.0cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込にはハマ痕が1ヶ所残る。外面には草文と圏線、内面には圏線、見込には亀の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2019は一部が欠損し、口径11.1cm、器高6.4cm、底径5.4cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込には三足ハマ痕が残る。外面には圏線と葦文、岩、帆掛舟の染付、内面には圏線、見込には「※」の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2020は高台が欠損し、口径10.9cmを測る。体部は内湾して口縁部に至り、端部を細く仕上げる。全面に透明釉を薄く施し、外面には草花文、内面には圏線、見込には花文の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

2021は肥前系の蓋で、約1/3が残存し、口径9.1cm、器高3.0cm、つまみ径4.3cmを測る。丸形で、つ

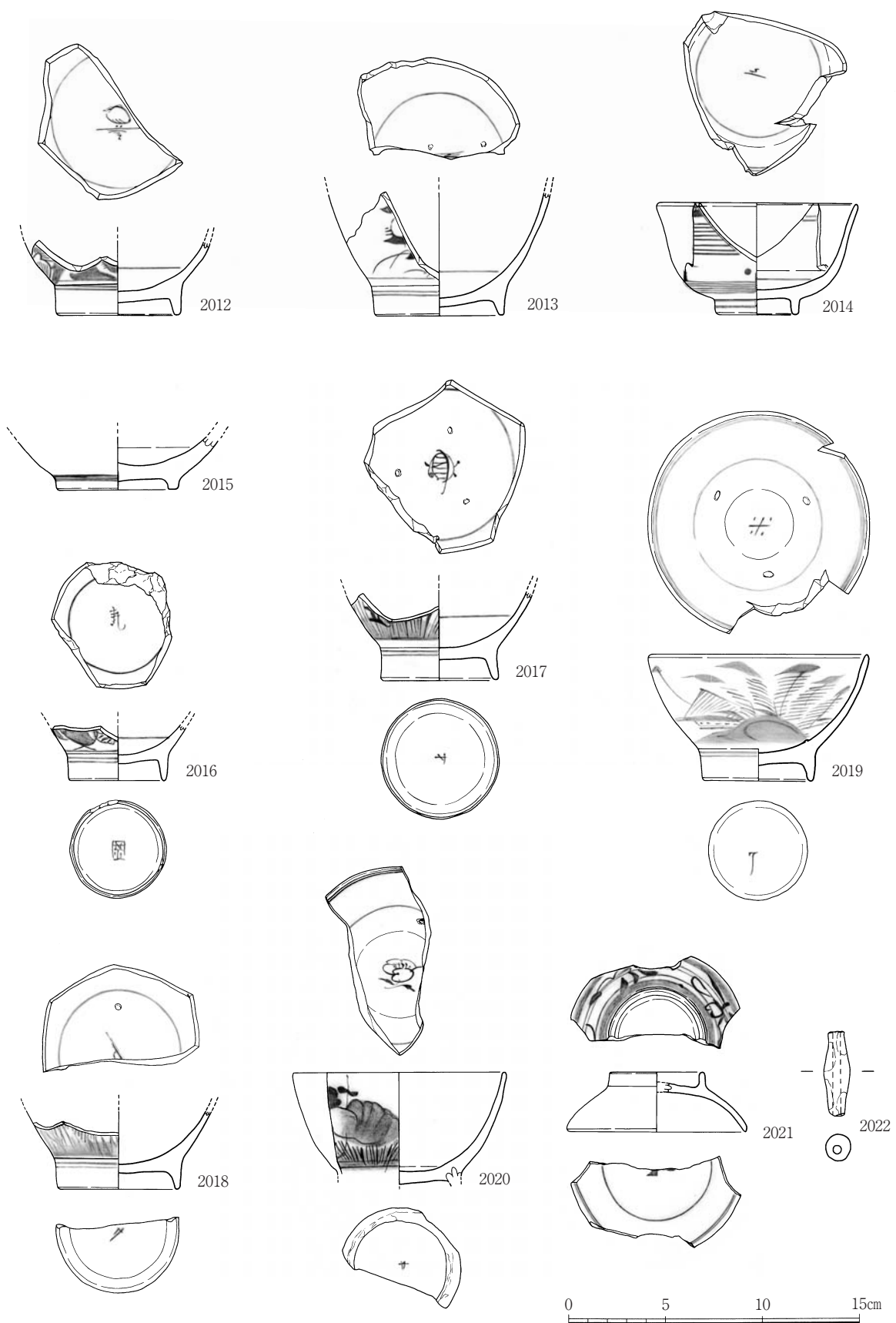


Fig.77 第IV層出土遺物実測図（近世磁器・土製品）

まみは細く直立する。全面に透明釉を薄く施し、つまみ端部は釉ハギを行う。外面には圏線、帯線、花文の染付、内面には圏線、見込には文様不明であるが染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

土製品 (Fig.77-2022)

2022は紡錘形の土錘である。完形を呈し、全長4.3cm、全幅1.4cm、孔径0.4cm、重量5.8gを測り、全面にナデ調整を施す。

#### 第V層出土遺物

須恵器 (Fig.78-2023)

2023は甕で、底部の一部が残存する。胴部は平らな底部から外上方に真っすぐ伸びる。調整は内面がナデまたはヘラナデで、外面には格子目状のタタキ目が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

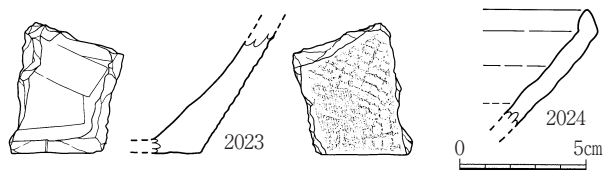


Fig.78 第V層出土遺物実測図(須恵器・東播系須恵器)

東播系須恵器 (Fig.78-2024)

2024は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は直線的に伸び、口縁部は上方に大きく拡張する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.79-2025~2033)

2025は杯で、約3/4が残存し、口径11.7cm、器高3.7cm、底径6.6cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸びて口縁部に至る。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

2026・2027は小皿である。2026は約1/2が残存し、口径7.6cm、器高1.7cm、底径4.4cmを測る。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は外上方に伸びる。調整は回転ナデで、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい橙色を呈する。2027は約1/3が残存し、口径7.7cm、器高1.7cm、底径5.7cmを測る。口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。調整と底部の切り離しは器面が著しく摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

2028は椀で、底部の一部が残存し、底径5.5cmを測る。底部には断面半円形を呈する高台を貼付する。調整は全面にナデを施す。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも淡黄色を呈する。

2029は甕で、口縁部の一部が残存し、口径18.0cmを測る。胴部は肩が張り、内湾して直立する口縁部に至る。調整は口縁部にヨコナデを施し、胴部は著しく摩耗するため不明である。胎土は粗く、焼成は比較的良く、色調は内外面とも淡黄色を呈する。

2030~2032は羽釜である。2030は口縁部の一部が残存する。口縁部は直立し、端部は内傾する。外面には断面三角形を呈する鐙がめぐる。調整は胴部がナデ、口縁部がヨコナデである。胎土はや

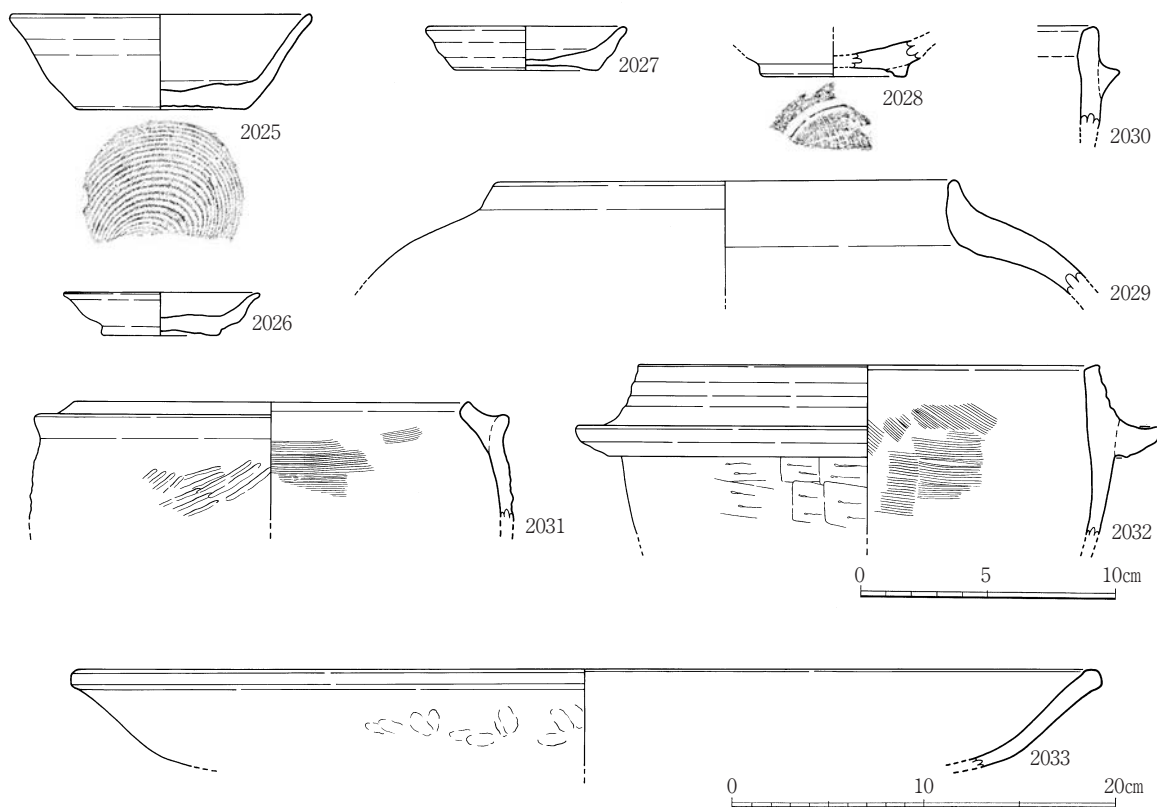


Fig.79 第V層出土遺物実測図（土師質土器）

や粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。2031は口縁部の一部が残存し、口径15.4cmを測る。口縁部は内湾し、端部は内傾する。外面には断面三角形を呈する鍔がめぐる。調整は体部内面がヨコ方向のハケ、口縁部がヨコナデ、体部外面が斜め方向のタタキである。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。2032は口縁部の一部が残存し、口径18.0cmを測る。口縁部は若干内湾し、端部は内傾する。外面には凹線状の段を有し、その下には幅約1.6cmを測る鍔がめぐる。調整は体部内面がハケ、口縁部がヨコナデ、体部外面がヨコ方向のヘラ削りである。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は、内面が灰黄色またはにぶい黄橙色、外面が灰白色または灰黄褐色を呈する。

2033は岡本系の焙烙で、口縁部と体部の一部が残存し、口径53.2cmを測る。口縁部は真っすぐ伸び、口縁部を肥厚させ、丸く収める。調整は口縁部がヨコナデ、内外面がナデで、外面には指頭圧痕が残る。焼成は粗く、砂粒を多く含み、色調は、内面がにぶい褐色、外面が褐灰色を呈する。

#### 常滑焼 (Fig.80-2034)

2034は甕で、口縁部はN字状を呈する。一部が残存し、口径38.2cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、内面には指頭圧痕が残る。また、外面には自然釉がかかる。胎土はやや密で、砂粒を含み、焼成は比較的良く、色調は、内面がにぶい褐色または灰色、外面がにぶい橙色または灰オリブ色を呈する。

#### 備前焼 (Fig.80-2035~2038)

2035~2038は播鉢で、口縁部の一部が残存する。2035は体部が内湾し、口縁部を肥厚させる。調

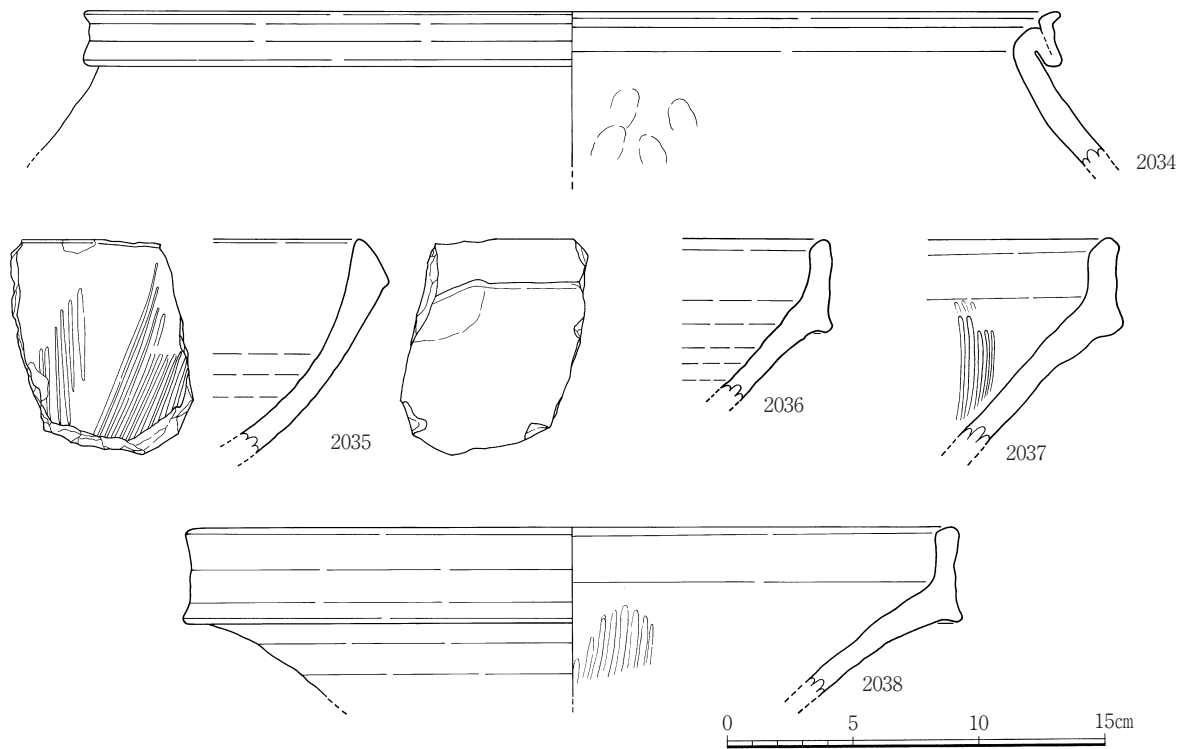


Fig.80 第V層出土遺物実測図（常滑焼・備前焼）

整は体部に回転ナデ，口縁部にヨコナデを施し，内面には10条単位の摺り目がみられる。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は，内面が灰赤色，外面が暗赤灰色または明赤褐色を呈する。2036は体部が直線的に伸び，残存部には摺り目はみられない。口縁部は器壁が薄く，直立する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや粗く，焼成は比較的良好で，色調は，内面が灰色，外面が暗赤灰色または褐灰色を呈する。2037は体部が直線的に伸び，口縁部は器壁が直立して端部を細く仕上げる。調整は体部がナデ，口縁部にヨコナデを施し，内面には残存部で5条の摺り目がみられる。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は，内面が灰色，外面が灰色または紫灰色を呈する。2038は口径30.0cmを測る。体部は直線的に伸び，口縁部は器壁が薄く，直立する。器面には回転ナデ調整を施し，内面には残存部で8条の摺り目がみられる。胎土はやや密で，焼成は比較的良好，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

瓦質土器 (Fig.81-2039~2041)

2039は羽釜で，口縁部の一部が残存し，口径20.8cmを測る。口縁部は内湾し，端部は内傾する面を有する。外面には扁平な鍔がめぐる。口縁部にはヨコナデ調整を施し，体部の調整は器面が著しく摩耗するため不明である。胎土は密で，焼成は比較的良好，色調は，内面が灰白色，外面が灰色を呈する。

2040は茶釜で，胴部の一部が残存する。胴部は球形を呈するものとみられ，最大径を有する部分に，幅約1.8cmを測る鍔がめぐる。調整は体部内面が板ナデまたはナデ，外面はナデ調整で，指頭圧痕が残り，鍔はヨコ方向のナデ，鍔の下にはヨコ方向のヘラ削りを施す。また外面にのみ炭素の吸着がみられる。胎土はやや粗く，焼成は良好で，色調は，内面が灰色，外面が明黄褐色または褐

灰色を呈する。

2041は播鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は内湾して立ち上り口縁部に至り、片口を有する。調整は体部がナデで指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデを施し、内面には残存部で8条の摺り目がみられる。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

青磁 (Fig.82-2042)

2042は龍泉窯系の盤で、底部の約1/8が残存し、底径12.8cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。全面に明緑灰色の釉を施し、高台内は輪状に釉ハギを行う。また、見込には片彫による文様がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

近世陶器 (Fig.82-2043・2044)

2043・2044は上層からの混入とみられる。2043は肥前系の碗で、底部の約1/2が残存し、底径5.4cmを測る。高台内の扱りは浅く、アーチ状を呈する。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は比較的良く、釉調は浅黄色、生地は灰白色を呈する。

2044は肥前系(内野山)の皿で、

底部が完存し、底径4.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有する。内面には銅緑釉を施し、見込は蛇の目釉ハギを行い、体部外面には灰釉を施す。胎土は密で、焼成は良く、釉調は暗オリーブ色または灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。

土製品 (Fig.83-2045~2047)

2045~2047は土錘で、全面にナデ調整を施す。2045は紡錘形を呈し、一部が欠損する。全長3.7cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量4.7gを測る。2046は円筒形を呈し、一部が欠損する。全長4.7cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量5.2gを測る。2047は円筒形を呈し、一部が欠損する。全長5.8cm、全幅1.3cm、孔径0.6cm、重量6.4gを測る。

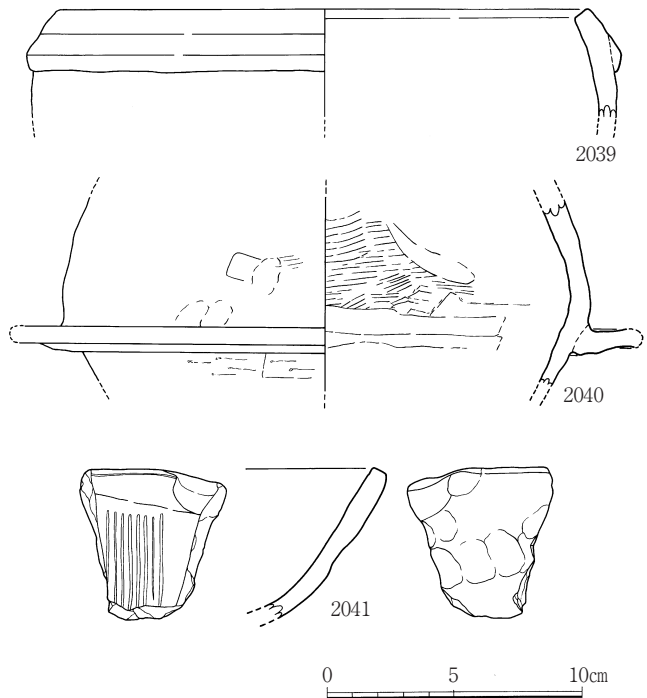


Fig.81 第V層出土遺物実測図(瓦質土器)

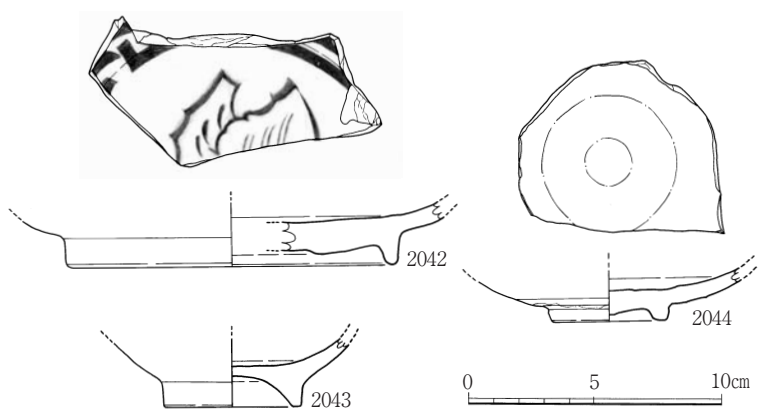


Fig.82 第V層出土遺物実測図(青磁・近世陶器)

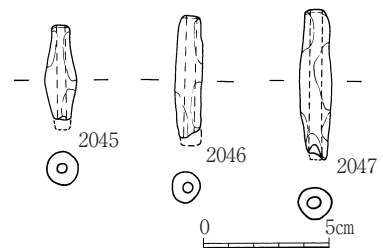


Fig.83 第V層出土遺物実測図(土製品)



石製品 (Fig.84-2048・2049)

2048・2049は砥石である。2048は一部が残存し、直方体を呈するものとみられ、全長8.1cm、全幅4.9cm、全厚3.4cmを測る。残存部で4面の使用痕がみられる。石材は砂岩である。2049は一部が残存し、全長14.4cm、全幅10.9cm、全厚6.7cmを測る。残存

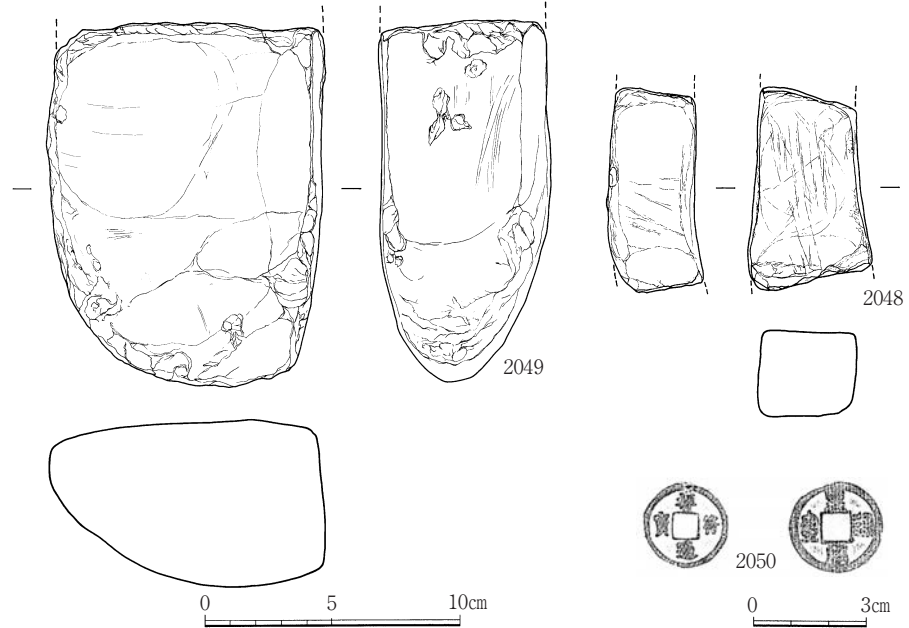


Fig.84 第V層出土遺物実測図 (石製品・古銭)

部で両面と1側面の3面の使用がみられる。石材は細粒花崗岩である。

古銭 (Fig.84-2050)

2050は3枚の古銭が癒着しており、間の古銭は不明である。1枚は祥符通寶で、銭径2.13cm、内径1.91cm、穿孔0.61cmを測る。北宋銭で、初鑄造年は1008年である。もう1枚は篆書の皇宋通寶で、銭径2.48cm、内径2.06cm、穿孔0.69cmを測る。北宋銭で、初鑄造年は1038年である。

#### その他の出土遺物

攪乱を受けた遺構から出土したもので、いずれも近代の遺物と伴出した。

近世陶器 (Fig.85-2051~2061)

2051~2060は碗である。2051は底部が完存し、底径5.2cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し、高台内の抉りは浅い。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調は灰黄色または浅黄色で、生地は灰白色を呈する。2052は底部の約1/2が残存し、底径4.8cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し、高台内の抉りは浅い。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調は浅黄色、生地は灰白色を呈する。2053は底部が完存し、底径5.0cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し、高台内の抉りは浅い。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調は浅黄色、生地は灰白色を呈する。2054は肥前系の碗で、底部が完存し、底径4.9cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。全面に灰釉を薄く施し、釉には貫入が入り、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調は黄褐色で、生地は灰白色を呈する。2055は陶胎染付で、底部の約2/3が残存し、底径5.3cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、体部はやや腰が張る形態を呈する。全面に白化粧土を施したのち、灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には圏線の染付が1条みられる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調はオ

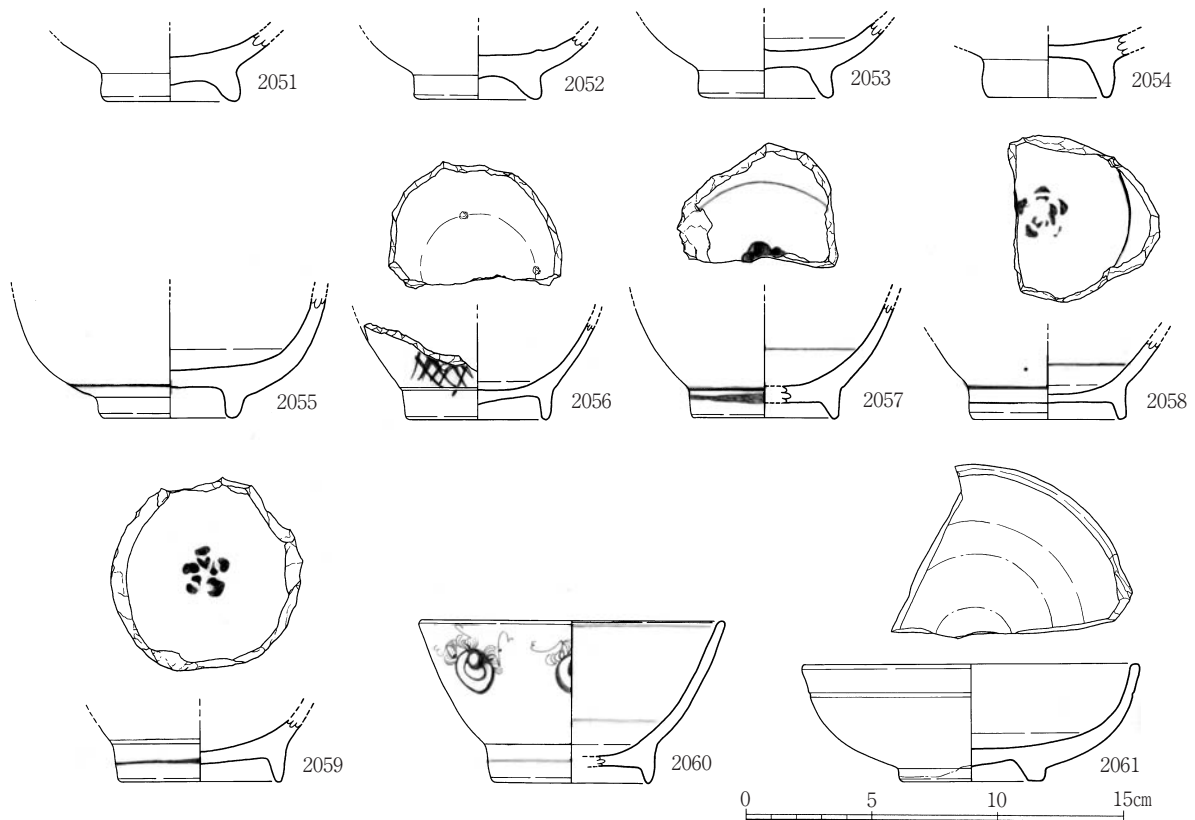


Fig.85 その他の出土遺物実測図（近世陶器）

リーブ灰色、生地は灰色を呈する。2056は尾戸焼または能茶山焼とみられる広東形の碗で、底部の約1/2が残存し、底径5.6cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。全面に灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込には足付ハマ痕が2ヶ所に残る。外面には斜格子文の鉄絵がみられる。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、釉調は灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。2057～2060は瀬戸・美濃系の陶胎染付で、全面に白化粧土を施したのち、透明釉を薄く掛け、畳付は釉ハギを行う。2057は丸碗で、底部の約1/4が残存し、底径5.6cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有する。外面には2条の圏線、内面には1条の圏線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土は粗く、焼成はやや不良で、生地は灰白色を呈する。2058は広東碗で、底部の約2/3が残存し、底径6.0cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有する。外面には2条の圏線、内面には1条の圏線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。釉には光沢があり、貫入が入る。胎土は粗く、焼成は良好で、生地は灰白色を呈する。2059も広東碗で、底部が完存し、底径6.4cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。外面には2条の圏線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土は粗く、焼成は良好で、生地は灰白色を呈する。2060も広東碗で、底部の約1/4が残存し、底径6.2cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有する。外面には宝珠文と圏線、内面には1条の圏線の染付がみられる。胎土は粗く、焼成はやや良好で、生地は灰白色を呈する。

2061は能茶山焼とみられる皿で、約1/3が残存し、口径13.2cm、器高4.6cm、底径5.6cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して口縁部に至る。内面と外面の高台付

近まで鉄釉を薄く施し、見込は蛇の目釉ハギを行う。胎土はやや密で、焼成は良く、釉調は暗褐色、生地はにぶい黄橙色を呈する。

近世磁器 (Fig.86・87-2062~2080)

2062~2068は肥前系の碗である。2062は広東碗で、底部の約1/3が残存し、底径5.8cmを測る。畳付は欠損するが、底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、内外面に圈線、見込に玉文の染付、高台内には銘の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。2063は青磁染付碗で、底部の約2/3が残存し、底径4.1cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有する。内面と高台内には透明釉、外面には青磁釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、砂が付着する。内面には2条の圈線、見込には五弁花の染付、高台内には渦福の銘がみられる。胎土は密で、黒色粒を含み、焼成は良好である。2064は丸碗で、底部の約1/2が残存し、底径4.4cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内外面に圈線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土は密で、黒色粒を多く含み、焼成は良好である。2065は筒形碗で、底部の約1/4が残存し、底径3.9cmを測る。底部にはハの字状に開く小さな削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内外面に圈線、見込には五弁花の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2066は腰張形の碗で、底部の約1/2が残存し、底径3.9cmを測る。底部にはハの字状に開く小さな削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には梅の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2067は端反碗で、底部の約1/2が残存し、底径4.0cmを測る。底部にはハの字状に開く小さな削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面に草文、内面に圈線の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。2068も端反碗で、底部が完存し、底径3.8cmを測る。底部にはハの字状に開く細い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面に花文、内面に圈線と波文、見込には波と岩とみられる染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2069は能茶山焼の薄手の腰張形の碗で、底部の約1/2が残存し、底径3.8cmを測る。底部には直立する小さな削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面の染付の文様は不明であるが、内面には圈線、見込には宝文の染付、高台内には「サ」の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2070は肥前系の碗とみられ、底部が完存し、底径4.1cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギ、見込は蛇の目釉ハギを行う。内面に格子文、見込には二重格子文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2071は能茶山焼の小碗で、底部が完存し、底径3.2cmを測る。底部には直立する小さな削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には草花文、高台内には「サ」の銘がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

2072は肥前系の蓋で、約2/3が残存し、口径9.2cm、器高3.0cm、つまみ径3.7cmを測る。丸型で、つまみは細く直立する。全面に透明釉を薄く施し、つまみ端部は釉ハギを行う。内面には雷文と環状の松竹梅文、外面には唐花の染付、つまみ内には方形枠に「重」の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

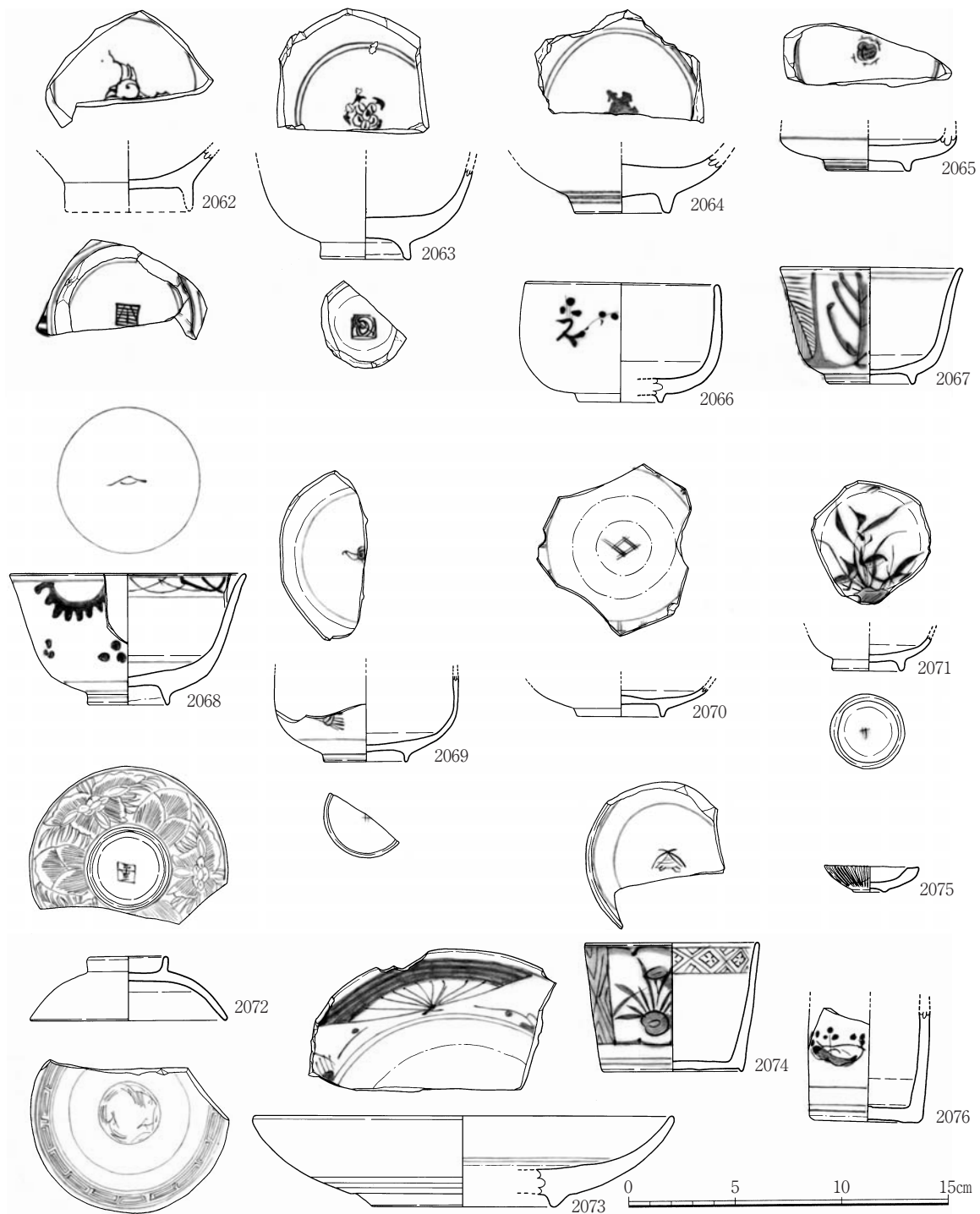


Fig.86 その他の出土遺物実測図（近世磁器1）

2073は肥前系（波佐見）の皿で、約1/8が残存し、口径19.6cm、器高4.2cm、底径8.4cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギ、見込は蛇の目釉ハギを行う。内面には宝文の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

2074は肥前系の筒形猪口で、約1/3が残存し、口径8.0cm、器高6.0cm、底径6.5cmを測る。底部は蛇の目凹形高台を有し、体部は直立して口縁部に至る。全面に透明釉を薄く施し、高台内を輪状に釉ハ

ギを行う。外面は窓に草花文と濃に格狭間、内面には四方襷文、見込には昆虫文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

2075は肥前系の紅皿で、約1/2が残存し、口径4.5cm、器高1.2cm、底径1.5cmを測る。型成形で、貝殻状を呈し、底部には断面半円形の

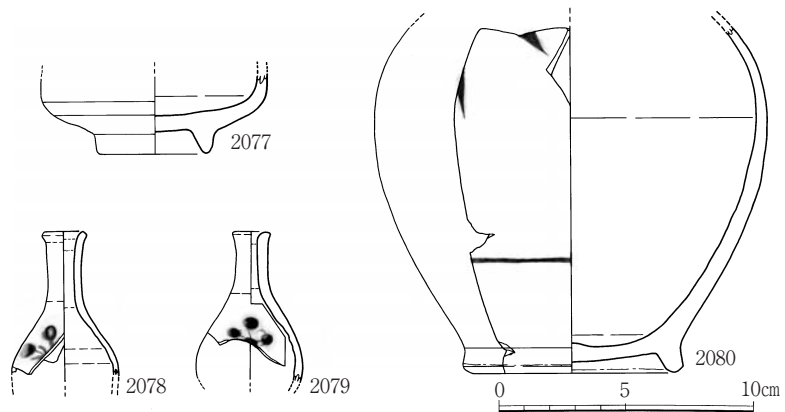


Fig.87 その他の出土遺物実測図（近世磁器2）

小さな高台を有する。内面と口縁部外面に白磁釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成は良好である。

2076は火入れまたは灰吹きとみられるもので、底部が完存し、底径4.9cmを測る。体部は平らな底部から直立して口縁部に至る。外面には透明釉を薄く施し、底部は釉ハギを行い、内面は露胎である。また、外面には圏線と梅文の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良好である。2077は腰張形の火入れで、底部がほぼ完存し、底径4.3cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は水平に伸びた後、直立する。外面には高台内まで灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、内面は露胎で、見込には輪状に砂が付着する。胎土はやや密で、焼成はやや良好、釉調はオリーブ灰色、生地は灰白色を呈する。

2078～2080は瓶である。2078・2079は小型の鶴首瓶で、胴部は丸く、頸部が直立し、口縁部は短く外反する。外面と口縁部内面には透明釉を薄く施し、胴部外面には梅文の染付がみられる。2078は口縁部が完存し、口径1.6cmを測り、胎土は密で、焼成は良好である。2079は口縁部の一部が欠損し、口径1.4cmを測り、胎土は密で、焼成は良好である。2080は肥前系とみられる瓶で、底部の約1/2が残存し、底径8.0cmを測る。底部にはハの字状に開く削り出し高台を有し、胴部は丸く、肩部が張る形態である。外面には透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胴部外面には染付がみられる。胎土はやや密で、黒色粒を含み、焼成は良好である。

## ② C区

### 第IV層出土遺物

#### 青磁 (Fig.88-2081)

2081は龍泉窯系の碗で、底部の約1/2が残存し、底径6.4cmを測る。底部には低い削り出し高台を有する。内面と外面の高台付近までオリーブ色の釉を薄く施す。胎土は密で、焼成は良好である。

#### 近世陶器 (Fig.88-2082～2086)

2082～2086は碗である。2082は底部が完存し、底径5.1cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、高台内の抉りは浅い。全面に灰釉を薄く施し、釉には貫入が入り、畳付は釉ハギを行う。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調は浅黄色、生地は灰白色を呈する。2083は底部が完存し、底径5.1cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。全面に灰釉を薄く施し、釉には貫入が入

り、畳付は釉ハギを行  
 行。胎土はやや密  
 で、焼成は良く、釉  
 調は浅黄色、生地は  
 灰白色を呈する。  
 2084～2086は瀬戸・  
 美濃系の広東碗で、  
 底部には断面三角形  
 を呈する削り出し高  
 台を有する。全面に  
 白化粧土を施した後、  
 透明釉を薄く掛け、  
 畳付は釉ハギを行。

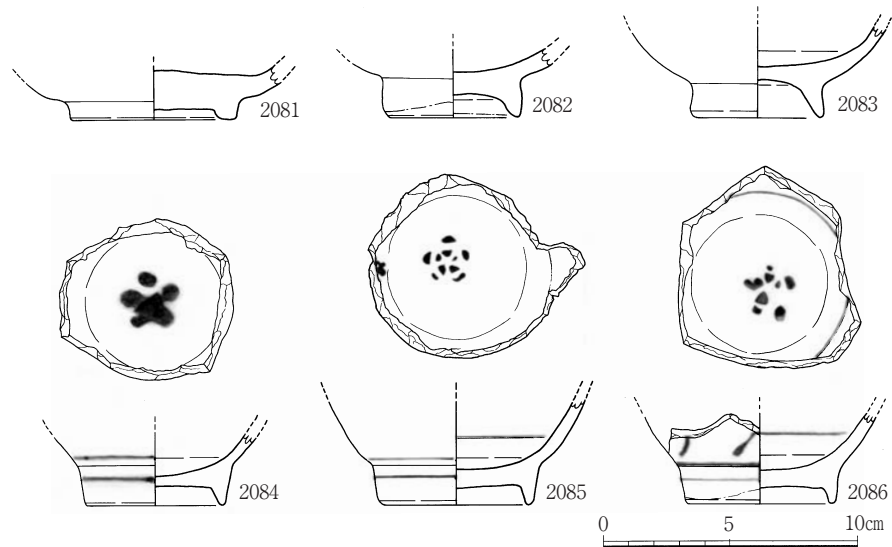


Fig.88 第IV層出土遺物実測図（青磁・近世陶器）

外面には圈線の染付，見込には五弁花のコンニャク印判を施す。2084は底部が完存し，底径5.4cmを測り，胎土は粗く，焼成はやや良好である。2085は底部が完存し，底径5.7cmを測り，胎土は粗く，焼成はやや良好である。2086は底部が完存し，底径5.7cmを測り，胎土は粗く，焼成は良好である。

近世磁器 (Fig.89-2087-2096)

2087～2091は肥前系の碗である。2087は底部の約1/2が残存し，底径4.0cmを測る。底部には直立する低い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には丸文と花文，圈線の染付，内面は圈線，見込には寿字の染付を施す。胎土はやや粗く，焼成は良好である。2088は底部が完存し，底径4.0cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には唐草文と圈線，内面には圈線，見込には寿字の染付がみられる。胎土はやや粗く，焼成は良好である。2089は端反碗で，約1/2が残存し，口径11.3cm，器高5.8cm，底径4.8cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には花文と圈線，内面は圈線と帯線，見込には文様不明の染付がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。2090は端反碗で，約1/2が残存し，口径11.3cm，器高6.3cm，底径4.2cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には唐草文と圈線，内面は圈線，見込には鷺文の染付，高台内には不明であるが銘がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。2091は端反碗で，約1/3が残存し，口径12.0cm，器高6.7cm，底径4.2cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には花文と圈線，内面は圈線と波文，見込には文様不明の染付がみられる。胎土はやや密で，焼成は良好である。2092～2094は能茶山焼の碗である。2092は端反碗で，底部が完存し，口径11.1cm，器高6.1cm，底径4.2cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し，畳付は釉ハギを行う。外面には草花文と圈線，帯線，内面は圈線と帯線，見込には帆掛舟の染付，高台内には方形枠に「茶」の銘がみられる。胎土は密で，焼成は良好である。2093・2094は端反碗で，底部には直立する細い削り出し高台を有す

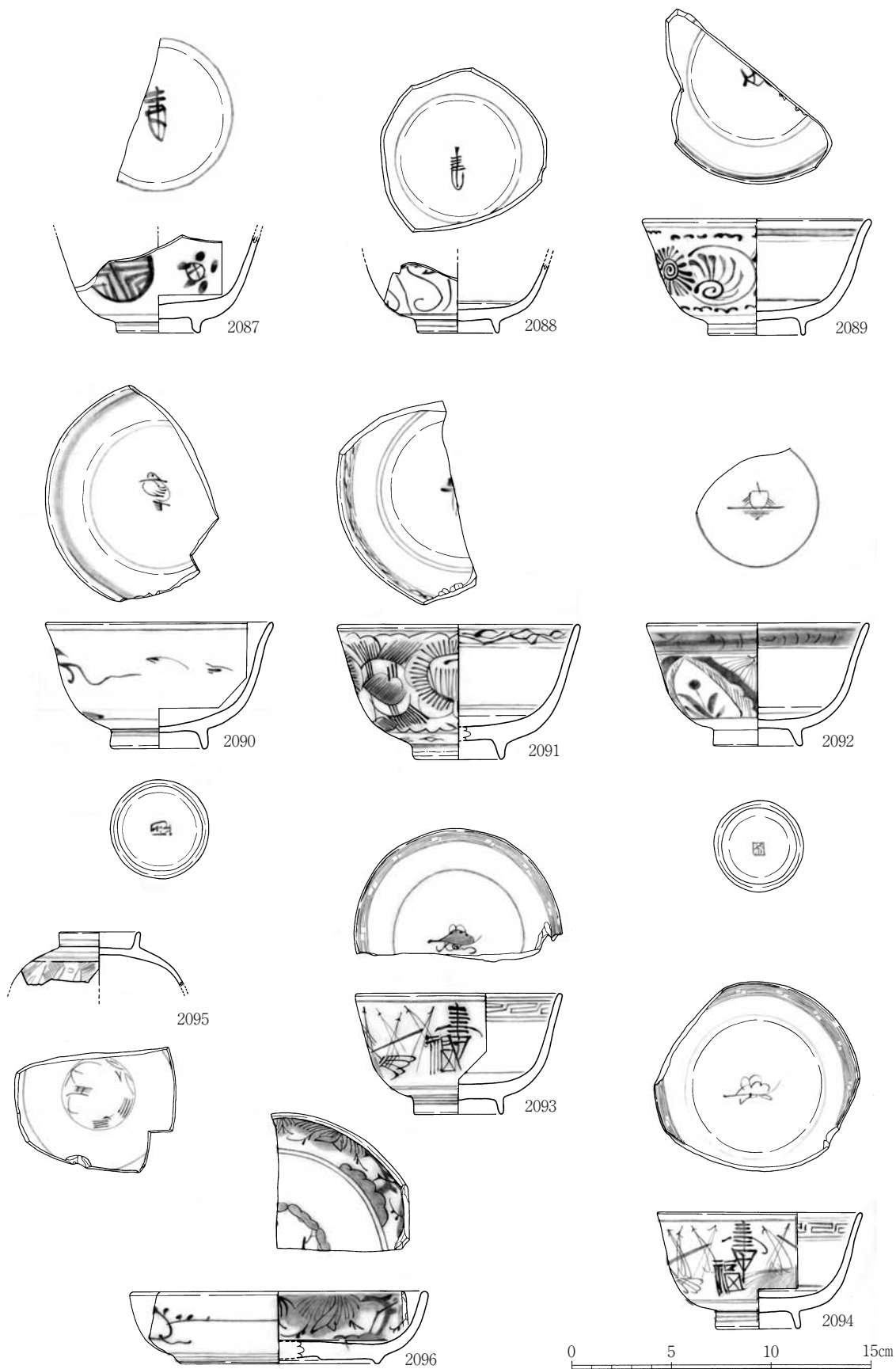


Fig.89 第Ⅳ層出土遺物実測図 (近世磁器)

る。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面には寿福字、松葉、箒と圏線、内面は雷文と圏線、見込には宝文の染付がみられる。2093は約1/2が残存し、口径10.2cm、器高6.0cm、底径4.3cmを測る。胎土はやや密で、焼成は良好である。2094は底部が完存し、口径10.2cm、器高6.9cm、底径4.1cmを測る。胎土はやや密で、焼成は良好である。

2095は肥前系の蓋で、口縁部が欠損し、つまみ径4.0cmを測る。丸形で、つまみは細く直立する。全面に透明釉を薄く施し、つまみ端部は釉ハギを行う。外面には唐花文と圏線、内面には環状の松竹梅文の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

2096は肥前系の皿で、約1/4が残存し、口径14.7cm、器高3.6cm、底径9.8cmを測る。底部は蛇の目凹形高台で、断面三角形を呈する小さな削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、底部外面は輪状に釉ハギを行う。外面には唐草文と圏線、内面は樹文と圏線、見込には文様不明の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

#### (4) 遺構と遺物

第Ⅱ調査地区は水路や道路によってA区、B区、C区に分れるが、中でもA区は特に遺構の密度が高く、その大半が中世に属するものとみられる。A区は南北に走る溝によって東部、中央部、西部に分けられる。

##### ① 中世

##### i 掘立柱建物跡

SB-2001～2019はA区、SB-2020～2027はB区で確認した掘立柱建物跡である。

##### SB-2001 (Fig.90)

A区東部で確認した梁間2間 (6.10～6.20m)、桁行3間 (8.35m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。SB-2002～2004と重なる。柱間寸法は、梁間 (南北) が2.70～2.80mと3.40m、桁行 (東西) が2.40～3.35mであった。柱穴は径0.20～0.75mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片44点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

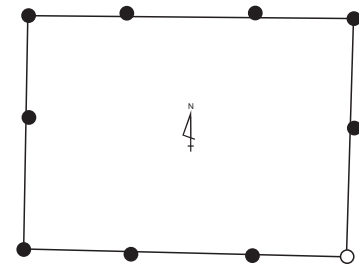


Fig.90 SB-2001

##### SB-2002 (Fig.91)

A区東部で確認した梁間1間 (4.00m)、桁行4間 (7.65～7.90m) の東西棟建物で、棟方向はN-85°-Wである。SB-2001・2003・2004と重なる。柱間寸法は、梁間 (南北) が4.00m、桁行 (東西) が1.80～2.30mである。柱穴は径0.30～0.70mの円形または楕円形で、柱径は約15cmとみられる。埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片49点、中世陶器片3点、鉄釘1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

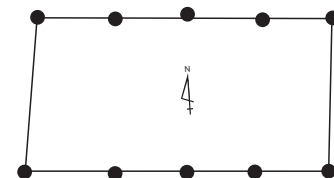


Fig.91 SB-2002



**SB-2003** (Fig.92)

A区東部で確認した梁間2間 (3.10~3.20m), 桁行3間 (4.70~4.85m) の東西棟建物で, 東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-89°-Eである。SB-2001・2002と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が1.40~1.70m, 桁行 (東西) が1.35~1.80mである。柱穴は径0.25~0.50mの円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

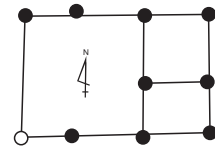


Fig.92 SB-2003

**SB-2004** (Fig.93)

A区東部で確認した梁間1間 (2.30~2.40m), 桁行3間 (5.65~5.75m) の東西棟建物で, 棟方向はN-84°-Wである。SB-2001・2002と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が2.30~2.40m, 桁行 (東西) が1.55~2.20mである。柱穴は径25~30cmの円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片6点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

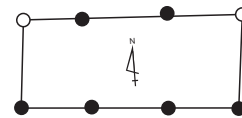


Fig.93 SB-2004

**SB-2005** (Fig.94)

A区中央部で確認した梁間1間 (3.80~3.90m), 桁行4間 (7.65~7.70m) の東西棟建物で, 棟方向は方眼東を向く。SB-2028と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が3.80~3.90m, 桁行 (東西) が1.80~2.05mである。柱穴は径0.25~0.50mの円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点, 青磁片1点, 瓦質土器片1点, 中世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

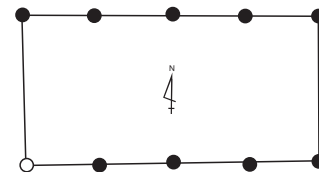


Fig.94 SB-2005

**SB-2006** (Fig.95)

A区中央部で確認した梁間1間 (3.10m), 桁行2間 (4.65~4.70m) の東西棟建物で, 棟方向はN-84°-Wである。SB-2007・2012・2028と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が3.10m, 桁行 (東西) が2.20~2.50mであった。柱穴は径0.30~0.55mの円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片14点, 土製品2点がみられ, 土師質土器 (2097), 土製品2点 (2098・2099) が図示できた。

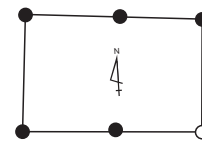


Fig.95 SB-2006

出土遺物

土師質土器 (Fig.117-2097)

2097は小皿で, 約3/4が残存し, 口径6.5cm, 器高1.6cm, 底径4.7cmを測る。口縁部は短く, 真つすぐ伸びる。調整は口縁部が回転ナデ, 底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で, 焼成はやや悪く, 器面は著しく摩耗する。色調は内外面とも橙色を呈する。

土製品 (Fig.117-2098・2099)

2098・2099は紡錘形の土錘で, 全面にナデ調整を施す。2098は完形で, 全長5.1cm, 全幅1.1cm,

孔径0.5cm, 重量4.6gを測る。2099は一部が欠損し, 全長4.9cm, 全幅1.1cm, 孔径0.3cm, 重量5.1gを測る。

#### SB-2007 (Fig.96)

A区中央部で確認した梁間1間(2.30m), 桁行3間(6.70~6.90m)の身舎の南側に下屋が付く, 南北2間(3.40m), 東西3間(6.70m)の東西棟建物で, 棟方向はN-80°-Wである。SB-2006と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が2.30m, 桁行(東西)が2.15~2.30m, 下屋の出が1.10~1.20mであった。柱穴は径20~45cmの円形または楕円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片37点, 手づくね土器1点, 青磁片1点, 土製品3点がみられ, 手づくね土器(2100), 土製品3点(2101~2103)が図示できた。

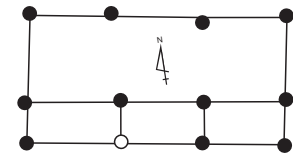


Fig.96 SB-2007

色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片37点, 手づくね土器1点, 青磁片1点, 土製品3点がみられ, 手づくね土器(2100), 土製品3点(2101~2103)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 手づくね土器 (Fig.117-2100)

2100は皿で, 口縁部の一部が残存し, 口径10.4cmを測る。器壁は厚く, 体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は外上方に摘み上げ, 端部を細く仕上げる。調整は内面がナデ, 口縁部がヨコナデ, 体部外面がナデまたは指頭圧を施す。胎土はやや密で, 焼成は比較的良く, 色調は, 内面が灰黄色, 外面が浅黄橙色を呈する。

##### 土製品 (Fig.117-2101~2103)

2101~2103は土錘で, いずれも全面にナデ調整を施す。2101は一部が欠損し, 紡錘形を呈する。全長3.8cm, 全幅1.0cm, 孔径0.4cm, 重量2.9gを測る。2102は完形で, 紡錘形を呈し, 全長5.4cm, 全幅1.1cm, 孔径0.4cm, 重量4.6gを測る。2103は完形で, 紡錘形を呈し, 全長4.9cm, 全幅1.0cm, 孔径0.4cm, 重量3.6gを測る。表面は摩耗する。

#### SB-2008 (Fig.97)

A区中央部で確認した梁間1間(2.50m), 桁行3間(4.50~4.65m)の東西棟建物で, 棟方向はN-80°-Wである。SB-2009と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が2.50m, 桁行(東西)が1.15~1.90mであった。柱穴は径0.20~0.50mの円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

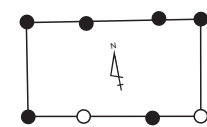


Fig.97 SB-2008

#### SB-2009 (Fig.98)

A区中央部で確認した梁間2間(3.75~3.80m), 桁行3間(6.80~6.95m)の東西棟建物で, 棟方向はN-85°-Wである。SB-2008と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が1.70~2.05m, 桁行(東西)が2.15~2.50mであった。柱穴は径0.30~0.65mの円形または楕円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片16点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

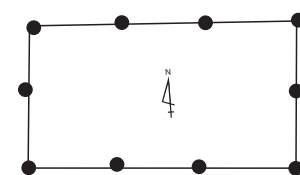


Fig.98 SB-2009

**SB-2010** (Fig.99)

A区中央部で確認した梁間1間 (3.60~3.70m), 桁行4間 (7.50~7.60m) の東西棟建物で, 棟方向はN-85°-Wである。SB-2011と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が3.60~3.70m, 桁行 (東西) が1.80~2.10mであった。柱穴は径30~40cmの円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは褐灰色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片11点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

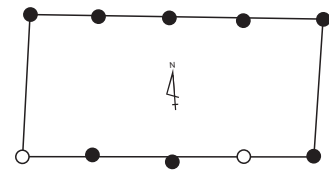


Fig.99 SB-2010

**SB-2011** (Fig.100)

A区中央部で確認した梁間1間 (3.35~3.45m), 桁行4間 (10.20m) の東西棟建物で, 棟方向はN-89°-Wである。SB-2010・2013と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が3.35~3.45m, 桁行 (東西) が1.80~3.00mであった。柱穴は円形または方形で, 径または長辺1.00~1.50mを測る。埋土は暗褐色シルトまたは褐灰色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片7点, 土師質土器片123点, 瓦質土器片2点, 白磁片2点, 青磁片3点, 中世陶器片1点, 鉄釘1点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

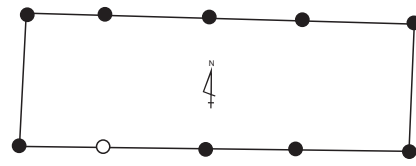


Fig.100 SB-2011

**SB-2012** (Fig.101)

A区中央部で確認した梁間1間 (4.40~4.60m), 桁行4間 (8.20~8.45m) の南北棟建物で, 棟方向はN-9°-Eである。SB-2006と重なる。柱間寸法は, 梁間 (東西) が4.40~4.60m, 桁行 (南北) が1.50~2.60mであった。柱穴は径20~40cmの円形または楕円形で, 埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点, 青磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

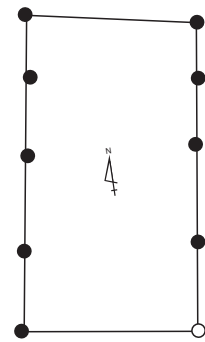


Fig.101 SB-2012

**SB-2013** (Fig.102)

A区中央部で確認した梁間2間 (3.40~3.60m), 桁行2間 (6.05~6.50m) の総柱東西棟建物で, 棟方向はN-81°-Wである。SB-2011と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が1.70~1.80m, 桁行 (東西) が3.00~3.30mであった。柱穴は径0.40~1.05mの円形または楕円形で, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片26点, 中世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

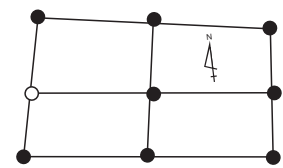


Fig.102 SB-2013

**SB-2014** (Fig.103)

A区中央部で確認した梁間2間 (3.15~3.20m), 桁行4間 (5.80~6.10m) の東西棟建物で, 東から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-84°-Wで, SB-2015・2016と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が1.35~1.60m, 桁行 (東西) が1.20~2.00mであった。柱穴は径0.30~0.70mの円

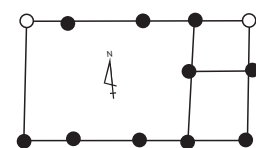


Fig.103 SB-2014

形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片16点、瓦質土器片1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SB-2015** (Fig.104)

A区中央部で確認した梁間1間 (3.05~3.15m)、桁行3間 (7.40m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Eである。SB-2014・2016と重なる。柱間寸法は、梁間 (南北) が3.05~3.15m、桁行 (東西) が1.80~2.80mであった。柱穴は径0.50~0.60mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片14点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

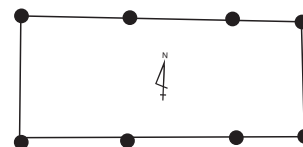


Fig.104 SB-2015

**SB-2016** (Fig.105)

A区中央部で確認した梁間1間 (3.80m)、桁行2間 (6.00m) の東西棟建物で、棟方向はN-89°-Wである。SB-2014・2015と重なる。柱間寸法は、梁間 (南北) が3.80m、桁行 (東西) が3.00mであった。柱穴は径0.30~1.00mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片14点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

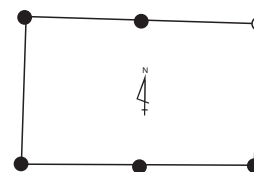


Fig.105 SB-2016

**SB-2017** (Fig.106)

A区中央部で確認した梁間2間 (4.20~4.25m)、桁行2間 (5.40~5.55m) の東西棟建物で、棟方向はN-84°-Wである。柱間寸法は、梁間 (南北) が1.95~2.30m、桁行 (東西) が2.45~3.10mであった。柱穴は径0.30~1.00mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片4点、土師質土器片29点、瓦質土器片3点、中世陶器片1点、土錘1点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

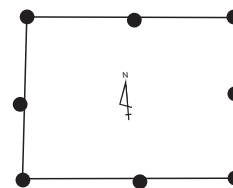


Fig.106 SB-2017

**SB-2018** (Fig.107)

A区北部で確認した梁間1間 (2.80m)、桁行2間 (6.00~6.20m) の南北棟建物で、棟方向はN-44°-Wである。SB-2019と重なる。柱間寸法は、梁間 (東西) が2.80m、桁行 (南北) が2.80~3.20mであった。柱穴は径0.30~1.30mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

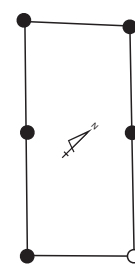


Fig.107 SB-2018

**SB-2019** (Fig.108)

A区北部で確認した梁間1間 (2.90~3.00m)、桁行2間 (6.40m) の南北棟建物で、棟方向はN-7°-Wである。SB-2018と重なる。柱間寸法は、梁間 (東西) が2.90~3.00m、桁行 (東西) が3.20mであった。柱穴は径0.30~1.30mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須

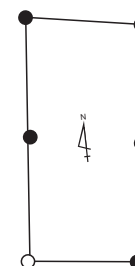


Fig.108 SB-2019

恵器片1点，瓦器片6点，土師質土器片74点，青磁片1点，土錘1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

**SB-2020** (Fig.109)

B区東部で確認した梁間2間 (3.40~3.45m)，桁行2間 (4.25~4.40m) の南北棟建物で，棟方向はN-10°-Eである。SB-2021と重なる。柱間寸法は，梁間(東西)が1.65~1.80m，桁行(東西)が2.05~2.30mであった。柱穴は径0.25~0.60mの円形または楕円形で，埋土は暗褐色シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点，土師質土器片10点，白磁片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

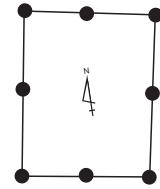


Fig.109 SB-2020

**SB-2021** (Fig.110)

B区東部で確認した梁間1間 (2.60m)，桁行3間 (5.60m) の東西棟建物で，棟方向はN-83°-Wである。SB-2020と重なる。柱間寸法は，梁間(南北)が2.60m，桁行(東西)が1.80~1.90mであった。柱穴は径0.30~0.60mの円形で，埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片2点，土師質土器片40点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

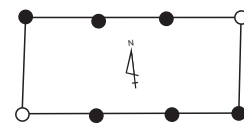


Fig.110 SB-2021

**SB-2022** (Fig.111)

B区中央部で確認した梁間1間 (3.50m)，桁行3間 (6.00~6.10m) の東西棟建物で，棟方向はN-81°-Wである。SB-2023と重なる。柱間寸法は，梁間(南北)が3.50m，桁行(東西)が1.70~2.40mであった。柱穴は径25~45cmの円形で，柱径は約20cmとみられる。埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点，土師質土器片20点，土錘1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

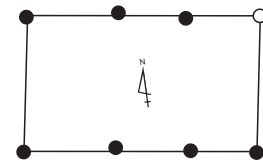


Fig.111 SB-2022

**SB-2023** (Fig.112)

B区中央部で確認した梁間2間 (3.65~3.75m)，桁行3間 (5.60~5.65m) の南北棟建物で，南から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-7°-Eで，SB-2022・2024と重なる。柱間寸法は，梁間(東西)が1.75~1.90m，桁行(南北)が1.40~2.00mであった。柱穴は径25~45cmの円形で，柱径は約20cmとみられる。埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片47点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

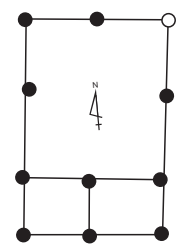


Fig.112 SB-2023

**SB-2024** (Fig.113)

B区中央部で確認した梁間1間 (2.45m)，桁行3間 (6.45~6.50m) の東西棟建物で，棟方向はN-82°-Wである。SB-2023と重なる。柱間寸法は，梁間(南北)が2.45m，桁行(東西)が1.90~2.50mであった。柱穴は径25~40cmの円形で，柱径は約15cmとみられる。埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片5点，土師質土器片38点，白磁1点がみられ，白磁(2104)が図示できた。

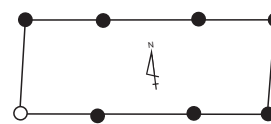


Fig.113 SB-2024

Tab.5 第Ⅱ調査地区中世掘立柱建物跡計測表1

遺構番号	規 模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備 考	
	梁間 × 桁行	梁間 (m) × 桁行 (m)		柱間寸法				
				梁間 (m)				桁行 (m)
SB-2001	2×3	6.10~6.20	× 8.35	2.70~2.80 ・ 3.40	2.40~3.35	51.35	N-89°-W	
SB-2002	1×4	4.00	× 7.65~7.90	4.00	1.80~2.30	31.10	N-85°-W	
SB-2003	2×3	3.10~3.20	× 4.70~4.85	1.40~1.70	1.35~1.80	15.05	N-89°-E	間仕切柱
SB-2004	1×3	2.30~2.40	× 5.65~5.75	2.30~2.40	1.55~2.20	13.40	N-84°-W	
SB-2005	1×4	3.80~3.90	× 7.65~7.70	3.80~3.90	1.80~2.05	29.55	N-90°-E	
SB-2006	1×2	3.10	× 4.65~4.70	3.10	2.20~2.50	14.50	N-84°-W	
SB-2007	2×3	3.40	× 6.70~6.90	2.30	2.15~2.30	22.78	N-80°-W	下屋
SB-2008	1×3	2.50	× 4.50~4.65	2.50	1.15~1.90	11.44	N-80°-W	
SB-2009	2×3	3.75~3.80	× 6.80~6.95	1.70~2.05	2.15~2.50	25.96	N-85°-W	
SB-2010	1×4	3.60~3.70	× 7.50~7.60	3.60~3.70	1.80~2.10	27.56	N-85°-W	
SB-2011	1×4	3.35~3.45	× 10.20	3.35~3.45	1.80~3.00	34.96	N-89°-W	
SB-2012	1×4	4.40~4.60	× 8.20~8.45	4.40~4.60	1.50~2.60	37.48	N-9°-E	
SB-2013	2×2	3.40~3.60	× 6.05~6.50	1.70~1.80	3.00~3.30	21.99	N-81°-W	総柱
SB-2014	2×4	3.15~3.20	× 5.80~6.10	1.35~1.60	1.20~2.00	18.90	N-84°-W	間仕切柱
SB-2015	1×3	3.05~3.15	× 7.40	3.05~3.15	1.80~2.80	22.94	N-89°-E	
SB-2016	1×2	3.80	× 6.00	3.80	3.00	11.40	N-89°-W	
SB-2017	2×2	4.20~4.25	× 5.40~5.55	1.95~2.30	2.45~3.10	23.13	N-84°-W	
SB-2018	1×2	2.80	× 6.00~6.20	2.80	2.80~3.20	17.08	N-44°-W	
SB-2019	1×2	2.90~3.00	× 6.40	2.90~3.00	3.20	18.88	N-7°-W	
SB-2020	2×2	3.40~3.45	× 4.25~4.40	1.65~1.80	2.05~2.30	14.82	N-10°-E	
SB-2021	1×3	2.60	× 5.60	2.60	1.80~1.90	14.56	N-83°-W	

出土遺物

白磁 (Fig.117-2104)

2104は杯で、底部の一部が残存し、底径6.8cmを測る。器壁は薄く、体部は平らな底部から屈曲して立ち上がる。全面に白色釉を施し、底部外面は釉ハギを行う。胎土は黒色の砂粒を含み、焼成は良好である。

SB-2025 (Fig.114)

B区中央部で確認した梁間2間 (4.10~4.30m)、桁行2間 (5.10~5.15m) の総柱南北棟建物で、棟方向はN-14°-Eである。SB-2026と重なる。柱間寸法は、梁間 (東西) が1.80~2.40m、桁行 (南北) が2.40~2.70mであった。柱穴は径30~35cmの円形で、埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

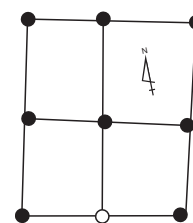


Fig.114 SB-2025

**SB-2026** (Fig.115)

B区中央部で確認した梁間2間 (6.20~6.45m), 桁行3間 (7.55~7.90m) の身舎の西側に下屋が付く, 南北2間 (6.20~6.30m), 東西4間 (9.35~9.40m) の東西棟建物である。棟方向はN-89°-Eで, SB-2025と重なる。柱間寸法は, 梁間 (南北) が2.70~3.50m, 桁行 (東西) が1.40~2.80m, 下屋の出が1.40~1.80mであった。柱穴は径0.35~0.50mの円形または楕円形で, 埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片3点, 土師質土器片21点, 瓦質土器片1点がみられ, 土師質土器1点 (2105) が図示できた。

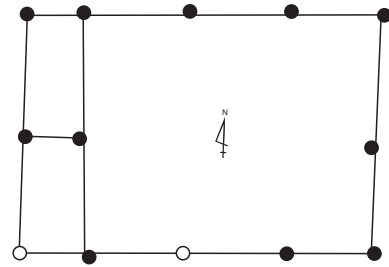


Fig.115 SB-2026

出土遺物

土師質土器 (Fig.117-2105)

2105は小皿で, 約1/3が残存し, 口径7.5cm, 器高2.0cm, 底径4.3cmを測る。口縁部はやや内湾して立ち上がる。調整は回転ナデののち内底面にナデ調整を加え, 底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で, 焼成は良く, 色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

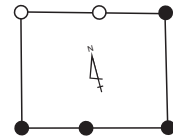


Fig.116 SB-2027

**SB-2027** (Fig.116)

B区北部で確認した梁間1間 (3.05~3.10m), 桁行2間 (3.80m) の東西棟建物である。棟方向はN-75°-Wである。柱間寸法は, 梁間 (南北) が3.05~3.10m, 桁行 (東西) が1.65~2.15mであった。柱穴は径20~40cmの円形で, 埋土は灰黄褐色砂質シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが, 復元図示できなかった。

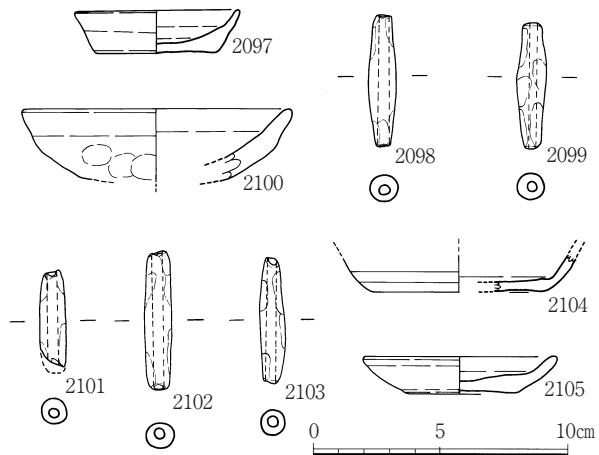


Fig.117 SB-2006・2007・2024・2026出土遺物実測図

Tab.6 第II調査地区中世掘立柱建物跡計測表2

遺構番号	規模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備考
	梁間 × 桁行	梁間 (m) × 桁行 (m)	柱間寸法				
			梁間 (m)	桁行 (m)			
SB-2022	1×3	3.50 × 6.00~6.10	3.50	1.70~2.40	21.18	N-81°-W	
SB-2023	2×3	3.65~3.75 × 5.60~5.65	1.75~1.90	1.40~2.00	20.81	N-7°-E	間仕切柱
SB-2024	1×3	2.45 × 6.45~6.50	2.45	1.90~2.50	15.86	N-82°-W	
SB-2025	2×2	4.10~4.30 × 5.10~5.15	1.80~2.40	2.40~2.70	21.53	N-14°-E	総柱
SB-2026	2×4	6.20~6.30 × 9.35~9.40	2.70~3.50	1.40~2.80	58.60	N-89°-E	下屋
SB-2027	1×2	3.05~3.10 × 3.80	3.05~3.10	1.65~2.15	11.69	N-75°-W	

## ii 塀・柵列跡

### SA-2001

A区東部で確認した南北塀（N-12°-W）である。4間分（4.40m）を検出し、柱間は0.90~1.20mである。柱穴は径25~30cmの円形で、柱径は約10cmとみられる。埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片10点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

Tab.7 第Ⅱ調査地区中世塀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備 考
	柱穴数 (個)	全長 (m)	柱間距離 (m)		
SA-2001	5	4.40	0.90~1.20	N-12°-W	

## iii 土坑

SK-2001~2049はA区、SK-2050~2097はB区で検出した土坑である。

### SK-2001

A区東部で検出した溝状の土坑である。全長2.59m、幅0.76m、深さ32cmを測り、長軸方向はN-21°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片12点がみられ、東播系須恵器（2106）が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.120-2106)

2106は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はくの字状に屈曲し、上下に拡張する。調整は回転ナデを施し、口縁部の外面には重ね焼痕が残る。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

### SK-2002

A区東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.86m、短径1.48m、深さ22cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片20点、白磁片1点、青磁片1点がみられ、土師質土器1点（2107）が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.120-2107)

2107は杯で、約1/5が残存し、底径5.6cmを測る。体部は真っすぐ外上方に伸びる。調整は回転ナデを施し、底部の切り離しは著しく摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

### SK-2003 (Fig.118)

A区東部で検出した不整形の土坑である。長辺1.57m、短辺1.37m、深さ37cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈する。埋土は2層に分かれ、上層が暗褐色シルト、下層が灰黄色シルト質粘土で、いずれも炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片10点、



瓦質土器片3点, 青磁片1点, 土錘1点, 鉄滓がみられ, 瓦質土器1点 (2108) が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.120-2108)

2108は羽釜で, 口縁部が約1/4残存し, 口径21.0cmを測る。口縁部は内湾し, 端部は水平な面を有する。口縁部外面には凹線状の段がめぐり, その下には幅約1.5cmの鐙が水平に付く。調整は口縁部内面に板ナデを施したのち体部内面にナデ, 口縁部にヨコナデを行い, 鐙の下にはヘラ削りがみられる。器面には炭素が吸着し, 体部外面には煤が付着する。胎土はやや密で, 焼成は良く, 色調は, 内面が灰褐色, 外面が黒褐色を呈する。

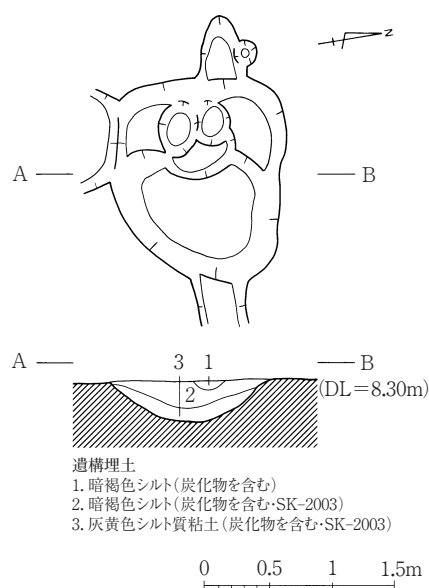


Fig.118 SK-2003

SK-2004

A区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.72m, 短辺1.29m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-69°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片42点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-2005

A区東部で検出した長方形の土坑で, SK-2006を切る。長辺1.46m, 短辺1.21m, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-74°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片52点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-2006

A区東部で検出した長方形の土坑で, SK-2005に切られる。長辺1.28m, 短辺1.21m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片57点, 土錘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-2007

A区東部で検出した円形の土坑で, 径0.62m, 深さ16cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片15点, 古銭1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-2008

A区東部で検出した長方形の土坑である。長辺1.13m, 短辺1.04m, 深さ37cmを測り, 長軸方向はN-34°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点, 瓦器片2点, 土師質土器片150点, 瓦質土器片1点, 土錘1点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

### SK-2009

A区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.23m、短辺1.09m、深さ19cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器1点、土師質土器片35点がみられ、須恵器(2109)が図示できた。

#### 出土遺物

須恵器 (Fig.120-2109)

2109は甕の底部で、約1/4が残存し、底径9.7cmを測る。胴部は平らな底部から若干内湾して立ち上がる。調整は胴部外面が回転ナデ、胴部内面は摩耗するため不明で、底部の切り離しは静止糸切りである。胎土には礫を含み、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰白色を呈する。

### SK-2010

A区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺0.82m、短辺0.62m、深さ10cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片30点、瓦質土器片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-2011

A区東部で検出した不整形の土坑である。SD-2004の底で確認し、SD-2003に切られる。全長4.08m、幅1.85m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、黄橙色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点、備前焼片1点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-2012

A区中央部で検出した不整隅丸方形の土坑である。長辺1.37m、短辺1.04m、深さ18cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-2013

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.20m、短径0.93m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-2°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片2点がみられ、東播系須恵器(2110)が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.120-2110)

2110は片口鉢で、口縁部の一部が残存し、口径21.2cmを測る。体部は外上方に真っすぐ立ち上がり、口縁部は下方に肥厚する。調整は回転ナデを施し、口縁部には重ね焼痕が残る。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも青灰色を呈する。

### SK-2014 (Fig.119)

A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.52m、短辺0.98m、深さ30cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が炭化物を含む暗褐色シル

ト、下層が黄橙色シルトのブロックを含む暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片26点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-2015**

A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.26m、短辺0.99m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-67°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が暗褐色シルト、下層が灰黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片3点、土師質土器片18点、土錘1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

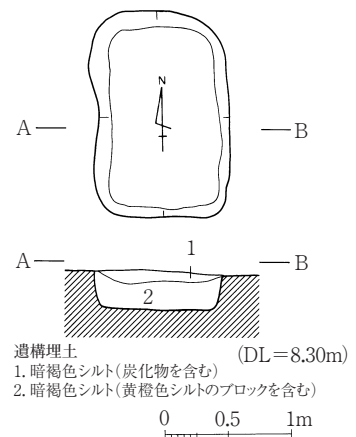


Fig.119 SK-2014

**SK-2016**

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2017を切る。長辺1.22m、短辺1.09m、深さ29cmを測り、長軸方向はN-14°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片18点、瓦質土器片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-2017**

A区中央部で検出した楕円形の土坑で、SK-2016に切られる。長径1.60m、短径1.41m、深さ0.50mを測り、長軸方向はN-55°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片27点、瓦質土器片1点がみられ、土師質土器1点(2111)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.120-2111)

2111は杯で、約1/6が残存し、底径7.4cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、回転ナデ調整を施

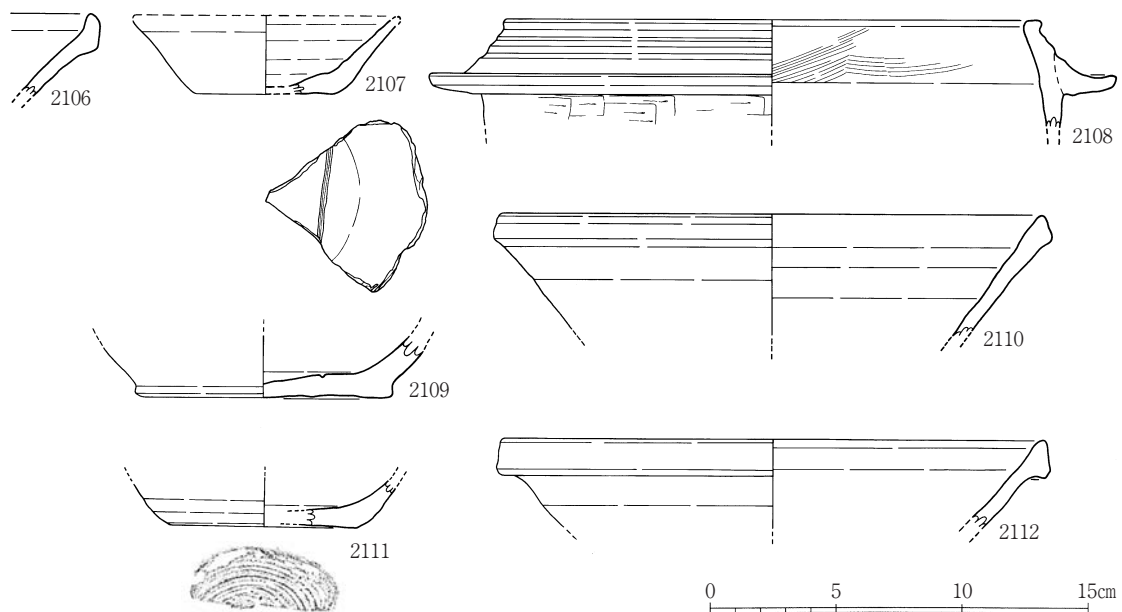


Fig.120 SK-2001~2018出土遺物実測図

す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### SK-2018

A区中央部で検出した楕円形の土坑で、SD-2004に切られる。検出した西半分は長径1.05m、短径1.12m、深さ17cmを測る。長軸方向はN-80°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、東播系須恵器1点、土師質土器片12点、土錘1点がみられ、東播系須恵器(2112)が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.120-2112)

2112は片口鉢で、口縁部の一部が残存し、口径21.4cmを測る。体部は直線的に伸び、口縁部は上下に拡張し、調整は回転ナデを施す。胎土はやや密で、焼成はやや不良となり、色調は、内面が灰黄色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

#### SK-2019

A区東部で検出した不整楕円形の土坑で、SD-2004を切る。長径0.94m、短径0.82m、深さ22cmを測り、長軸方向はN-40°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片12点、石鍋片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2020

A区中央部で検出した楕円形の土坑で、SK-2021を切る。長径1.52m、短径1.12m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-57°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片10点、白磁片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2021 (Fig.121)

A区中央部で検出した長方形の土坑で、SK-2020・2022に切られる。長辺1.40m、短辺1.17m、深さ17cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片14点、瓦質土器片1点、青磁片1点、土錘2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2022 (Fig.121)

A区中央部で検出した方形の土坑で、SK-2021を切り、一辺0.89m、深さ27cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片10点、瓦質土器片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

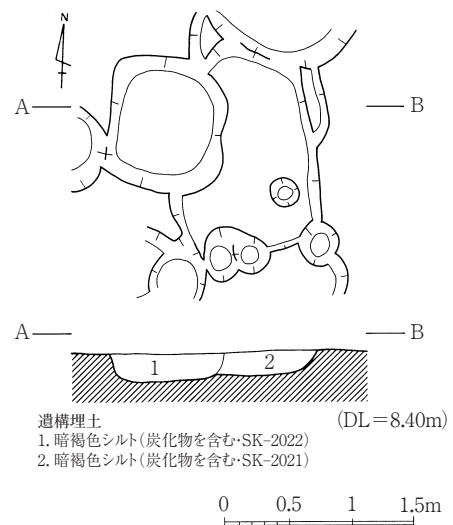


Fig.121 SK-2021・2022

**SK-2023**

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.51m, 短辺1.01m, 深さ31cmを測り, 長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片11点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2024**

A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.74m, 短辺0.79m, 深さ30cmを測り, 長軸方向はN-76°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片66点, 青磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2025**

A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.31m, 短辺1.11m, 深さ23cmを測り, 長軸方向はN-16°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片20点, 瓦質土器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2026**

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.28m, 短径1.01m, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-74°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で, 粗砂を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片15点, 備前焼片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2027**

A区中央部で検出した長方形の土坑で, SK-2028・2029に切られる。検出した西半分は長辺2.16m, 短辺0.91m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-79°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した古銭(2113)のみがみられた。

出土遺物

古銭 (Fig.124-2113)

2113は行書の元豊通寶で, 銭径2.44cm, 内径1.85cm, 穿径0.65cm, 銭厚0.15cm, 重量2.4gを測る。北宋銭で, 初鑄造年は1078年である。

**SK-2028**

A区中央部で検出した楕円形の土坑で, SK-2027・2029を切る。長径1.76m, 短径1.36m, 深さ21cmを測り, 長軸方向はN-80°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 黄橙色シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した古銭(2114)のみがみられた。

出土遺物

古銭 (Fig.124-2114)

2114は真書の天聖元寶で, 一部が欠損する。銭径2.48cm, 内径2.04cm, 穿径0.62cm, 銭厚0.12cm, 重量1.8gを測る。北宋銭で, 初鑄造年は1023年である。

**SK-2029**

A区中央部で検出した不整形の土坑で, SK-2028に切られる。全長1.56m, 幅1.14m, 深さ34cm

を測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した古銭（2115）のみがみられた。

#### 出土遺物

古銭 (Fig.124-2115)

2115は真書の熙寧元寶で、一部が欠損する。銭径2.48cm, 内径2.09cm, 穿径0.72cm, 銭厚0.12cm, 重量1.8gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1068年である。

#### SK-2030 (Fig.122)

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径3.07m, 短径1.23m, 深さ0.51mを測り、長軸方向はN-3°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が細砂と黄色シルトのブロックと炭化物を含むにぶい黄褐色シルト, 下層が粗砂と炭化物を含むにぶい黄橙色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片3点, 土師質土器片75点, 瓦質土器片1点, 土錘1点, 鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2031

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.38m, 短辺0.96m, 深さ42cmを測り、長軸方向はN-63°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片9点, 瓦質土器片1点, 青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2032 (Fig.123)

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.09m, 短辺1.21m, 深さ30cmを測り、長軸方向はN-75°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が細砂と炭化物を含むにぶい黄橙色シルト, 下層が炭化物を含むにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物は上層より土師質土器片3点, 鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2033

A区中央部で検出した方形の土坑で、SK-2034に切られ、一辺1.48m, 深さ27cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片47点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2034

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2033を切る。長

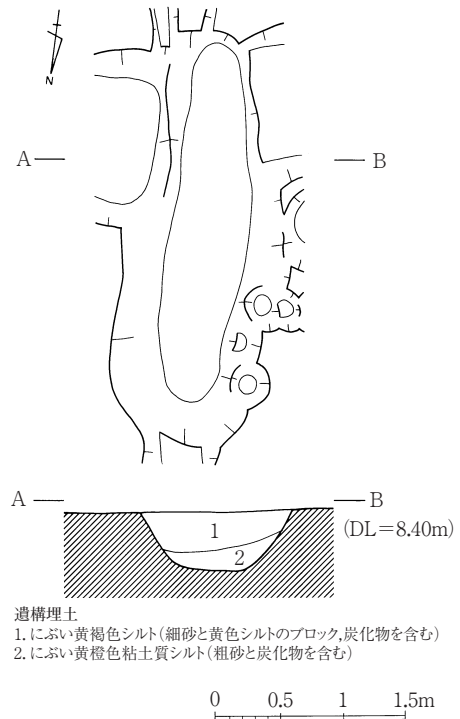


Fig.122 SK-2030

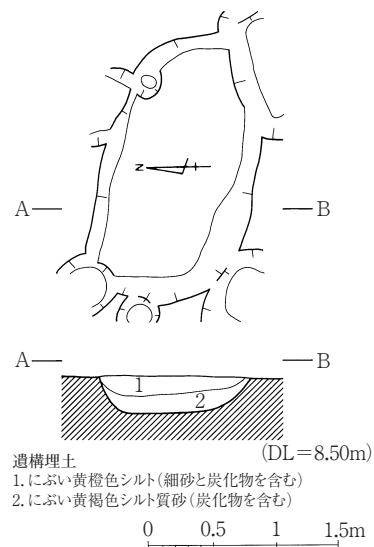


Fig.123 SK-2032

辺1.31m, 短辺0.93m, 深さ45cmを測り, 長軸方向はN-54°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片3点, 土師質土器片60点, 白磁片2点, 青磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2035**

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑で, SD-2006・2007を切る。長辺1.96m, 短辺1.42m, 深さ29cmを測り, 長軸方向は方眼北を向く。断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 瓦器片1点, 土師質土器片21点, 青磁片2点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2036**

A区中央部で検出した隅丸方形を呈するとみられる土坑で, 東は調査区外へ続き, SK-2108・2109に切られる。検出した西半分は長辺1.44m, 短辺1.28m, 深さ43cmを測り, 断面は逆台形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片33点, 青磁片1点, 鉄釘2点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2037**

A区中央部で検出した不整楕円形の土坑である。SD-2009を切り, P-2024に切られる。長径4.05m, 短径2.85m, 深さ39cmを測り, 長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片45点, 備前焼片1点, 白磁片1点, 青磁片1点, 土錘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2038**

A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.51m, 短辺1.30m, 深さ26cmを測り, 長軸方向はN-76°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 瓦器片1点, 土師質土器片18点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2039**

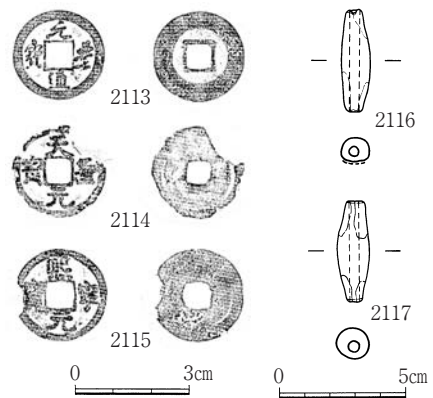
A区中央部で検出した楕円形の土坑で, SD-2010を切る。長径1.87m, 短径1.47m, 深さ43cmを測り, 長軸方向はN-71°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は褐灰色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片20点, 青磁片2点, 土錘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2040**

A区中央部で検出した不整形の土坑である。全長1.39m, 幅0.91m, 深さ37cmを測り, 断面は舟底形を呈し, 埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片12点, 土製品2点がみられ, 土製品2点(2116・2117)が図示できた。

**出土遺物**

土製品 (Fig.124-2116・2117)

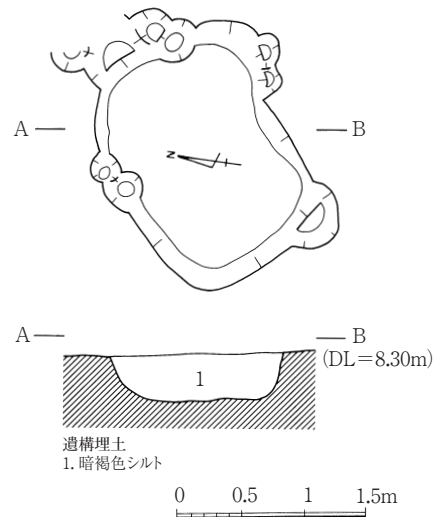


**Fig.124** SK-2027~2029・2040  
出土遺物実測図

2116・2117は紡錘形の土鍾で、いずれも全面にナデ調整を施す。2116は一部が欠損し、全長3.9cm、全幅1.1cm、孔径0.4cm、重量3.7gを測る。2117は完形で、全長3.9cm、全幅1.3cm、孔径0.4cm、重量4.5gを測る。表面は摩耗する。

**SK-2041** (Fig.125)

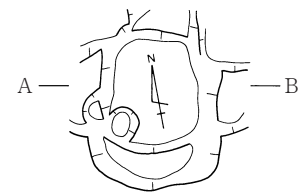
A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.84m、短辺1.29m、深さ39cmを測り、長軸方向はN-48°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片60点、青磁片1点、土鍾2点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。



**Fig.125** SK-2041

**SK-2042**

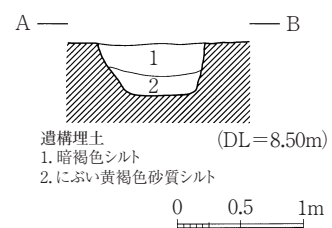
A区中央部で検出した円形の土坑で、径1.85m、深さ41cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片2点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



**Fig.126** SK-2043

**SK-2043** (Fig.126)

A区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.24m、短辺0.73m、深さ44cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が暗褐色シルト、下層がにぶい黄褐色砂質シルトであった。出土遺物は須恵器片1点、瓦器片5点、土師質土器片26点、瓦質土器片4点、土鍾3点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



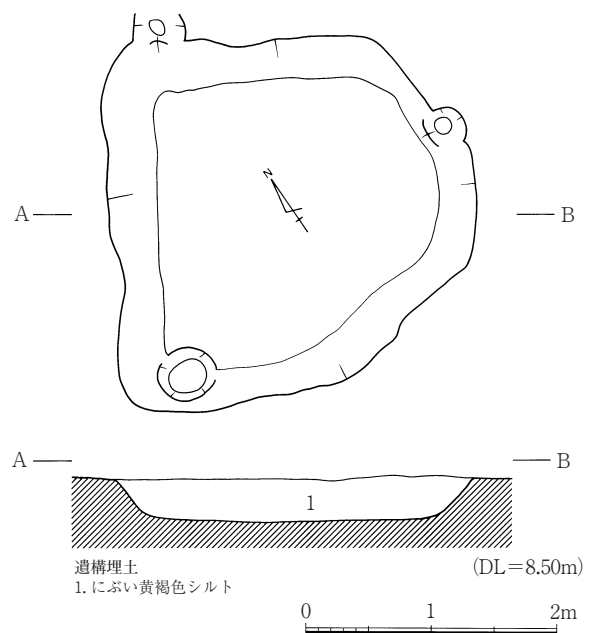
**SK-2044** (Fig.127)

A区中央部で検出した不整形の土坑である。全長2.90m、幅1.10m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-32°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片65点、瓦質土器片2点、近世陶器1点、砥石1点がみられ、瓦質土器1点 (2118)、近世陶器 (2119) が図示できたが、2119は混入したものとみられる。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.131-2118)

2118は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径21.9cmを測る。口縁部は内湾し、端部は水平な面を有する。口縁部の外面には凹線状の



**Fig.127** SK-2044



段がめぐり、その下に幅約2.1cmの鐙が水平に付く。調整は内面が板ナデ、口縁部がヨコナデ、鐙の下にはヘラ削りを施す。器面には炭素が吸着する。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は、内面が暗灰色、外面が灰色または黒褐色を呈する。

近世陶器 (Fig.131-2119)

2119は碗で、口縁部の約1/6が残存し、口径11.0cmを測る。体部は内湾して口縁部に至り、端部を丸く収める。内面から体部外面に鉄釉を施す。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、釉調はオリブ黒色、生地は灰色を呈する。

#### SK-2045

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径2.38m、短径1.30m、深さ30cmを測り、長軸方向はN-26°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられ、土師質土器1点(2120)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.131-2120)

2120は小皿で、約2/3が残存し、口径8.9cm、器高2.2cm、底径4.4cmを測る。口縁部は長く、内湾する。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

#### SK-2046

A区西部で検出した楕円形の土坑である。長径1.98m、短径1.40m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-22°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片8点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2047

A区西部で検出した楕円形の土坑である。長径1.68m、短径1.27m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2048

A区西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.10m、短辺1.07m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-14°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片20点、青磁片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2049

A区西部で検出した溝状の土坑である。全長4.10m、幅1.28m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-5°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片5点、土製品1点がみられ、土製品(2121)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.131-2121)

2121は紡錘形の土錘で、一部が欠損する。全長4.6cm、全幅0.9cm、孔径0.3cm、重量3.2gを測り、

全面にナデ調整を施す。表面は摩耗する。

### SK-2050

B区東部で検出した不整形の土坑で、東は調査区外へ続く。SK-2051とSD-2014に切られる。検出した西半分は全長2.60m、幅1.56m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-30°-Eを示す。断面は皿状を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片27点、瓦質土器片3点、備前焼1点がみられ、備前焼(2122)が図示できた。

#### 出土遺物

備前焼 (Fig.131-2122)

2122は播鉢で、底部の一部が残存する。体部は平らな底部から若干内湾して立ち上がる。調整は体部が回転ナデ、底部外面がナデで、体部内面には残存部で4条の摺り目がみられる。胎土は密で、砂粒を含み、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

### SK-2051 (Fig.128)

B区東部で検出した不整隅丸方形の土坑である。SD-2014の底で検出し、SK-2050を切る。長辺2.11m、短辺1.83m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が炭化物を含む灰黄褐色砂質シルト、下層が細砂と炭化物を含む灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片30点、瓦質土器片2点がみられ、瓦質土器1点(2123)が図示できた。

#### 出土遺物

瓦質土器 (Fig.131-2123)

2123は播鉢で、口縁部の一部が残存し、口径21.1cmを測る。体部は真っすぐ伸びて口縁部に至り、端部は肥厚して面を有する。調整は体部がナデ、口縁部がヨコナデで、体部内面には残存部で5条の摺り目がみられる。器面は著しく摩耗し、炭素はみられない。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

### SK-2052

B区東部で検出した不整隅丸方形の土坑である。長辺1.28m、短辺1.05m、深さ28cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は舟底形で、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片34点、瓦質土器片2点、青磁片1点、鉄滓がみられ、土師質土器1点(2124)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.131-2124)

2124は杯で、底部がほぼ完存し、底径7.3cmを測る。底部の器壁は薄く、体部はやや内湾して立

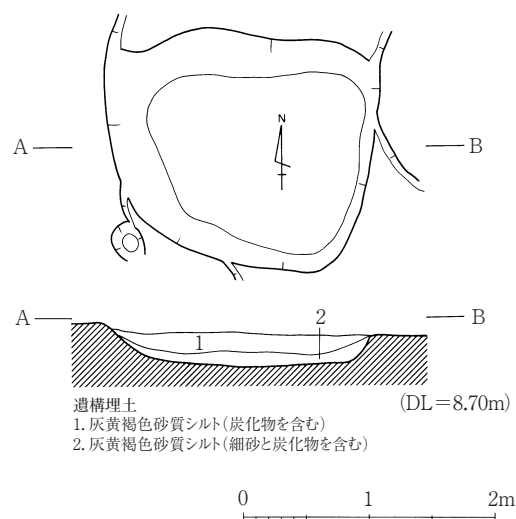


Fig.128 SK-2051

ち上がる。調整は体部外面が回転ナデ、内面は摩耗するため不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

**SK-2053**

B区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.31m、短辺1.26m、深さ22cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片13点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-2054**

B区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.58m、短辺0.75m、深さ29cmを測り、長軸方向はN-87°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-2055** (Fig.129)

B区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.89m、短辺1.09m、深さ32cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が褐灰色シルト質砂を含む灰黄褐色シルト質砂、下層が浅黄橙色シルト質砂のブロックを含むにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片55点、瓦質土器片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

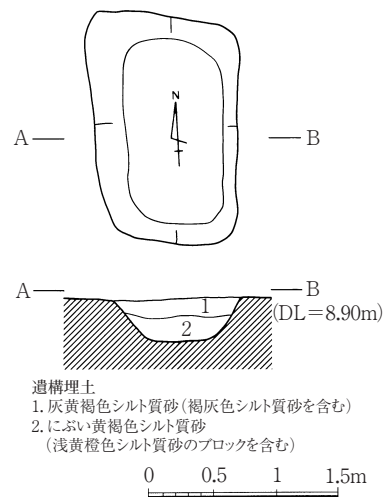


Fig.129 SK-2055

**SK-2056** (Fig.130)

B区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.19m、短辺1.02m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-12°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が浅黄橙色シルト質砂ブロックを含むにぶい黄褐色シルト質砂、下層が淡黄色砂質シルトブロックを含む灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器片2点、土師質土器片30点、備前焼片1点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

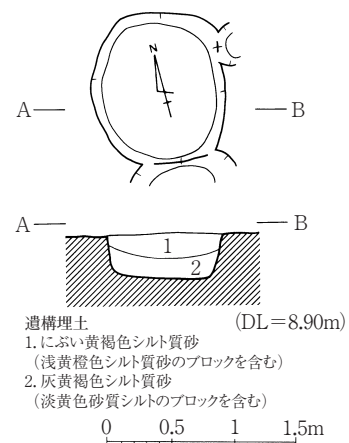


Fig.130 SK-2056

**SK-2057**

B区東部で検出した楕円形の土坑である。長径0.79m、短径0.65m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-69°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点、土製品1点がみられ、土製品(2125)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.131-2125)

2125は円筒形の土錘で、一部が欠損する。全長4.6cm、全幅1.6cm、孔径0.4cm、重量9.6gを測り、全面にナデ調整を施す。

#### SK-2058

B区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.07m、短辺0.71m、深さ23cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点、青花片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2059

B区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.21m、短辺0.80m、深さ20cmを測り、長軸方向はN-13°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片25点、土錘2点、鉄滓がみられ、土師質土器1点(2126)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.131-2126)

2126は椀で、底部の約1/6が残存し、底径6.4cmを測る。底部には断面台形を呈する高台を貼付し、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。調整は内面が丁寧なナデ、外面はナデで一部ヘラ磨きがみられる。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は、内面が浅黄橙色、外面が浅黄色を呈する。

#### SK-2060

B区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.38m、短辺1.36m、深さ36cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片42点、青磁片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2061

B区東部で検出した長方形の土坑である。長辺1.28m、短辺0.99m、深さ35cmを測り、長軸方向はN-5°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片3点、土師質土器片170点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2062

B区東部で検出した長方形の土坑である。長辺1.15m、短辺1.05m、深さ38cmを測り、長軸方向はN-80°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片4点、土師質土器片120点、瓦質土器片2点、青磁片1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2063

B区東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.33m、短径1.02m、深さ19cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片10点、土製品1点がみられ、土製品

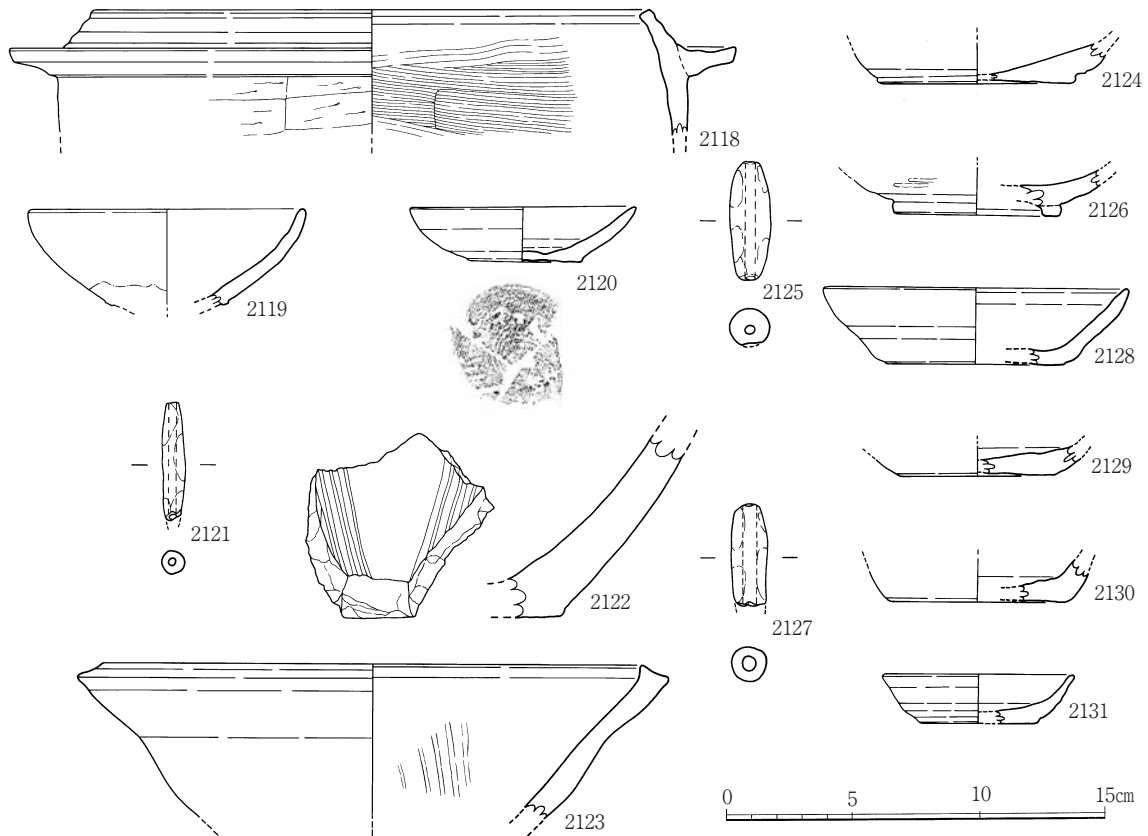


Fig.131 SK-2044~2065出土遺物実測図

(2127) が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.131-2127)

2127は円筒形の土錘で、一部が欠損する。全長4.0cm、全幅1.4cm、孔径0.6cm、重量6.7gを測り、全面にナデ調整を施す。

SK-2064

B区東部で検出した楕円形の土坑で、SK-2065に切られる。長径0.99m、短径0.65m、深さ39cmを測り、長軸方向はN-61°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片9点がみられ、土師質土器3点 (2128~2130) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.131-2128~2130)

2128~2130は杯である。2128は約1/6が残存し、口径11.8cm、器高3.0cm、底径6.8cmを測る。器高が低く、体部は短く真っすぐ伸びる。体部の調整は器面が摩耗するため不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。2129は底部が約1/6残存し、底径6.2cmを測る。調整と底部の切り離しは器面が摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。2130は底部が約1/8残存し、底径6.8cmを測る。体部の調整は回転ナデ、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良

く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### SK-2065

B区東部で検出した長方形の土坑で、SK-2064を切る。長辺1.95m、短辺1.11m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-11°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片11点がみられ、土師質土器1点(2131)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.131-2131)

2131は小皿で、約1/5が残存し、口径7.4cm、器高1.9cm、底径4.5cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### SK-2066

B区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.42m、短辺1.10m、深さ34cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片3点、瓦器片3点、土師質土器片38点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2067

B区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.07m、短辺0.75m、深さ27cmを測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片15点、瓦質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2068 (Fig.132)

B区東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2069に切られる。長辺1.47m、短辺1.32m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-79°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片4点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2069 (Fig.132)

B区東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2068・2070を切る。長辺1.62m、短辺1.38m、深さ36cmを測り、長軸方向はN-82°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片20点、瓦質土器片1点、白磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2070

B区東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2069に切られる。長辺1.55m、短辺1.36m、深さ25cm

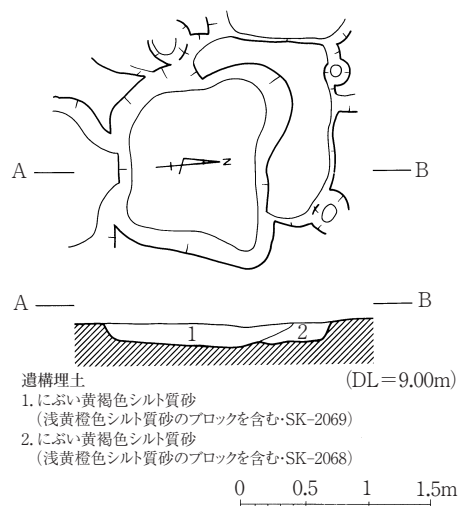
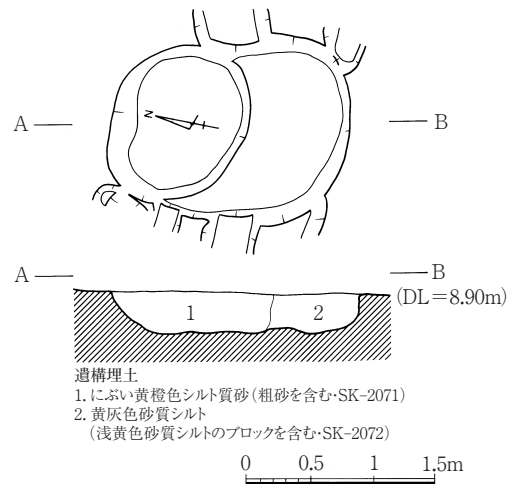


Fig.132 SK-2068・2069

を測り、長軸方向は方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片26点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-2071** (Fig.133)

B区南部で検出した楕円形の土坑で、SK-2072に切られ、SD-2018~2020を切る。検出した南半分は長径1.74m、短径1.42m、深さ30cmを測り、長軸方向はN-10°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、粗砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、常滑焼片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



**Fig.133** SK-2071・2072

**SK-2072** (Fig.133)

B区南部で検出した楕円形の土坑で、SK-2071を切る。長径1.37m、短径1.29m、深さ31cmを測り、長軸方向はN-87°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色砂質シルトで、浅黄色砂質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片23点、瓦質土器片2点がみられ、土師質土器1点(2132)、瓦質土器1点(2133)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.139-2132)

2132は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径18.8cmを測る。口縁部は内湾して端部は肥厚し、外面には断面三角形の鏝がめぐる。調整は体部内面がヨコ方向のナデ、口縁部がヨコナデを施す。体部外面には斜め方向のタタキ目がみられ、鏝の下には煤が付着する。胎土は粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内外面とも橙色を呈する。

瓦質土器 (Fig.139-2133)

2133は羽釜で、口縁部の約1/5が残存し、口径20.5cmを測る。口縁部は内湾し、端部は水平な面を有する。口縁部の外面には凹線状の段を有し、その下には幅1.8cmの鏝がめぐる。調整は内面がヨコ方向の板ナデ、口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコ方向のヘラ削りを施し、鏝の下には煤が付着する。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は、内面が灰色、外面が黒褐色を呈する。

**SK-2073**

B区中央部で検出した溝状の土坑である。一部攪乱を受け、SK-2078を切る。全長5.22m、幅0.55m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片27点がみられ、土師質土器1点(2134)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.139-2134)

2134は杯で、底部の約1/8が残存し、底径7.7cmを測る。体部は外上方に直線的に伸びる。調整は著しく摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

#### SK-2074

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.47m、短辺1.44m、深さ33cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄色砂質シルトで、浅黄色砂質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片28点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2075 (Fig.134)

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2095を切る。長辺1.74m、短辺0.68m、深さ31cmを測り、長軸方向はN-12°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が炭化物を含む灰黄褐色シルト質砂、下層がにぶい橙色シルト質砂で、いずれも焼土を伴っていた。また、下層には約10~20cm大の河原石がみられ、被熱の痕跡が残るものもあった。出土遺物には土師質土器片14点、瓦質土器片1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

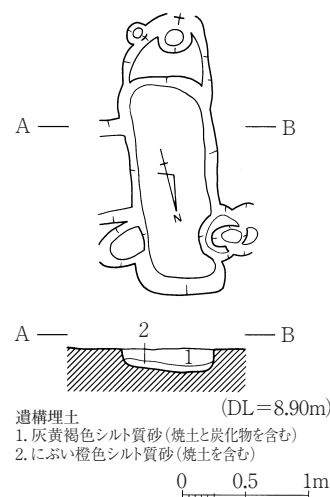


Fig.134 SK-2075

#### SK-2076

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.69m、短辺1.02m、深さ36cmを測り、長軸方向はN-78°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が焼土と炭化物を含む灰黄褐色砂質シルト、下層が灰黄褐色砂質シルトのブロックと炭化物を含むにぶい浅黄色砂質シルトであった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2077

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.44m、短辺1.08m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-65°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片20点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2078

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2073に切られる。長辺1.22m、短辺0.64m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-72°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片8点がみられ、東播系須恵器(2135)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 東播系須恵器 (Fig.139-2135)

2135は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は真っすぐ伸び、口縁部はくの字状に屈曲して、上下に拡張する。調整は回転ナデで、口縁部には重ね焼痕が残る。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも紫灰色を呈する。



**SK-2079** (Fig.135)

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.30m, 短辺1.10m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層が灰黄褐色砂質シルト, 下層が浅黄色砂質シルトで, いずれも焼土と炭化物を多く含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片28点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

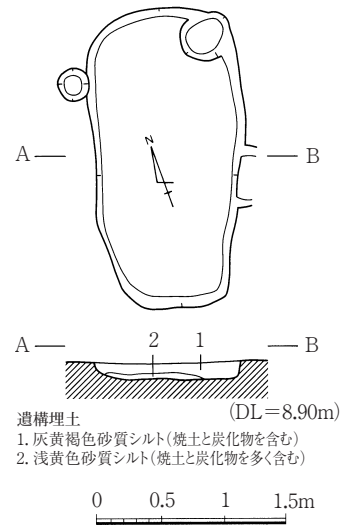


Fig.135 SK-2079

**SK-2080**

B区中央部で検出した長方形の土坑である。長辺1.21m, 短辺0.91m, 深さ16cmを測り, 長軸方向はN-11°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師器片1点, 瓦器片1点, 土師質土器片15点, 白磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2081**

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.22m, 短辺1.00m, 深さ13cmを測り, 長軸方向はN-79°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点, 土師質土器片12点がみられ, 東播系須恵器 (2136) が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.139-2136)

2136は片口鉢で, 口縁部の一部が残存する。体部は真っすぐ伸び, 口縁部はくの字状に屈曲して上下に拡張する。調整は回転ナデで, 口縁部外面には重ね焼痕が残る。胎土はやや粗く, 焼成は不良で, 色調は内外面とも灰白色である。

**SK-2082**

B区西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.00m, 短辺1.08m, 深さ28cmを測り, 長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片17点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2083**

B区西中央部で検出した隅丸方形の土坑で, 攪乱を受け, 他の土坑に切られる。長辺1.34m, 短辺1.08m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-10°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点, 白磁片1点, 土錘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2084** (Fig.136)

B区西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.86m, 短辺0.94m, 深さ34cmを測り, 長軸方向はN-88°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は3層に分かれ, 上から粗砂を含むい黄橙色シルト質砂, 細砂を含む灰白色砂質シルト, 細砂を含むい黄橙色シルト質砂であった。出土遺

物には土師器片1点、瓦器片1点、土師質土器片4点、瓦質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2085

B区中央部で検出した楕円形の土坑で、攪乱を受け、SK-2087に切られる。検出した東半分は長径2.72m、短径1.53m、深さ28cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師器片1点、土師質土器片9点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2086

B区中央部で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、攪乱を受け、SK-2085・2087・2088に切られる。検出した東半分は長径1.42m、短径0.52m、深さ26cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片33点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2087 (Fig.137)

B区中央部で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、SK-2086を切る。大半が攪乱を受けており、長径1.81m、短径1.66m、深さ0.69mを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が粗砂と炭化物を含むにぶい黄褐色砂質シルト、下層が炭化物を含む暗灰黄色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2088

B区中央部で検出した不整隅丸方形を呈するとみられる土坑で、攪乱を受ける。検出した北半分は長辺1.76m、短辺1.27m、深さ7cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、細砂と焼土、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片15点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-2089

B区西部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.20m、短辺0.77m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片21点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

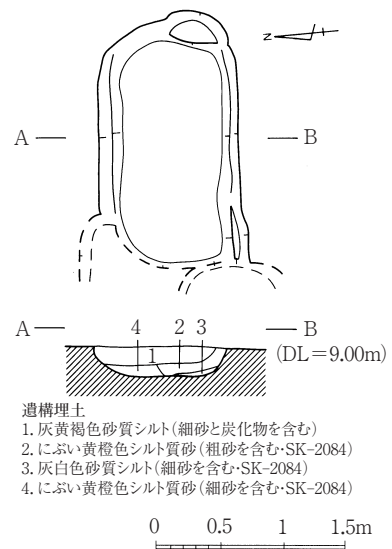


Fig.136 SK-2084

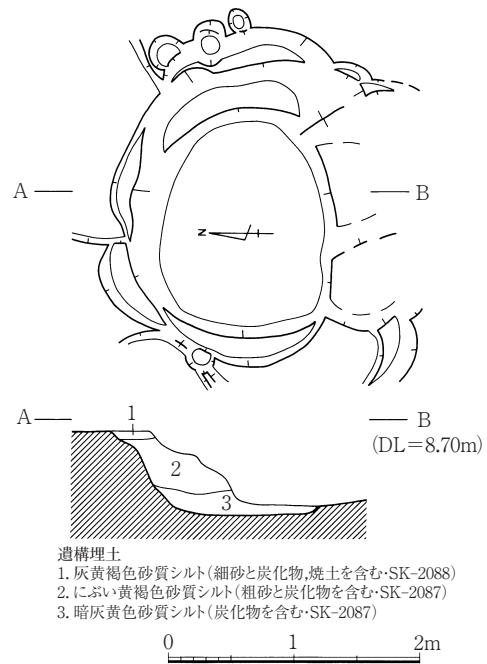


Fig.137 SK-2087

**SK-2090**

B区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.38m、短辺1.29m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片24点、鉄釘1点、鉄滓がみられ、土師質土器1点(2137)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.139-2137)

2137は杯で、底部の約1/2が残存し、底径6.6cmを測る。底部は小さく、体部は内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

**SK-2091**

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.20m、短辺0.77m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-71°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器1点、土師質土器片47点、瓦質土器片1点、青磁1点がみられ、東播系須恵器(2138)、土師質土器1点(2139)、青磁(2140)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.139-2138)

2138は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。口縁部は肥厚して上方に拡張し、器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

土師質土器 (Fig.139-2139)

2139は杯で、底部の約1/8が残存し、底径8.0cmを測る。体部は底部より屈曲して立ち上がり、直線的に伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

青磁 (Fig.139-2140)

2140は龍泉窯系の碗で、底部の約1/4が残存し、底径4.8cmを測る。底部の器壁は厚く、断面台形を呈する低い削り出し高台を有する。内面から外面の高台付近までオリーブ色の釉を約0.5mmの厚さに施し、見込には片彫の草花文がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

**SK-2092 (Fig.138)**

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.50m、短辺0.93m、深さ41cmを測り、長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片41点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

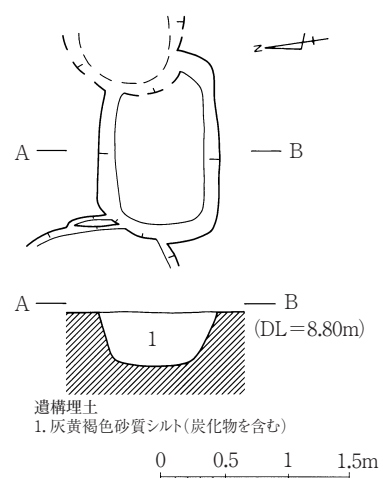


Fig.138 SK-2092

### SK-2093

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.50m, 短辺0.81m, 深さ14cmを測り, 長軸方向はN-5°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で, 粗砂を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片26点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

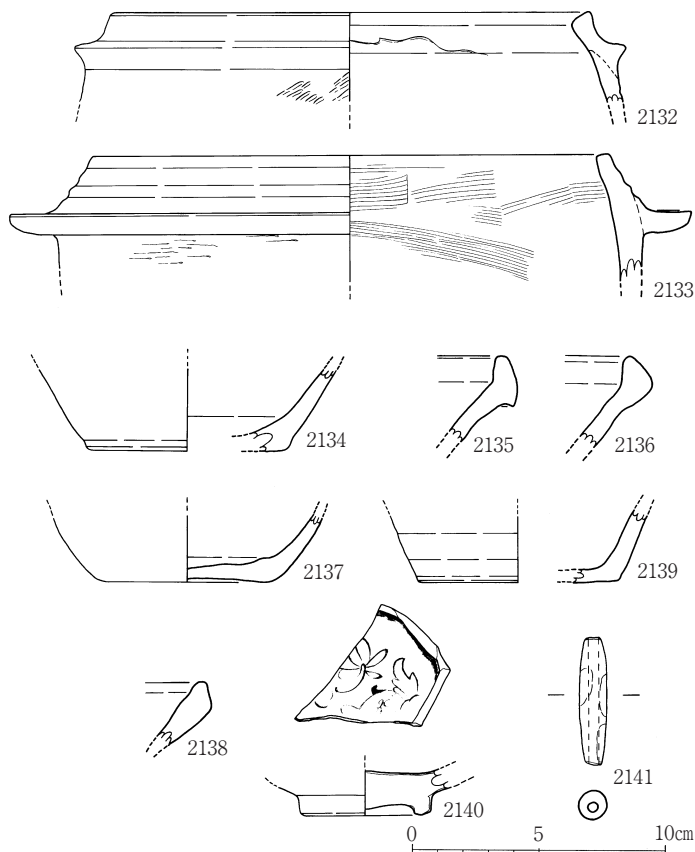


Fig.139 SK-2072~2097出土遺物実測図

### SK-2094

B区中央部で検出した溝状の土坑である。全長3.53m, 幅0.75m, 深さ11cmを測り, 長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 黄橙色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 土師質土器片8点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

### SK-2095

B区中央部で検出した隅丸方形の土坑で, 南端はSK-2074に切られる。長さ4.82m, 幅0.56m, 深さ11cmを測り, 長軸方向は方眼北を向く。断面は舟底形を呈し, 埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で, 浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点, 土師質土器片2点, 白磁片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

### SK-2096

B区北部で検出した隅丸方形の土坑で, 一部攪乱を受け, SK-2097を切る。長辺1.12m, 短辺48cm, 深さ29cmを測り, 長軸方向はN-75°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には瓦器片3点, 東播系須恵器片1点, 土師質土器片53点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

### SK-2097

B区北部で検出した隅丸方形の土坑で, 攪乱を受け, SK-2096に切られる。長辺1.48m, 短辺0.64m, 深さ0.64mを測り, 長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 炭化物を少し含んでいた。出土遺物には瓦器片2点, 東播系須恵器片2点, 土師質土器片75点, 瓦質土器片2点, 土製品1点がみられ, 土製品(2141)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.139-2141)

2141は紡錘形の土錘である。完形で、全長5.0cm、全幅1.1cm、孔径0.4cm、重量4.7gを測り、全面にナデ調整を施す。

iv 溝跡

SD-2001

A区南東部で検出した南北溝跡 (N-9°-E) で、区画溝とみられる。SD-2002・2023と並走し、両端は調査区外へ続く。幅0.43~0.84m、深さ13~15cmを測り、基底面は南 (7.686m) から北 (7.510m) に傾斜し、9.30mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、瓦質土器片1点がみられ、土師質土器1点 (2142) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.141-2142)

2142は小皿で、約1/4が残存し、口径7.8cm、器高1.8cm、底径6.0cmを測る。口縁部は短く、直線的に伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

SD-2002

A区南東部で検出した南北溝跡 (N-12°-E) で、区画溝とみられる。SD-2001・2023と並走し、両端は調査区外へ続く。幅2.62~3.55m、深さ15~39cmを測り、基底面は南 (7.940m) から北 (7.650m) に向かって傾斜し、9.95mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦質土器片1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-2003 (Fig.140)

A区南部で検出した南北溝跡 (N-7°-E) で、区画溝とみられる。SD-2004の底で確認した溝跡で、SD-2004とほぼ並走し、南端は調査区外へ続く。幅0.30~0.80m、深さ0.29~0.53mを測り、基底面は北端が7.846m、南端が7.808mとほぼ平坦で、17.50mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片24点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-2004 (Fig.140)

A区南部で検出した南北溝跡 (N-9°-E) で、区画溝とみられる。SD-2003とほぼ並走し、南端は調査区外へ続く。幅1.24~2.95m、深さ0.07~0.50mを測り、基底面は北 (8.054m) から南 (7.808m) に向かって緩やかに傾斜し、23.80mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は一部が2層に分かれ、上層がマンガンと炭化物を含むぶい黄褐色粘土質シルト、下層が炭化物を含む灰黄褐色砂質シルトであった。

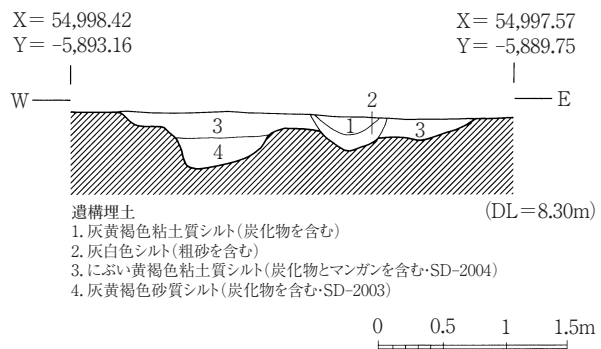


Fig.140 SD-2003・2004

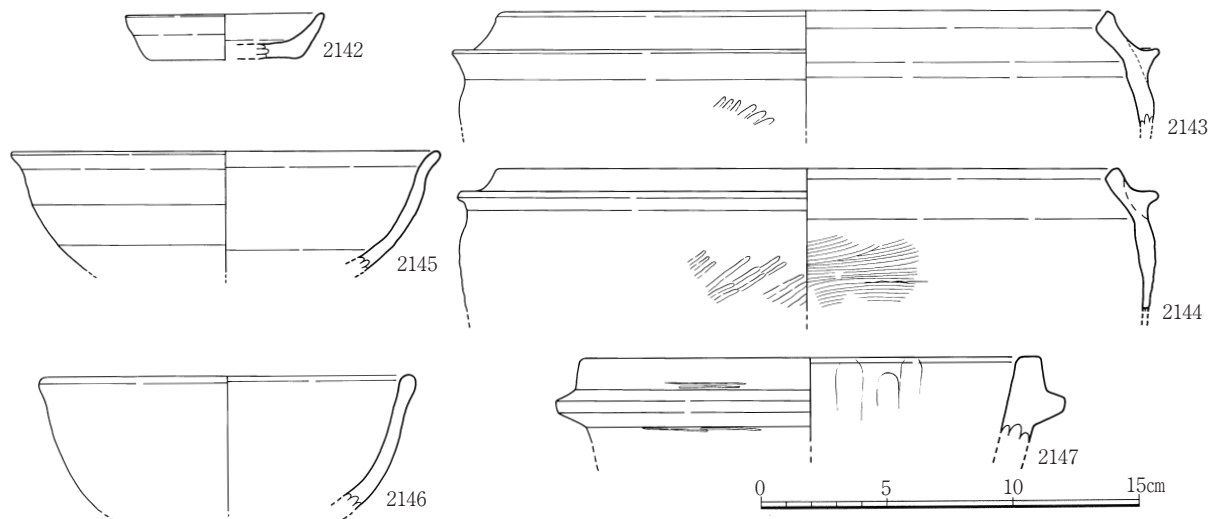


Fig.141 SD-2001・2004出土遺物実測図

出土遺物には須恵器片6点，瓦器片3点，土師質土器片340点，備前焼片5点，瓦質土器片11点，白磁片3点，青磁片11点，石製品1点，鉄釘2点，鉄滓がみられ，土師質土器2点（2143・2144），白磁1点（2145），青磁1点（2146），石製品（2147）が図示できた。

#### 出土遺物

##### 土師質土器 (Fig.141-2143・2144)

2143・2144はいずれも羽釜で，口縁部の一部が残存する。口縁部は内湾して，端部は内傾する面を有し，外面には断面三角形の鏝がめぐる。2143は口径23.8cmを測り，調整は体部内面がヨコ方向のナデ，口縁部がヨコナデ，体部外面が斜め方向のタタキを施す。胎土はやや粗く，焼成は良好で，色調は，内面が橙色，外面がにぶい赤褐色を呈する。2144は口径24.2cmを測り，調整は体部内面がヨコ方向のハケ，口縁部がヨコナデ，体部外面が斜め方向のタタキを施す。胎土はやや粗く，焼成はやや良好で，色調は，内面が橙色，外面がにぶい橙色またはにぶい褐色を呈する。

##### 白磁 (Fig.141-2145)

2145は碗で，口縁部の約1/8が残存し，口径16.7cmを測る。体部は大きく内湾し，口縁部は屈曲して外上方へ真っすぐ伸びる。器面には灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや粗く，焼成は良好である。

##### 青磁 (Fig.141-2146)

2146は龍泉窯系の碗で，口縁部の約1/5が残存し，口径14.8cmを測る。体部は内湾し，口縁部は肥厚して端部を丸く収める。器面にはオリーブ色の釉を約1mmの厚さに施す。胎土は密で，焼成は良好である。

##### 石製品 (Fig.141-2147)

2147は滑石製の石鍋で，口縁部の約1/8が残存し，口径18.1cmを測る。口縁部は直線的に伸び，端部は水平な面を有する。外面には断面台形を呈する幅約1cmを測る削り出しの鏝がめぐる。内面には幅の広い縦方向の加工痕，外面にはヨコ方向の沈線状の加工痕がみられ，鏝の下には煤が付着する。

#### SD-2005

A区東部で検出した東西溝跡（N-83°-W）で，東端は調査区外へ続き，西はSD-2004にほぼ直

行して取り付く。幅1.48～2.29m、深さ18～32cmを測り、基底面は西(8.051m)から東(7.888m)に向かって傾斜し、4.82mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片145点、瓦質土器片3点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-2006

A区東部で検出した南北溝跡(N-12°-E)で、両端を土坑に切られる。SD-2004にほぼ並走する。幅0.39～0.86m、深さ20～37cmを測り、基底面は8.100m前後と平坦で、3.55mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片12点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-2007

A区東部で検出した南北溝跡(N-12°-E)で、両端を土坑に切られる。SD-2006にほぼ並走する。幅0.58～1.12m、深さ14～21cmを測り、基底面は8.174m前後と平坦で、3.65mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片55点、瓦質土器片1点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-2008

A区東部で検出した南北溝跡(N-11°-E)で、北端は調査区外へ続く。幅0.48～1.35m、深さ4～33cmを測り、基底面は北(8.322m)から南(8.066m)に向かって傾斜し、7.80mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片4点、土師質土器片5点、瓦質土器片2点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-2009

A区中央部で検出した東西溝跡で、SD-2010に切られる。溝跡は北西(N-67°-W)を向いた後、西(N-84°-W)に方向を変える。幅約0.58m、深さ4～14cmを測り、基底面は8.300m前後と平坦で、8.80mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片20点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-2010

A区中央部で検出した東西溝跡(N-85°-W)で、SD-2009とほぼ並走する。幅0.48～0.70m、深さ12～17cmを測り、基底面は8.250m前後と平坦で、4.80mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-2011 (Fig.142)

A区北部で検出した南北溝跡(N-5°-E)で、区画溝とみられる。SD-2024～2027と並走する。幅3.30～3.55m、深さ0.88～1.09mを測り、基底面は北(7.328m)から南(7.182m)に向かって緩やかに傾斜し、南側20.09mを検出したが、調査区北端まで続くものとみられる。断面は逆台形を呈し、埋土は4層に分かれ、埋土1が灰色粘土質シルトのブロックと細砂及び炭化物を含むにぶい黄褐色粘土質シルト、埋土2が灰色シルトのブロックと細砂を含む灰黄褐色シルト質砂、埋土3がにぶい黄褐色シルト質砂、埋土4が灰白色シルトのブロックと微砂を含むにぶい黄橙色砂質シルトであった。

出土遺物には瓦器片1点，土師質土器片26点，瓦質土器片1点，白磁片1点，青磁片1点，鉄釘1点，鉄滓がみられ，土師質土器1点 (2148) が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.144-2148)

2148は鍋で，口縁部の一部が残存し，口径27.0cmを測る。体部は直立し，口縁端部は肥厚して丸く収める。調整は体部内面がヨコ方向の板ナデ，口縁部が強いヨコナデ，体部外面が格子目状のタタキとナデを施す。胎土はやや粗く，焼成は良好で，色調は，内面が橙色，外面が明褐色を呈する。

#### SD-2012

A区西部で検出した南北溝跡で，SD-2011に並走する。溝跡は北西 (N-9°-W) に向いた後，北東 (N-8°-E) に方向を変える。幅1.32~1.88m，深さ29~40cmを測り，基底面は北 (8.097m) から南 (7.843m) に向かって緩やかに傾斜し，9.09mを検出した。断面は舟底形を呈し，埋土は灰黄色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点，土師質土器片3点がみられ，土師質土器1点 (2149) が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.144-2149)

2149は杯で，約1/4が残存し，口径13.8cm，器高3.7cm，底径7.7cmを測る。器高が低く，体部は大きく歪み，短く内湾して伸びる。調整は器面が摩耗するため不明瞭であるが，体部には一部回転ナデ調整がみられ，底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で，焼成はやや悪く，色調は内外面とも橙色を呈する。

#### SD-2013

A区西部で検出した東西溝跡 (N-71°-W) で，東はSD-2012に取り付き，西は調査区外へ続く。幅0.79~1.20m，深さ25~29cmを測り，基底面は8.250m前後と平坦で，5.20mを検出した。断面は舟底形を呈し，埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で，浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片10点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

#### SD-2014

B区東部で検出した南北溝跡で，北は調査区外へ続く。溝跡は北西 (N-7°-W) に向いた後，北東 (N-15°-E) に方向を変える。幅1.61~2.16m，深さ15cmを測り，基底面は8.650m前後と平坦で，10.98mを検出した。断面は舟底形を呈し，埋土は灰黄色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点，土師質土器片42点がみられ，土師質土器1点 (2150) が図示できた。

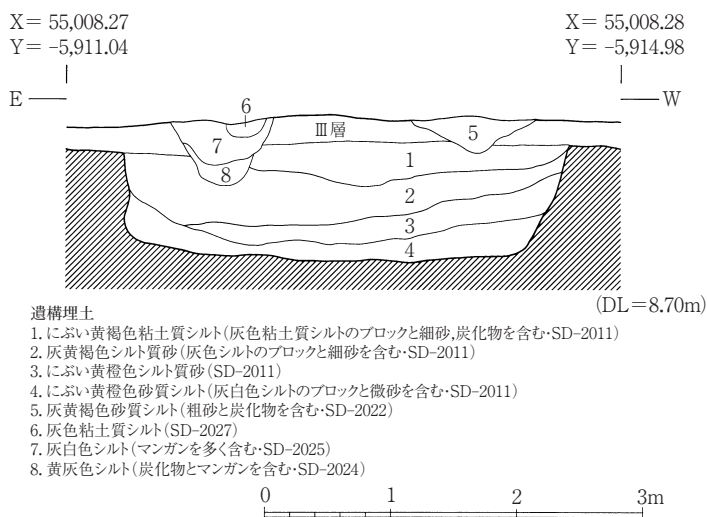


Fig.142 SD-2011・2022~2027



出土遺物

土師質土器 (Fig.144-2150)

2150は柱状高台の杯で、底部がほぼ完存し、底径3.7cmを測る。高台は柱実で高さ約1cmを測り、体部は外上方に立ち上がる。調整は器面が著しく摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

SD-2015

B区南部で検出した東西溝跡 (N-90°-E) で、SD-2018を切る。幅0.81~2.21m、深さ15~26cmを測り、基底面は東 (8.557m) から西 (8.524m) に向かって緩やかに傾斜し、5.32mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色粘土質シルトで、粗砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片12点、瓦質土器片1点、瀬戸焼片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-2016

B区南部で検出した東西溝跡 (N-85°-W) である。幅0.41~0.76m、深さ3~43cmを測り、基底面は東 (8.713m) から西 (8.392m) に向かって傾斜し、6.35mを検出した。断面は逆台形で、埋土は2層に分かれ、上層が粗砂と炭化物を少し含む灰黄褐色砂質シルト、下層は上層と同じ埋土に浅黄色砂質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-2017

B区南部で検出した南北溝跡で、SD-2016に切られる。溝跡は北東 (N-4°-E) を向いた後、北西 (N-2°-W) に方向を変える。幅0.34~0.54m、深さ2~12cmを測り、基底面は北 (8.704m) から南 (8.611m) に向かって傾斜し、6.42mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、粗砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-2018 (Fig.143)

B区南部で検出した東西溝跡で、区画溝とみられる。SD-2019・2020と並走し、西端は攪乱を受ける。溝跡は南西 (N-86°-E) を向いた後、北西 (N-81°-W) に方向を変える。幅0.50~0.85m、深さ16~27cmを測り、基底面は東 (8.580m) から西 (8.497m) に向かって緩やかに傾斜し、15.15mを検出した。断面はU字形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、浅黄色砂質シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片25点、青磁片1点、鉄滓がみられ、土師質土器2点 (2151・2152) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.144-2151・2152)

2151は杯で、底部がほぼ完存し、底径7.3cmを測る。器壁は薄く、体部は外上方に真っすぐ立ち上がる。調整は回転ナデ調整で、底部の切り離しは回転糸切りであるが、器面は著しく摩耗す

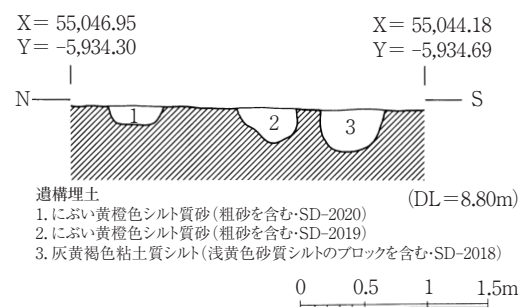


Fig.143 SD-2018~2020

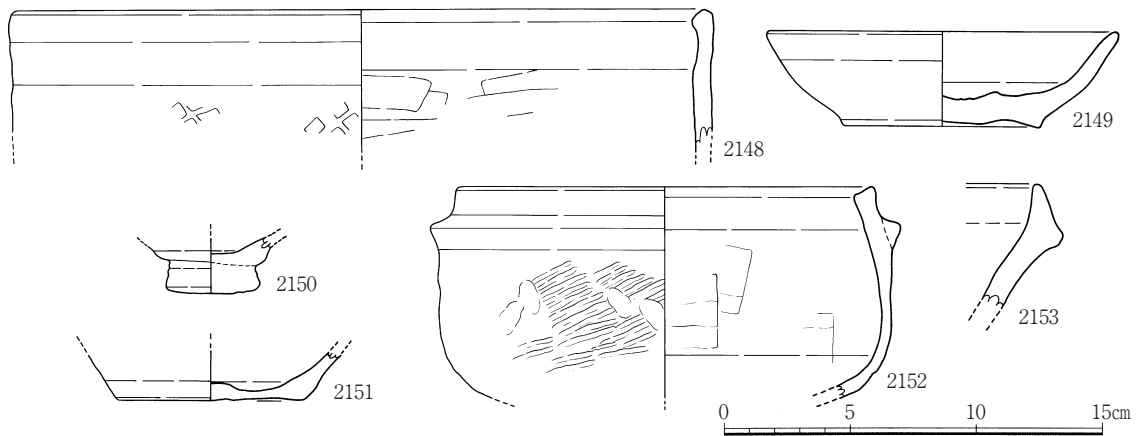


Fig.144 SD-2011~2019出土遺物実測図

る。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。2152は羽釜で、約1/6が残存し、口径16.4cmを測る。胴部が膨らみ、やや内傾して立ち上がり、口縁端部は肥厚して内傾する面を有する。口縁部外面には断面三角形を呈する鍔がめぐる。調整は内面が板ナデ、口縁部がヨコナデ、胴部外面が斜め方向のタタキとナデを施し、胴部外面には煤が付着する。胎土は粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は、内面が橙色または灰褐色、外面が褐色を呈する。

#### SD-2019 (Fig.143)

B区南部で検出した東西溝跡で、区画溝とみられる。SD-2018・2020と並走し、西端は攪乱を受ける。溝跡は南西(N-84°-E)を向いた後、北西(N-79°-W)に方向を変える。幅0.44~0.76m、深さ19~25cmを測り、基底面は東(8.572m)から西(8.483m)に向かって緩やかに傾斜し、10.19mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、粗砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、備前焼1点、瓦質土器片1点がみられ、備前焼(2153)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 備前焼 (Fig.144-2153)

2153は播鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は直線的に伸び、口縁部はくの字状に屈曲して上下に大きく拡張する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は粗く、砂粒を含み、焼成はやや良好で、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

#### SD-2020 (Fig.143)

B区南部で検出した東西溝跡で、区画溝とみられる。SD-2018・2019と並走し、西端は攪乱を受ける。溝跡は西(N-88°-E)を向いた後、北西(N-76°-W)に方向を変える。幅27~48cm、深さ9~13cmを測り、基底面は東(8.641m)から西(8.616m)に向かって緩やかに傾斜し、6.25mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、粗砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SD-2021**

B区東部で検出した南北溝跡（N-11°-E）である。幅0.56～1.33m、深さ11～24cmを測り、基底面は北（8.695m）から南（8.622m）に向かって緩やかに傾斜し、8.60mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルト質砂で、細砂を含んでいた。出土遺物は皆無であった。

**SD-2022** (Fig.142)

B区北部で検出した東西溝跡（N-77°-W）で、幅0.50～0.85m、深さ16～27cmを測り、基底面は西（8.694m）から東（8.564m）に向かって緩やかに傾斜し、9.26mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、粗砂と炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片11点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

v ピット

**P-2001**

A区東部で検出した楕円形のピットで、長径39cm、短径35cm、深さ25cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられ、土師質土器1点（2154）が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.145-2154)

2154は杯で、約1/3が残存し、口径12.0cm、器高2.9cm、底径5.2cmを測る。底部が小さく、体部は外上方に大きく伸びる。調整は回転ナデで、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

**P-2002**

A区東部で検出した楕円形のピットで、長径35cm、短径24cm、深さ0.51mを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点、青磁1点がみられ、青磁（2155）が図示できた。

出土遺物

青磁 (Fig.145-2155)

2155は龍泉窯系の碗で、口縁部の約1/3が残存し、口径16.6cmを測る。体部は内湾して口縁部に至る。器面にはオリーブ色の釉を約0.5mmの厚さに施し、外面には鎬連弁文がみられる。胎土は密で、焼成はやや良好である。

**P-2003**

A区東部で検出した円形のピットで、径18cm、深さ36cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、土製品1点がみられ、土製品（2156）が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.145-2156)

2156は円筒形の土錘である。約1/2が残存し、全長3.1cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量3.7gを測り、全面にナデ調整を施す。

**P-2004**

A区東部で検出した楕円形のピットで、長径0.51m、短径37cm、深さ0.57mを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、石製品1点がみられ、石製品（2157）が図示できた。

**出土遺物**

石製品 (Fig.145-2157)

2157は砥石で、一部が残存し、全長7.4cm、全幅6.1cm、全厚3.4cmを測る。残存部で4面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

**P-2005**

A区東部で検出した円形のピットで、径31cm、深さ0.61mを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土製品（2158）のみがみられた。

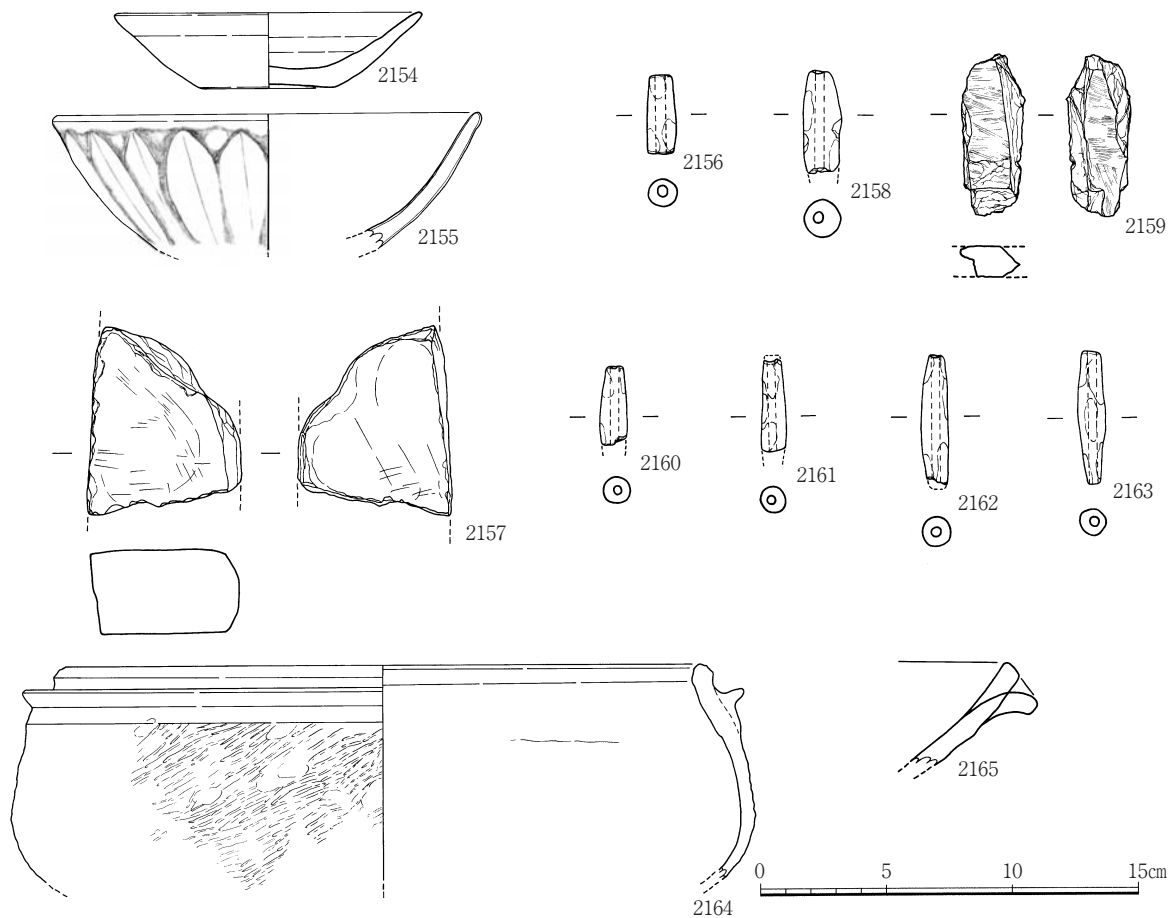
**出土遺物**

土製品 (Fig.145-2158)

2158は紡錘形の土錘である。約1/2が残存し、全長4.0cm、全幅1.5cm、孔径0.4cm、重量7.4gを測り、全面ナデ調整を施す。

**P-2006**

A区東部で検出した隅丸方形のピットである。SD-2004の底で確認し、SK-2011を切る。長辺



**Fig.145** P-2001~2010出土遺物実測図

1.00m, 短径0.85m, 深さ12cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点, 石製品1点がみられ, 石製品 (2159) が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.145-2159)

2159は砥石で, 一部が残存し, 全長6.4cm, 全幅2.5cm, 全厚1.3cmを測る。残存部で2面に使用痕が残る。石材は粘板岩である。

**P-2007**

A区中央部で検出した楕円形のピットで, 長径38cm, 短径31cm, 深さ46cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には図示した土製品 (2160) のみがみられた。

出土遺物

土製品 (Fig.145-2160)

2160は紡錘形の土錘である。約1/2が残存し, 全長3.1cm, 全幅1.1cm, 孔径0.4cm, 重量3.2gを測り, 全面にナデ調整を施す。

**P-2008**

A区中央部で検出した楕円形のピットで, 長径42cm, 短径35cm, 深さ0.64mを測る。埋土は暗褐色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点, 土製品3点がみられ, 土製品3点 (2161~2163) が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.145-2161~2163)

2161~2163は紡錘形の土錘で, 全面にナデ調整を施す。2161は一部が残存し, 全長3.6cm, 全幅1.0cm, 孔径0.3cm, 重量3.0gを測る。2162は一部が欠損し, 全長5.1cm, 全幅1.1cm, 孔径0.3cm, 重量5.6gを測る。2163は完形で, 全長5.2cm, 全幅1.1cm, 孔径0.4cm, 重量5.2gを測る。

**P-2009**

A区中央部で検出した楕円形のピットで, 長径28cm, 短径19cm, 深さ31cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点がみられ, 土師質土器1点 (2164) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.145-2164)

2164は羽釜で, 約1/6が残存し, 口径25.0cmを測る。胴部は膨らみ, やや内湾して立ち上がる。口縁部は直線的で, 端部は肥厚して丸く収める。口縁部外面には幅0.8cmの鐙がめぐり, 外上方に伸びる。調整は内面がナデ, 口縁部がヨコナデ, 外面が斜め方向のタタキと指頭圧を施す。胎土は砂粒を多く含み, 焼成は良く, 色調は, 内面が橙色, 外面がにぶい黄橙色を呈する。

**P-2010**

A区中央部で検出した楕円形のピットで, 長径0.55m, 短径41cm, 深さ48cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片1点, 東播系須恵器1点, 土師質土器片4点がみられ, 東播系須恵器 (2165) が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.145-2165)

2165は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。口縁部は若干内湾し、端部は外傾する面を有し、片口部は大きく外反する。器面には回転ナデ調整を施し、片口部はナデ調整を施す。胎土は粗く、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰色を呈する。

#### P-2011

A区中央部で検出した隅丸方形のピットで、長辺43cm、短辺38cm、深さ0.60mを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片20点、土製品3点がみられ、土製品2点 (2166・2167) が図示できた。

#### 出土遺物

土製品 (Fig.146-2166・2167)

2166・2167は紡錘形の土錘で、全面にナデ調整を施す。2166は一部が欠損し、全長4.8cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量3.5gを測る。2167は完形で、全長5.0cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量5.0gを測る。

#### P-2012

A区中央部で検出した不整楕円形のピットで、長径0.72m、短径0.55m、深さ35cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器1点、土師質土器片20点、鉄滓がみられ、須恵器 (2168) が図示できた。

#### 出土遺物

須恵器 (Fig.146-2168)

2168は甕で、底部の約1/4が残存し、底径12.4cmを測る。底部は平らで、ハの字状に開く高台を有する。調整は胴部が回転ナデ、底部がナデである。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は、内面が灰白色または明紫灰色、外面が明紫灰色を呈する。

#### P-2013

A区中央部で検出した円形のピットで、径28cm、深さ21cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点がみられ、瓦器1点 (2169) が図示できた。

#### 出土遺物

瓦器 (Fig.146-2169)

2169は小皿で、約1/6が残存し、口径8.8cm、器高2.0cm、底径3.3cmを測る。口縁部は底部から内湾して立ち上がる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデまたは指頭圧を施し、全面に炭素が吸着する。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

#### P-2014

A区中央部で検出した円形のピットで、径32cm、深さ29cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片7点、瓦質土器片5点がみられ、瓦質土器1点 (2170) が図示できた。

#### 出土遺物

瓦質土器 (Fig.146-2170)

2170は羽釜で、口縁部の約1/8が残存し、口径17.4cmを測る。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部は直線的に伸び、端部は内傾する面を有し、外面には断面半円形を呈する鍔がめぐる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデまたは指頭圧を施す。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

#### P-2015

A区中央部で検出した隅丸方形のピットで、長辺31cm、短辺27cm、深さ19cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器（2171）のみがみられた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.146-2171)

2171は杯で、底部の約1/6が残存し、底径9.4cmを測る。やや大型のもので、体部は内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は、内面が橙色、外面が橙色またはにぶい橙色を呈する。

#### P-2016

A区中央部で検出した円形のピットで、径25cm、深さ38cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した石製品（2172）のみがみられた。

#### 出土遺物

石製品 (Fig.146-2172)

2172は砥石で、一部が残存する。直方体を呈するものとみられ、全長8.1cm、全幅4.0cm、全厚1.7cmを測る。残存部で4面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

#### P-2017

A区中央部で検出した楕円形のピットで、長径41cm、短径33cm、深さ17cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片1点、古銭3点がみられ、古銭3点（2173~2175）が図示できた。

#### 出土遺物

古銭 (Fig.146-2173~2175)

2173は真書の皇宋通寶で、一部に錆化がみられる。銭径2.43cm、内径1.84cm、穿径0.64cm、銭厚0.14cm、重量3.1gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1038年である。2174は篆書の元符通寶で、全面に錆化がみられる。銭径2.53cm、内径1.89cm、穿径0.55cm、銭厚0.15cm、重量3.4gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1098年である。2175は行書の聖宋通寶で、表面に錆化がみられる。銭径2.37cm、内径1.87cm、穿径0.60cm、銭厚0.14cm、重量3.0gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1101年である。

#### P-2018

A区中央部で検出した不整楕円形のピットで、長径0.94m、短径0.54m、深さ13cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片7点、古銭1点がみられ、古銭（2176）が図示できた。

#### 出土遺物

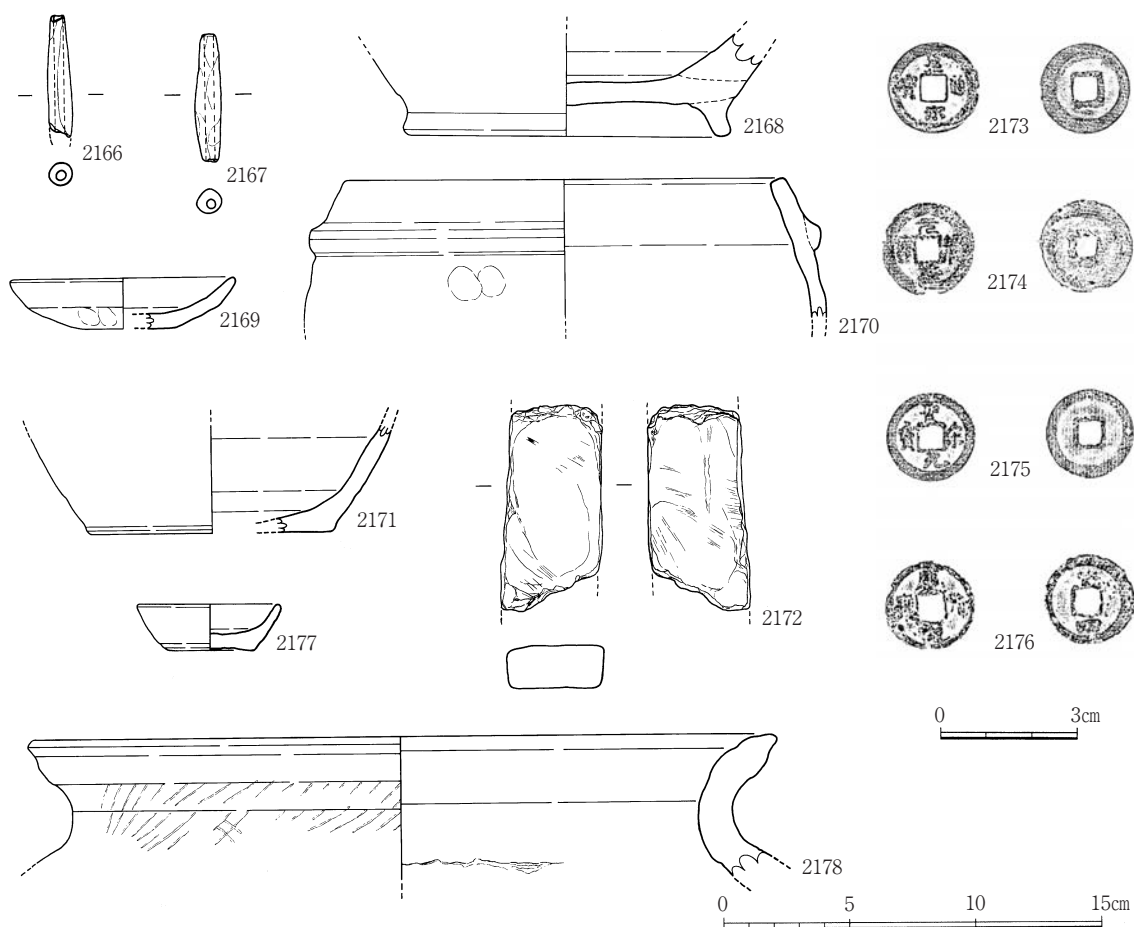


Fig.146 P-2011~2020出土遺物実測図

#### 古銭 (Fig.146-2176)

2176は慶元通寶で、裏文字には四がみられる。全面に銹化がみられる。銭径2.37cm, 内径2.00cm, 穿径0.70cm, 銭厚0.16cm, 重量2.1gを測る。南宋銭で、初鑄造年は1195年である。

#### P-2019

A区中央部で検出した楕円形のピットで、長径30cm, 短径26cm, 深さ24cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器 (2177) のみがみられた。

#### 出土遺物

##### 土師質土器 (Fig.146-2177)

2177は小皿で、約1/4が残存する。口径5.5cm, 器高1.8cm, 底径3.3cmを測る。口径が小さく、口縁部はやや内湾する。調整は回転ナデで、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### P-2020

A区中央部で検出した楕円形のピットで、長径0.61m, 短径41cm, 深さ25cmを測る。埋土は暗黄褐色シルトであった。出土遺物には東播系須恵器1点, 土師質土器片4点がみられ、東播系須恵器 (2178) が図示できた。



出土遺物

東播系須恵器 (Fig.146-2178)

2178は甕で、口縁部の約1/5が残存し、口径29.0cmを測る。頸部は緩やかに外反して口縁部に至り、口縁端部を細く仕上げ、内面には凹線状の段がめぐる。内面の調整は摩耗するため不明で、口縁部はヨコナデ調整、外面の頸部には斜め方向のタタキを施す。胎土は粗く、砂粒を含み、焼成は不良で、色調は、内面がにぶい黄褐色または浅黄色、外面がにぶい黄褐色または灰色を呈する。

**P-2021**

A区中央部で検出した楕円形のピットで、長径30cm、短径24cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片1点、土製品1点がみられ、土製品(2179)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.147-2179)

2179は紡錘形の土錘で、一部が欠損する。全長5.4cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量4.9gを測り、残面にナデ調整を施す。

**P-2022**

A区中央部で検出した円形のピットで、径25cm、深さ37cmを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した古銭(2180)のみがみられた。

出土遺物

古銭 (Fig.147-2180)

2180は真書の皇宋通寶である。銭径2.50cm、内径1.97cm、穿径1.10cm、銭厚0.15cm、重量2.4gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1038年である。

**P-2023**

A区中央部で検出した隅丸方形のピットで、長辺37cm、短辺31cm、深さ0.50mを測る。埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片5点がみられ、東播系須恵器(2181)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.147-2181)

2181は片口鉢で、口縁部の一部が残存し、口径24.0cmを測る。体部は直線的に伸び、口縁部はくの字状に屈曲して、上下に拡張する。調整は回転ナデで、口縁部には重ね焼痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

**P-2024**

A区中央部で検出した隅丸方形のピットで、SK-2037を切る。長辺0.93m、短辺0.89m、深さ33cmを測り、埋土は暗褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片2点、土製品1点がみられ、土製品(2182)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.147-2182)

2182は円筒形の土錘で、一部が欠損する。全長4.1cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量3.9gを測り、全面にナデ調整を施す。

#### P-2025

A区中央部で検出した楕円形のピットで、SD-2004を切る。長径44cm、短径35cm、深さ0.52mを測り、埋土は黒褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片11点がみられ、土師質土器1点(2183)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.147-2183)

2183は柱状高台の杯で、底部が完存し、底径5.0cmを測る。高台は柱実で高さ約2.5cmを測り、若干ハの字状に開く。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### P-2026

A区中央部で検出した隅丸方形のピットで、長辺45cm、短辺35cm、深さ35cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器1点、土師質土器片4点、鉄滓がみられ、瓦器(2184)が図示できた。

#### 出土遺物

瓦器 (Fig.147-2184)

2184は小皿で、約1/2が残存し、口径7.8cm、器高1.6cm、底径3.8cmを測る。口縁部は底部から緩やかに内湾して立ち上がり、全面に炭素が吸着する。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面はナデで指頭圧痕が残る。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

#### P-2027

A区中央部で検出した楕円形のピットで、長径26cm、短径23cm、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦質土器片1点、古銭1点がみられ、古銭(2185)が図示できた。

#### 出土遺物

古銭 (Fig.147-2185)

2185は隸書の開元通寶で、銭径2.43cm、内径1.97cm、穿径0.62cm、銭厚0.15cm、重量2.6gを測る。南唐銭で、初鑄造年は960年である。

#### P-2028

A区中央部で検出した隅丸方形のピットで、SK-2043に切られる。長辺1.30m、短辺1.20m、深さ16cmを測り、埋土はにぶい褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片11点、古銭1点、鉄滓がみられ、古銭(2186)が図示できた。

#### 出土遺物

古銭 (Fig.147-2186)

2186は篆書の熙寧元寶で、全面に銹化がみられる。銭径2.33cm、内径1.83cm、穿径0.58cm、銭厚0.15cm、重量2.6gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1068年である。

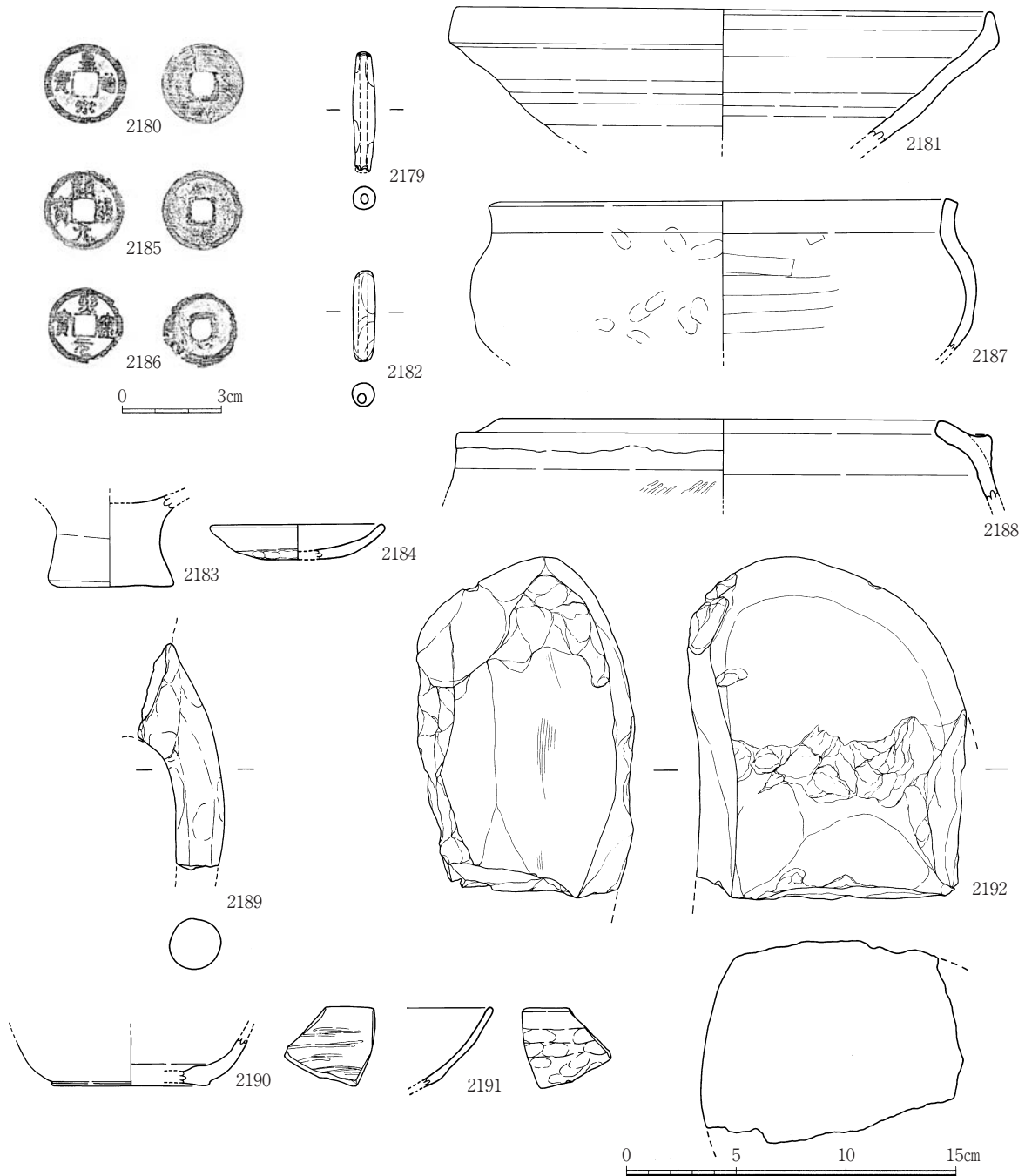


Fig.147 P-2021~2034出土遺物実測図

**P-2029**

A区中央部で検出した楕円形のピットで、SD-2013を切る。長径40cm、短径32cm、深さ15cmを測り、埋土は暗褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した瓦質土器（2187）のみがみられた。

**出土遺物**

瓦質土器（Fig.147-2187）

2187は鍋で、口縁部と胴部の一部が残存し、口径20.4cmを測る。胴部は大きく膨らみ、口縁部は

直立して、端部は水平面を有する。調整は内面が板ナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデまたは指頭圧を施し、全面に炭素が吸着する。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

#### P-2030

B区東部で検出した円形のピットで、径42cm、深さ28cmを測る。埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器（2188）のみがみられた。

#### 出土遺物

土師質土器（Fig.147-2188）

2188は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径19.8cmを測る。口縁部は大きく内湾し、端部は内傾する面を有する。外面には断面三角形を呈する鍔がめぐる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面が斜め方向のタタキを施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### P-2031

B区東部で検出した円形のピットで、径42cm、深さ30cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師器片1点、土師質土器片2点がみられ、土師質土器1点（2189）が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器（Fig.147-2189）

2189は足釜の脚部で、先端が欠損する。残存長10.3cm、全幅2.3cmを測り、断面は円形を呈する。全面にナデ調整を施し、一部煤が付着する。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成は比較的良く、色調は灰黄色またはにぶい橙色を呈する。

#### P-2032

B区東部で検出した楕円形のピットで、長径38cm、短径22cm、深さ15cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられ、土師質土器1点（2190）が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器（Fig.147-2190）

2190は杯で、約1/3が残存し、底径7.0cmを測る。体部は底部から内湾して立ち上がる。調整は器面が摩耗するため不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

#### P-2033

B区東部で検出した楕円形のピットで、SK-2062に切られる。長径37cm、短径31cm、深さ46cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には図示した瓦器（2191）のみがみられた。

#### 出土遺物

瓦器（Fig.147-2191）

2191は椀で、口縁部の一部が残存する。器壁は薄く、体部は内湾して口縁端部は丸く収める。調整は内面がナデの後に、ヨコ方向のヘラ磨き、口縁部はヨコナデを2段施し、体部外面には指頭圧

痕が残る。胎土は密で、焼成は良く、器面には炭素が吸着しておらず、色調は内外面とも浅黄色を呈する。

**P-2034**

B区東部で検出した円形のピットで、径36cm、深さ39cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片10点、石製品1点、鉄釘1点がみられ、石製品(2192)が図示できた。

出土遺物

石製品 (Fig.147-2192)

2192は砥石で、一部が残存し、全長15.4cm、全幅12.3cm、全厚9.2cmを測る。残存部で1面に使用痕がみられ、剥離面には被熱の痕跡がみられる。石材は砂岩である。

**P-2035**

B区東部で検出した円形のピットで、径40cm、深さ0.59mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片25点がみられ、東播系須恵器(2193)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.148-2193)

2193は片口鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は直線的に伸び、口縁部はくの字状に屈曲して上下に大きく拡張し、口縁部には重ね焼痕がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良く、色調は内外面とも褐灰色を呈する。

**P-2036**

B区東部で検出した円形のピットで、径37cm、深さ33cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄褐色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片50点がみられ、土師質土器1点(2194)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.148-2194)

2194は小皿で、約1/3が残存し、口径6.8cm、器高1.9cm、底径5.2cmを測る。口縁部は短く直線的に伸びる。調整は摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

**P-2037**

B区中央部で検出した楕円形のピットで、長径0.52m、短径42cm、深さ32cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄褐色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片6点がみられ、土師質土器1点(2195)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.148-2195)

2195は杯で、底部が完存し、底径6.7cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。調整は回転ナデで、内底面にナデ調整を加える。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

**P-2038**

B区中央部で検出した隅丸方形のピットで、長辺0.91m、短辺0.81m、深さ48cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には瓦器1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片85点がみられ、瓦器（2196）、土師質土器1点（2197）が図示できた。

**出土遺物**

瓦器 (Fig.148-2196)

2196は椀で、約1/6が残存し、口径12.4cmを測る。器高が低く、体部はやや内湾する。調整は内面がナデの後に、ヘラ磨き、口縁部がヨコナデ、外面はナデまたは指頭圧を施す。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰色または灰白色を呈する。

土師質土器 (Fig.148-2197)

2197は杯で、底部が完存し、底径5.1cmを測る。底部は小さく、器壁は厚い。調整は著しく摩耗するため不明である。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は内外面とも橙色を呈する。

**P-2039**

B区中央部で検出した円形のピットで、径21cm、深さ18cmを測る。埋土はにぶい黄橙色砂質シルトで、粗砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点がみられ、土師質土器1点（2198）が図示できた。

**出土遺物**

土師質土器 (Fig.148-2198)

2198は杯で、底部の約1/3が残存し、底径7.9cmを測る。体部は直線的に外上方に立ち上がる。調整は著しく摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

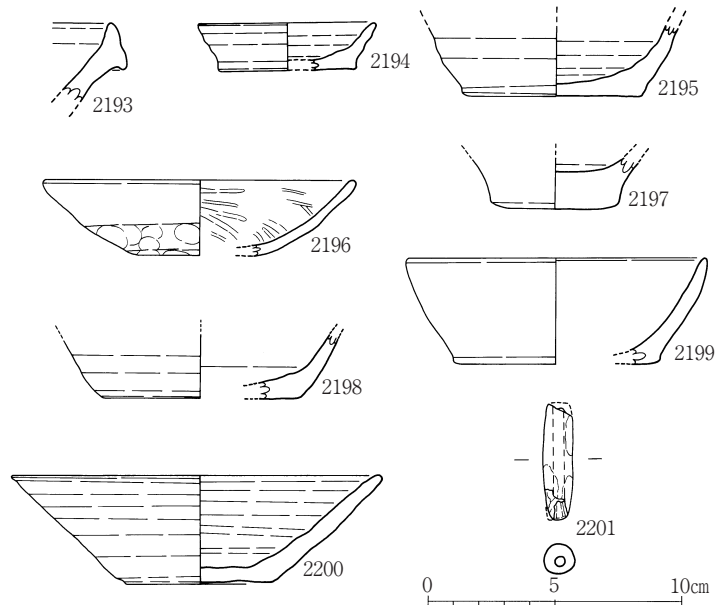
**P-2040**

B区中央部で検出した不整楕円形のピットで、長径0.90m、短径0.61m、深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられ、土師質土器1点（2199）が図示できた。

**出土遺物**

土師質土器 (Fig.148-2199)

2199は杯で、約1/8が残存し、口径11.8cm、器高4.1cm、底径8.0cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。調整は著しく摩耗するため不明であ



**Fig.148** P-2035~2042出土遺物実測図

る。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

**P-2041**

B区西部で検出した不整形のピットで、径30cm、深さ25cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には図示した土師質土器（2200）のみがみられた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.148-2200)

2200は杯で、ほぼ完存し、口径14.5cm、器高4.3cm、底径5.7cmを測る。成形はロクロ水挽きで、底部は小さく、体部は外上方に大きく開く。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

**P-2042**

B区西部で検出した楕円形のピットで、長径0.82m、短径0.52m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで、炭化物を少し含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、土製品1点がみられ、土製品（2201）が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.148-2201)

2201は紡錘形の土錘で、一部が欠損する。全長4.6cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量5.9gを測り、全面にナデ調整を施す。

② 近世以降

i 掘立柱建物跡

SB-2028~2030はA区、SB-2031はB区で確認した掘立柱建物跡である。

**SB-2028** (Fig.149)

A区中央部で確認した梁間2間（5.20~5.30m）、桁行2間（5.30~5.50m）の東西棟建物で、西から1間目の柱通りに間仕切柱が立つ。棟方向はN-4°-Eである。SB-2005・2006と重なる。柱間寸法は、梁間（南北）が2.60~2.70m、桁行（東西）が2.15~3.15mであった。柱穴は径25~40cmの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトまたは灰黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

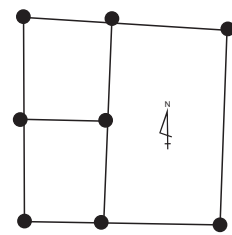


Fig.149 SB-2028

**SB-2029** (Fig.150)

A区中央部の北端で確認した梁間1間（4.00m）、桁行3間（5.80m）の東西棟建物で、東は調査区外に続くものとみられる。棟方向はN-86°-Wで、SB-2030と重なる。柱間寸法は、梁間（南北）が4.00m、桁行（東西）が1.80mと2.00mであった。柱穴は径0.70~1.05mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色

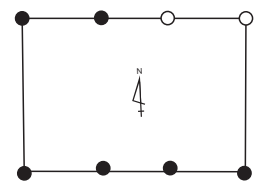


Fig.150 SB-2029

シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、青磁片1点、近世陶器片2点、近世磁器片1点、鉄釘2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SB-2030** (Fig.151)

A区中央部の北端で確認した梁間1間 (4.00m), 桁行4間 (7.70~8.00m) の東西棟建物で、棟方向はN-87°-Wである。SB-2029と重なる。柱間寸法は、梁間 (南北) が4.00m, 桁行 (東西) が1.70~2.10mであった。柱穴は径0.70~1.20mの円形または楕円形で、埋土は暗褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片21点、青磁片2点、近世陶器片2点、近世磁器片1点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

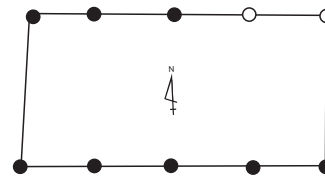


Fig.151 SB-2030

**SB-2031** (Fig.152)

B区西部で確認した梁間1間 (3.40m), 桁行2間 (4.85m) の南北棟建物で、棟方向はN-9°-Eである。柱間寸法は、梁間 (東西) が3.40m, 桁行 (南北) が2.05mと2.80mであった。柱穴は径0.30~0.50mの円形で、埋土は灰黄褐色砂質シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

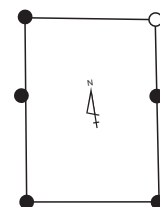


Fig.152 SB-2031

Tab.8 第II調査地区近世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備 考
	梁間 × 桁行	梁間 (m) × 桁行 (m)	柱間寸法				
			梁間 (m)	桁行 (m)			
SB-2028	2×2	5.20~5.30 × 5.30~5.50	2.60~2.70	2.15~3.15	28.36	N-4°-E	間仕切柱
SB-2029	1×3	4.00 × 5.80	4.00	1.80・2.00	23.20	N-86°-W	
SB-2030	1×4	4.00 × 7.70~8.00	4.00	1.70~2.10	31.40	N-87°-W	
SB-2031	1×2	3.40 × 4.85	3.40	2.05・2.80	16.49	N-9°-E	

ii 塀・柵列跡

**SA-2002**

A区中央部で確認した東西塀 (N-81°-W) である。6間分 (10.75m) を検出し、柱間は1.55~2.05mである。柱穴は径20~45cmの円形または楕円形で、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片12点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

Tab.9 第II調査地区近世塀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備 考
	柱穴数 (個)	全長 (m)	柱間距離 (m)		
SA-2002	7	10.75	1.55~2.05	N-81°-W	



iii 土坑

SK-2098~2114はA区, SK-2115~2120はB区, SK-2121はC区で検出された土坑である。

**SK-2098**

A区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.04m, 短辺1.32m, 深さ41cmを測り, 長軸方向は方眼北を向く。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片15点, 近世陶器片2点, 鉄釘1点がみられ, 近世陶器1点(2202)が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.154-2202)

2202は肥前系の皿で, 約1/2が残存し, 口径10.2cm, 器高3.4cm, 底径4.0cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し, 体部は底部から緩やかに内湾して立ち上がる。内面から高台付近まで灰釉を薄く施す。胎土はやや密で, 焼成は比較的良く, 釉調は灰オリーブ色, 生地は橙色を呈する。

**SK-2099**

A区東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.38m, 短辺1.04m, 深さ15cmを測り, 長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片75点, 土製品1点がみられ, 土製品(2203)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.154-2203)

2203は紡錘形の土錘で, 一部が欠損する。全長4.1cm, 全幅1.0cm, 孔径0.3cm, 重量3.7gを測り, 全面にナデ調整を施す。

**SK-2100**

A区東部で検出した円形の土坑で, 径1.73m, 深さ44cmを測る。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片1点, 瓦器片1点, 土師質土器片4点, 近世陶器片3点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2101**

A区東部で検出した楕円形の土坑で, SD-2004を切る。長径1.69m, 短径1.55m, 深さ12cmを測り, 長軸方向はN-28°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色シルトで, 黄橙色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片31点, 瓦質土器片1点, 近世陶器片1点, 鉄滓がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SK-2102**

A区東部で検出した楕円形の土坑で, SD-2004を切る。長径1.48m, 短径1.14m, 深さ10cmを測り, 長軸方向はN-53°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰白色シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片12点, 瓦質土器1点, 近世陶器片2点がみられ, 瓦質土器(2204), 近世陶器1点(2205)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.154-2204)

2204は鍋で、口縁部の約1/8が残存し、口径18.3cmを測る。胴部は膨らみ、口縁部は直立して、端部を肥厚させる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面はナデで指頭圧痕が残る。炭素の吸着は甘い。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

近世陶器 (Fig.154-2205)

2205は唐津焼の皿で、底部の約1/4が残存し、底径4.7cmを測る。底部には断面台形を呈する低い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。内面と体部外面の一部に灰釉を薄く施し、見込には胎土目痕が1ヶ所残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、釉調は灰オリーブ色、生地は灰黄色を呈する。

SK-2103 (Fig.153)

A区中央部で検出した楕円形の土坑で、SD-2004を切り、SK-2104に切られる。長径2.97m、短径2.86m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-24°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、底には幅約25cm、深さ約5cmの溝が円形にめぐる。埋土は2層に分かれ、上層が灰色シルト質砂、下層が灰色砂質シルトで、いずれもマンガンを多く含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片9点、瀬戸・美濃系陶器片6点、青磁片1点がみられ、瀬戸・美濃系陶器1点(2206)が図示できた。

出土遺物

瀬戸・美濃系陶器 (Fig.154-2206)

2206は皿で、底部の約1/5が残存し、底径5.0cmを測る。底部は削り出しで、碁底風に外底面を削り込み、体部は直線的に立ち上がる。全面に灰オリーブ色の釉を薄く施し、見込は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。

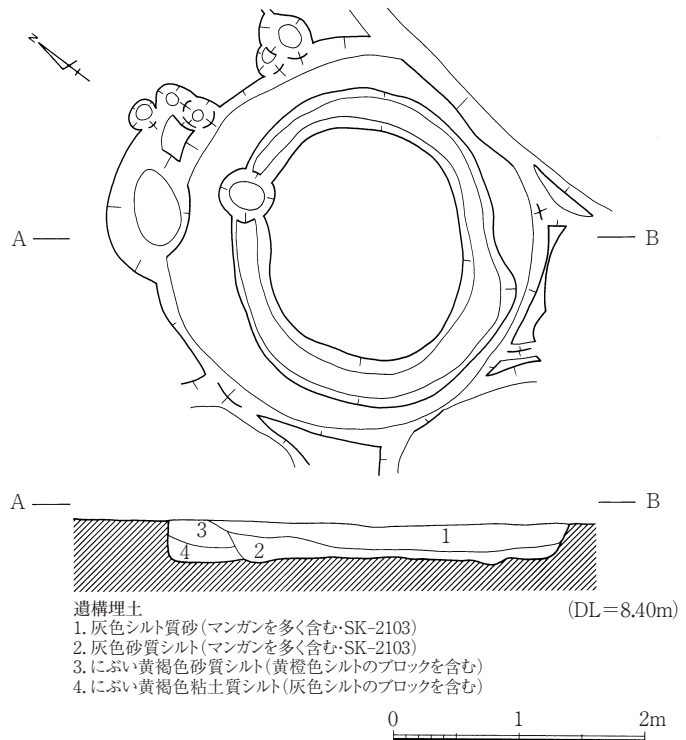


Fig.153 SK-2103

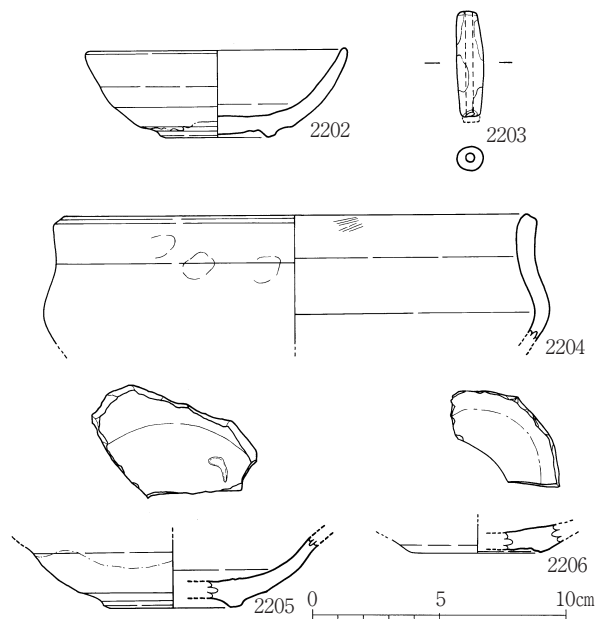


Fig.154 SK-2098~2103出土遺物実測図

**SK-2104** (Fig.155)

A区中央部で検出した楕円形の土坑で、SK-2103を切る。長径1.54m、短径1.36m、深さ36cmを測り、長軸方向はN-56°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色シルト、下層が淡黄色シルトで、底にはマンガンの堆積がみられた。出土遺物には土師質土器片11点、青磁片1点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

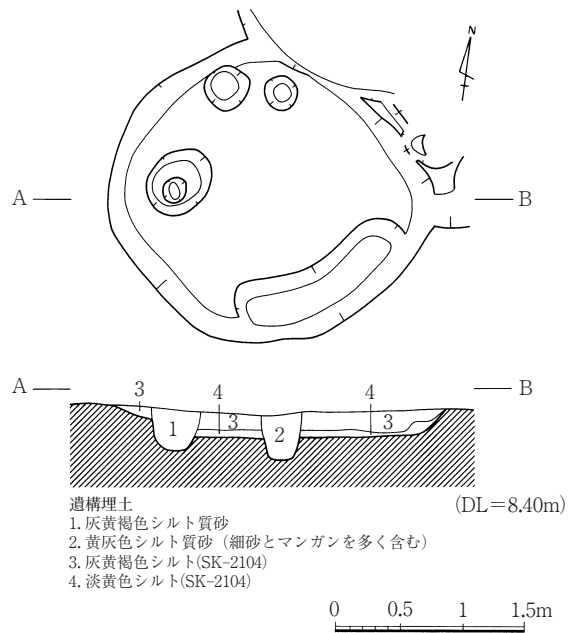


Fig.155 SK-2104

**SK-2105**

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.82m、短径1.70m、深さ43cmを測り、長軸方向はN-54°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトで、黄橙色シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、白磁片3点、青磁片1点、近世陶器片2点、近世磁器片2点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-2106**

A区中央部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.41m、短辺1.52m、深さ39cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片59点、近世磁器片1点がみられ、土師質土器3点(2207~2209)が図示できた。  
 出土遺物

土師質土器 (Fig.157-2207~2209)

2207~2209は杯である。2207は底部がほぼ完存し、底径6.9cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。2208は底部の約2/3が残存し、底径6.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。2209は約2/3が残存し、口径13.6cm、器高3.7cm、底径6.0cmを測る。器壁が薄く、体部は外上方に大きく開く。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

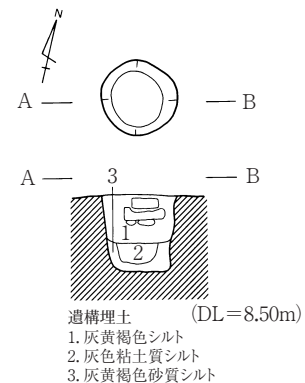


Fig.156 SK-2107

**SK-2107** (Fig.156)

A区中央部で検出した円形の土坑で、径0.58m、深さ0.61mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は3層に分かれ、埋土1は灰黄褐色シルト、埋

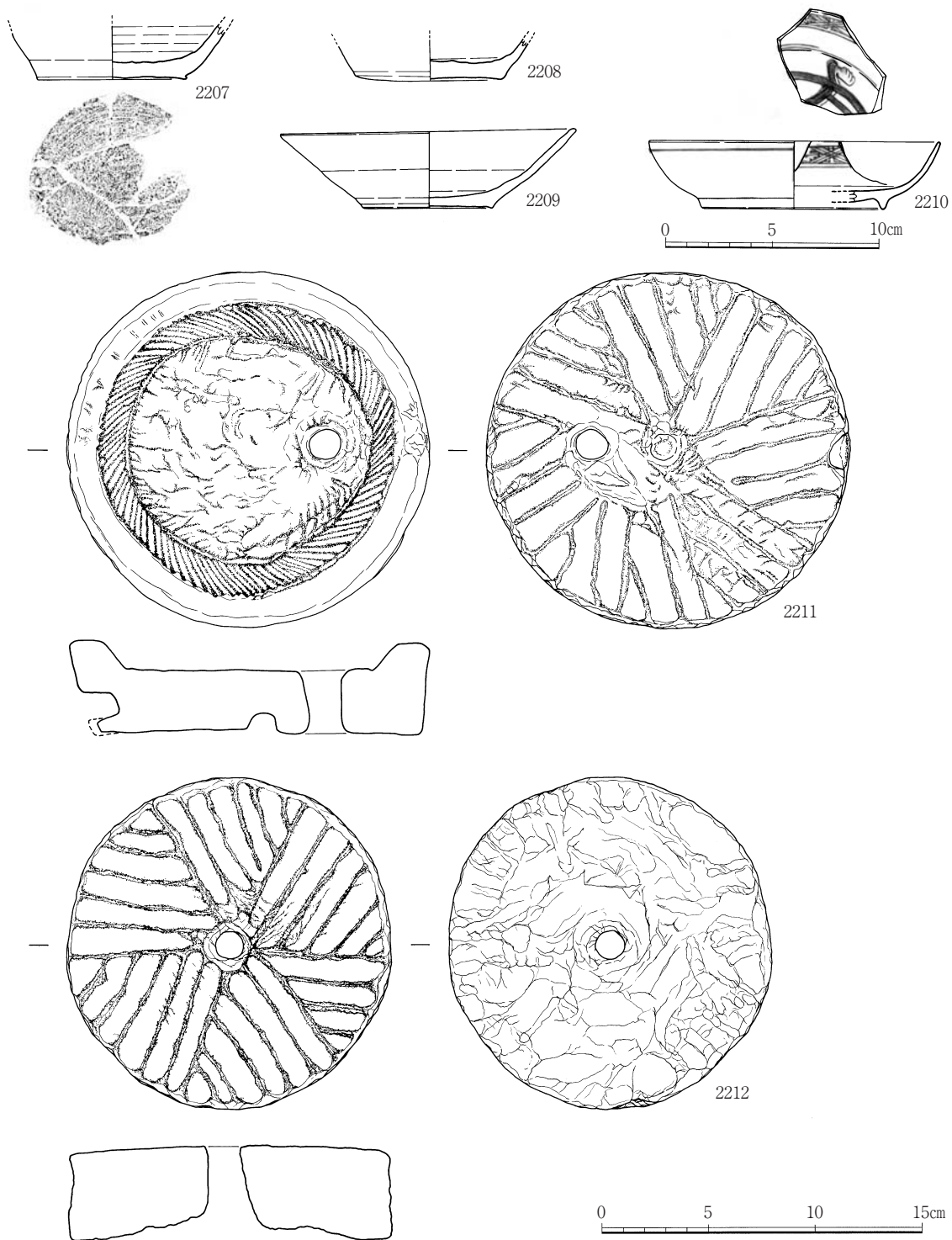


Fig.157 SK-2106・2107出土遺物実測図

土2は灰色粘土質シルト，埋土3は灰黄褐色砂質シルトであった。埋土1からは河原石の上に石臼が置かれた状態で出土した。河原石は約15cm大のものが4個置かれており，その内2個は被熱の痕跡がみられた。石臼は上臼が下に置かれ，その上に下臼が摺り目を下にした状態で出土した。出土遺物には土師質土器片3点，瓦質土器片1点，青花1点，近世陶器片1点，石製品2点がみられ，青花（2210），石製品2点（2211・2212）が図示できた。

## 出土遺物

### 青花 (Fig.157-2210)

2210は景德鎮窯系の皿の一部で、口径13.6cm、器高3.2cm、底径8.4cmを測る。底部には断面三角形を呈する小さな削り出し高台を有し、体部は器壁が薄く、内湾して口縁部に至る。全面に透明釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行い、高台内には砂が付着する。内面には四方襷文と2条の圏線、見込には玉獅子文とみられる染付の一部がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。

### 石製品 (Fig.157-2211・2212)

2211は石臼の上臼である。完形で、直径33.0cm、全厚8.9cmを測り、口径2.6cmの孔が貫通する。上面は径約28.0cmを窪ませ、下面には3～5本単位の斜行する摺り目が8ヶ所みられ、摺り目は磨耗する。また、下面と側面には径約3cmの窪みがみられる。石材は砂岩である。2212は石臼の下臼である。完形で、直径30.0cm、全厚8.8cmを測り、口径2.6cmの孔が貫通する。摺り目は4～6本単位の斜行する条線が6ヶ所みられ、磨耗する。石材は砂岩である。

### SK-2108

A区中央部の東端で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、東半分は調査区外へ続き、SK-2109を切る。第IV層の上面より掘り込みがみられる。西半分を検出し、長径1.80m、短径1.42m、深さ46cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片10点、青磁片1点、近世陶器片1点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-2109

A区中央部の東端で検出した楕円形を呈するとみられる土坑で、東半分は調査区外へ続き、SK-2108に切られる。第IV層の下面より掘り込みがみられる。西半分を検出し、長径2.35m、短径1.86m、深さ39cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色シルト、下層が黄橙色シルトのブロックを多く含む黄灰色砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

### SK-2110

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.23m、短径0.98m、深さ33cmを測り、長軸方向はN-5°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルトで、黄褐色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点、近世陶器片1点、近世磁器1点がみられ、近世磁器(2213)が図示できた。

## 出土遺物

### 近世磁器 (Fig.160-2213)

2213は肥前系の丸碗で、約1/2が残存し、底径4.3cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は腰が張る形態を呈する。全面に透明釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行う。外面には草花文の染付、高台内には崩れ渦福の銘がみられる。胎土はやや粗く、焼成はやや不良である。

### SK-2111

A区中央部で検出した不整楕円形の土坑である。長径1.80m、短径1.42m、深さ46cmを測り、長軸方向はN-20°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器

片2点、土師質土器片20点、近世磁器1点、鉄滓がみられ、近世磁器（2214）が図示できた。

#### 出土遺物

##### 近世磁器 (Fig.160-2214)

2214は丸碗で、約1/2が残存し、底径3.8cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、高台内には砂が付着する。外面と見込には染付がみられる。胎土は粗く、焼成は良好である。

##### SK-2112

A区中央部で検出した円形の土坑で、径1.80m、深さ38cmを測る。断面は逆台形を呈し、底部には円形で、径1.66mを測る掘り込みがみられる。埋土は2層に分かれ、上層が暗褐色シルト、下層が円形状の掘り込みの部分で、褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片10点、青磁片1点、近世陶器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

##### SK-2113

A区中央部で検出した円形の土坑で、径2.20m、深さ35cmを測る。断面は逆台形を呈し、底には円形で、径1.54mを測る掘り込みがみられる。埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色シルト、下層が円形状の掘り込みの部分で、褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片8点、近世陶器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

##### SK-2114

A区中央部で検出した楕円形の土坑である。長径2.02m、短径1.57m、深さ0.55mを測り、長軸方向はN-1°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、底には長径1.55m、短径1.32mを測る楕円形状の掘り込みがみられる。埋土は暗褐色シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片10点、近世磁器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

##### SK-2115 (Fig.158)

B区東部で検出しただるま形の土坑で、SK-2116に切られる。全長1.67m、短幅0.85m、深さ23cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、灰白色シルト質砂のブロックを含んでおり、その下に焼土と炭化物の堆積がみられた。また、側面には焼土がみられ、オーバーハングしている箇所もみられた。出土遺物には土師質土器片5点、瓦質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

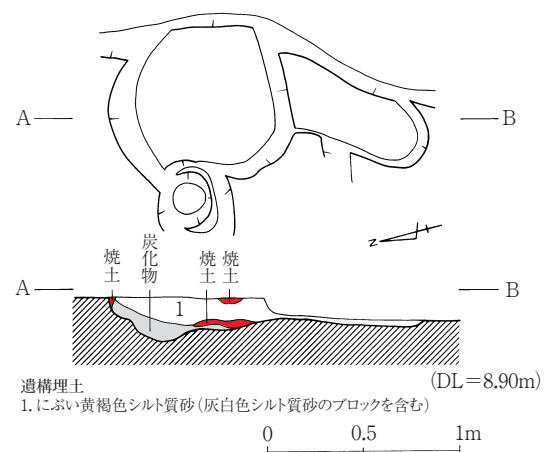


Fig.158 SK-2115

##### SK-2116

B区東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-2115を切る。長辺3.11m、短辺1.95m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-83°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂で、浅黄色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師器1点、瓦器片5点、土師質土器片26点、青磁

片2点, 近世陶器片1点, 土錘1点, 鉄滓がみられ, 土師器 (2215) が図示できた。

出土遺物

土師器 (Fig.160-2215)

2215は甕で, 口縁部の一部が残存する。頸部はくの字状に屈曲し, 口縁部は直線的に伸びて端部は上方に拡張する。内面の調整は摩耗するため不明で, 口縁部はヨコナデ, 体部外面はナデを施す。胎土は粗く, 砂粒を多く含み, 焼成はやや不良で, 色調は, 内面が赤褐色または橙色, 外面は明赤褐色を呈する。

SK-2117 (Fig.159)

B区西部で検出した隅丸方形のハンダ土坑である。長辺1.45m, 短辺1.24m, 深さ31cmを測り, 長軸方向はN-74°-Wを示す。断面は逆台形を呈し, 側面は厚さ約3cm程度のハンダで固められていた。埋土は3層に分かれ, 埋土1は灰黄色シルト, 埋土2はにぶい黄色砂質シルト, 埋土3は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点, 近世陶器片1点, 近世磁器片2点, 鉄釘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

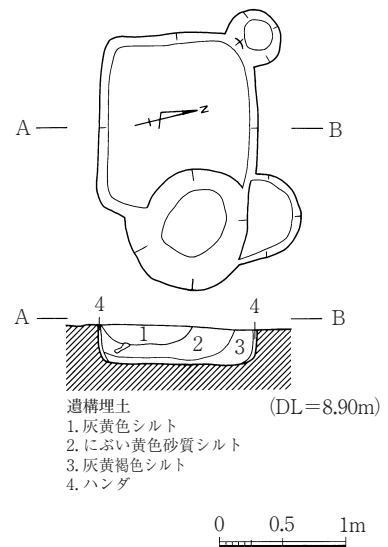


Fig.159 SK-2117

SK-2118

B区西端で検出した隅丸方形の土坑で, 西半は調査区外へ続く。東半を検出し, 長辺1.60m, 短辺0.71m, 深さ35cmを測り, 長軸方向はN-39°-Wを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 黄灰色砂質シルトと炭化物, マンガンを含んでいた。出土遺物には瓦質土器片3点, 近世陶器片3点, 近世磁器片5点, 瓦片1点, 鉄製品1点がみられ, 近世磁器2点 (2216・2217), 鉄製品 (2218) が図示できた。

出土遺物

近世磁器 (Fig.160-2216・2217)

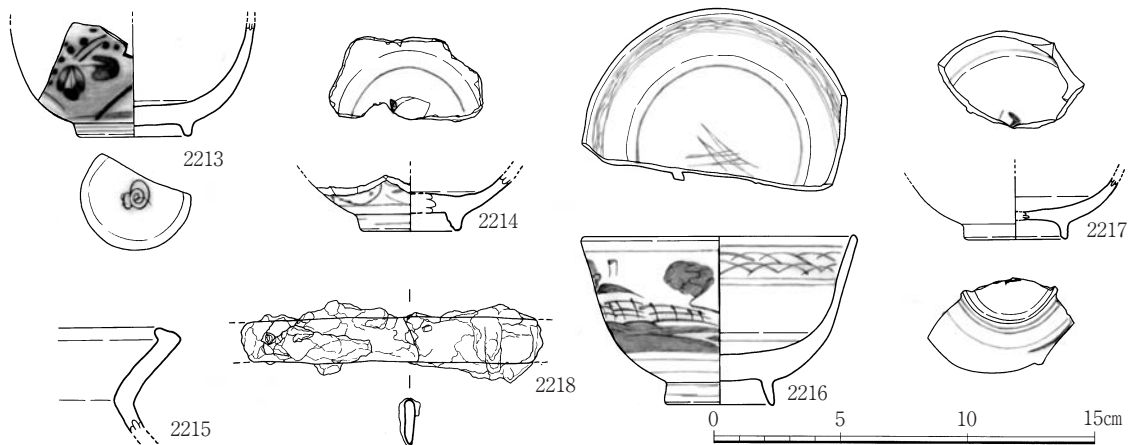


Fig.160 SK-2110・2111・2116・2118出土遺物実測図

2216は肥前系の碗で、約1/2が残存し、口径10.6cm、器高6.6cm、底径4.2cmを測る。底部にはハの字状に開く細い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は端反形を呈する。全面に透明釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行う。外面には山水文、内面には波文、見込には松葉文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2217は能茶山焼の小碗で、底部の約1/4が残存し、底径4.0cmを測る。底部には細く直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行う。内外面と高台内には染付がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良好である。

鉄製品 (Fig.160-2218)

2218は刀子で、鋒と関は欠損し、全面に錆化がみられる。全長11.9cm、全幅3.1cm、全厚0.4cmを測り、刃部は直線的に伸びる。

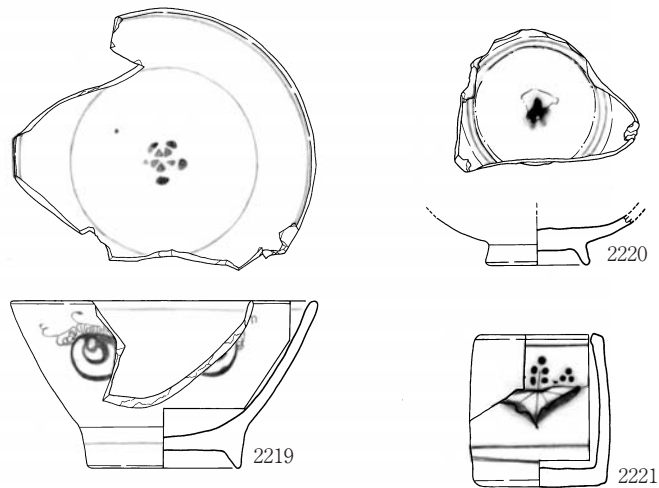
### SK-2119

B区西端で検出した隅丸方形の土坑で、西半は調査区外へ続く。上層は大半の部分が攪乱を受けていた。東半を検出し、長辺6.65m、短辺2.66m、深さ0.54mを測り、長軸方向はN-79°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がマンガンを含む灰黄褐色砂質シルト、下層が細砂と5~10cm大の礫と炭化物を含む灰色砂であった。出土遺物には近世陶器片5点、近世磁器片41点がみられ、近世陶器1点 (2219)、近世磁器4点 (2220~2223) が図示できた。

#### 出土遺物

近世陶器 (Fig.161-2219)

2219は瀬戸・美濃系の広東碗で、約1/2が残存し、口径12.0cm、器高6.6cm、底径6.0cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部はやや内湾する。全面に透明釉を薄く施し、暈付は釉ハギを行う。陶胎染付で、生地に白化粧土を施し、外面には圈線と宝珠文、内面には圈線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土は粗く、焼成はやや不良である。



近世磁器 (Fig.161-2220~2223)

2220は肥前系の染付青磁碗で、底部が完存し、底径4.0cmを測る。底部には細くハの字状に開く削り出し高台を有する。内面には透明釉を施し、見込は蛇の目釉ハギを行い、砂が付着する。また、見込には五弁花の染

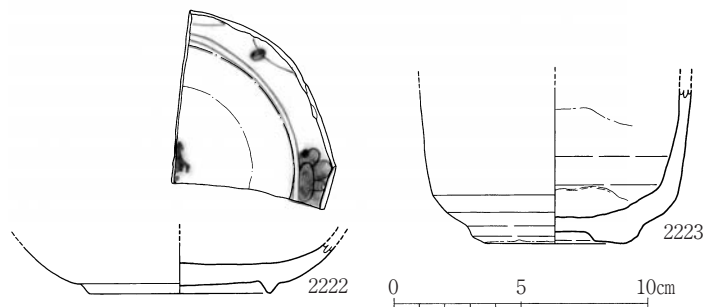


Fig.161 SK-2119出土遺物実測図



付がみられる。外面には青磁釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、焼成は良好である。

2221は火入れとみられ、約1/8が残存し、口径4.4cm、器高6.0cm、底径4.6cmを測る。体部は平らな底部から直立して口縁部に至る。外面には透明釉を薄く施し、底部は釉ハギを行い、砂が付着する。内面は回転ナデ調整を施し、露胎である。体部外面には花文と圏線の染付がみられる。胎土はやや密で、黒色の砂粒を含み、焼成は良好である。

2222は肥前系(波佐見)の皿で、底部の約1/4が残存し、底径7.2cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有する。全面に透明釉を施し、畳付を釉ハギ、見込は蛇の目釉ハギを行い、砂が付着する。また、内面には草花文、見込には五弁花の染付がみられる。胎土はやや密で、焼成はやや良好である。

2223は青磁の香炉または火入れとみられ、約1/5が残存し、底径5.6cmを測る。底部には低く、幅の広い削り出し高台を有し、体部は直立する。内面の一部と外面にオリーブ色の釉を施し、畳付は釉ハギを行い、砂が付着する。内面は粗雑な回転ナデ調整で、底部には砂が付着する。胎土は密で、焼成は良好である。

**SK-2120**

B区西端で検出した楕円形または円形を呈するとみられる土坑で、大半の部分が攪乱の影響を受けていた。北側の一部を検出し、長径3.48m、短径3.17m、深さ32cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、黄灰色砂質シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には近世磁器片2点がみられ、近世磁器1点(2224)が図示できた。

出土遺物

近世磁器 (Fig.162-2224)

2224は肥前系(波佐見)の皿で、底部の約1/3が残存し、底径4.1cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は外上方に立ち上がる。内面と体部外面に透明釉を薄く施し、

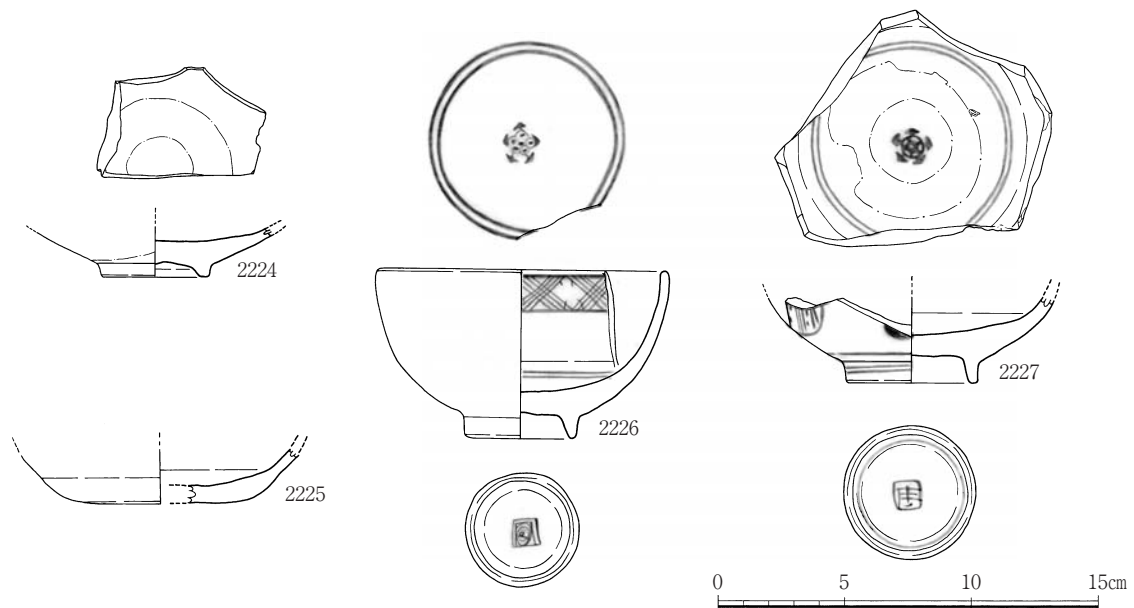


Fig.162 SK-2120・2121出土遺物実測図

見込は蛇の目釉ハギを行い、砂が付着する。胎土はやや密で、黒色の砂粒を含み、焼成は良好である。

#### SK-2121 (Fig.167)

C区で検出した楕円形の土坑で、SD-2028に切られる。長径2.46m、短径0.78m、深さ42cmを測り、長軸方向はN-15°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、灰白色シルト質砂のブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点、近世陶器片13点、近世磁器片14点、土錘1点がみられ、土師質土器1点(2225)、近世磁器2点(2226・2227)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 土師質土器 (Fig.162-2225)

2225は杯で、底部の約1/3が残存し、底径7.4cmを測る。体部は器壁が薄く、底部から滑らかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色または浅黄橙色を呈する。

##### 近世磁器 (Fig.162-2226・2227)

2226は肥前系の染付青磁碗で、底部が完存し、口径11.3cm、器高6.6cm、底径4.2cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、体部は内湾して口縁部に至る。内面と高台内に透明釉、外面には青磁釉を施し、畳付は釉ハギを行い、砂が付着する。内面には四方襷文と圏線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判、高台内には渦福の銘がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。2227は肥前系(波佐見)の丸碗で、底部が完存し、底径5.1cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギ、見込は蛇の目釉ハギを行う。外面には丸文、内面には圏線の染付、見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

#### iv 溝跡

##### SD-2023

A区南東部で検出した南北溝跡(N-12°-E)で、西側の肩のみ確認した。幅2.25m以上、深さ0.69~0.90mを測り、基底面は北(7.850m)から南(7.550m)に向かって緩やかに傾斜し、5.10mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色粘土質シルトで、マンガンを含み、特に下部はマンガンが多く含まれていた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

##### SD-2024 (Fig.163)

A区西部で検出した南北溝跡(N-8°-E)で、区画溝とみられる。SD-2025に切られ、SD-2011・2025・2026・2028と並走し、南端は調査区外へ続く。幅0.61~1.36m、深さ26~43cmを測り、基底面は北(8.219m)から南(7.862m)に向かって緩やかに傾斜し、33.33mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルトで、炭化物と

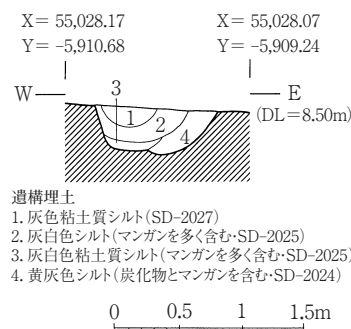


Fig.163 SD-2024・2025・2027

マンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片21点、瓦質土器片1点、白磁片1点、青磁片1点、近世陶器片4点、近世磁器片3点がみられ、土師質土器2点 (2228・2229)、近世陶器2点 (2230・2231) が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.164-2228・2229)

2228・2229は杯である。2228は底部の約1/2が残存し、底径5.0cmを測る。器壁は薄く、体部は底部から緩やかに立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は、内面が浅黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。2229は約1/6が残存し、口径12.8cm、器高2.5cm、底径5.3cmを測る。器高が低く、皿状を呈する。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

近世陶器 (Fig.164-2230・2231)

2230は碗で、底部の約1/2が残存し、底径7.2cmを測る。底部の器壁は厚く、断面三角形の小さな削り出し高台を有し、体部は水平に伸びたのち、外上方に立ち上がる。内面と外面の高台まで灰釉を薄く施し、見込にはハマ痕が2ヶ所残る。胎土はやや密で、焼成は良く、釉調はオリーブ黄色、生地は灰黄色を呈する。

2231は播鉢で、底部の約1/6が残存し、底径12.4cmを測る。体部は平らな底部よりやや内湾して立ち上がり、内面には8条単位の摺り目がみられる。全面に黒褐色の釉を施す。胎土はやや密で、砂粒を含み、焼成は良く、釉調は黒褐色、生地は灰赤色を呈する。

SD-2025 (Fig.163)

A区北部で検出した南北溝跡 (N-7°-E) で、区画溝とみられる。SD-2027に切られ、SD-2011・2024・2026・2027・2028と並走する。幅0.30~0.98m、深さ18~33cmを測り、基底面は南 (8.027m) から北 (7.960m) に向かって緩やかに傾斜し、30.36mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色シルト、下層が灰白色粘土質シルトで、いずれもマンガンを多く含んでいた。出土遺物には土師質土器片140点、備前焼片1点、瓦質土器片2点、白磁片2点、青磁片2点、近世陶器片27点、近世磁器片12点、土錘1点、石製品1点、鉄釘1点、鉄滓がみられ、土師質土器1点 (2232)、近世陶器1点 (2233)、近世磁器3点 (2234~2236)、石製品 (2237) が図示できた。

出土遺物

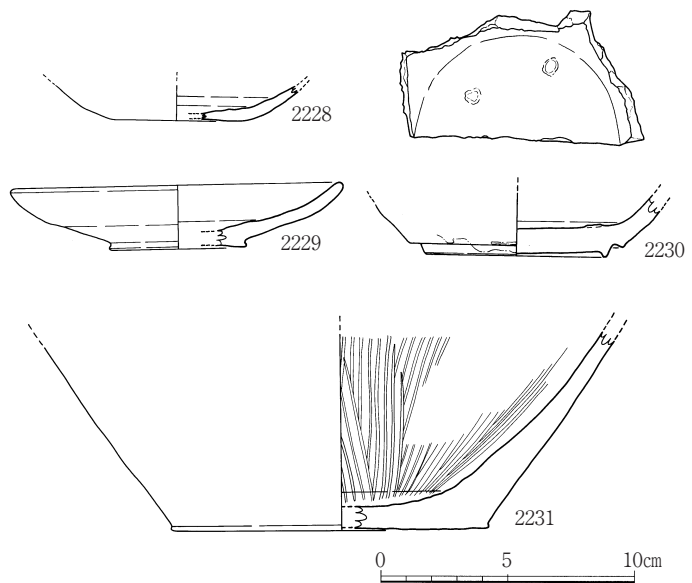


Fig.164 SD-2024出土遺物実測図

土師質土器 (Fig.166-2232)

2232は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径21.0cmを測る。胴部は内湾して口縁部に至り、端部は内傾する面を有する。外面には断面三角形の鏝がめぐる。調整は内面に粗いハケ、体部外面に斜め方向のタタキを施したのち、口縁部にヨコナデを加える。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は、内面が灰褐色または黒褐色、外面が橙色または黒褐色を呈する。

近世陶器 (Fig.166-2233)

2233は搦鉢で、約1/4が残存し、口径27.0cm、器高10.9cm、底径13.8cmを測る。体部は真っすぐ伸び、口縁部は肥厚し、外面には2条の凹線がみられる。調整は内面が回転ナデで、9本単位の摺り目がみられ、口縁部はヨコナデ調整、体部外面は回転ヘラ削り調整を施す。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は内外面ともにぶい赤褐色を呈する。

近世磁器 (Fig.166-2234~2236)

2234は丸碗で、約1/2が残存し、口径10.0cm、器高5.9cm、底径3.6cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して口縁部を薄く仕上げる。器面には灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、若干砂が付着する。胎土は密で、黒色の砂粒を含み、焼成は良く、釉調と生地は灰白色を呈する。

2235は皿で、底部の約1/2が残存し、底径7.0cmを測る。底部には断面三角形を呈する小さな削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。外面は唐草文、見込は舟とみられる染付が残り、高台内には「造」の銘がみられる。胎土はやや密で、焼成は良好である。2236は肥前系の皿で、約1/4が残存し、口径14.2cm、器高2.8cm、底径8.8cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部は内湾して短く立ち上がる。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、砂が付着する。外面には唐草文と圏線、内面には草花文と圏線、見込には五弁花の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

石製品 (Fig.166-2237)

2237は砥石で、一部が欠損する。直方体を呈するものとみられ、全長13.8cm、全幅9.8cm、全厚4.8cmを測る。残存部で表面と2側面に使用痕がみられ、特に側面の磨耗が著しい。石材は砂岩である。

SD-2026 (Fig.165)

A区北部で検出した南北溝跡 (N-4°-E) で、区画溝とみられる。SD-2011・2024・2025・2027・2028と並走する。幅0.15~0.67m、深さ12~23cmを測り、基底面は北 (8.263m) から南 (7.922m) に向かって傾斜し、24.15mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片7点、土師質土器片3点、備前焼片4点、瓦質土器片2点、白磁片1点、青磁片3点、近世陶器片1点、近世磁器片2点、砥石1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

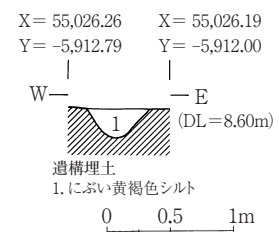


Fig.165 SD-2026

SD-2027 (Fig.163)

A区北部で検出した南北溝跡 (N-7°-E) で、区画溝とみられる。SD-2025を切り、SD-2011・

2024・2025・2026・2028と並走する。幅25～34cm、深さ6～22cmを測り、基底面は北（8.327m）から南（8.292m）に向かって緩やかに傾斜し、27.20mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片4点、近世陶器片4点、近世磁器片12点がみられ、土師質土器2点（2238・2239）、近世陶器1点（2240）、近世磁器1点（2241）が図示できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.166-2238・2239）

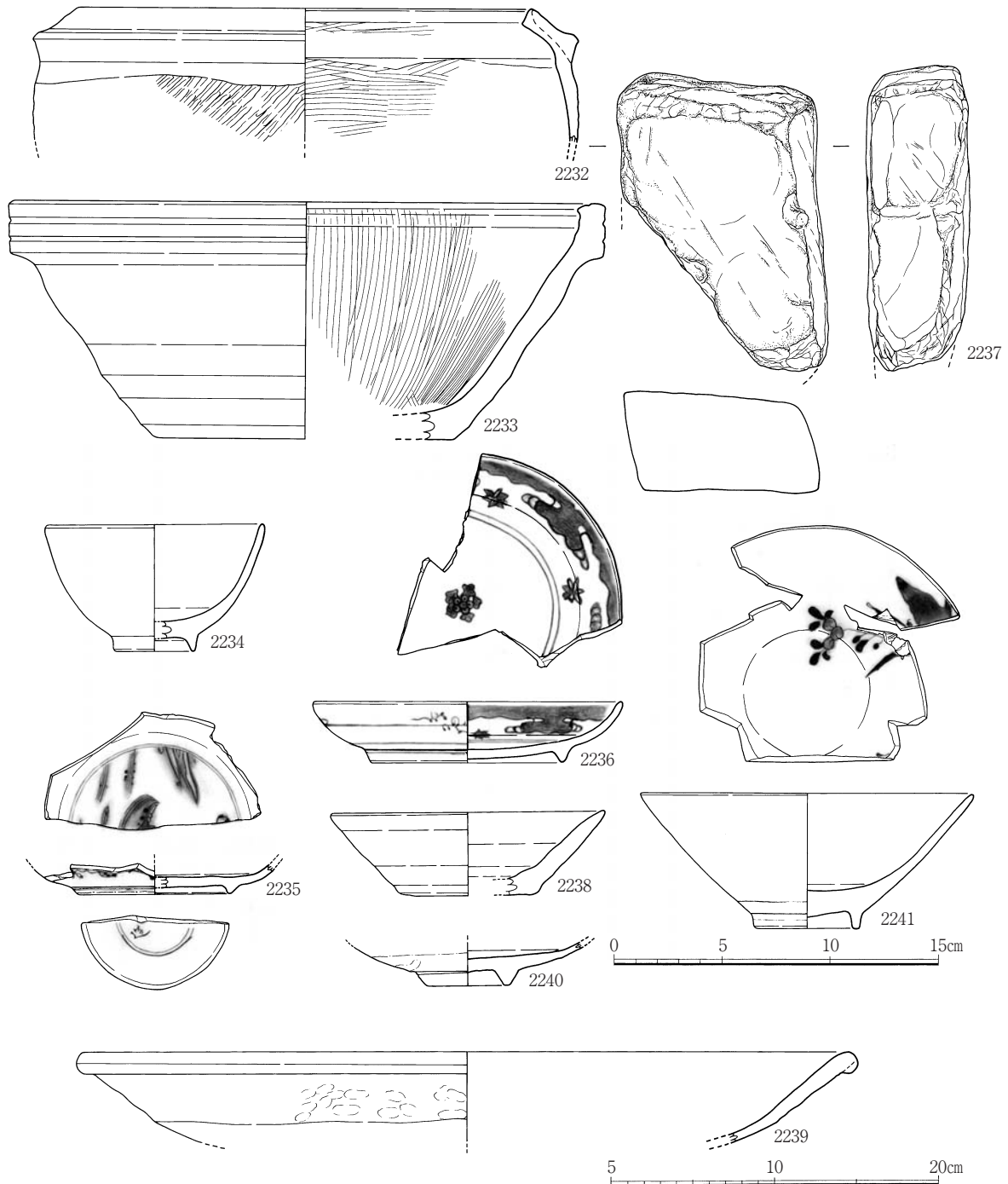


Fig.166 SD-2025・2027出土遺物実測図

2238は杯で、約1/5が残存し、口径12.6cm、器高3.8cm、底径6.6cmを測る。体部は真っすぐ伸び、口縁部を細く仕上げる。成形は粘土紐巻き上げとみられ、調整は著しく摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。2239は岡本系とみられる焙烙で、口縁部の一部が残存し、口径47.8cmを測る。口縁部は直線的に伸び、端部は丸く肥厚させる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、体部外面はナデで指頭圧痕が残り、外面には煤が付着する。胎土は粗く、金雲母を含み、焼成はやや良好で、色調は、内面がにぶい橙色、外面が褐灰色を呈する。

#### 近世陶器 (Fig.166-2240)

2240は肥前系の皿で、底部が完存し、底径3.8cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、体部の器壁は薄く、内湾して立ち上がる。内面と外面の一部に灰釉を薄く施す。底部外面は露胎で、高台に砂が付着する。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰白色を呈する。

#### 近世磁器 (Fig.166-2241)

2241は碗で、約1/4が残存し、口径15.4cm、器高6.2cm、底径4.6cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、体部は外上方へ大きく開く。全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面には草花文、外面には圏線の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

#### SD-2028 (Fig.167)

C区北部で検出した南北溝跡 (N-11°-E) で、攪乱を受ける。幅0.33~0.63m、深さ0.10~0.63mを測り、基底面は南 (8.730m) から北 (8.711m) に向かって緩やかに傾斜し、13.78mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色砂質シルトで、炭化物とマンガンを少し含んでいた。出土遺物には土師器片1点、須恵器片1点、土師質土器片7点、備前焼片1点、瀬戸焼片1点、近世陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

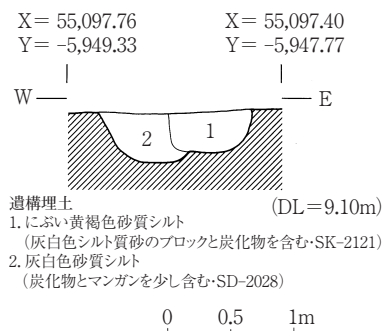


Fig.167 SD-2028, SK-2121

#### v ピット

#### P-2043

A区東部で検出した楕円形のピットで、長径0.82m、短径0.52m、深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、石製品1点がみられ、石製品 (2242) が図示できた。

#### 出土遺物

#### 石製品 (Fig.168-2242)

2242は砥石で、完形を呈し、全長21.0cm、全幅8.2cm、全厚4.9cmを測る。断面は隅丸三角形を呈し、1面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

#### P-2044

A区中央部で検出した楕円形のピットで、SK-2104に切られる。楕円形とみられ、長径1.59m、短径1.82m、深さ14cmを測る。埋土は黄灰色粘土質シルトであった。出土遺物には東播系須恵器片

1点, 土師質土器片25点, 備前焼片1点, 瓦質土器片3点, 近世陶器片2点がみられ, 瓦質土器1点(2243)が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.168-2243)

2243は羽釜で, 口縁部の一部が残存し, 口径22.8cmを測る。口縁部は内湾し, 端部は水平な面を有する。外面には幅約1.8cmの鋳が水平にめぐり。調整は胴部内面がナデ, 口縁部内面が板ナデ, 口縁部がヨコナデで, 外面には凹線状の段がめぐり, 体部外面にはヨコ方向のヘラ削りを施す。胎土はやや粗く, 焼成はやや良好で, 色調は, 内面が灰色, 外面が灰色またはオリーブ黄色を呈する。

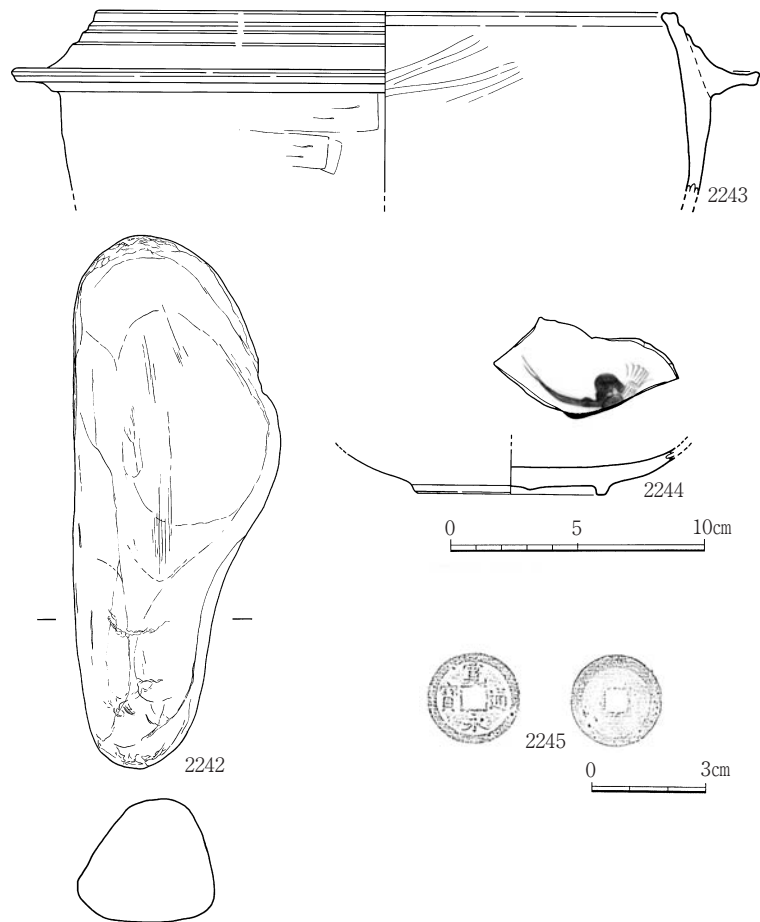


Fig.168 P-2043~2046出土遺物実測図

P-2045

A区中央部で検出した楕円形のピットで, 長径36cm, 短径33cm, 深さ11cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には図示した近世磁器(2244)のみがみられた。

出土遺物

近世磁器 (Fig.168-2244)

2244は肥前系の皿で, 底部の一部が残存し, 底径7.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有する。器面には透明釉を施し, 畳付は釉ハギを行い, 砂がわずかに付着する。内面には染付がみられる。胎土は密で, 焼成は良好である。

P-2046

B区西部で検出した楕円形のピットで, 長径37cm, 短径34cm, 深さ19cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質シルトで, 黄灰色シルトのブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片4点, 古銭1点がみられ, 古銭(2245)が図示できた。

出土遺物

古銭 (Fig.168-2245)

2245は完形の寛永通寶で, 新寛永である。全面に銹化がみられ, 銭径2.45cm, 内径1.93cm, 穿径0.59cm, 銭厚0.13cm, 重量2.7gを測る。

### 3. 第Ⅲ調査地区

#### (1) 概要

本調査区は第Ⅱ調査地区の北西部にあたり、字摺木、西ノ裏に位置する。第Ⅱ調査地区との間には南北に市道と水路が走り、この水路が自然堤防の頂部となり東西に地形が下がっている。特にこの水路の西側に位置する第Ⅲ調査地区では京間遺跡の縁辺部とみられ、西に向かって大きく地形が下がり、遺構の密度も低くなっている。また、調査区東部は調査前は宅地であったため、著しく攪乱を受けていたものの、ほぼ全面で中世と近世の遺構包含層を確認した。遺構は調査区東部では密度が高く掘立柱建物跡などを多く検出しており、西部では遺構の密度が低く、中世の細い溝跡や近世の畝状遺構などを検出しており、生産域として利用されていたものとみられる。調査区は東西に走る道路によりさらに南北に分かれ、北部では土置き場の関係により2回に分けて調査を行っており、計3回に分け調査を行った。調査期間は平成14年6月21日から9月6日、9月26日から10月28日で実働57日、調査面積は1,777㎡であった。

#### (2) 層序

ほぼ全面で中世と近世の2層の遺物包含層が確認され、調査区南西部の地形が下がっている部分については中世と近世の遺物包含層がそれぞれ2層確認された。なお、調査区南西部 (Fig.169) では以下の堆積が認められた。

- 第Ⅰ層 におい黄褐色 (10YR5/3) シルト質砂層 (耕作土)
- 第Ⅱ層 明褐色 (7.5YR5/8) シルト質砂層 (マンガンの堆積)
- 第Ⅲ層 灰色 (N6/0) シルト質砂層で酸化鉄を多く含む (近世の遺物包含層1)
- 第Ⅳ層 におい黄橙色 (10YR7/2) シルト質砂層で酸化鉄を含む (近世の遺物包含層2)
- 第Ⅴ層 におい黄橙色 (10YR6/4) 砂質シルト層で酸化鉄を含む (中世の遺物包含層1)
- 第Ⅵ層 におい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト層で微砂を含む (中世の遺物包含層2)
- 第Ⅶ層 におい黄橙色 (10YR6/4) シルト層
- 第Ⅷ層 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト層で細砂を含む
- 第Ⅸ層 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト質砂層で微砂を含む
- 第Ⅹ層 におい黄褐色 (10YR5/4) シルト質砂層で細砂を含む
- 第Ⅺ層 におい黄色 (2.5Y6/3) シルト質砂層で粗砂と1cm大の礫を含む
- 第Ⅻ層 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂層 (細砂)
- 第Ⅼ層 灰色 (7.5Y4/1) 砂層 (粗砂)
- 第Ⅾ層 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂層 (微砂)
- 第Ⅿ層 灰色 (5Y5/1) 砂層 (細砂)
- 第ⅰ層 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト層で微砂を含む
- 第ⅱ層 灰色 (5Y6/1) 砂層 (微砂)
- 第ⅲ層 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト質砂層で微砂を含む
- 第ⅳ層 灰色 (5Y5/1) 砂層 (細砂)



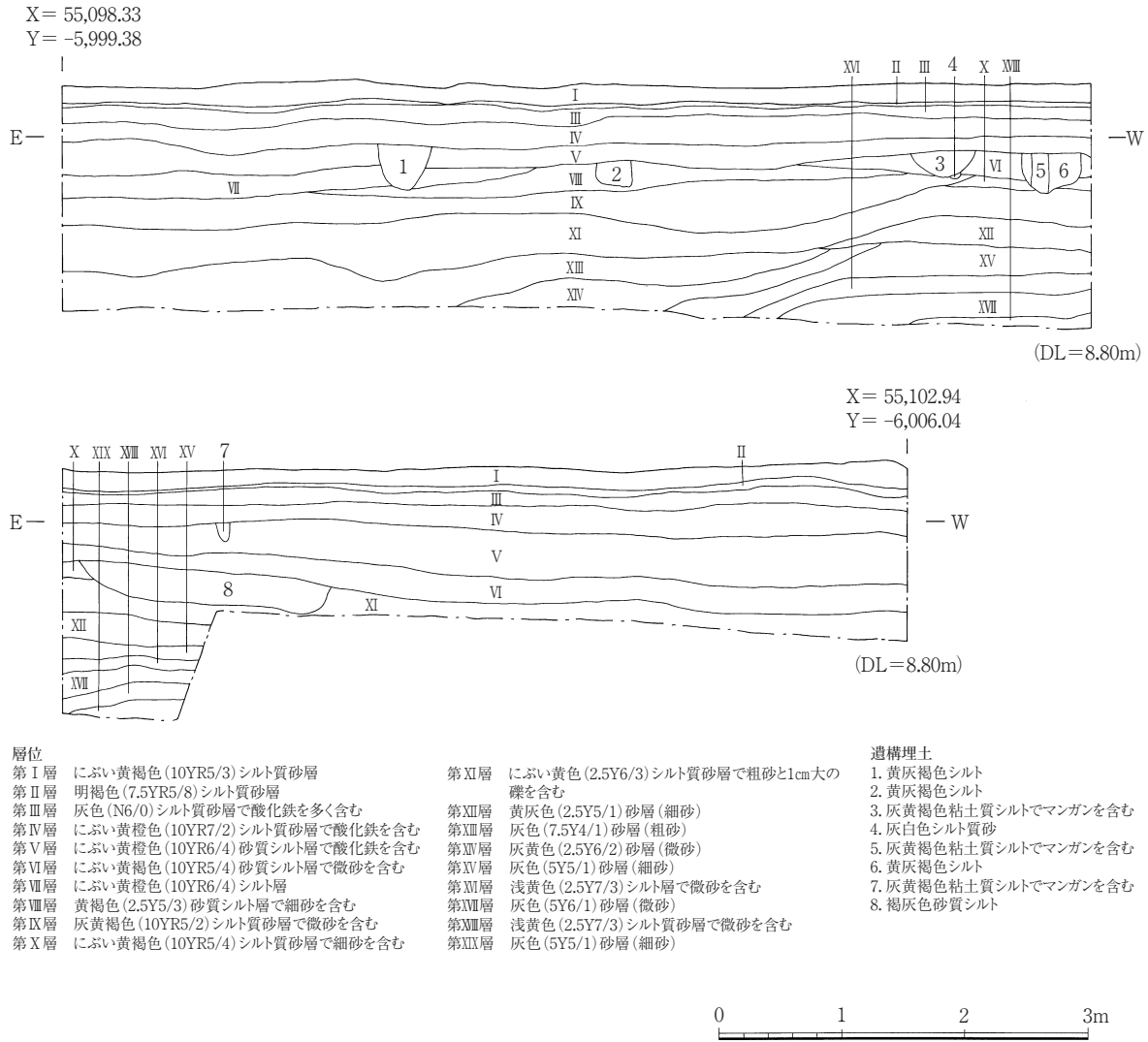


Fig.169 第III調査地区南西部セクション図

第I層は耕作土、第II層はそれに伴う床土で、これらは調査区全面で見られた。調査区東部においては、第I層の上に客土と攪乱層の堆積が認められた。

第III層と第IV層は近世の遺物包含層で、ほぼ水平に堆積する。調査区南部では部分的に第III層と第IV層に分層できたが、その他の多くの部分では第III層のみ認められた。第III層はほぼ全面でみられ、酸化鉄を多く含み、厚さは約10~30cmを測る。第IV層は調査区南部でみられ、厚さ約20~25cmを測る。いずれも調査区東部においては攪乱と削平を受け、粘土化して変色している箇所も多くみられた。

第V層は中世の遺物包含層で、北西部を除く全面で認められた。厚さは約20~40cmを測る。北東部から南西部に向かって傾斜し、その比高差は約35cmを測る。

第VI層も中世の遺物包含層で、南西部のごく一部のみで認められた。厚さは約10~25cmを測り、西に向かって大きく傾斜し、その比高差は約0.55mを測る。

第VII層以下は自然堆積層である。第VII層は調査区東半で見られた土層で、厚さ約20cmを測る。

第Ⅷ層と第Ⅸ層は調査区西部でみられた土層で、いずれも厚さ10～20cmを測り、西に向かって大きく傾斜する。

第Ⅹ層以下は調査区南西部の下層確認トレンチでのみ確認した土層である。砂層またはシルト質砂層で起伏に富んでおり、仁淀川の氾濫の影響を受けたものとみられる。

第Ⅹ層は非常に起伏に富んでおり、西端部には見られない。厚さ5～40cmを測る。

第Ⅺ層も非常に起伏に富んでおり、厚さ20～45cmで、1cm大の礫を含んでいる。

第Ⅻ層は西端部でみられた層で、厚さ20～25cmを測り、西に傾斜する。

第Ⅼ層と第Ⅽ層はいずれも砂層で起伏に富んでおり、東に傾斜する。厚さは第Ⅼ層が20～40cm、第Ⅽ層が約15cmを測る。

第Ⅾ層から第Ⅹ層は西端部のみで確認された層で、いずれも東に傾斜し、厚さは15～30cmを測る。

### (3) 堆積層出土遺物

#### 第Ⅰ層出土遺物

近世磁器 (Fig.170-3001)

3001は肥前系の瓶で、底部の約1/2が残存し、底径9.0cmを測る。底部には断面三角形を呈する削り出し高台を有し、胴部は底部より滑らかに立ち上がる。外面には灰釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。内面は露胎で、回転ナデ調整の痕が明瞭に残る。胎土は密で、焼成は良好である。

石製品 (Fig.170-3002)

3002は砥石で、一部が欠損する。全長17.4cm、全幅6.7cm、全厚3.6cmを測る。3面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

古銭 (Fig.170-3003)

3003は寛永通寶で、新寛永とみられる。全面に錆化がみられる。銭径2.15cm、内径1.93cm、穿径0.65cm、銭厚0.12cm、重量1.8gを測る。

#### 第Ⅳ層出土遺物

須恵器 (Fig.171-3004)

3004は高杯の脚部で、一部が残存し、底径13.7cmを測る。脚部はハの字状に開き、端部は外傾する

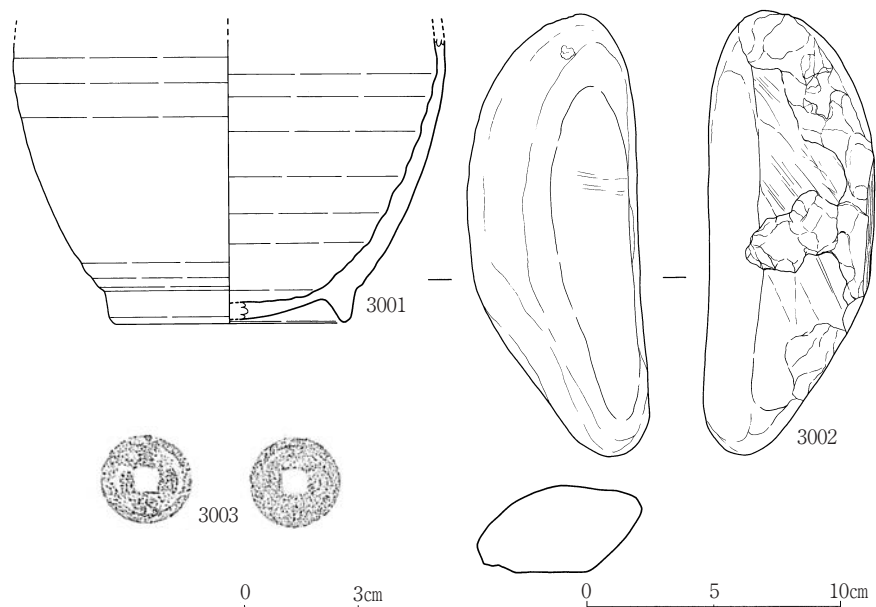


Fig.170 第Ⅰ層出土遺物実測図 (近世磁器・石製品・古銭)

面を有し、器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

土師質土器 (Fig.171-3005~3007)

3005・3006は小皿である。3005は底部が完存し、口径6.6cm、器高1.9cm、底径4.3cmを測る。口縁部はやや内湾し、端部を細く仕上げる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。3006は約1/2が残存し、口径9.1cm、器高2.1cm、底径4.7cmを測る。器壁が薄く、口縁部は真っすぐ伸びる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

3007は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径15.8cmを測る。口縁部は内湾し、端部は大きく肥厚し丸く収める。外面には断面三角形を呈する扁平な鏝がめぐる。調整は内面がヨコ方向のハケの後ナデ、口縁部と外面はヨコナデで、鏝の下部には煤が付着する。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は、内面がにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色または褐色を呈する。

青花 (Fig.171-3008)

3008は景德鎮窯系の碗で、底部の約1/4が残存し、底径6.6cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、体部は

内湾して立ち上がる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギを行う。内外面には圈線、見込には花文の染付がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

近世陶器

(Fig.171-3009・3010)

3009は瀬戸・美濃系の広東碗で、底部が完存し、底径6.0cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有する。全面に白化粧土を施した後、透明釉を薄く掛け、畳付は釉ハギを行う。外面には不明であるが染付がみら

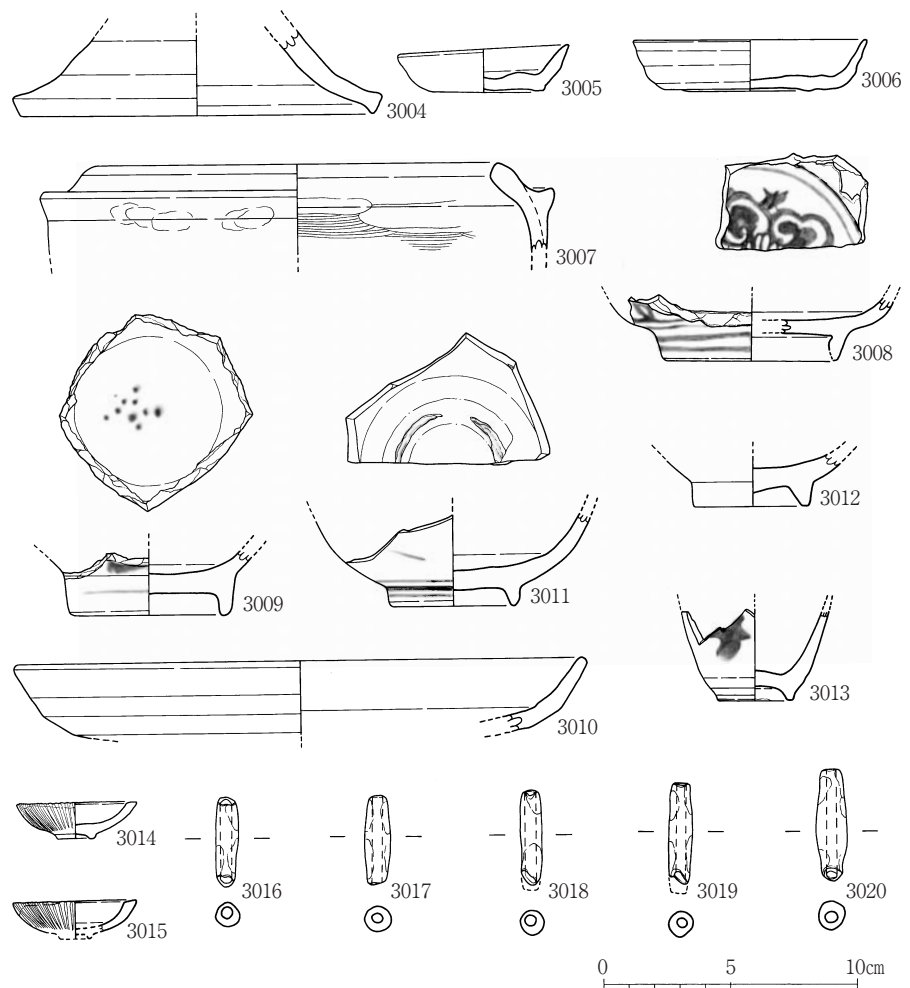


Fig.171 第IV層出土遺物実測図 (須恵器・土師質土器・青花ほか)

れ、見込には五弁花のコンニャク印判が施される。胎土はやや密で、焼成はやや不良である。

3010は皿で、口縁部の一部が残存し、口径2.9cmを測る。口縁部は内湾し、内面には沈線状の段を有する。体部外面に回転ヘラ削り調整を行った後、全面に灰釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰色を呈する。

#### 近世磁器 (Fig.171-3011~3015)

3011・3012は碗である。3011は肥前系の丸碗とみられ、底部の約1/2が残存し、底径4.7cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有し、体部は内湾して立ち上がる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギ、見込は蛇の目釉ハギを行い、釉ハギを行った部分には砂が付着する。外面には文様不明の染付がみられる。胎土は密で、焼成はやや不良である。3012は小型の碗で、底部の約2/3が残存し、底径4.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有する。内面と畳付付近まで青磁釉を施し、畳付には砂が付着する。胎土はやや密で、黒色粒を含み、焼成は良好である。

3013は小杯で、底部の約1/3が残存し、底径3.0cmを測る。底部には断面台形を呈する小さな削り出し高台を有し、体部は外上方に真っすぐ伸びる。全面に透明釉を施し、畳付は釉ハギを行い、外面には染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

3014・3015は肥前系の紅皿である。型成形で、貝殻状を呈し、底部には断面半円形を呈する小さな高台を有する。内面と口縁部外面には白磁釉を薄く施す。3014は約4/5が残存し、口径4.7cm、器高1.4cm、底径1.4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。3015は口縁部の約1/3が残存し、口径4.8cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。

#### 土製品 (Fig.171-3016~3020)

3016~3020は土錘で、全面にナデ調整を施す。3016は円筒形で、完形を呈し、全長3.5cm、全幅0.9cm、孔径0.5cm、重量2.4gを測る。3017は円筒形で、ほぼ完形を呈し、全長3.5cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量2.8gを測る。3018は円筒形で、一部が欠損し、全長3.7cm、全幅0.9cm、孔径0.5cm、重量2.3gを測る。3019は円筒形で、一部が欠損し、全長3.9cm、全幅0.9cm、孔径0.4cm、重量2.6gを測る。3020は円筒形で、一部が欠損し、全長4.4cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量5.2gを測る。

### 第V層出土遺物

#### 土師器 (Fig.172-3021)

3021は大和型の搬入品とみられる甕で、口縁部の約1/5が残存し、口径22.8cmを測る。器壁が非常に薄く、胴部は球形を呈するものとみられ、頸部はくの字状に屈曲して、口縁部は直線的に外上方に伸び、端部は内側に大きく肥厚して丸く収める。また、頸部外面には接合痕がみられる。調整は胴部内面がナデで、頸部には指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデ、胴部外面にナデ調整を施し、一部指頭圧痕がみられる。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成はやや良好で、色調は、内面ににぶい黄橙色、外面がにぶい橙色または灰黄褐色を呈する。

#### 須恵器 (Fig.172-3022)

3022は鉢で、口縁部の一部が残存する。体部は真っすぐ外上方に伸び口縁部に至り、器面には回転ナデ調整を施す。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰色を呈する。

瓦器 (Fig.172-3023~3025)

3023~3025は椀である。3023は底部の一部が残存し、底径4.2cmを測る。底部には断面三角形を呈する高台を貼付し、体部は内湾して立ち上がる。調整は内面がナデで、一部ヘラ磨きがみられ、外面はナデで指頭圧痕が残る。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成は不良で、色調は、内面が灰色、外面が灰黄色を呈し、炭素は外面の一部にのみみられる。3024は口縁部の一部が残存し、口径13.7cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部に至る。調整は内面がナデで、その後一部ヘラ磨きを施し、口縁部のヨコナデは1段で、外面はナデで指頭圧痕が残る。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも灰色または暗灰色ないし灰白色を呈し、炭素は全面に吸着する。3025は口縁部の一部が残存し、口径15.3cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁部に至る。調整は内面がナデで、その後一部ヘラ磨きを施し、口縁部のヨコナデは1段で、外面はナデで指頭圧痕が残る。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰色を呈し、炭素は全面に吸着する。

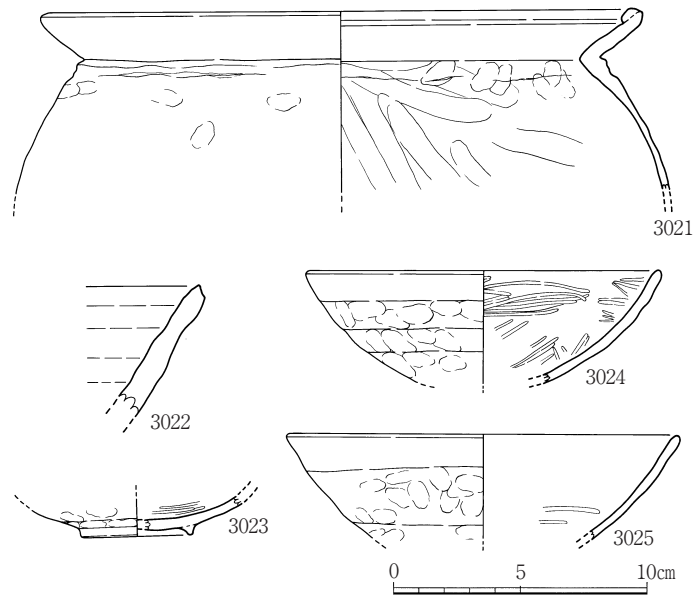


Fig.172 第V層出土遺物実測図 (土師器・須恵器・瓦器)

東播系須恵器 (Fig.173-3026~3031)

3026~3028は片口鉢である。3026は口縁部の一部が残存し、口径27.6cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び、口縁部はくの字状に屈曲して上下に拡張する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成は悪く、色調は内外面とも灰白色を呈する。3027は底部の一部が残存し、底径11.0cmを測る。底部は平らで、体部は底部から屈曲して外上方に伸びる。調整は著しく摩耗するため不明である。胎土はやや粗く、焼成は不良で、色調は、内面が灰白色、外面が灰黄色を呈する。3028は底部の一部が残存し、底径10.8cmを測る。底部は平らで、体部は底部から屈曲して外上方に真っすぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は内外面とも灰白色を呈する。

3029~3031は椀である。3029は口縁部の一部が残存し、口径16.3cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び、口縁端部は丸く収める。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色または淡黄色を呈する。3030は底部の一部が残存し、底径4.4cmを測る。体部は小さな底部からやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く、焼成はやや不良で、色調は内外面とも灰白色を呈する。3031は底部の一部が残存し、底径6.4cmを測る。体部は底部からやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はや

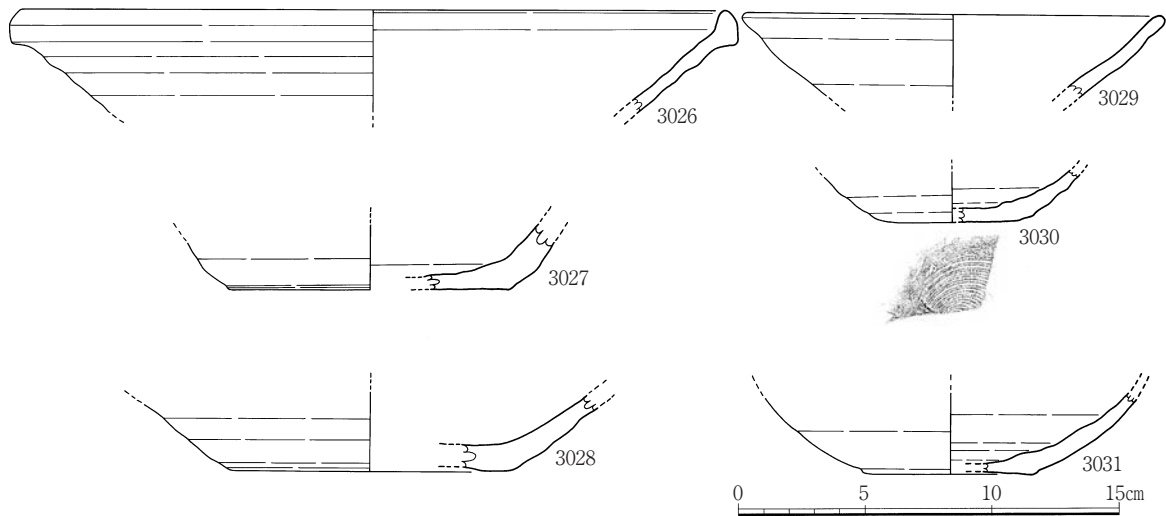


Fig.173 第V層出土遺物実測図（東播系須恵器）

や粗く，焼成は良好で，色調は内外面とも灰白色または褐灰色を呈する。

土師質土器（Fig.174・175-3032~3050）

3032~3040は杯である。3032は柱状高台の底部の一部が残存し，底径5.8cmを測る。高台は中空で内傾し，体部は外上方へ立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で，焼成は良く，色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。3033は底部の約1/3が残存し，底径5.8cmを測る。底部は円盤状をなし，体部はやや内湾して立ち上がる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で，焼成はやや悪く，色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。3034は底部がほぼ完存し，底径6.4cmを測る。体部は底部から屈曲して外上方に真っすぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土はやや密で，焼成は比較的良く，色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が浅黄橙色または黄灰色を呈する。3035は底部の約1/3が残存し，底径6.7cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し，内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で，焼成は比較的良く，色調は内外面とも灰白色を呈する。3036は底部の約1/4が残存し，底径7.9cmを測る。底部は器壁が薄く，体部は底部から屈曲して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し，内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りで，板状圧痕が残る。胎土はやや密で，焼成は比較的良く，色調は，内面がにぶい赤褐色またはにぶい橙色，外面がにぶい橙色を呈する。3037は底部の約1/3が残存し，底径8.0cmを測る。体部は底部から屈曲して外上方に真っすぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土はやや密で，焼成は比較的良く，色調は，内面がにぶい黄橙色，外面が浅黄色または暗灰黄色を呈する。3038は底部の約1/3が残存し，底径8.3cmを測る。体部は底部から屈曲して外上方に伸びる。器面には回転ナデ調整を施し，底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で，焼成は良く，色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。3039は口縁部の一部が残存し，口径15.1cmを測る。体部は内湾し，口縁部は外上方に伸びる。器面には回転ナデ調整を施す。胎土は密で，焼成は良く，色調は内外面ともにぶい黄橙色またはにぶい橙色を呈する。3040は約1/4が残存し，口径15.3cm，器高4.4cm，底径8.0cmを測る。器壁が厚く，体部は外上方

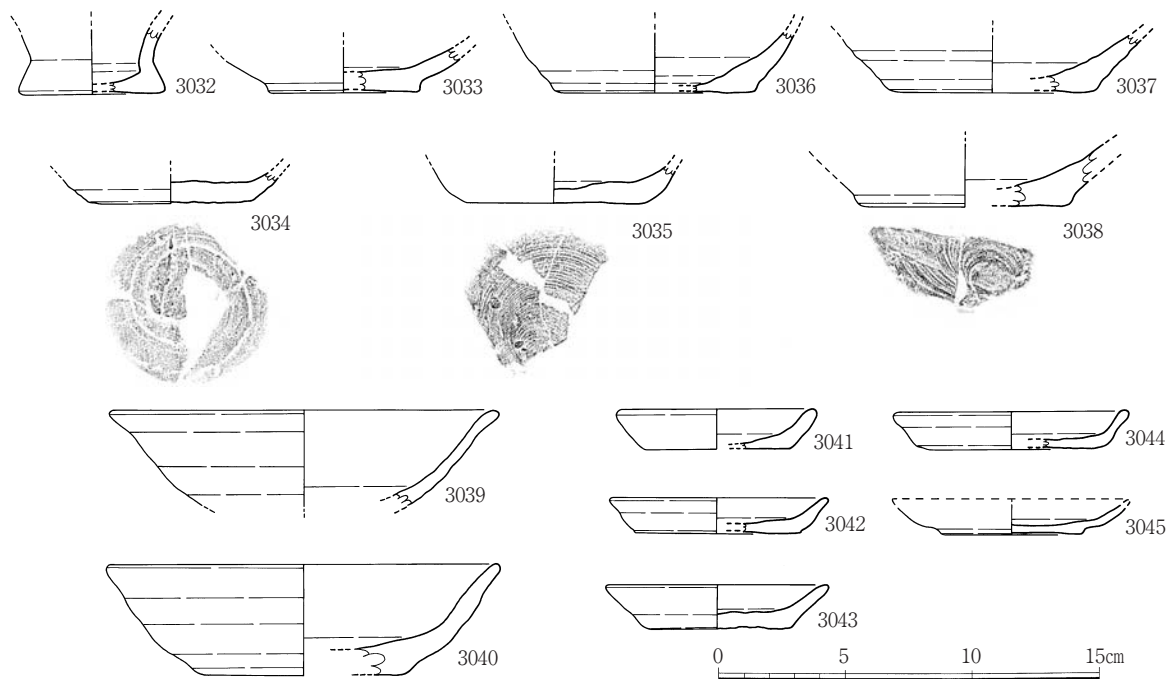


Fig.174 第V層出土遺物実測図（土師質土器）

に真っすぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

3041～3045は小皿である。3041は約1/4が残存し、口径7.5cm、器高1.6cm、底径5.7cmを測る。口縁部はやや内湾し、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。3042は約1/4が残存し、口径8.4cm、器高1.4cm、底径6.4cmを測る。口縁部は真っすぐ伸び、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面ともにおい橙色を呈する。3043は約1/3が残存し、口径8.6cm、器高1.8cm、底径5.6cmを測る。口縁部は真っすぐ伸び、器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転ヘラ切りとみられるが、摩耗するため不明瞭である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにおい黄橙色を呈する。3044は約1/3が残存し、口径8.9cm、器高1.5cm、底径6.4cmを測る。口縁部は真っすぐ伸び、端部は肥厚して丸く収める。調整は著しく摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面ともにおい黄橙色またはにおい橙色を呈する。3045は底部の約2/3が残存し、底径6.4cmを測る。口縁部は内湾し、調整は著しく摩耗するため不明である。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

3046は鍋で、口縁部の一部が残存し、口径31.6cmを測る。口縁部は直立し、端部は肥厚して受け部状を呈する。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデで指頭圧痕が残り、外面には煤が付着する。胎土は粗く、砂粒を含み、焼成は良好で、色調は、内面がにおい黄橙色または黒褐色、外面が黒褐色を呈する。

3047～3050は羽釜である。3047は口縁部の破片で、やや内湾し、端部は内傾する面を有する。外

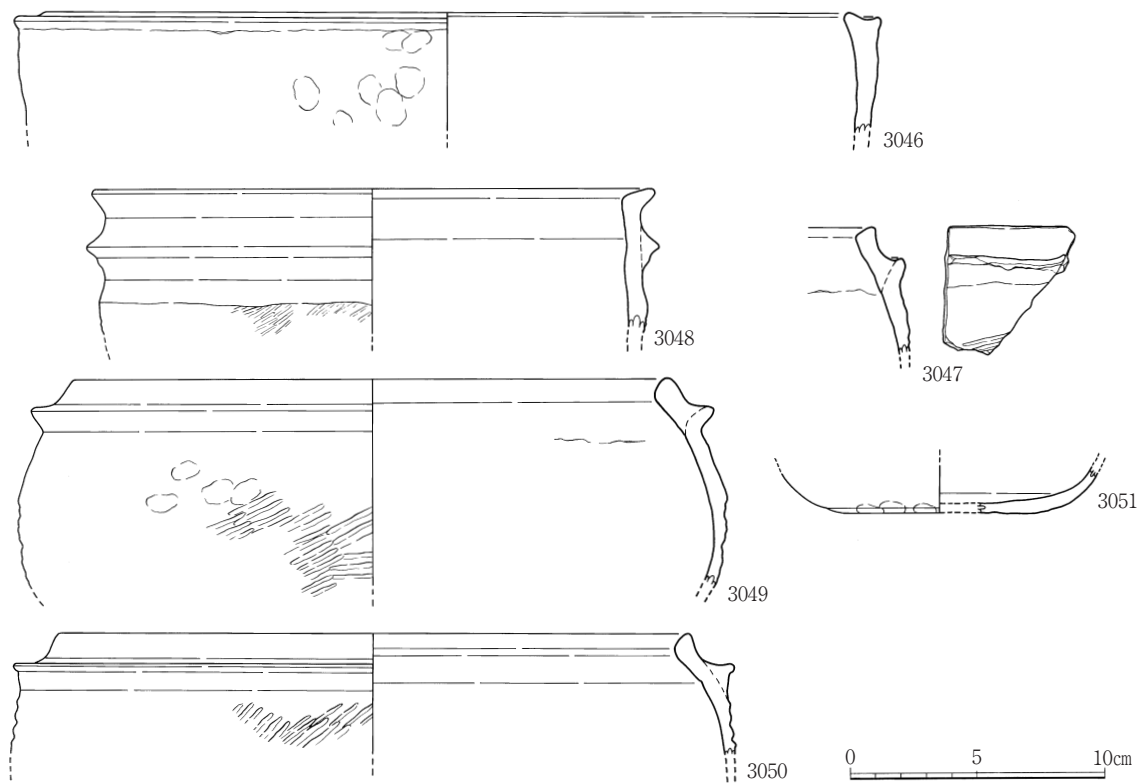


Fig.175 第V層出土遺物実測図（土師質土器・手づくね土器）

面には断面三角形を呈する小さな鏝がめぐり，鏝の下には煤が付着する。調整は内面がナデ，口縁部がヨコナデ，外面がナデで，一部斜め方向のタタキ目が残る。胎土はやや粗く，焼成は良好で，色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。3048は口縁部の一部が残存し，口径20.8cmを測る。口縁部は直立し，端部は短く外上方に伸びる。外面には断面三角形を呈する小さな鏝がめぐり，煤が付着する。調整は内面がナデ，口縁部がヨコナデ，外面がナデで，一部斜め方向のタタキ目が残る。胎土はやや粗く，砂粒を含み，焼成は良好で，色調は，内面が橙色，外面が褐灰色または橙色を呈する。3049は口縁部と胴部の一部が残存し，口径23.2cmを測る。胴部は丸く，胴部上位に最大径を有し，口縁部は内湾して，端部は肥厚する。外面には断面三角形を呈する小さな鏝がめぐり，鏝より下には煤が付着する。調整は内面がナデ，口縁部がヨコナデ，外面がナデで，胴部には斜め方向のタタキを施す。胎土は粗く，焼成は良好で，色調は，内面が橙色または灰褐色，外面がにぶい褐色を呈する。3050は口縁部の一部が残存し，口径24.7cmを測る。口縁部は内湾し，端部は肥厚する。外面には断面三角形を呈する小さな鏝がめぐり。調整は内面がヨコ方向のナデ，口縁部がヨコナデ，外面には斜め方向のタタキを施す。胎土はやや粗く，焼成は良好で，色調は，内面が橙色，外面がにぶい黄橙色を呈する。

手づくね土器 (Fig.175-3051)

3051は皿で，底部の一部が残存し，底径8.8cmを測る。器壁が薄く，体部は底部より内湾して緩やかに立ち上がる。器面にはナデ調整を施し，外面には指頭圧痕が残り，内面にはタールが付着する。胎土は精良で，焼成は良く，色調は，内面が灰白色または灰褐色，外面が灰白色を呈する。



瓦質土器

(Fig.176-3052~3054)

3052は鍋で、口縁部の一部が残存し、口径21.4cmを測る。頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は外上方に短く伸びる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、

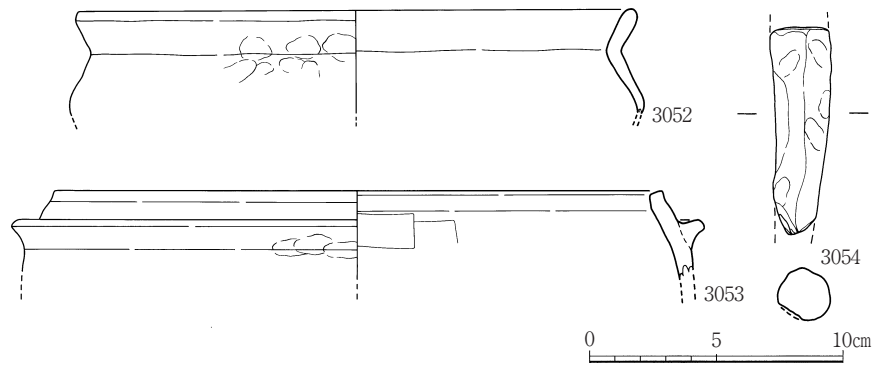


Fig.176 第V層出土遺物実測図(瓦質土器)

外面はナデで指頭圧痕が残り、全面に炭素が吸着する。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面とも灰白色または黒色を呈する。

3053・3054は羽釜である。3053は口縁部の一部が残存し、口径23.8cmを測る。口縁部は内湾し、外面には断面三角形を呈する小さな鋸がめぐる。調整は内面がナデまたは板ナデ、口縁部がヨコナデ、外面はナデで指頭圧痕が残る。外面には炭素の吸着はみられない。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は、内面が灰色、外面が灰黄色を呈する。3054は足釜の脚部で、一部が残存する。残存長8.2cm、全幅2.3cmを測り、断面は円形を呈する。全面にナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。器面には炭素が吸着する。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は灰色を呈する。

白磁 (Fig.177-3055・3056)

3055は碗で、口縁部の一部が残存し、口径15.6cmを測る。体部は直線的に伸びて口縁に至り、口縁部は玉縁状を呈する。全面に灰白色の釉を薄く施す。胎土は密で、焼成は良好である。

3056は皿で、底部の約1/3が残存し、底径6.2cmを測る。体部は平らな底部より屈曲して立ち上がる。内面と体部外面には灰白色の釉を薄く施し、底部外面は回転削り調整を行い、露胎である。胎土はやや密で、焼成は良好である。

青磁 (Fig.177-3057~3060)

3057~3060は龍泉窯系の碗である。3057~3059はいずれも底部の破片で、器壁が厚く、断面台形を呈する削り出し高台を有する。内面と外面の高台付近までオリーブ色の釉を約1mmの厚さに施す。3057は底径5.0cmを測り、胎土は密で、黒色粒を若干含み、焼成は良好である。3058は底径5.1cmを測り、胎土はやや密で、焼成はやや不良である。3059は底径5.2cmを測り、胎土はやや密で、焼成は良好である。3060は底部の約1/3が残存し、底径5.3cmを測る。体部は大振りで腰が張る形態を呈し、底部には断面台形を呈する削り出し高台を有する。全面にオリーブ色の釉を約1mmの厚さに施し、外底

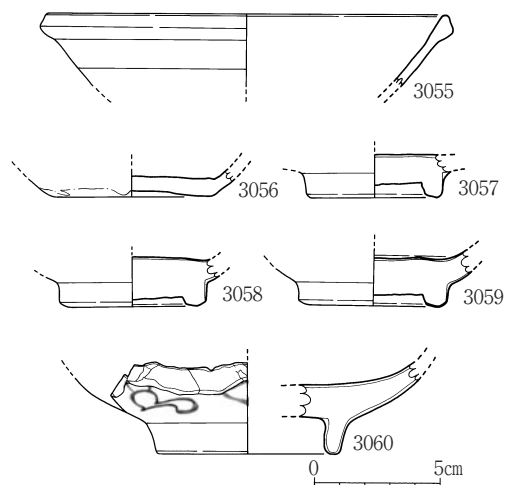


Fig.177 第V層出土遺物実測図(白磁・青磁)

面の釉を掻きとり，外面には蓮弁文の一部とみられる文様が残存する。胎土はやや粗く，黑色粒を若干含み，焼成は良好である。

近世陶器 (Fig.178-3061)

3061は肥前系の碗で，上層からの混入とみられる。底部が完存し，底径4.7cmを測る。底部にはハの字状に開く低い削り出し高台を有し，高台内の抉りは浅い。内面と外面の一部に灰釉を施す。胎土はやや密で，焼成は比較的良く，釉調は灰オリーブ色，生地はにぶい黄橙色を呈する。

土製品 (Fig.178-3062)

3062は円筒形の土錘で，一部が欠損する。全長3.8cm，全幅1.3cm，孔径0.5cm，重量4.5gを測り，全面にナデ調整を施す。

石製品 (Fig.178-3063~3066)

3063は滑石製の石鍋で，口縁部の一部が残存する。体部は外上方に真っすぐ伸び，口縁部は肥厚して鏝状を呈する。内面は研磨され，口縁部外面は斜め方向の削り，体部外面はヨコ方向の削りを施す。また，口縁端部と体部外面には煤が付着する。

3064~3066は砥石である。3064は一部が残存し，全長5.5cm，全幅4.3cm，全厚4.0cmを測る。残存部で3面に使用痕がみられる。また，4面に被熱の痕跡がみられる。石材は砂岩である。3065は一部が欠損する。直方体を呈するものとみられ，全長6.8cm，全幅3.2cm，全厚2.6cmを測る。残存部で4面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。3066は完形を呈し，全長12.6cm，全幅4.1cm，全厚3.9cmを測る。残存部で4面に使用痕が残り，3ヶ所に刺突した痕跡がみられる。石材は細粒花崗岩である。

古銭 (Fig.178-3067)

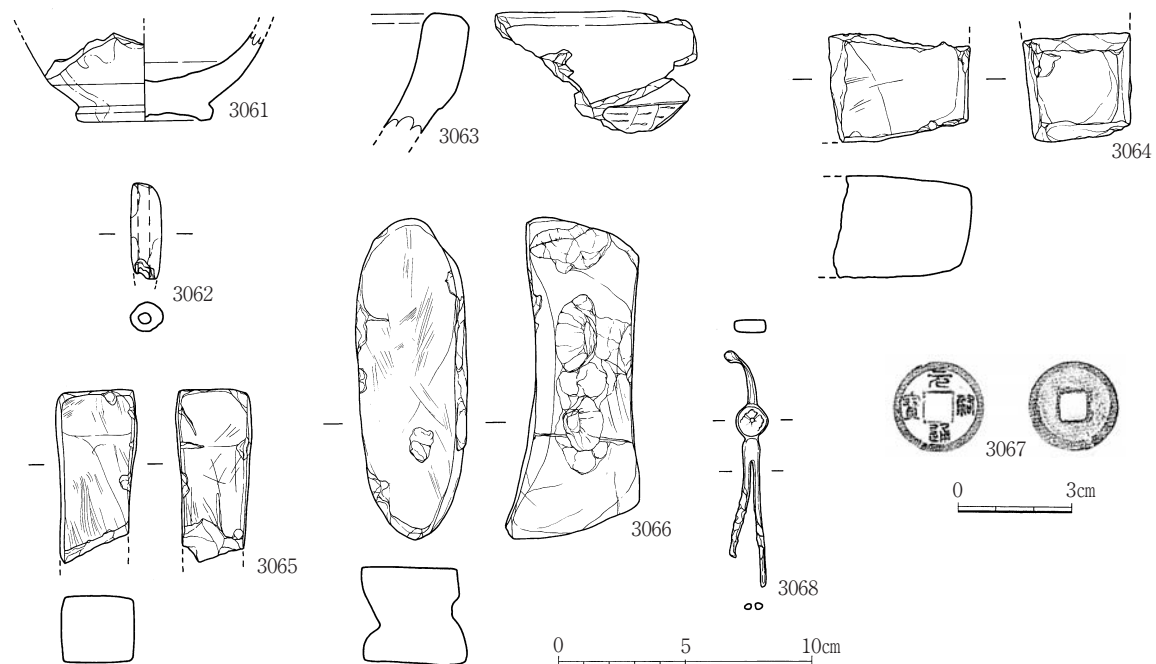


Fig.178 第V層出土遺物実測図 (近世陶器・土製品・石製品ほか)

3067は篆書の元祐通寶で、銭径2.40cm、内径1.90cm、穿径0.69cm、銭厚0.14cm、重量2.2gを測る。北宋銭で、初鑄造年は1086年である。

銅製品 (Fig.178-3068)

3068は簪で、一部が欠損する。全面に銹化がみられ、全長9.3cm、全幅1.2cm、全厚0.5cmを測る。断面は方形を呈し、花文の刻印がみられる。

その他の出土遺物

攪乱を受けた遺構から出土したもので、いずれも近代の遺物と供出した。

土師質土器 (Fig.179-3069)

3069は小皿で、底部の約1/4が残存し、底径5.8cmを測る。器面が摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りとみられるが、不明瞭である。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも黄橙色を呈する。

古銭 (Fig.179-3070・3071)

3070は寛永通寶で、古寛永である。銭径2.27cm、内径1.85cm、穿径0.56cm、銭厚0.12cm、重量2.2gを測る。3071は昭和14年鑄造の五銭である。銭径1.90cm、内径1.64cm、穿径0.38cm、銭厚0.15cm、重量2.7gを測る。表面には「大日本 昭和十四年」銘と桜がみられ、裏面には「五銭」銘と菊と桐が鑄出される。

銅製品 (Fig.179-3072)

3072は煙管で、完形を呈し、全長17.6cm、全幅0.9cm、火皿径1.0cm、火皿高0.7cmを測る。雁首と吸口が一体のもので、内部には木質のものが詰まる。

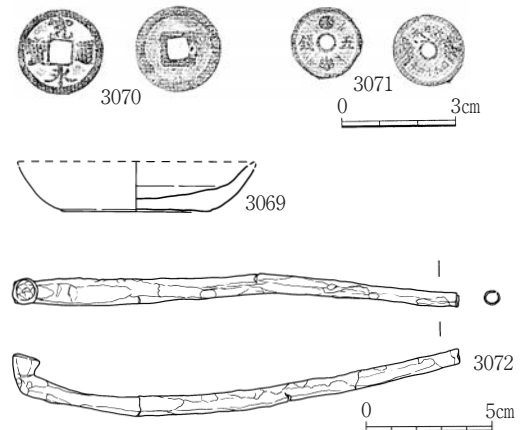


Fig.179 その他の出土遺物実測図  
(土師質土器・古銭・銅製品)

#### (4) 遺構と遺物

##### ① 中世

##### i 掘立柱建物跡

##### SB-3001 (Fig.180)

北東部で確認した梁間1間 (2.70m)、桁行2間 (4.50~4.60m) の南北棟建物で、棟方向はN-23°-Eである。SB-3002と重なる。柱間寸法は、梁間 (東西) が2.70m、桁行 (南北) が2.20~2.40mであった。柱穴は径0.35~0.70mの円形または楕円形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片7点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

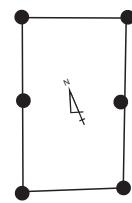


Fig.180 SB-3001

##### SB-3002 (Fig.181)

北東部で確認した梁間1間 (2.60~2.70m)、桁行3間 (4.95m) の南北棟建物で、棟方向はN-58°-Eである。SB-3001と重なる。柱間寸法は、梁間 (東西) が

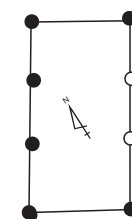


Fig.181 SB-3002

2.60～2.70m, 桁行(南北)が1.55～1.80mであった。柱穴は径0.30～0.70mの円形または楕円形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点, 土師質土器片10点, 鉄製品1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

**SB-3003** (Fig.182)

北部で確認した梁間1間(3.15～3.35m), 桁行4間(8.35～8.50m)の身舎の西側に下屋が付く, 東西2間(4.00～4.20m), 南北4間(8.35～8.50m)の南北棟建物である。棟方向はN-17°-Eである。柱間寸法は, 梁間(東西)が3.15～3.35m, 桁行(南北)が1.90～2.30mで, 下屋の出が0.85mであった。柱穴は径0.30～0.65mの円形または楕円形で, 柱径は約15cmとみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトまたはにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

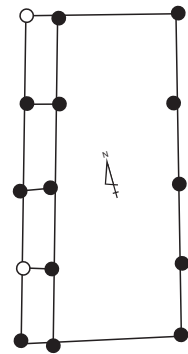


Fig.182 SB-3003

**SB-3004** (Fig.183)

南部で確認した梁間1間(4.00m), 桁行3間(6.00～6.10m)の東西棟建物で, 棟方向はN-75°-Wである。SB-3005と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が4.00m, 桁行(東西)が1.90～2.15mであった。柱穴は径0.60～0.90mの円形または楕円形で, 柱径は約20cmとみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片21点, 瓦質土器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

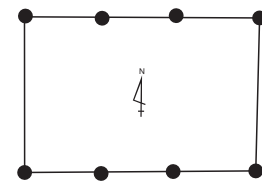


Fig.183 SB-3004

**SB-3005** (Fig.184)

南部で確認した梁間1間(2.80m), 桁行3間(5.45～5.50m)の東西棟建物で, 棟方向はN-74°-Wである。SB-3004と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が2.80m, 桁行(東西)が1.70～2.05mであった。柱穴は径0.35～0.60mの円形または楕円形で, 柱径は15～20cmとみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトまたは灰黄色シルト質砂であった。出土遺物には東播系須恵器片1点, 土師質土器片12点, 中世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

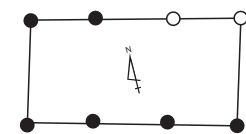


Fig.184 SB-3005

**SB-3006** (Fig.185)

南部で確認した梁間2間(4.20～4.30m), 桁行3間(6.60～6.80m)の総柱東西棟建物で, 棟方向はN-87°-Wである。SB-3005と重なる。柱間寸法は, 梁間(南北)が1.95～2.30m, 桁行(東西)が2.10～2.40mであった。柱穴は径0.30～0.55mの円形または楕円形で, 柱径は10～20cmとみられる。埋土は灰黄褐色粘土質シルトまたは灰黄色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片17点, 中世陶器片1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

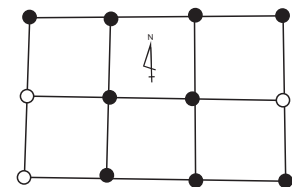


Fig.185 SB-3006

Tab.10 第Ⅲ調査地区中世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備 考
	梁間 × 桁行	梁間 (m) × 桁行 (m)	柱間寸法				
			梁間 (m)	桁行 (m)			
SB-3001	1×2	2.70 × 4.50~4.60	2.70	2.20~2.40	12.29	N-23°-E	
SB-3002	1×3	2.60~2.70 × 4.95	2.60~2.70	1.55~1.80	13.12	N-58°-E	
SB-3003	2×4	4.00~4.20 × 8.35~8.50	3.15~3.35	1.90~2.30	34.55	N-17°-E	下屋
SB-3004	1×3	4.00 × 6.00~6.10	4.00	1.90~2.15	24.20	N-75°-W	
SB-3005	1×3	2.80 × 5.45~5.50	2.80	1.70~2.05	15.33	N-74°-W	
SB-3006	2×3	4.20~4.30 × 6.60~6.80	1.95~2.30	2.10~2.40	28.48	N-87°-W	総柱

ii 塀・柵列跡

SA-3001

南部で確認した東西塀 (N-80°-W) で, SB-3004の東隣に位置する。3間分 (5.20m) を検出し, 柱間は1.60~2.00mである。柱穴は径0.30~0.60mの円形または楕円形で, 柱径は約20cmとみられる。埋土は灰黄褐色シルトまたは灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

Tab.11 第Ⅲ調査地区中世塀・柵列跡計測表

遺構番号	規 模			方向 (NはGN)	備 考
	柱穴数 (個)	全長 (m)	柱間距離 (m)		
SA-3001	4	5.20	1.60~2.00	N-80°-W	

iii 土坑

SK-3001

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で, 北半分は調査区外へ続く。検出した南半分は長径0.99m, 短径0.86m, 深さ28cmを測り, 長軸方向はN-42°-Eを示す。断面は舟底形を呈し, 埋土は灰黄褐色粘土質シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点, 土師質土器片4点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

SK-3002 (Fig.186)

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.31m, 短辺1.25m, 深さ38cmを測り, 長軸方向はN-25°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は灰黄褐色粘土質シルトで, 炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点, 土師質土器片40点, 瓦質土器片2点, 鉄釘1点がみられたが, 復元図示できるものはなかった。

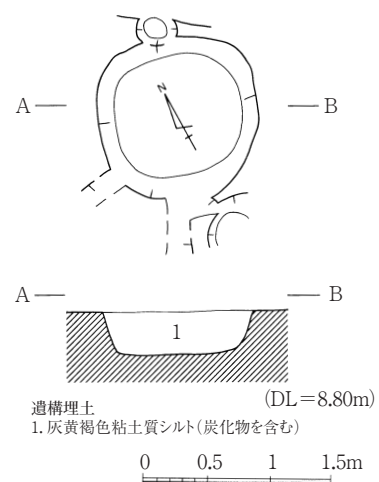


Fig.186 SK-3002

### SK-3003

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SD-3003に切られる。長辺1.11m、短辺1.01m、深さ0.67mを測り、長軸方向はN-65°-Wを示す。断面はU字形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片6点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3004

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SD-3003に切られる。長辺1.04m、短辺0.68m、深さ27cmを測り、長軸方向はN-24°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3005

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、一部攪乱を受ける。長辺1.30m、短辺1.23m、深さ32cmを測り、長軸方向はN-81°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、東播系須恵器片2点、土師質土器片20点、青磁片1点、鉄釘1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3006

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、一部攪乱を受ける。長辺1.57m、短辺1.04m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-12°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3007

調査区北東部で検出した溝状の土坑で、SK-3008に切られる。長さ1.46m、短辺0.70m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片3点がみられ、東播系須恵器(3073)が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.188-3073)

3073は椀で、約1/4が残存し、口径18.0cm、器高4.7cm、底径6.8cmを測る。粘土紐巻き上げ成形で、体部はやや内湾して立ち上がり口縁部に至る。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部には重ね焼痕がみられる。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも青灰色または浅黄色を呈する。

### SK-3008

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SK-3007を切る。長径0.86m、短径0.81m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-84°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片2点、瀬戸焼片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3009**

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3010を切る。一辺1.20m、深さ12cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片7点、土製品1点、鉄滓がみられ、土製品(3074)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.188-3074)

3074は円筒形の土錘で、一部が欠損する。全長4.6cm、全幅1.5cm、孔径0.5cm、重量7.0gを測り、全面にナデ調整を施す。

**SK-3010**

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3009に切られる。長辺1.20m、短辺1.09m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-21°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片10点、鉄釘1点、鉄滓がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3011** (Fig.187)

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、北半分は調査区外へ続く。長辺1.14m、短辺1.10m、深さ1.01mを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が黄灰色シルト質砂、下層が灰黄褐色砂質シルトで、いずれも淡黄色シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片50点、瓦質土器片2点、中世陶器片1点、土製品3点、鉄製品4点がみられ、土製品1点(3075)、鉄製品2点(3076・3077)が図示できた。

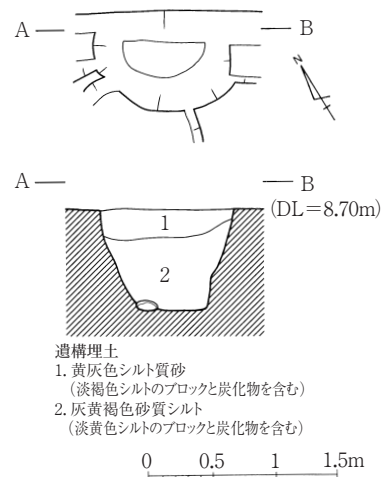


Fig.187 SK-3011

出土遺物

土製品 (Fig.188-3075)

3075は紡錘形の土錘で、一部が欠損する。全長3.9cm、全幅1.3cm、孔径0.4cm、重量4.8gを測り、全面にナデ調整を施す。

鉄製品 (Fig.188-3076・3077)

3076・3077は釘である。3076は頂部が環状を呈するL字形の釘で、全長7.6cm、全幅0.6cmを測る。断面は方形を呈し、先端を細く仕上げ、環状の部分にはヘアピン状の鉄製品が付く。3077は頂部がL字形を呈する釘で、全長7.7cm、全幅0.6cm、全厚0.4cmを測る。断面は方形を呈し、先端を細く仕上げる。全面に銹化がみられる。

**SK-3012**

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、北半分は調査区外へ続く。検出した南半分は長径1.72m、短径0.55m、深さ39cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、瓦器片1点、土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3013

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.14m，短辺0.86m，深さ26cmを測り，長軸方向はN-52°-Eを示す。断面は舟底形を呈し，埋土は灰黄褐色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点，土師質土器片2点がみられ，東播系須恵器（3078）が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.188-3078)

3078は片口鉢で，口縁部の一部が残存し，口径32.4cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び，口縁部はくの字状に屈曲して上下に拡張する。調整は回転ナデで，口縁部には一部ヨコナデがみられる。また，口縁部には重ね焼痕がみられ，粘土が付着する。胎土はやや密で，焼成は良く，色調は内外面とも灰色を呈する。

### SK-3014

調査区北東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.23m，短径0.81m，深さ21cmを測り，長軸方向はN-13°-Eを示す。断面は舟底形を呈し，埋土は灰黄褐色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点，土師質土器片6点，瓦質土器片1点，青磁片1点がみられたが，復元図示できるものはなかった。

### SK-3015

調査区北東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.55m，短径0.96m，深さ12cmを測り，長軸方向はN-75°-Wを示す。断面は舟底形を呈し，埋土は灰黄褐色粘土質シルトで，炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点，土師質土器片1点，白磁1点がみられ，白磁（3079）が図示できた。

#### 出土遺物

白磁 (Fig.188-3079)

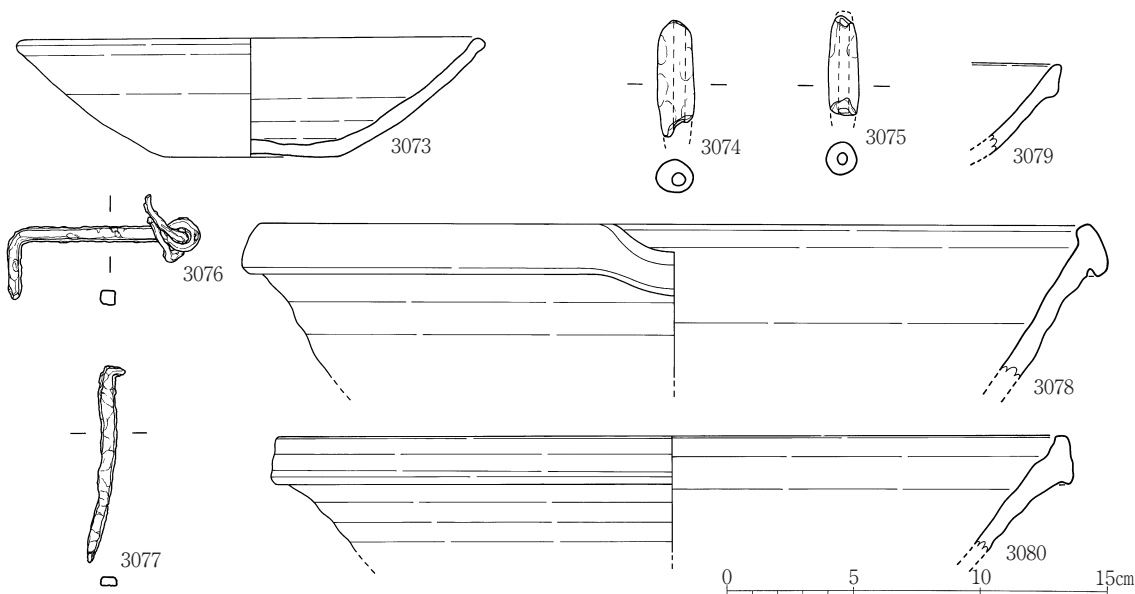


Fig.188 SK-3007~3016出土遺物実測図



3079は碗で、口縁部の一部が残存する。口縁部は玉縁状を呈し、器面には灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや粗く、黒色粒を含み、焼成はやや良好である。

#### SK-3016

調査区北東部で検出した楕円形の土坑である。長径2.04m、短径1.61m、深さ10cmを測り、長軸方向はN-70°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片4点、瓦質土器片1点がみられ、東播系須恵器(3080)が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.188-3080)

3080は片口鉢で、口縁部の一部が残存し、口径30.8cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び、口縁部はくの字状に屈曲して上下に拡張する。調整は回転ナデで、口縁部には一部ヨコナデを施し、重ね焼痕がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は内外面とも灰色を呈する。

#### SK-3017

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3018を切る。長辺1.46m、短辺1.05m、深さ27cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片20点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-3018

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SK-3017に切られる。長径0.66m、短径0.57m、深さ11cmを測り、長軸方向はN-8°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

#### SK-3019

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SD-3009に切られる。長径1.49m、短径1.34m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-19°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-3020

調査区北東部で検出した隅丸方形とみられる土坑で、北半分は調査区外へ続く。検出した南半分は長辺0.99m、短辺0.85m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-76°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、瓦質土器1点がみられ、瓦質土器(3081)が図示できた。

#### 出土遺物

瓦質土器 (Fig.189-3081)

3081は鍋で、口縁部と胴部の一部が残存する。胴部は丸く膨らみ、口縁部は屈曲して外上方へ短く伸びる。胴部はナデ調整を施し、外面には指頭圧痕がみられ、口縁部はヨコナデを施す。器面には炭素の吸着がみられる。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は、内面が灰色、外面が灰白色を呈する。

### SK-3021

調査区北東部で検出した楕円形とみられる土坑で、SK-3023に切られる。長径0.98m、短径0.86m、深さ21cmを測り、長軸方向はN-25°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点、常滑焼1点がみられ、常滑焼(3082)が図示できた。

#### 出土遺物

常滑焼 (Fig.189-3082)

3082は甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部は縁帯の幅が小さく、N字状を呈する。器面には回転ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は、内面が黒褐色または灰白色、外面が黒褐色または褐色を呈する。

### SK-3022

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3021・3023・3024に切られる。長辺1.70m、短辺1.25m、深さ27cmを測り、長軸方向はN-88°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3023

調査区北東部で検出した楕円形の土坑で、SK-3021・3022・3024を切る。長径0.93m、短径0.79m、深さ23cmを測り、長軸方向はN-29°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片30点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3024

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3023に切られる。長辺1.20m、短辺0.52m、深さ45cmを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片3点がみられ、東播系須恵器(3083)が図示できた。

#### 出土遺物

東播系須恵器 (Fig.189-3083)

3083は片口鉢で、口縁部の約1/5が残存し、口径22.6cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び、口縁部はくの字状に屈曲して上下に拡張する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部には重ね焼痕がみられる。胎土はやや粗く、焼成はやや良好で、色調は、内面が灰オリーブ色、外面が灰オリーブ色または灰色を呈する。

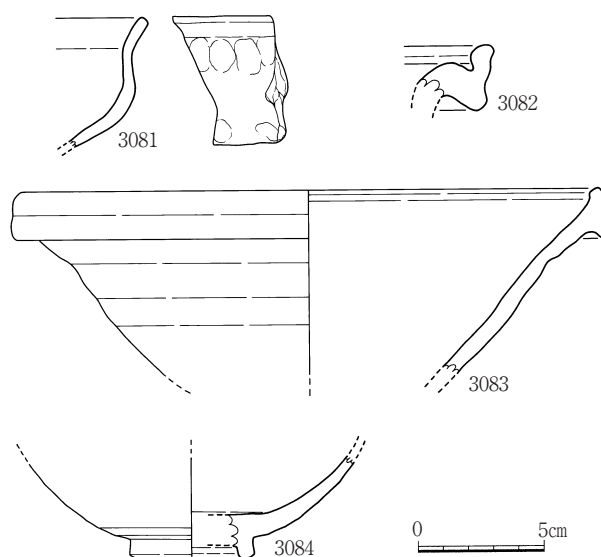


Fig.189 SK-3020~3025出土遺物実測図

**SK-3025**

調査区北東部で検出した溝状の土坑で、SK-3026を切る。長さ2.81m、幅0.76m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、瓦質土器片2点、青磁1点、鉄釘1点がみられ、青磁(3084)が図示できた。

**出土遺物**

青磁 (Fig.189-3084)

3084は龍泉窯系の碗で、底部の一部が残存し、底径4.4cmを測る。底部には断面台形を呈する削り出し高台を有し、体部は大きく内湾して立ち上がる。内面と外面の畳付付近まで灰オリーブ色の釉を薄く施す。胎土は密で、焼成は良好である。

**SK-3026**

調査区北東部で検出した不整楕円形の土坑で、SK-3025・3027に切られる。長径1.34m、短径1.13m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-25°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片3点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3027**

調査区北東部で検出した溝状の土坑で、攪乱を受け、SK-3028に切られる。長辺1.16m、短辺0.89m、深さ24cmを測り、長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片6点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3028**

調査区北東部で検出した隅丸方形とみられる土坑で、SK-3027を切る。長辺1.39m、短辺0.63m、深さ9cmを測る。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色砂質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3029**

調査区北部で検出した楕円形の土坑で、SK-3030を切り、北半分は調査区外へ続く。長径2.24m、短径0.81m、深さ27cmを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片20点、瓦質土器片2点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3030**

調査区北部で検出した溝状の土坑で、SK-3029・3052に切られ、北半分は調査区外へ続く。長辺5.35m、短辺1.26m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-48°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3031 (Fig.190)

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3052に切られる。長辺4.80m、短辺1.30m、深さ24cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片12点、瓦質土器片3点、青磁片1点、中世陶器片1点、土錘1点がみられ、瓦質土器1点(3085)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 瓦質土器 (Fig.193-3085)

3085は鍋で、口縁部と胴部の約1/8が残存し、口径25.4cmを測る。胴部は大きく膨らみ、上胴部に最大径を有する。口縁部は胴部から屈曲して外上方に短く伸びる。調整は胴部がナデで、外面には指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデを施す。器面には炭素の吸着はほとんどみられない。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は、内面が灰白色、外面が灰白色または褐灰色を呈する。

### SK-3032

SK-3031の底で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3031を切る。長辺1.10m、短辺0.94m、深さ12cmを測り、長軸方向はN-40°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片6点、瓦質土器片1点、土錘1点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3033

調査区北部で検出した溝状の土坑で、多数の遺構に切られる。長辺1.32m、短辺0.59m、深さ20cmを測り、長軸方向はN-79°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3034

調査区北部で検出した不整隅丸方形の土坑で、P-3005を切る。長辺0.82m、短辺0.59m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-86°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点、土製品2点がみられ、土製品1点(3086)が図示できた。

#### 出土遺物

##### 土製品 (Fig.193-3086)

3086は土錘で、一部が欠損する。全長3.6cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量2.8gを測り、全面にナデ調整を施す。

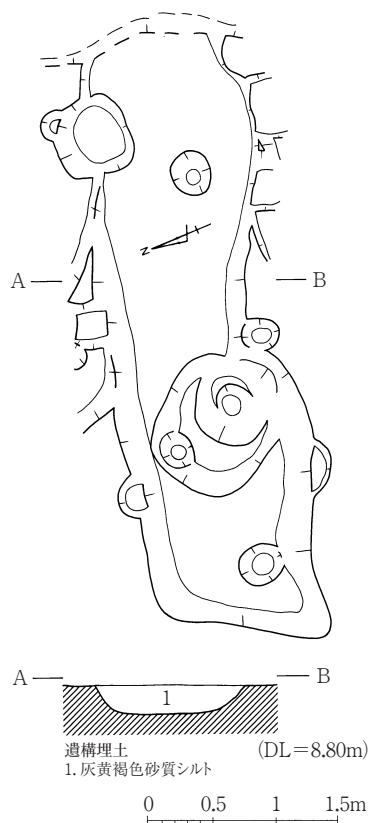


Fig.190 SK-3031

**SK-3035** (Fig.191)

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑で、SD-3010に切られる。長辺4.10m、短辺2.45m、深さ0.72mを測り、長軸方向はN-49°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片18点、瓦質土器片6点、青磁片1点、土製品2点、鉄釘1点がみられ、土製品1点(3087)が図示できた。

出土遺物

土製品 (Fig.193-3087)

3087は円筒形の土錘で、完形を呈する。全長4.5cm、全幅1.0cm、孔径0.5cm、重量4.4gを測り、全面にナデ調整を施す。

**SK-3036** (Fig.191)

SK-3035の底で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.15m、短辺1.71m、深さ0.53mを測り、長軸方向はN-71°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は3層に分かれ、上層から炭化物を含むにぶい黄橙色砂質シルト、浅黄色砂質シルト、細砂と炭化物を含む灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には土師質土器片20点、瓦質土器片3点、土錘2点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3037**

調査区北部で検出した長方形の土坑で、攪乱を受ける。長辺1.26m、短辺0.86m、深さ22cmを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、瓦質土器片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3038**

調査区北部で検出した長方形の土坑である。長辺1.11m、短辺0.85m、深さ18cmを測り、長軸方向はN-18°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片6点、瓦質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3039**

SD-3010の底で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.27m、短辺0.72m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-28°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点、土製品1点がみられ、土製品(3088)が図示できた。

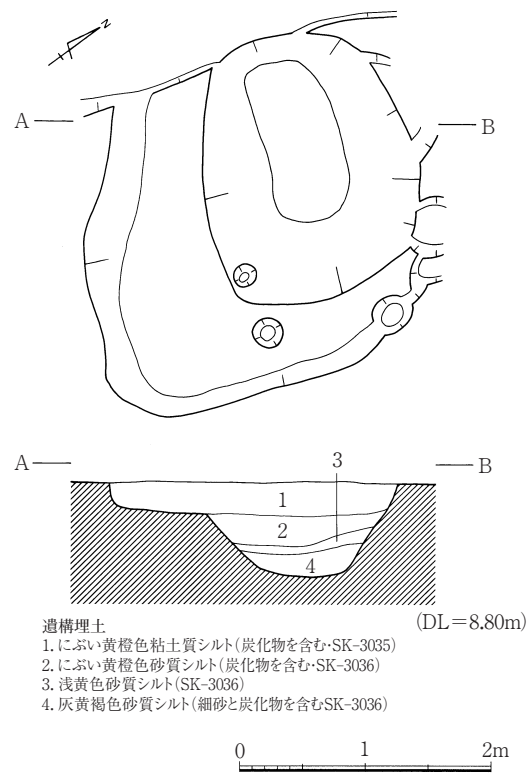


Fig.191 SK-3035・3036

## 出土遺物

土製品 (Fig.193-3088)

3088は円筒形の土錘で、一部が欠損する。全長4.9cm、全幅1.2cm、孔径0.4cm、重量5.6gを測り、全面にナデ調整を施す。

### SK-3040

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.49m、短辺1.21m、深さ7cmを測り、長軸方向はN-84°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片6点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3041

調査区南東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.96m、短辺1.96m、深さ27cmを測り、長軸方向はN-83°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片20点、鉄製品2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3042

調査区南東部で検出した隅丸方形の土坑で、攪乱を受ける。長辺1.79m、短辺1.48m、深さ40cmを測り、長軸方向はN-12°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片15点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3043

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3044を切る。長辺0.98m、短辺0.75m、深さ32cmを測り、長軸方向はN-63°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3044

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、SK-3043に切られる。長辺2.08m、短辺1.64m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-66°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SK-3045

調査区南部で検出した長方形の土坑である。長辺1.58m、短辺1.03m、深さ15cmを測り、長軸方向はN-17°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、東播系須恵器片1点、土師質土器片8点、瓦質土器1点がみられ、瓦質土器(3089)が図示できた。

## 出土遺物

瓦質土器 (Fig.193-3089)

3089は鉢で、約1/4が残存し、口径23.6cmを測る。粘土紐巻き上げ成形で、体部は外上方に真っ

すぐ伸び、口縁部は上方に短く伸びる。調整は内面がナデ、口縁部がヨコナデ、外面がナデまたは板ナデで指頭圧痕が残る。器面は著しく摩耗し、外面は一部に炭素の吸着がみられるのみである。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成はやや悪く、色調は、内面が灰色、外面が灰色または灰白色を呈する。

**SK-3046**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.68m、短辺2.02m、深さ14cmを測り、長軸方向はN-6°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器片1点、土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3047**

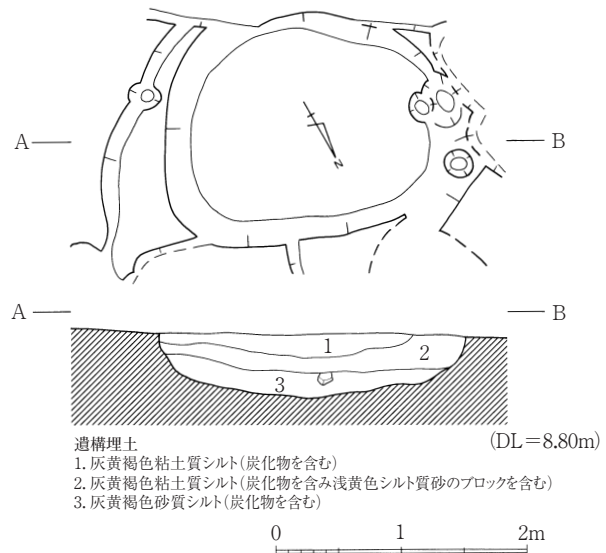
調査区南部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.97m、短辺0.86m、深さ17cmを測り、長軸方向はN-4°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、東播系須恵器片1点、土師質土器片5点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3048**

調査区南部で検出した隅丸方形の土坑で、南半分は攪乱を受ける。長辺1.89m、短辺1.09m、深さ31cmを測り、長軸方向はN-76°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には土師質土器片5点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3049 (Fig.192)**

調査区南部で検出した楕円形の土坑である。長径2.87m、短径1.76m、深さ0.57mを測り、長軸方向はN-55°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は3層に分かれ、上層から灰黄褐色粘土質シルト、浅黄色シルト質砂のブロックを含む灰黄褐色粘土質シルト、灰黄褐色砂質シルトで、いずれも炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片30点、石製品1点、鉄釘1点がみられ、最下層から出土した土師質土器1点(3090)、石製品(3091)が図示できた。



**Fig.192 SK-3049**

**出土遺物**

土師質土器 (Fig.193-3090)

3090は小皿で、底部が完存し、底径4.6cmを測る。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にはナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は、内面が浅黄橙色またはにぶい黄橙色、外面がにぶい黄橙色を呈する。

石製品 (Fig.193-3091)

3091は砥石で、一部が欠損し、全長16.3cm、全幅12.8cm、全厚7.9cmを測る。残存部で3面に使用痕がみられる。石材は砂岩である。

#### SK-3050

調査区中央で検出した楕円形の土坑で、SD-3015の底で確認した。長径2.97m、短径2.30m、深さ9cmを測り、長軸方向はN-56°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、東播系須恵器片1点、土師質土器片41点、白磁1点、青磁片1点がみられ、白磁(3092)が図示できた。

#### 出土遺物

白磁 (Fig.193-3092)

3092は皿で、口縁部の一部が残存する。口縁部は内湾し、端部は内傾する面を有する。調整は回転ナデで、体部外面には回転ヘラ削りを施し、口縁部には灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや密で、焼成はやや不良である。

#### SK-3051

調査区南西部で検出した土坑で、第VI層に伴う遺構である。東側の肩のみ確認した。長さ1.98m、幅0.60m、深さ25cmを測り、長軸方向はN-30°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は褐灰色砂質シルトで、微砂を含んでいた。出土遺物には瓦器片16点、東播系須恵器片2点、土師質土器片40点、青磁片1点がみられ、土師質土器3点(3093~3095)が図示できた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.193-3093~3095)

3093・3094は杯である。3093は柱状高台の底部が約1/3残存し、底径8.2cmを測る。高台は中空で、ハの字状に開き、体部は高台から屈曲して外上方に立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。3094は底部の一部が残存し、底径5.4cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは摩耗するため不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は、内面が明黄褐色または暗灰色、外面が浅黄橙色を呈する。

3095は小皿で、約1/3が残存し、口径8.4cm、器高1.6cm、底径6.0cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成はやや悪く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### iv 溝跡

SD-3001 (Fig.194)

調査区北東部で検出した東西溝跡(N-76°-W)で、区画溝とみられる。SD-3002・3003とほぼ並走し、西端は攪乱を受ける。幅0.26~0.67m、深さ4~24cmを測り、基底面は東(8.536m)から西(8.449m)に向かって緩やかに傾斜し、7.08mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、浅黄色砂質シルトのブロックと炭化物を含んでいた。出土遺物には瓦器片2点、東播系須恵器片3点、土師質土器片45点、青磁片1点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。



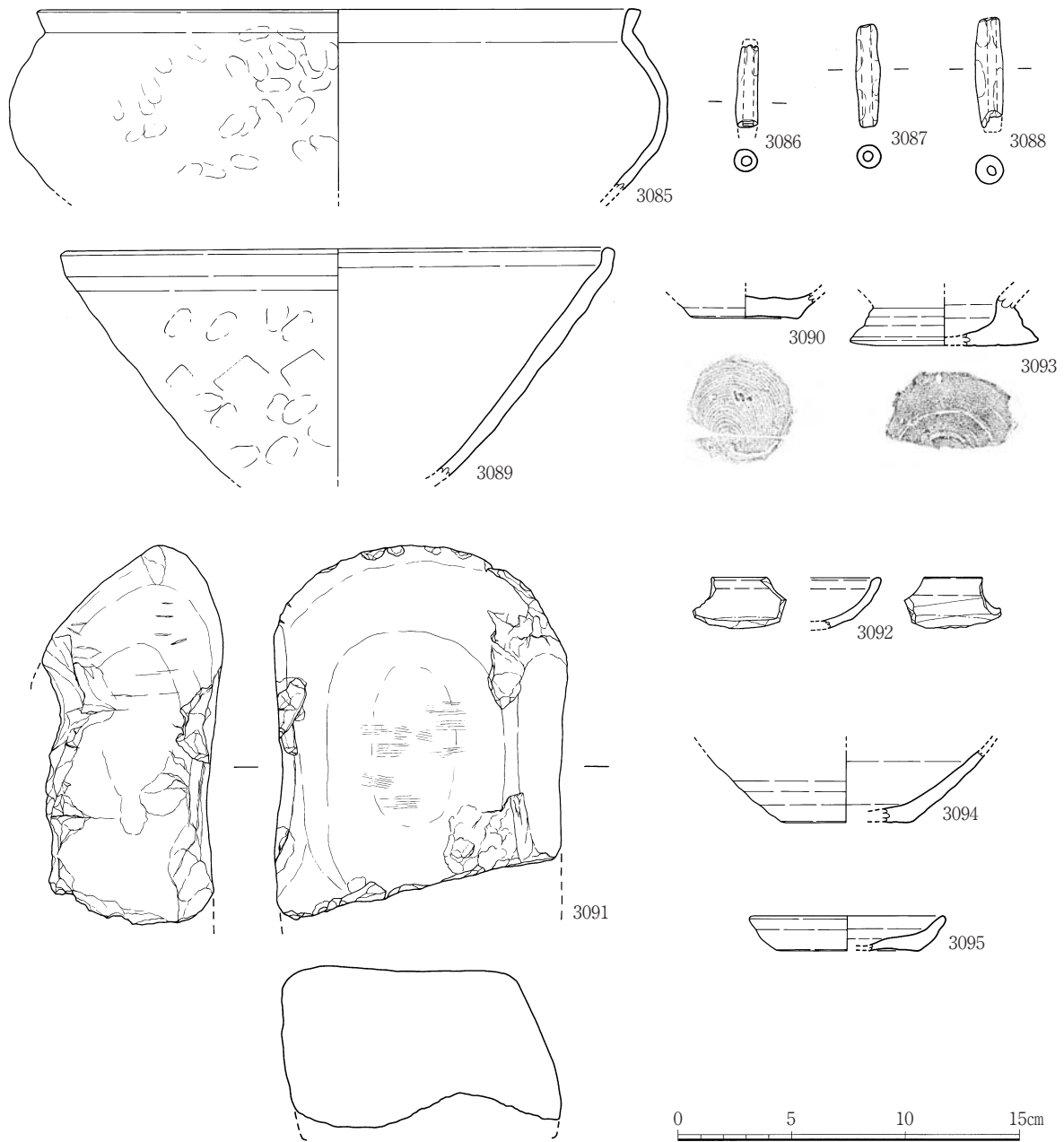


Fig.193 SK-3031~3051出土遺物実測図

SD-3002 (Fig.194)

調査区北東部で検出した東西溝跡 (N-76°-W) で、区画溝とみられる。SD-3001・3003とほぼ並走し、西端は攪乱を受ける。幅0.42~0.59m、深さ11~31cmを測り、基底面は東 (8.471m) から西 (8.383m) に向かって緩やかに傾斜し、4.22mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色砂質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片2点、土師質土器片24点、瓦質土器片4点、青磁片1点、鉄釘1点がみられ、瓦質土器1点 (3096) が図示できた。

出土遺物

瓦質土器 (Fig.201-3096)

3096は羽釜で、口縁部の一部が残存し、口径19.9cmを測る。口縁部は内湾し、端部は内傾する面

を有し、外面には断面三角形を呈する扁平な鏝がめぐる。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土はやや密で、焼成は比較的良く、色調は、内面が灰黄色、外面が浅黄色または暗灰色を呈する。

#### SD-3003 (Fig.194)

調査区北東部で検出した東西溝跡 (N-79°-W) で、区画溝とみられ、SD-3001・3002とほぼ並走する。幅18~37cm、深さ22~32cmを測り、基底面は西 (8.398m) から東 (8.364m) に向かって緩やかに傾斜し、5.56mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片8点、青磁片1点、土錘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

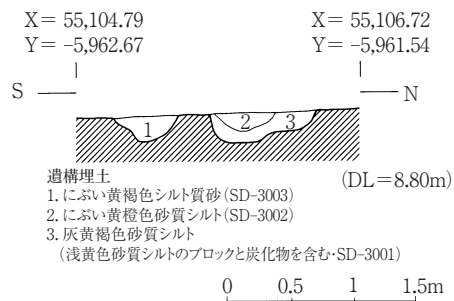


Fig.194 SD-3001~3003

#### SD-3004 (Fig.195)

調査区北東部で検出した南北溝跡 (N-13°-E) で、南端は調査区外へ続く。幅0.38~0.79m、深さ20~35cmを測り、基底面は南 (8.540m) から北 (8.408m) に向かって緩やかに傾斜し、一部攪乱を受けるが、8.61mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトで、微砂と炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、東播系須恵器片2点、土師質土器片25点、瀬戸焼片1点がみられ、東播系須恵器1点 (3097) が図示できた。

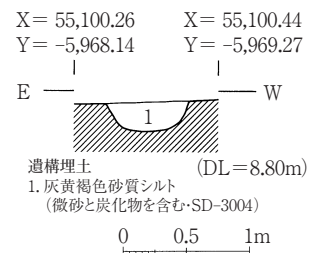


Fig.195 SD-3004

#### 出土遺物

##### 東播系須恵器 (Fig.201-3097)

3097は片口鉢で、口縁部と体部の一部が残存し、口径24.0cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び、口縁部は肥厚して上下に拡張し、器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は、内面が灰色、外面が灰色または暗赤褐色を呈する。

#### SD-3005

調査区北東部で検出した南北溝跡 (N-22°-E) である。幅0.74~1.09m、深さ8~16cmを測り、基底面は8.650m前後とほぼ平坦で、11.30mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には東播系須恵器片2点、土師質土器片17点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SD-3006

調査区北東部で検出した東西溝跡 (N-70°-W) で、東端はSD-3005に取り付く。幅0.30~0.56m、深さ3~8cmを測り、基底面は西 (8.830m) から東 (8.753m) に向かって緩やかに傾斜し、6.01mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点、常滑焼1点がみられ、常滑焼 (3098) が図示できた。

#### 出土遺物

常滑焼 (Fig.201-3098)

3098は甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部はN字状を呈し、器面には回転ナデ調整、頸部内面にはナデ調整を施す。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は、内面がにぶい赤褐色または暗灰色、外面がにぶい赤褐色または暗灰色ないし青灰色を呈する。

SD-3007

調査区北東部で検出した東西溝跡 (N-71°-W) で、SD-3006とほぼ並走する。幅0.41~0.77m、深さ6~9cmを測り、基底面は西 (8.783m) から東 (8.701m) に向かって緩やかに傾斜し、5.69mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片2点、土師質土器片9点、砥石1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-3008

調査区北東部で検出した南北溝跡 (N-14°-E) で、南端は攪乱を受け、SD-3006・3007を切る。幅0.59~0.85m、深さ5~14cmを測り、基底面は北 (8.811m) から南 (8.734m) に向かって緩やかに傾斜し、4.65mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片6点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-3009

調査区北東部で検出した南北溝跡 (N-15°-E) である。SD-3008と並走し、北端は攪乱を受ける。幅28~45cm、深さ8~9cmを測り、基底面は8.800m前後と平坦で、3.50mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-3010 (Fig.196)

調査区北部で検出した南北溝跡で、屋敷の西端を画する溝跡とみられ、両端は調査区外へ続く。溝跡は北 (N-6°-E) に向いた後、北東 (N-20°-E) に方向を変える。幅0.81~2.17m、深さ4~26cmを測り、基底面は北 (8.395m) から南 (8.387m) に向かって緩やかに傾斜し、28.75mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂であった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片2点、東播系須恵器片2点、土師質土器片35点、瓦質土器片1点、中世陶器片2点、古銭1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

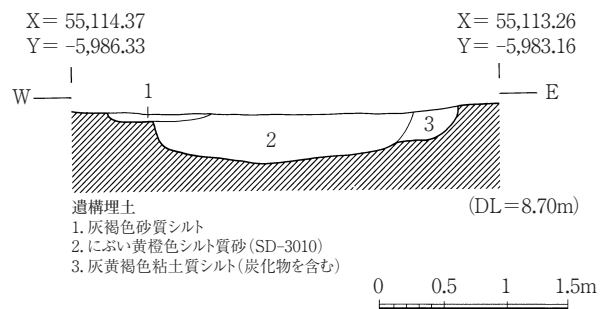


Fig.196 SD-3010

SD-3011

調査区北西部で検出した東西溝跡 (N-75°-W) で、SD-3012と並走し、SD-3010を切る。幅17~38cm、深さ7~20cmを測り、基底面は東 (8.510m) から西 (8.371m) に向かって緩やかに傾斜し、10.91mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物は皆無であった。

### SD-3012

調査区北西部で検出した東西溝跡（N-74°-W）で、SD-3011と並走し、SD-3010を切る。幅0.18~0.61m、深さ2~18cmを測り、基底面は8.400m前後とほぼ平坦で、23.95mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

### SD-3013

調査区北西隅で検出した南北溝跡（N-14°-E）で、両端は調査区外へ続く。幅0.29~0.51m、深さ9~28cmを測り、基底面は南（8.410m）から北（8.280m）に向かって緩やかに傾斜し、10.16mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は黄灰色シルトであった。出土遺物には備前焼片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

### SD-3014

調査区西部で検出した南北溝跡（N-20°-E）である。幅0.21~0.54m、深さ2~7cmを測り、基底面は北（8.404m）から南（8.297m）に向かって緩やかに傾斜し、11.90mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄色シルト質砂で、微砂を含んでいた。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかつた。

### SD-3015 (Fig.197)

調査区中央部で検出した東西溝跡（N-72°-W）で、東端は攪乱を受け、北は調査区外に続く。幅2.60m、深さ7~16cmを測り、基底面は東（8.617m）から西（8.433m）に向かって緩やかに傾斜し、13.65mを検出した。また、東側はさらに落ち込んでおり、最も深い所では深さ0.56mを測る。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄橙色シルト質砂で、浅黄橙色シルト質砂のブロック

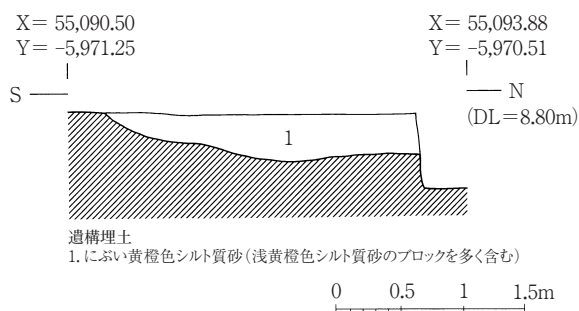


Fig.197 SD-3015

を多く含んでいた。出土遺物には須恵器片3点、瓦器片4点、土師質土器片60点、白磁片1点、中世陶器片1点、鉄滓がみられ、土師質土器2点（3099・3100）が図示できた。

### 出土遺物

#### 土師質土器 (Fig.201-3099・3100)

3099は杯で、底部と体部の約1/3が残存し、底径6.0cmを測る。体部は器壁が薄く、内湾して立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は、内面がにぶい橙色、外面が橙色を呈する。

3100は小皿で、底部の約2/3が残存し、底径4.8cmを測る。器面は著しく摩耗するため調整は不明で、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は内外面ともににぶい橙色を呈する。

### SD-3016

調査区中央部で検出した南北溝跡（N-14°-E）で、北端はSD-3015に取り付く。幅25~36cm、

深さ9～15cmを測り、基底面は8.550m前後とほぼ平坦で、2.71mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片5点、瓦質土器片1点がみられ、土師質土器1点(3101)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.201-3101)

3101は椀で、底部の約1/3が残存し、底径6.4cmを測る。底部には断面半円形を呈する高台を貼付する。器面は著しく摩耗するため調整は不明である。胎土は密で、焼成は比較的良く、色調は、内外面ともにぶい橙色または灰褐色を呈する。

SD-3017 (Fig.198)

調査区南東部で検出した南北溝跡 (N-12°-E) で、北端は攪乱を受ける。幅0.66～0.96m、深さ28～36cmを測り、基底面は南(8.238m)から北(8.181m)に向かって緩やかに傾斜し、4.10mを検出した。断面は逆台形を呈し、埋土はにぶい黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には図示した青磁(3102)のみがみられた。

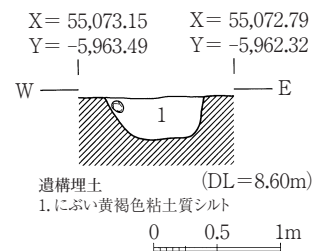


Fig.198 SD-3017

出土遺物

青磁 (Fig.201-3102)

3102は龍泉窯系の皿で、口縁部の約1/3が残存し、口径8.1cmを測る。高台が欠損し、口縁部は内湾して端部を丸く収める。器面にはオリーブ灰色の釉を約0.5mmの厚さに施し、内面には2条単位の垂線がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

SD-3018

調査区南西部で検出した南北溝跡 (N-20°-E) である。SD-3019・3020と並走し、北端は調査区外に続く。幅0.30～0.61m、深さ4～14cmを測り、基底面は南(8.328m)から北(8.264m)に向かって緩やかに傾斜し、3.61mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

SD-3019 (Fig.199)

調査区南西部で検出した南北溝跡 (N-19°-E) である。両端は調査区外に続き、SD-3020に切られる。幅0.78～1.06m、深さ0.26～0.53mを測り、基底面は南(8.266m)から北(8.066m)に向かって緩やかに傾斜し、4.89mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片4点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

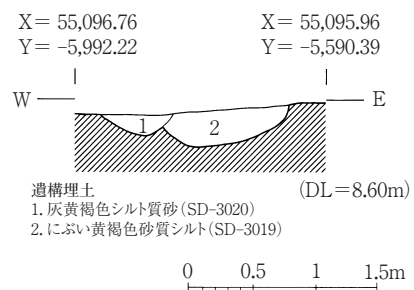


Fig.199 SD-3019・3020

SD-3020 (Fig.199)

調査区南西部で検出した南北溝跡 (N-19°-E) である。両端は調査区外に続き、SD-3019・3022を切る。幅0.59～0.67m、深さ19～22cmを測り、基底面は8.280m前後とほぼ平坦で、4.96m

を検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片10点、備前焼片1点、瓦質土器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

### SD-3021

調査区南西部で検出した南北溝跡（N-5°-E）である。南端は調査区外に続き、SD-3022に切られる。幅0.80~1.02m、深さ15~18cmを測り、基底面は北（8.223m）から南（8.166m）に向かって緩やかに傾斜し、3.12mを検出した。断面は舟底形を呈し、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、淡黄色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物は皆無であった。

### SD-3022 (Fig.200)

調査区南西部で検出した東西溝跡（N-65°-W）で、西端と北側の肩は調査区外に続き、東端はSD-3020に切られる。幅0.55~2.70m、深さ13~47cmを測り、基底面は東（8.206m）から西（7.836m）に向かって傾斜し、15.3mを検出した。断面は舟底形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片7点、東播系須恵器片7点、土師質土器片48点、瓦質土器片1点、白磁1点、鉄滓がみられ、白磁（3103）が図示できた。

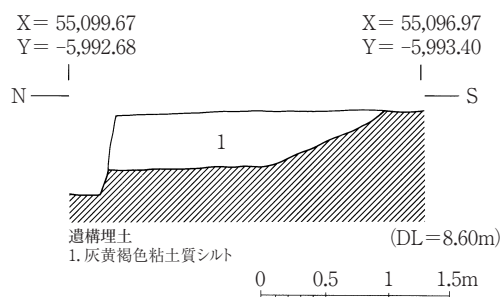


Fig.200 SD-3022

### 出土遺物

#### 白磁 (Fig.201-3103)

3103は碗で、口縁部と体部の一部が残存し、口径16.3cmを測る。体部はやや内湾し、口縁部は玉縁状を呈する。体部外面の一部を除き、器面には灰白色の釉を薄く施す。胎土はやや粗く、焼成はやや良好である。

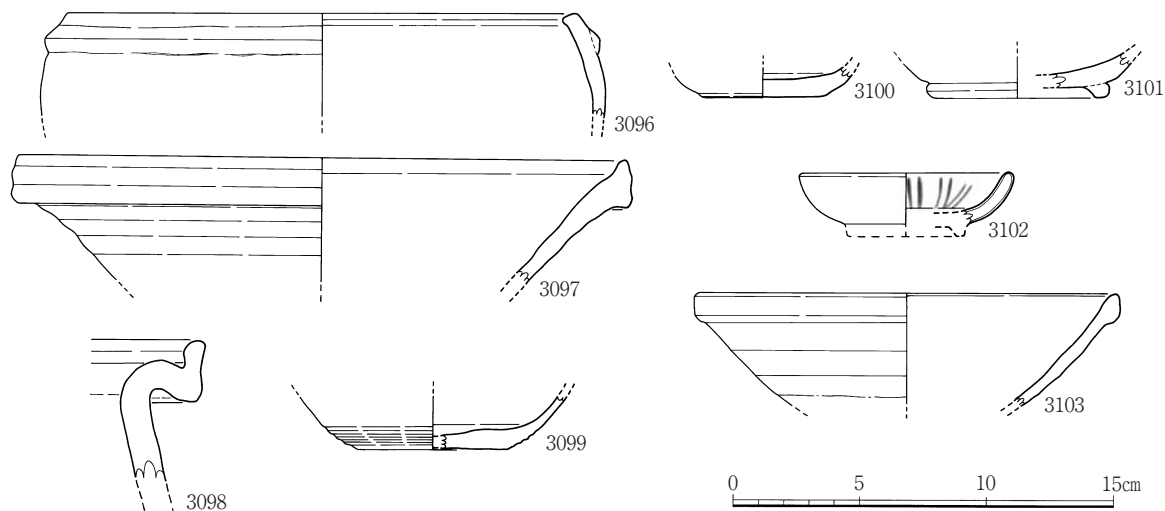


Fig.201 SD-3002~3022出土遺物実測図

v ピット

**P-3001**

調査区北東部で検出した隅丸方形のピットである。長辺0.89m、短辺0.66m、深さ16cmを測り、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には東播系須恵器1点、土師質土器片6点がみられ、東播系須恵器(3104)が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.202-3104)

3104は片口鉢の口縁部の破片で、口縁端部は上方に拡張する。器面には回転ナデ調整を施し、口縁部外面には重ね焼痕がみられる。胎土はやや粗く、焼成は良好で、色調は、内面が灰白色、外面が灰色または灰白色を呈する。

**P-3002**

調査区北東部で検出した楕円形のピットで、SD-3014を切る。長径29cm、短径25cm、深さ9cmを測り、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した石製品(3105)のみがみられた。

出土遺物

石製品 (Fig.202-3105)

3105は砥石の一部で、全長7.2cm、全幅2.3cm、全厚1.8cmを測る。残存部で1面に使用痕がみられる。石材は粘板岩である。

**P-3003**

調査区北部で検出した楕円形のピットで、SK-3032の底で確認した。長径0.59m、短径0.52m、深さ0.54mを測り、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物には図示した石製品(3106)のみがみられた。

出土遺物

石製品 (Fig.202-3106)

3106は砥石の一部で、全長5.8cm、全幅5.6cm、全厚2.6cmを測る。残存部で1面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

**P-3004**

調査区北部で検出した楕円形のピットで、SK-3032の底で確認した。長径1.00m、短径0.77m、深さ10cmを測り、埋土は灰黄褐色粘土質シルトで、炭化物を含んでいた。出土遺物は瓦器片1点、土師質土器片11点がみられ、土師質土器1点(3107)が図示できた。

出土遺物

土師質土器 (Fig.202-3107)

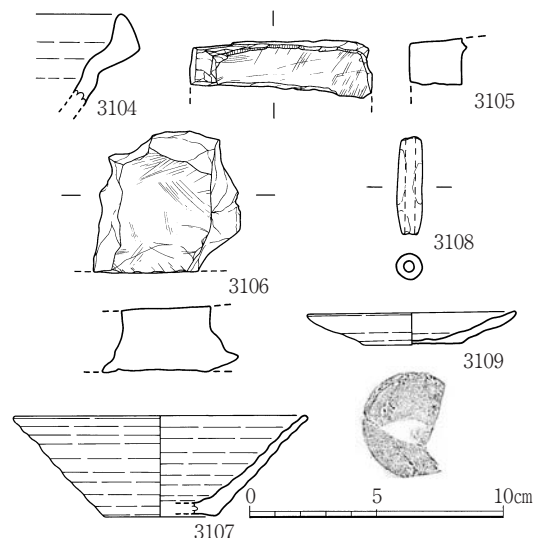


Fig.202 P-3001~3006出土遺物実測図

3107は杯で、約1/6が残存し、口径11.4cm、器高4.0cm、底径4.3cmを測る。底部が小さく、体部は外上方に大きく開く。成形はロクロ水挽で、器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は内外面ともにぶい橙色を呈する。

#### **P-3005**

調査区北部で検出した楕円形のピットで、SK-3034に切られる。長径0.79m、短径0.55m、深さ27cmを測り、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片2点、土製品1点、鉄滓がみられ、土製品(3108)が図示できた。

#### 出土遺物

土製品 (Fig.202-3108)

3108は円筒形の土錘で、ほぼ完形を呈する。全長3.9cm、全幅1.0cm、孔径0.4cm、重量3.0gを測り、全面にナデ調整を施す。

#### **P-3006**

調査区南東部で検出した楕円形のピットで、SD-3015を切る。長径49cm、短径41cm、深さ0.69mを測り、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には図示した土師質土器(3109)のみがみられた。

#### 出土遺物

土師質土器 (Fig.202-3109)

3109は小皿で、約1/2が残存し、口径8.1cm、器高1.3cm、底径3.6cmを測る。器壁が薄く、口縁部は外上方に真っすぐ伸びる。器面には回転ナデ調整を施し、内底面にナデ調整を加える。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土は密で、焼成は良く、色調は内外面とも橙色を呈する。

#### **P-3007**

調査区南東部で検出した不整楕円形のピットである。長径0.55m、短径43cm、深さ36cmを測り、埋土は灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物には図示した石製品1点(3110)のみがみられた。

#### 出土遺物

石製品 (Fig.203-3110)

3110は石臼の下臼で、約1/2が残存し、直径26.6cm、全厚5.4cmを測る。摺り目は7~8本単位の斜行する条線で、残存部で4ヶ所みられる。摺り目は磨耗し、一部被熱の痕跡がみられる。石材は砂岩である。

#### **P-3008**

調査区南東部で検出した不整楕円形のピットである。長径36cm、短径31cm、深さ0.59mを測り、埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には須恵器1点、瓦質土器片1点がみられ、須恵器(3111)が図示できた。

#### 出土遺物



須恵器 (Fig.203-3111)

3111は杯で、底部の一部が残存し、底径5.4cmを測る。底部には断面台形を呈する高台を貼付し、体部は滑らかに立ち上がる。調整は内面が丁寧なナデ、体部外面は回転ナデ、高台内はナデを施す。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は、内面が灰白色、外面が灰色を呈する。

P-3009

調査区南東部で検出した楕円形のピットである。長径42cm, 短径39cm, 深さ31cmを測り, 埋土は灰黄褐色シルトであった。出土遺物には土師質土器片4点, 瓦質土器片1点がみられ, 瓦質土器片がSK-3045より出土した瓦質土器 (3089) と接合できた。

P-3010

調査区南東部で検出した円形のピットである。径34cm, 深さ48cmを測り, 埋土は灰黄色シルト質砂であった。出土遺物には瓦質土器片1点がみられ, SK-3045より出土した瓦質土器 (3089) と接合できた。

P-3011

調査区南東部で検出した溝状のピットで, SK-3048に切られる。長辺1.76m, 短辺25cm, 深さ15cmを測り, 埋土はにぶい黄褐色シルト質砂であった。出土遺物には図示した石製品 (3112) のみがみられた。

出土遺物

石製品 (Fig.203-3112)

3112は砥石で, ほぼ完形を呈する。全長14.7cm, 全幅5.8cm, 全厚6.1cmを測る。残存部で表面と裏面の2面に使用痕がみられる。石材は細粒花崗岩である。

P-3012

調査区南東部で検出した隅丸方形のピットである。長辺0.70m, 短辺0.52m, 深さ0.50mを測り, 埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片5点がみられ, 土師質土器1点 (3113) が図示できた。

出土遺物

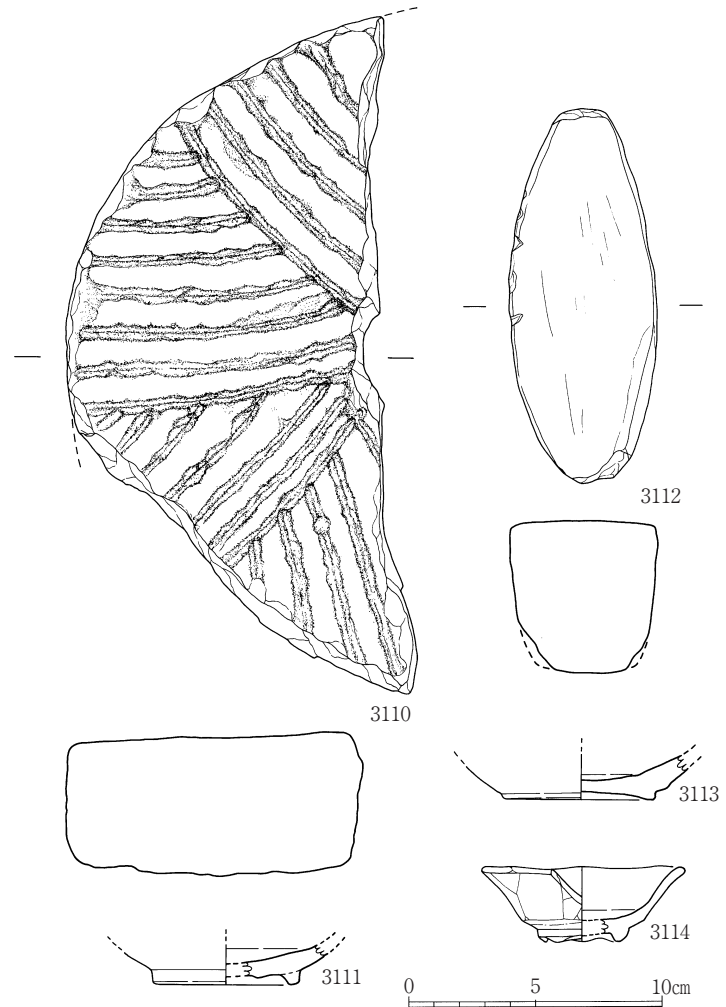


Fig.203 P-3007~3013出土遺物実測図

土師質土器 (Fig.203-3113)

3113は杯で、底部が完存し、底径5.8cmを測る。体部は外上方に真っすぐ立ち上がる。器面には回転ナデ調整を施し、底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや密で、焼成は良く、色調は、内面が灰黄褐色、外面がにぶい橙色またはにぶい褐色を呈する。

### P-3013

調査区南西部で検出した楕円形のピットである。長径0.59m、短径41cm、深さ35cmを測り、埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点、白磁1点がみられ、白磁(3114)が図示できた。

### 出土遺物

白磁 (Fig.203-3114)

3114は多角形皿で、約1/6が残存し、口径7.6cm、器高3.0cm、底径2.8cmを測る。八角形を呈するものとみられ、底部は削り出しで切高台を有する。体部は外上方へ短く伸び、口縁部は外反し、端部を丸く収める。内面と外面の高台付近まで灰白色の釉を薄く施し、見込には砂目痕が残る。胎土はやや密で、焼成は良好である。

## ② 近世以降

### i 掘立柱建物跡

#### SB-3007 (Fig.204)

北部で確認した梁間1間 (2.80~2.85m)、桁行2間 (4.00m) の南北棟建物で、棟方向はN-20°-Eである。柱間寸法は、梁間 (東西) が2.80~2.85m、桁行 (南北) が1.60~2.40mであった。柱穴は径0.40~0.80mの円形または楕円形で、埋土は灰黄褐色粘土質シルトまたは灰黄色シルト質砂であった。出土遺物には瓦器片3点、土師質土器片7点、青磁1点がみられ、青磁 (3115) が図示できた。

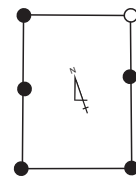


Fig.204 SB-3007

### 出土遺物

青磁 (Fig.205-3115)

3115は龍泉窯系の碗で、底部の約1/3が残存し、底径6.4cmを測る。底部の器壁は厚く、断面台形を呈する削り出し高台を有する。内面と外面は畳付付近まで灰オリーブ色の釉を薄く施す。見込には方形枠に「金玉满堂」とみられるスタンプを施す。胎土は密で、焼成は良好である。

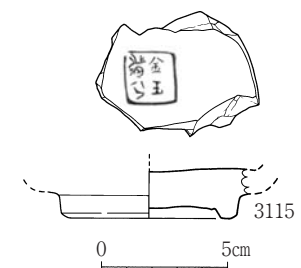


Fig.205 SB-3007  
出土遺物実測図

#### SB-3008 (Fig.206)

北西部で確認した梁間1間 (3.60m)、桁行2間 (4.10m) の南北棟建物で、棟方向はN-16°-Eである。柱間寸法は、梁間 (東西) が3.60m、桁行 (南北) が2.00mと2.10mであった。柱穴は径0.35~0.60mの円形または楕円形で、柱径は約20cmとみられる。埋土は灰白色シルトで、出土遺物は皆無であった。

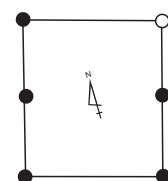


Fig.206 SB-3008

SB-3009 (Fig.207)

北部で確認した梁間2間 (2.60m), 桁行2間 (3.40m) の東西棟建物で, 棟方向はN-73°-Wである。柱間寸法は, 梁間 (南北) が1.20mと1.40m, 桁行 (東西) が1.70mであった。柱穴は径30~45cmの円形または楕円形で, 柱径は約15cmとみられる。埋土は灰白色シルトまたは灰黄褐色砂質シルトであった。出土遺物に須恵器片1点がみられたが, 復元図示できなかった。

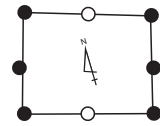


Fig.207 SB-3009

Tab.12 第Ⅲ調査地区近世掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規 模				面積 (m <sup>2</sup> )	棟方向 (NはGN)	備 考	
	梁間 × 桁行	梁間 (m) × 桁行 (m)		柱間寸法				
				梁間 (m)				桁行 (m)
SB-3007	1×2	2.80~2.85	× 4.00	2.80~2.85	1.60~2.40	11.30	N-20°-E	
SB-3008	1×2	3.60	× 4.10	3.60	2.00・2.10	14.76	N-16°-E	
SB-3009	2×2	2.60	× 3.40	1.20・1.40	1.70	8.84	N-73°-W	

ii 土坑

SK-3052 (Fig.208)

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で, 北半分は調査区外へ続く。検出した南半分は, 長辺3.90m, 短辺1.84m, 深さ0.51mを測り, 長軸方向はN-7°-Eを示す。断面は逆台形を呈し, 埋土は2層に分かれ, 上層が黄灰色砂, 下層が灰黄褐色シルト質砂で, いずれも炭化物を含んでいた。出土遺物には須恵器片3点, 東播系須恵器1点, 土師質土器片60点, 青磁片5点, 近世陶器片7点, 近世磁器片15点, 土錘1点, 石製品3点, 鉄滓がみられ, 東播系須恵器 (3116), 近世磁器1点 (3117), 石製品3点 (3118~3120) が図示できた。

出土遺物

東播系須恵器 (Fig.209-3116)

3116は片口鉢で, 底部の約1/3が残存し, 底径11.1cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸びる。成形は粘土紐巻き上げで, 器面には回転ナデ調整を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。胎土はやや粗く, 焼成はやや良好で, 色調は, 内面が灰黄色, 外面が黄灰色を呈する。

近世磁器 (Fig.209-3117)

3117は碗で, 約1/4が残存し, 口径10.6cm, 器高6.3cm, 底径4.7cmを測る。底部には直立する細い削り出し高台を有し, 体部は内湾して立ち上がり, 口縁部は真っすぐ伸びる。

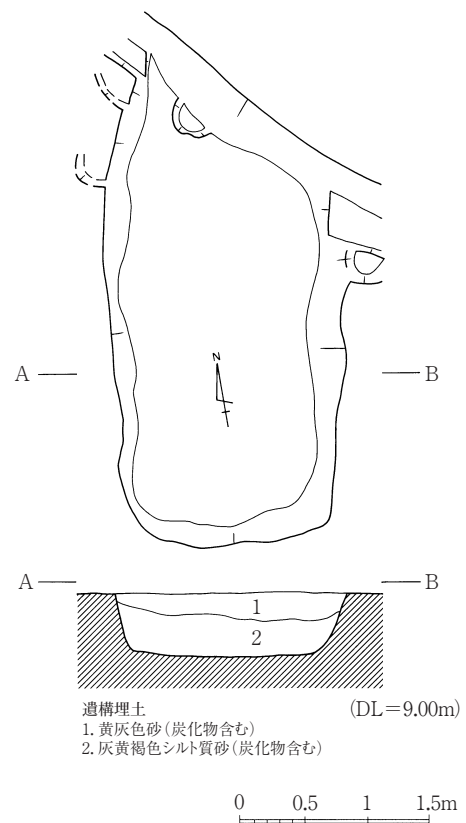


Fig.208 SK-3052

全面に透明釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行い、見込には砂が付着する。外面には圏線と草文の染付がみられる。胎土は密で、焼成は良好である。

石製品 (Fig.209-3118~3120)

3118~3120は砥石である。3118・3119は直方体を呈するものとみられ、一部が欠損する。残存部で4面に使用痕がみられ、石材は細粒花崗岩である。3118は全長6.1cm、全幅2.9cm、全厚1.5cmを測り、一部被熱の痕跡が残る。3119は全長5.2cm、全幅4.1cm、全厚1.3cmを測る。3120は一部が残存し、全長7.0cm、全幅5.1cm、全厚3.5cmを測る。全面に使用痕がみられ、1面には沈線状の使用痕が残る。石材は細粒花崗岩である。

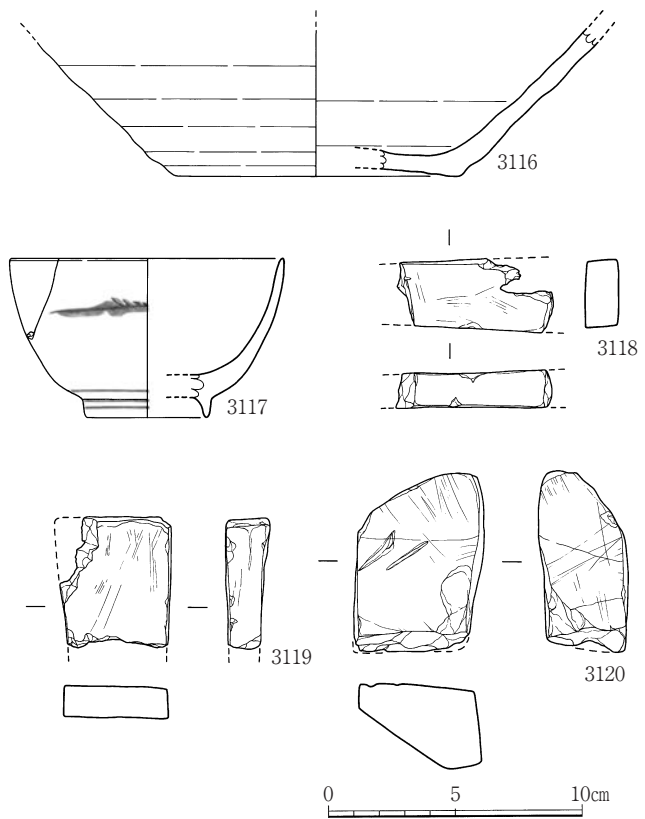


Fig.209 SK-3052出土遺物実測図

#### SK-3053

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑で、一部調査区外へ続く。長辺2.15m、短辺1.32m、深さ4cmを測り、長軸方向はN-78°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-3054

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.15m、短辺0.95m、深さ6cmを測り、長軸方向はN-82°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色シルトであった。出土遺物には土師質土器片2点、近世磁器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-3055

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.08m、短辺0.99m、深さ13cmを測り、長軸方向はN-13°-Eを示す。断面は舟底形を呈し、埋土は灰白色砂質シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片1点、土師質土器片9点、近世陶器片1点、鉄釘1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

#### SK-3056

調査区北東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.34m、短辺1.23m、深さ19cmを測る。長軸方向はN-4°-Eを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は黄灰色シルト質砂であった。出土遺物には土師質土器片4点、近世陶器片1点、近世磁器片3点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3057** (Fig.210)

調査区北部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺2.18m、短辺2.11m、深さ45cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色シルト、下層が灰白色砂質シルトであった。出土遺物には須恵器片1点、瓦器片1点、土師質土器片2点、備前焼1点、近世磁器片1点がみられ、上層から出土した備前焼(3121)が図示できた。

出土遺物

備前焼 (Fig.213-3121)

3121は播鉢で、約1/4が残存し、口径31.5cm、器高13.1cm、底径15.2cmを測る。体部は外上方に真っすぐ伸び、口縁部は分厚く、顎部の張り出しが顕著で、外面には凹線が2条めぐり、体部は回転ナデ調整を施し、内面には放射線状の12本単位の摺り目を時計回りに施す。底部外面は一部ナデ調整がみられる。胎土はやや粗く、砂粒を含み、焼成は比較的良く、色調は内外面とも灰赤色を呈する。

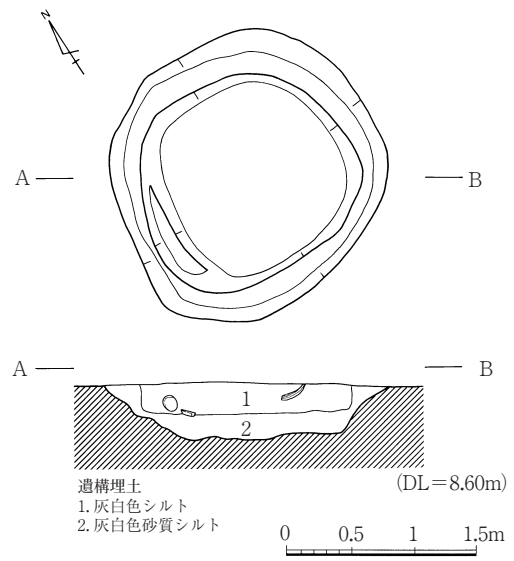


Fig.210 SK-3057

**SK-3058** (Fig.211)

調査区南東部で検出した楕円形の土坑である。長径2.37m、短径2.23m、深さ0.66mを測り、長軸方向はほぼ方眼北を向く。断面は逆台形を呈し、底部には幅約40cm、深さ5cmの溝がめぐり、埋土は黄灰色シルト質砂で、にぶい黄褐色シルト質砂のブロックと炭化物、マンガンを含んでいた。出土遺物には土師質土器片7点、青磁片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

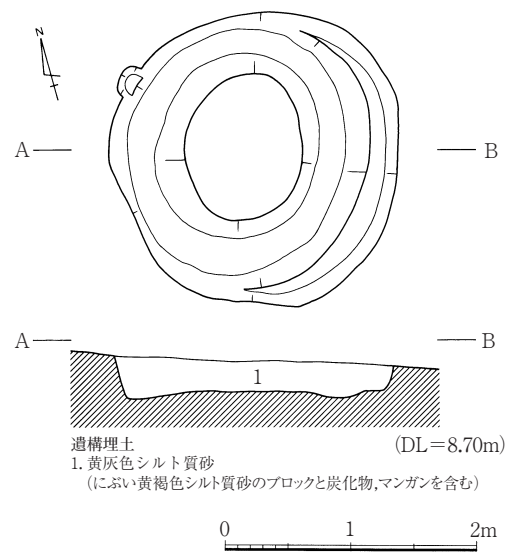


Fig.211 SK-3058

**SK-3059**

調査区南東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺1.56m、短辺1.52m、深さ8cmを測り、長軸方向はN-84°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、底部には径1.54mの円形の桶がわずかに残存していた。

埋土は調査区東側の用水路の影響を受け、青灰色粘土質シルトを呈する。近代の遺構とみられる。出土遺物には土師質土器片1点、近世陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

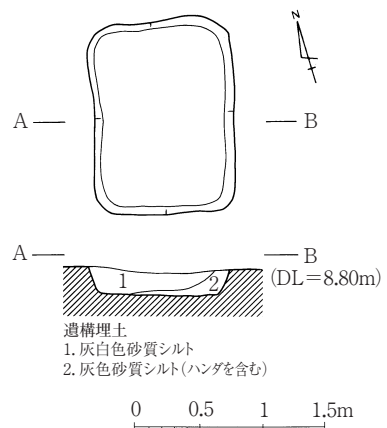
**SK-3060**

調査区南東部で検出した楕円形の土坑である。長径2.30m、短径2.25m、深さ26cmを測り、長軸方向はN-56°-Wを示す。断面は舟底形を呈し、底部には幅約0.30~0.80m、深さ5cmの溝がめぐ

る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片1点がみられたが、復元図示できなかった。

**SK-3061** (Fig.212)

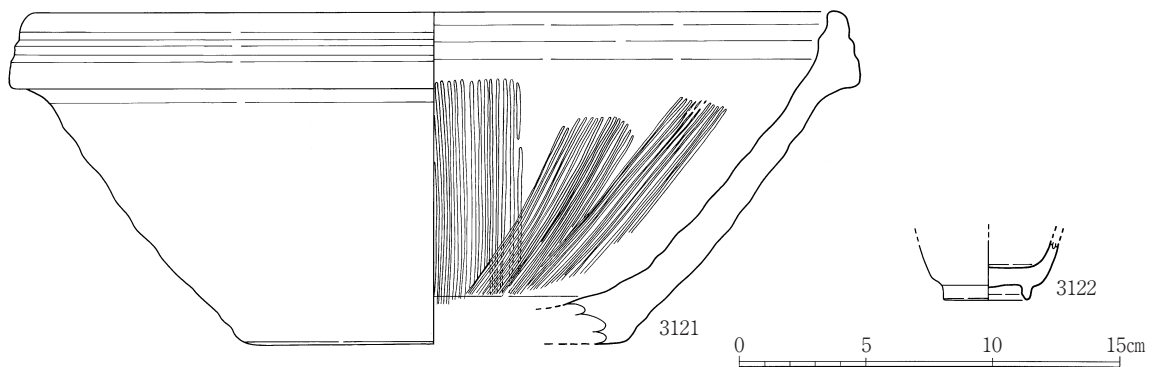
調査区南東部で検出した隅丸方形のハンダ土坑である。長辺1.58m、短辺1.13m、深さ27cmを測り、側面と底部はハンダで固められていた。長軸方向はN-81°-Wを示す。断面は逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色砂質シルト、下層がハンダを含む灰色砂質シルトであった。近代の遺構とみられる。出土遺物は皆無であった。



**Fig.212** SK-3061

**SK-3062**

調査区南東部で検出した円形の土坑で、径1.21m、深さ9cmを測る。断面は舟底形を呈し、底部には幅約20cm、深さ3cmの溝がめぐる。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には瓦器片1点、土師質土器片6点、近世磁器1点がみられ、近世磁器(3122)が図示できた。



**Fig.213** SK-3057・3062出土遺物実測図

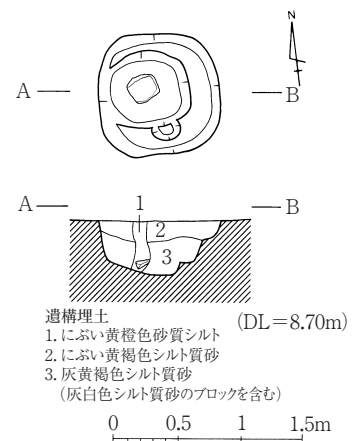
出土遺物

近世磁器 (Fig.213-3122)

3122は小杯で、底部と体部の約3/4が残存し、底径3.3cmを測る。底部には直立する削り出し高台を有し、体部は真っすぐ伸びる。器面には灰白色の釉を薄く施し、畳付は釉ハギを行う。胎土は密で、黒色粒を含み、焼成は良好である。

**SK-3063** (Fig.214)

調査区南東部で検出した隅丸方形の土坑である。長辺0.96m、短辺0.92m、深さ46cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。柱穴とみられ、柱根部分は径10cmを測り、埋土はにぶい黄橙色砂質シルトであった。掘方は断面が逆台形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色シルト質砂、下層が灰黄褐色シルト質砂で、灰



**Fig.214** SK-3063

白色シルト質砂のブロックを含んでいた。出土遺物には土師質土器片8点、近世陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

**SK-3064**

調査区南東部で検出した楕円形の土坑である。長径1.55m、短径1.40m、深さ33cmを測り、長軸方向は方眼東を向く。断面は舟底形を呈し、埋土は2層に分かれ、上層が灰白色シルト質砂、下層が灰黄色砂質シルトであった。出土遺物には東播系須恵器片3点、土師質土器片16点、白磁片1点、近世陶器片1点がみられたが、復元図示できるものはなかった。

iii 畝状遺構

**SU-3001** (Fig.215)

調査区北西部で検出した畝状遺構で、畝間の痕跡を5条確認した。長軸方向はN-7°-20°-Eで、検出長20.24m、幅0.20~1.18m、深さ1~13cmを測る。畝間は1.05~1.95m間隔でばらつきがあり、畝幅は0.70~1.30mとみられる。埋土は灰白色シルトで、マンガンを含んでいた。出土遺物には須恵器片2点、土師質土器片15点、瀬戸焼片1点、常滑焼1点、瓦質土器片4点、白磁片1点、土製品1点がみられ、常滑焼(3123)、土製品(3124)が図示できた。

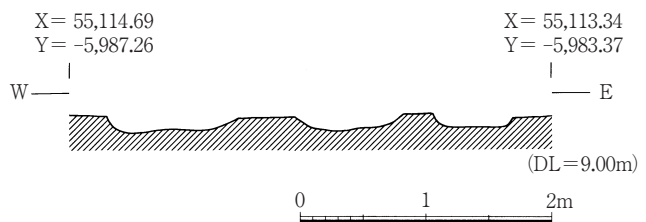


Fig.215 SU-3001

出土遺物

常滑焼 (Fig.216-3123)

3123は甕で、口縁部の一部が残存する。口縁部はT字が倒れた形態を呈し、器面には回転ナデ調整を施す。胎土はやや密で、焼成はやや良好である。

土製品 (Fig.216-3124)

3124は紡錘形の土錘で、一部が欠損する。全長4.4cm、全幅1.2cm、孔径0.3cm、重量4.6gを測り、全面にナデ調整を施す。

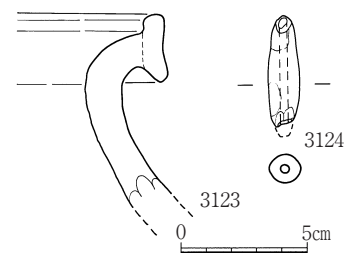


Fig.216 SU-3001  
出土遺物実測図

iv ピット

**P-3014**

調査区南東部で検出した不整楕円形のピットで、長径48cm、短径28cm、深さ46cmを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトであった。出土遺物には土師質土器片3点、近世陶器1点がみられ、近世陶器(3125)が図示できた。

出土遺物

近世陶器 (Fig.217-3125)

3125は唐津焼の皿で、口縁部の約1/5が残存し、口径11.4cmを測る。体部は直線的に伸びて口

縁部に至る。内面から体部外面まで灰釉を薄く施し、底部外面は露胎である。胎土は密で、焼成は良く、釉調は灰オリーブ色、生地は灰色または黄橙色を呈する。

#### P-3015

調査区南西部で検出した楕円形のピットで、長径28cm、短径22cm、深さ33cmを測る。埋土は灰白色粘土質シルトであった。出土遺物には図示した石製品（3126）のみがみられた。

#### 出土遺物

石製品 (Fig.217-3126)

3126は砥石で、一部が欠損し、全長9.1cm、全幅4.8cm、全厚4.8cmを測る。残存部で4面に使用痕がみられる。石材は砂岩である。

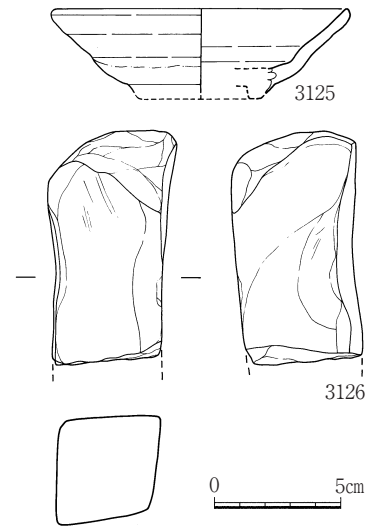


Fig.217 P-3014・3015  
出土遺物実測図



## 第Ⅳ章 考察

### 1. 中世について

中世の遺構は第Ⅱ調査地区で特に多く検出された。なかでも南北に走る溝跡によって大きく3つに分けられる。A区南東部で検出したSD-2001・2002, A区中央部で検出したSD-2003・2004, SD-2011は幅や規模は異なるものの、長軸方向がN-7~12°-E, 溝跡の間隔が17~20mを測り、ほぼ一定の間隔をもって並走している。これらの溝跡の時期についてみてみると、SD-2004からは播磨型の土師質土器の釜や無文の龍泉窯系の青磁碗, その他白磁碗や石鍋も出土しているが、概ね15世紀に埋没したとみられる。SD-2011は外面に格子状のタタキ目が残る土師質土器の鍋などが出土しており、15世紀から16世紀とみられ、これらの溝跡が同時期に存在していたと考えられる。また、企画性をもった溝跡とみられ、屋敷の区画溝と考えられる。

東西を区画する溝跡は明確でないものの、SD-2009・2010が東西の区画溝として北と南に屋敷地が存在したと考え、南の屋敷地は東西が約20m, 南北が28m以上, 北側の屋敷地は東西が約20m, 南北が22m以上と考えられ、いずれも南北に細長い屋敷地と推察される。また、遺構が削平を受けた可能性もあるが、第Ⅱ調査地区(B区西部)で検出した東西の溝跡SD-2018~2020と南北の溝跡SD-2017・2021を屋敷の南東の隅を区画する溝跡と考え、東西が15m以上, 南北が25m以上の規模になるとみられる。

掘立柱建物跡については、柱穴とみられるピットが非常に多くみられ、幾度となく建て替えを行っていることがわかる。比較的規模の大きいSB-1001・1005・2012・3003・3006などが母屋とみられ、ほぼ区画溝を意識した配置となっているが、規模や柱間寸法にはばらつきがみられ、統一性はみられない。後述するが、集落の存続時期が長く、時期幅があることも関連するとみられる。

次に、土坑について若干触れる。SK-2027~2029は第Ⅱ調査地区(A区北部)の屋敷地内で検出された土坑であるが、いずれも不整形を呈するもので、それぞれ宋銭が1枚出土している。ちょうど柱穴が少ない部分であり、屋敷墓の可能性も考えられる。

出土遺物についてみてみると、国内の広域流通品では東播系須恵器, 瓦器, 備前焼, 常滑焼, 瀬戸・美濃系陶器などがみられる。東播系須恵器と瓦器は土佐市バイパス関連遺跡では一定量出土しており、京間遺跡においても同様の状況がみられる。京間遺跡では特に東播系須恵器の出土が目立ち、瓦器の出土は比較的少ない。瓦器はⅢ期<sup>(1)</sup>のものがほとんどであるが、Ⅳ期とみられるもの(2196)も1点出土している。備前焼は播鉢のみがみられ、Ⅳ期<sup>(2)</sup>以降のものであり、量的には林口遺跡には及ばないが一定量出土している。常滑焼は甕のみで、図示できた4点は6b~8型式<sup>(3)</sup>に収まり、土佐市においては天神遺跡で3点, 林口遺跡で3点, 野田遺跡で1点がみられ、点数は少ないものの京間遺跡の周辺の遺跡には数点の出土がみられる。古瀬戸については卸皿の破片が出土しているが図示できるものはなく、大釜期のもものが若干量出土している。貿易陶磁器については白磁はⅣ類の玉縁の碗のほか、Ⅸ類<sup>(4)</sup>の皿や林口遺跡でも出土している多角形皿(3114)が極少量であるがみられ

る。青磁はⅠ類とⅣ類の碗、稜花皿や盤が2点出土している。また、特異なものとして大和型の土師器の甕や手づくね土器が出土している。3021は大和型の土師器の甕で、胎土からも高知で作られたとは考えられず、搬入されたと思われるが、土佐では初めての出土である。手づくね土器の皿は2点が出土している。土佐市においては林口遺跡で1点みられるのみで、物部川流域では普遍的な存在であるのに対し、土佐市においては非常に稀である。最近の調査で日高村千本杉遺跡<sup>5)</sup>から手づくね土器がまとまって出土しており、そのことを踏まえた上で、土佐市における手づくね土器の意義について今後検討していく必要がある。

これらの遺物から概ね12世紀末から16世紀にかけて集落が連綿と続いていたことが窺われ、隣接する野田遺跡と同じ時期に存在していたと言える。また、16世紀には長宗我部氏による地検が行われており、その記載と照らし合わせてみることにする。第Ⅰ調査地区は字南京間、第Ⅱ調査地区は字京間、第Ⅲ調査地区は字西裏と摺木にあたる。地検帳<sup>6)</sup>には「キヤウマ」「京満」「ケウマ」という記載があり、京間にあたると思われる。また南京間という記載は見当たらず、地検を行った順を追っていくと、京間と同じ「ケヤウマ」「京満」「ケウマ」に相当するとみられる。「ケヤウマ」「京満」「ケウマ」には上屋敷、中屋敷、下屋敷が比較的多くみられ、遺構が最も多く検出された第Ⅱ調査地区の状況や、第Ⅰ調査地区で16世紀後半の遺物が比較的多く出土した状況と一致する。それに対し第Ⅲ調査地区の西裏と摺木は下畠または下々畠や荒れ地という記載がみられ、16世紀後半の遺物が少なかったことから理解できる。また第Ⅰ調査地区の南側での試掘調査で遺構が確認されなかった字京間前にあたると思われる「キヤウマノ前」には下畠または下々畠の記載のみであり、考古学的な成果と一致していると言えよう。

## 2. 近世について

近世の遺構は第Ⅰ調査地区で特に多く検出され、第Ⅱ調査地区で検出した中世の区画溝と同様な南北に走る溝跡を確認している。調査区南東部で検出したSD-1008と調査区北部で検出したSD-1010・1011は長軸方向がN-3°-E前後で並走し、その間隔は約30mを測る。第Ⅱ調査地区で検出した近世の溝跡が中世の区画溝を踏襲していることや、中世の区画溝と若干のずれはあるものの北を指向しており、東西の区画溝がみられない点など共通する部分もあり、中世から近世を通して土地の区画を踏襲していた可能性が考えられる。第Ⅰ調査地区においては現在の排水溝によって南北に二分されているが、この排水溝とSD-1011が並走することからも、中世から現在まで土地の区画がほとんど変わっていないとみられる。また、SD-1011の出土遺物についてみると、埋没時期は近世後期に下ると考えられるが、大釜期とみられる天目茶碗が3点と砂目痕がみられる唐津焼の皿が2点など中世末から近世初期にかけての遺物も少なからず含まれており、長期間溝を使用していた可能性も考えられる。

掘立柱建物跡についてみると、溝跡で区切られた範囲にそれぞれ掘立柱建物跡が集中する箇所がみられる。掘立柱建物跡はすべて区画溝を意識しているとみられ、区画溝とほぼ同じ方向を向いている。母屋とみられるSB-1017・1018・1020・1022・1026・1027などは1×4~5間の東西棟で、中世に比べると企画性が見て取れる。また、第Ⅲ調査地区で確認した掘立柱建物跡SB-3007

～3009はいずれも1×2間の小型のものである。SB-3009内部には作業土坑とみられるSK-3057があり、覆い屋と考えられ、隣接して畝状遺構が確認されていることからSB-3007・3008は住居というよりは、作業小屋や倉庫的な建物跡とみられる。

出土遺物についてしてみると、近世初期の遺物の出土が注目される。砂目痕が残る唐津焼の皿が11点、胎土目痕が残るものが2点出土しているが、その内第Ⅰ調査地区では砂目痕が残るものが10点出土しているほか、初期伊万里の碗(1066)もみられる。第Ⅰ調査地区では16世紀後半の大釜期の遺物がみられることから、16世紀後半から17世紀前半にかけては、集落の中心が京間遺跡南部に移ったとみられる。胎土目痕が残る唐津焼は土佐市においては野田遺跡と林口遺跡でも出土している。胎土目痕が残る唐津焼が出土する遺跡は土佐では中世後期段階には城館・屋敷跡・寺院・津等に関連する遺跡かその周辺とみられる。<sup>(7)</sup>また、初期伊万里の碗が出土する遺跡はさらに限定され、城郭や上級武家屋敷跡、中世段階に城館や屋敷地に関連した遺跡とされ、県内では高知城跡、後藤家屋敷跡、屋舗田丸遺跡、林口遺跡で出土しているのみである。京間遺跡で初期伊万里の碗が出土していることからみて、京間遺跡の周辺に上級武家屋敷が存在した可能性が考えられる。

また、18世紀から19世紀にかけての遺物は調査対象地のいずれからも出土しており、特に第Ⅱ調査地区の北部では肥前系または瀬戸・美濃系陶磁器や能茶山焼が多く出土している。この時期には京間遺跡の中央部を中心に広範囲に集落が広がったものとみられる。

### 3. 井戸跡について

第Ⅰ調査地区の南東部で石組井戸(SE-1001)を確認している。SE-1001は河原石を螺旋状に積み上げ、井筒には曲物が使われていた。石組井戸は県内でも田村遺跡で15基<sup>(8)</sup>、土佐国衙跡で1基<sup>(9)</sup>、上美都岐遺跡で1基<sup>(10)</sup>、ムク入道遺跡で1基<sup>(11)</sup>、林口遺跡<sup>(12)</sup>で1基など多く確認されており、河原石を螺旋状に積み上げる工法は中世後期から近世を通してみられるようである。これらの内井筒に曲物を用いているものはムク入道遺跡のみであり、京間遺跡が2例目となる。井戸の構造の違いは地盤の土壌の違いや、湧水点までの深さ、所有者の違いなども考えられよう。出土遺物を見ると、18世紀に入るとみられるものが含まれてはいるが、瀬戸・美濃系陶器や備前焼など16世紀後半の遺物から17世紀代で収まる遺物がほとんどであり、中世末に築造され近世前期を通して使用されたと考えられる。

### 4. 窯跡について

京間遺跡では焼土を伴う土坑が5基(SK-1033・1038・1039・1041・2115)確認されている。平面形態はだるま形を呈し、床面と側面には焼土がみられ、側面がオーバーハングしているものや煙道とみられる突出した部分を有するものもみられた。いずれも天井部が残存したものはないが、隣接する野田遺跡においては天井部が残存しているものが2基確認されており<sup>(13)</sup>、それは床面から天井部までの高さが20cm前後を測る。また、煙道がみられるものがあり、側面から湾曲して上方に立ち上がる方形のもので、壁面には焼土がみられた。これらの窯とみられる土坑はすべて屋敷地内で検出されており、平地式の簡易なものであると考えられる。出土遺物は破片のみで図示できるものはないが、埋土からは瓦質土器や青磁、唐津焼とみられる陶器が出土している。県内ではこのような平地

式の窯跡は確認されておらず、用途や時期については判然としない。小規模であり、比較的低温で被熱したとみられることから、土師質土器の焼成に伴うものである可能性が考えられるのではなかろうか。興味深い事としては、長宗我部地検帳の「京満」の部分に「番匠七良大良居」という記載がみられ、大工等の職人が居住していた可能性がある。また、調査地内からは鉄滓の出土が多くみられたことも窯跡と何らかの関連があるのかもしれないが、今後の類例の増加を期待したい。

## 5. まとめ

京間遺跡は土佐市バイパス建設に伴って行われた試掘調査で確認された遺跡であり、平成12年に初めてその存在が明らかとなった。隣接する野田遺跡や光永・岡ノ下遺跡と同様に南北に長い自然堤防上に立地する遺跡である。京間遺跡では中世以前の遺物が出土しておらず、集落の成立は12世紀後半で、その後17世紀まで連綿と集落が存続していたとみられる。林口遺跡や天神遺跡、野田遺跡、光永・岡ノ下遺跡などの土佐市バイパス関連遺跡ではすべて12世紀後半には溝で囲まれた屋敷跡が成立しており、その内17世紀まで集落が存続するのは林口遺跡と野田遺跡、京間遺跡である。林口遺跡は林口城跡の存在やホノギに「御所の内」や「和田屋敷」などの名前が残っており、また、野田遺跡についても「白石土居」というホノギがみられ、名主層や土豪、豪農といった一般の集落とは異なる屋敷であると考えられる。京間遺跡については屋敷に繋がる地名は残っていないものの、出土遺物や集落の存続時期が長いことから同様の屋敷跡である可能性が高い。また、京間遺跡の北西部や野田遺跡の北側には「川原」や「野田川」といった川が付く地名が多く残っており、仁淀川やその支流が現在よりも西を流れていたとみられ、水運にも恵まれた土地であったことも集落が長期に互って存続した理由の一つであろう。

## 註

- (1) 尾上実・森島康男・近江俊秀「瓦器碗」『概説 中世の土器陶磁器』中世土器研究会 1995年
- (2) 間壁忠彦・間壁葎子「備前焼研究ノート1～5」『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18号 倉敷考古館 1966～68・84年
- (3) 中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器陶磁器』中世土器研究会 1995年
- (4) 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年
- (5) 現在報告書作成中であり、平成16年3月に刊行予定である。
- (6) 『長宗我部地検帳 高岡郡 上の一』高知県立図書館 1963年
- (7) 浜田恵子「高知県」『国内出土の肥前陶磁器 第一分冊』九州近世陶磁学会 2002年
- (8) 『田村遺跡群』第6～10分冊 高知県教育委員会 1986年
- (9) 『土佐国衙跡発掘調査報告書第4集』一府中・太郎ヤシキ地区の調査一 1983年
- (10) 『上美都岐遺跡』佐川町教育委員会 1997年
- (11) 『天神遺跡Ⅰ・林口遺跡Ⅰー土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』高知県教育委員会・財高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年
- (12) (11)に同じ
- (13) 現在報告書作成中であり、平成16年に刊行予定である。

**参考文献**

『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会 1994年

『シンポジウム 中世土器研究の今日的課題－土器編年と中世史研究』日本中世土器研究会 2003年

『全国シンポジウム 「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994年

『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム資料集』2001年

圖 版



第 I 調査地区画像平面図 (S=1/500)



第 I 調査地区調査前風景（南より）



第 I 調査地区調査前風景（北より）





第Ⅰ調査地区北西部遺構検出状態（南より）



第Ⅰ調査地区北西部遺構完掘状態（南より）



第 I 調査地区西部遺構検出状態（南より）



第 I 調査地区西部遺構完掘状態（南より）



第Ⅰ調査地区中央部遺構検出状態（南より）



第Ⅰ調査地区中央部遺構完掘状態（南より）



第 I 調査地区北西部遺構完掘状態（真上より）



第 I 調査地区西部遺構完掘状態（西上空より）



第 I 調査地区下層確認トレンチ (南より)



第 I 調査地区北壁セクション (南より)

PL.8



SB-1027・1028 (北より)



SK-1042 (南東より)



SK-1053集石検出状態（北より）

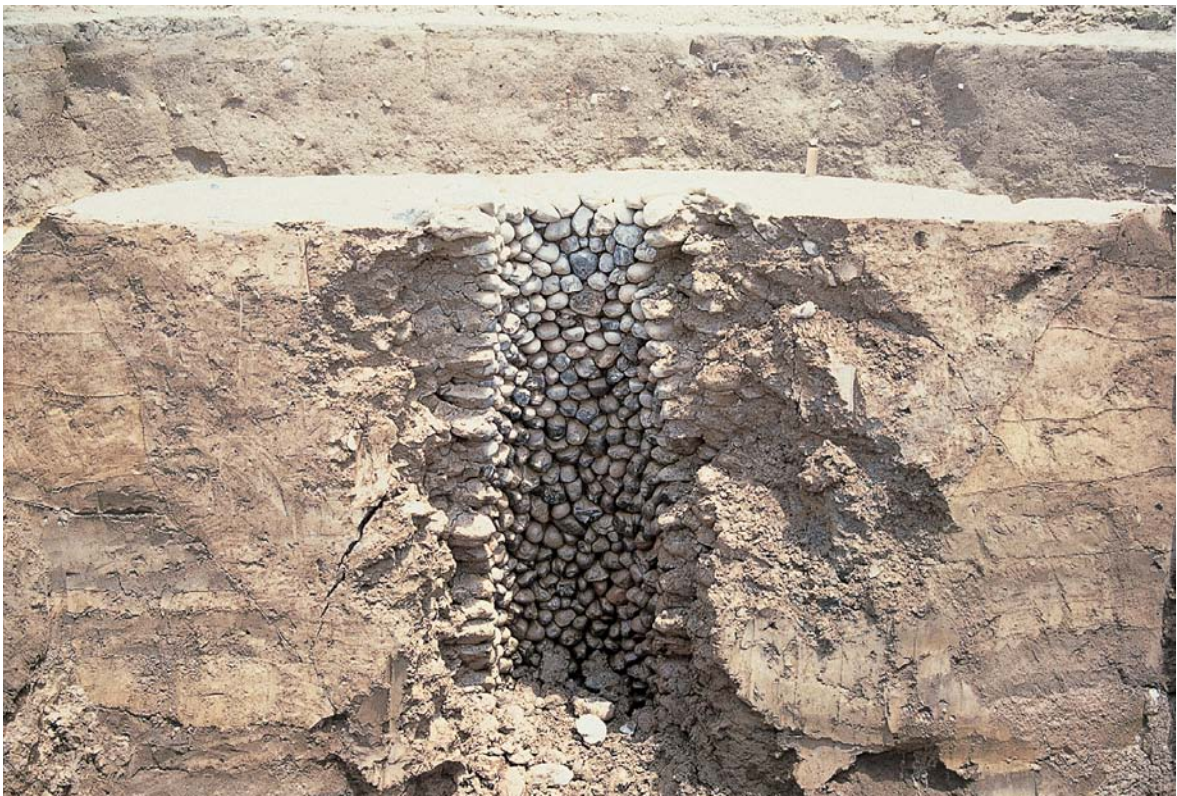


SD-1010・1011（南より）

PL.10



SE-1001完掘状態（真上より）



SE-1001半掘状態（北より）





SK-1023 (東より)



SK-1024 (東より)



SK-1042 (南西より)



SK-1045 (東より)



SD-1001 (西より)



SD-1010・1011 (南より)



SD-1012 (南より)



P-1006・1007 (西より)



SB-1015古銭(1045)出土状態(南より)



SB-1022鉄製品(1047)出土状態(南西より)



SK-1017土師質土器(1038)出土状態(西より)



SK-1022土師質土器(1039)出土状態(南より)



SK-1060古銭(1068)出土状態(北より)



SD-1007近世陶器(1071)出土状態(北より)



SD-1011近世陶器(1078)出土状態(北より)



SD-1011近世陶器(1080)出土状態(北より)



第Ⅱ調査地区(A区)画像平面図 (S=1/400)



第Ⅱ調査地区調査前風景（南より）



第Ⅱ調査地区調査前風景（北より）



第Ⅱ調査地区A区(北部)遺構検出状態(南より)



第Ⅱ調査地区A区(北部)遺構完掘状態(北より)



第Ⅱ調査地区A区(南部)遺構検出状態(北より)



第Ⅱ調査地区A区(南部)遺構完掘状態(北より)



第Ⅱ調査地区A区(北部)遺構完掘状態(北上空より)



第Ⅱ調査地区A区(南部)遺構完掘状態(北上空より)



第Ⅱ調査地区B区(東部)遺構検出状態(南より)



第Ⅱ調査地区B区(東部)遺構完掘状態(真上より)





第Ⅱ調査地区B区(西部)遺構検出状態(南東より)



第Ⅱ調査地区B区(西部)遺構完掘状態(東上空より)



第Ⅱ調査地区C区遺構検出状態（南より）



第Ⅱ調査地区C区遺構完掘状態（南より）



第Ⅱ調査地区東壁セクション1 (西より)



第Ⅱ調査地区東壁セクション2 (西より)

PL.22



SD-2004 (南より)



SD-2011 (北より)



SK-2032 (西より)



SK-2037 (東より)



SK-2053 (南より)



SK-2055 (西より)



SK-2079 (西より)



SK-2092 (西より)



SK-2098 (南より)



SK-2104 (南より)



SK-2105 (東より)



SK-2106 (西より)



SK-2114 (南より)



SD-2024・2025・2027 (南より)



SD-2026 (南より)



SD-2018・2019 (西より)



SB-2006土師質土器(2097)出土状態(南より)



SK-2098近世陶器(2202)出土状態(南より)



SK-2106土師質土器(2209)出土状態(西より)



SK-2107石製品(2211・2212)出土状態(南より)



P-2001土師質土器(2154)出土状態(西より)



P-2009土師質土器(2164)出土状態(北より)



P-2014瓦質土器(2170)出土状態(東より)



P-2022古銭(2180)出土状態(東より)



P-2037土師質土器(2195)出土状態(東より)



P-2041土師質土器(2200)出土状態(南より)



第Ⅲ調査地区北西部遺構検出状態（東より）



第Ⅲ調査地区北西部遺構完掘状態（東より）





第Ⅲ調査地区北東部近世遺構検出状態（南東より）



第Ⅲ調査地区北東部近世遺構完掘状態（西より）



第Ⅲ調査地区北東部中世遺構検出状態（西より）



第Ⅲ調査地区北東部中世遺構完掘状態（西より）



第Ⅲ調査地区北東部中世遺構完掘状態（西上空より）



第Ⅲ調査地区遠景（西上空より）



第Ⅲ調査地区南部近世遺構検出状態（東より）



第Ⅲ調査地区南部近世遺構完掘状態（東より）



第Ⅲ調査地区南部近世遺構完掘状態（西より）



第Ⅲ調査地区南部中世遺構完掘状態（南西上空より）



第Ⅲ調査地区下層確認トレンチ（東より）



第Ⅲ調査地区南壁セクション（北より）



SB-3008・3009 (東より)



SK-3035・3036 (東より)



SK-3031 (東より)



SK-3049 (北より)



SK-3063 (南より)



SD-3010 (南より)



SK-3011礎板出土状態 (南東より)



SK-3025青磁(3084)出土状態 (南より)



P-3004土師質土器(3107)出土状態 (東より)

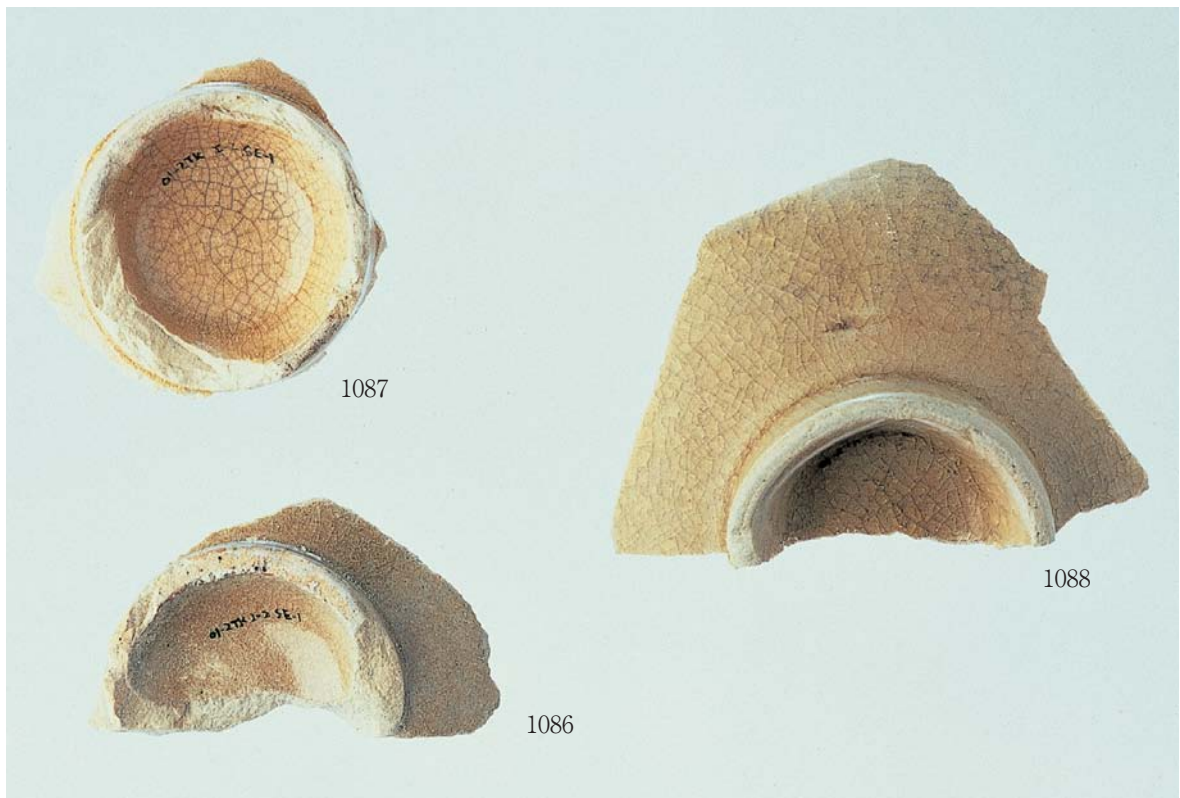


P-3007石製品(3110)出土状態 (南東より)





近世陶器 (皿)



近世陶器 (碗)



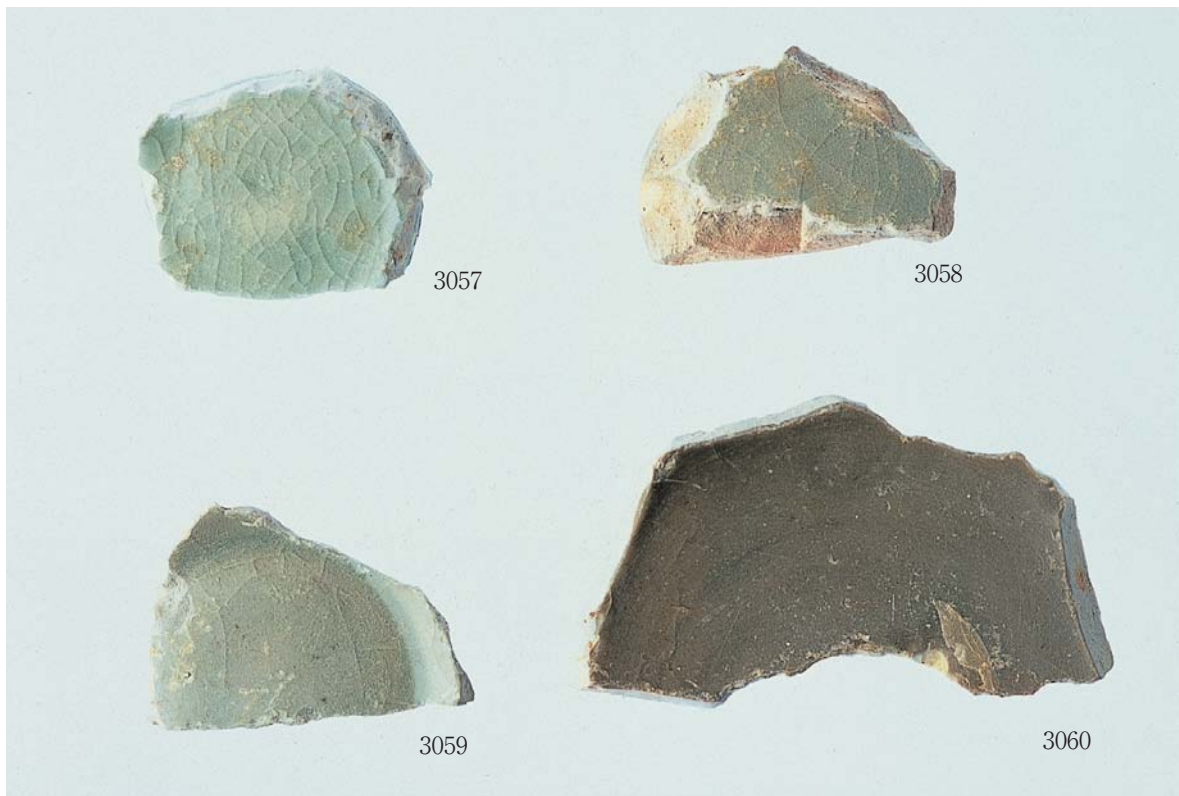
近世陶器 (皿)



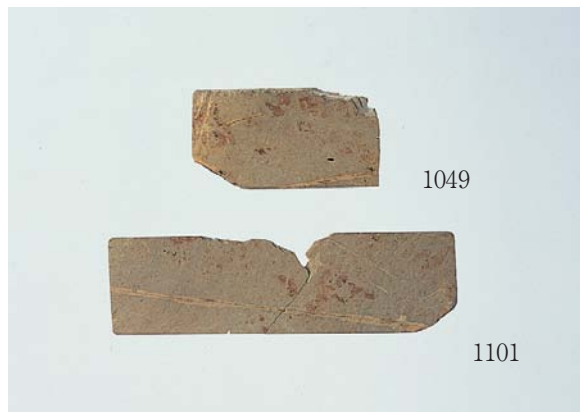
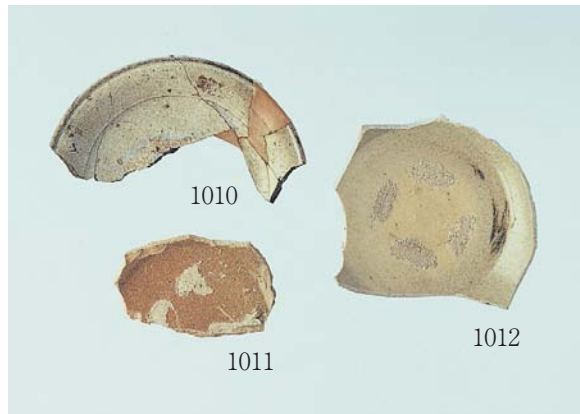
備前焼 (播鉢)



土師質土器 (鍋・羽釜)



青磁 (碗)



土師質土器(羽釜), 備前焼(掃鉢), 青磁(碗・稜花皿), 青花(皿), 近世陶器(皿), 石製品(砥石・五輪塔)



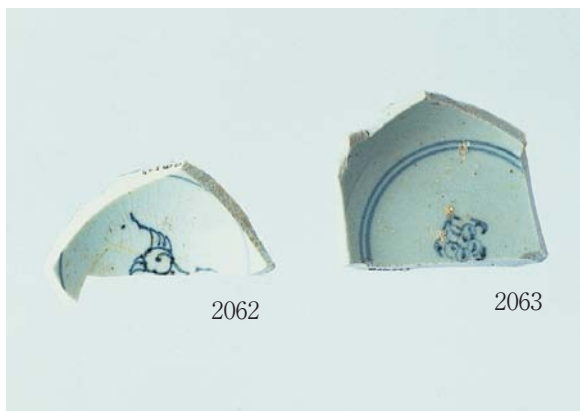
備前焼(擂鉢), 瀬戸・美濃系陶器(天目茶碗), 近世陶器(碗・皿), 近世磁器(小杯・皿・仏飯器)



土師質土器(鍋), 瓦質土器(羽釜), 青磁(碗), 近世陶器(皿・甕), 近世磁器(碗), 石製品(五輪塔)



須恵器(甕), 常滑焼(甕), 瓦質土器(羽釜・搗鉢), 近世磁器(碗), 土製品(土錘)



近世磁器(碗・皿・猪口)

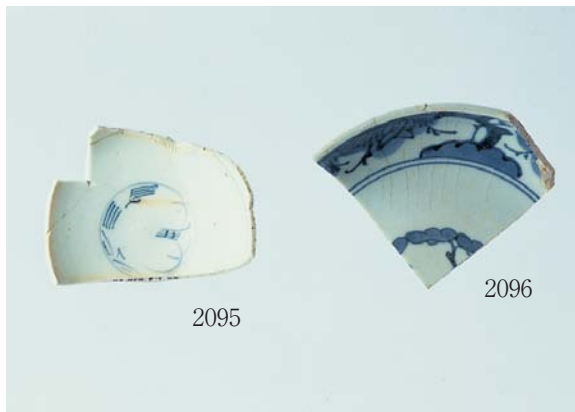




2093



2094



2095

2096



2098

2099



2100



2122

2123



2135

2136

2138



2145

2146

2147

東播系須恵器(片口鉢), 手づくね土器(皿), 備前焼(搦鉢), 瓦質土器(搦鉢), 白磁(碗), 青磁(碗), 近世磁器(碗・蓋・皿), 土製品(土錘), 石製品(石鍋)



瓦器(碗), 土師質土器(羽釜), 備前焼(鉢), 青磁(碗), 青花(皿), 近世陶器(皿), 近世磁器(碗), 土製品(土錘)



土師器(甕), 土師質土器(羽釜), 白磁(碗・皿), 近世陶器(碗・皿), 近世磁器(碗), 石製品(石鍋)



東播系須恵器(片口鉢), 常滑焼(甕), 備前焼(搦鉢), 白磁(碗・杯), 青磁(碗), 石製品(砥石)



土師質土器(杯), 近世磁器(小杯), 土製品(土錘)



土師質土器(杯), 近世磁器(碗), 古錢, 鉄製品(刀子)



土師質土器(杯・小皿)，瀬戸・美濃系陶器(皿)，青磁(盤)，青花(皿)，近世陶器(皿)，石製品(砥石)

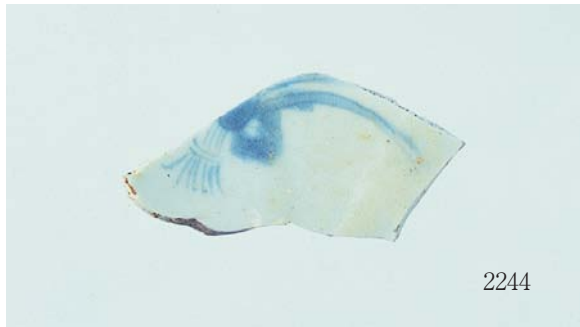


土師質土器(小皿・炮烙), 青磁(盤), 近世陶器(碗), 古錢





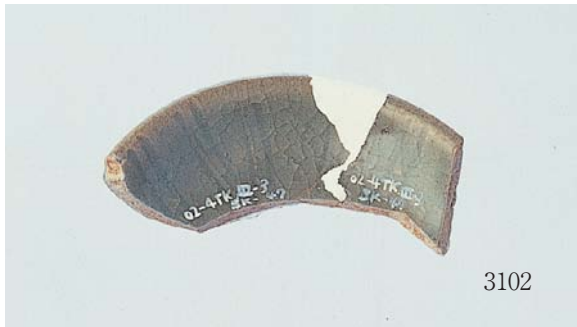
土師質土器(杯·小皿), 瓦質土器(羽釜), 土製品(土錘), 石製品(砥石), 古錢



土師質土器(杯・小皿)，瀬戸・美濃系陶器(皿)，近世陶器(皿)，近世磁器(皿)，古銭，鉄製品



土師質土器(杯·小皿), 青花(碗), 近世磁器(紅皿), 土製品(土錘), 古錢



東播系須恵器(碗), 土師質土器(杯・小皿), 青磁(皿), 古錢, 銅製品(簪・煙管), 鐵製品(釘)

報告書抄録

ふりがな	きょうまいせき							
書名	京間遺跡							
副書名	土佐市バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	VI							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第89集							
編著者名	廣田佳久・田中涼子							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	高知県南国市篠原南泉1437-1							
発行年月日	2004年3月19日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北 緯 。 ’ ”	東 経 。 ’ ”	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きょうまいせき 京間遺跡	こうちけん 高知県 とさし 土佐市 たかおかちょう 高岡町	39205	050090	33° 29' 59"	133° 26' 02"	20010119 ) 20010308 20010521 ) 20010710 20010730 ) 20011109 20020626 ) 20021028 20030506 ) 20030630	8,270	土佐市 バイパス 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
京間遺跡	集 落	中 世		掘立柱建物跡 44棟	堀 跡 50条	土師質土器 瓦器 東播系須恵器 瓦質土器 備前焼 常滑焼 白磁 青磁 石鍋	中世から近世に かけての掘立柱建 物跡を復元し、溝 で区画された屋敷 跡を確認した。 近世では石組の 井戸跡を確認した ほか、唐津焼や初 期伊万里焼、瀬 戸・美濃系陶器、 能茶山焼など多く の近世陶磁器が出 土している。	
		近 世		掘立柱建物跡 25棟	堀 跡 12条	肥前系陶器 瀬戸・美濃系 陶器 近世陶磁器		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第89集

---

## 京 間 遺 跡

土佐市バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ

---

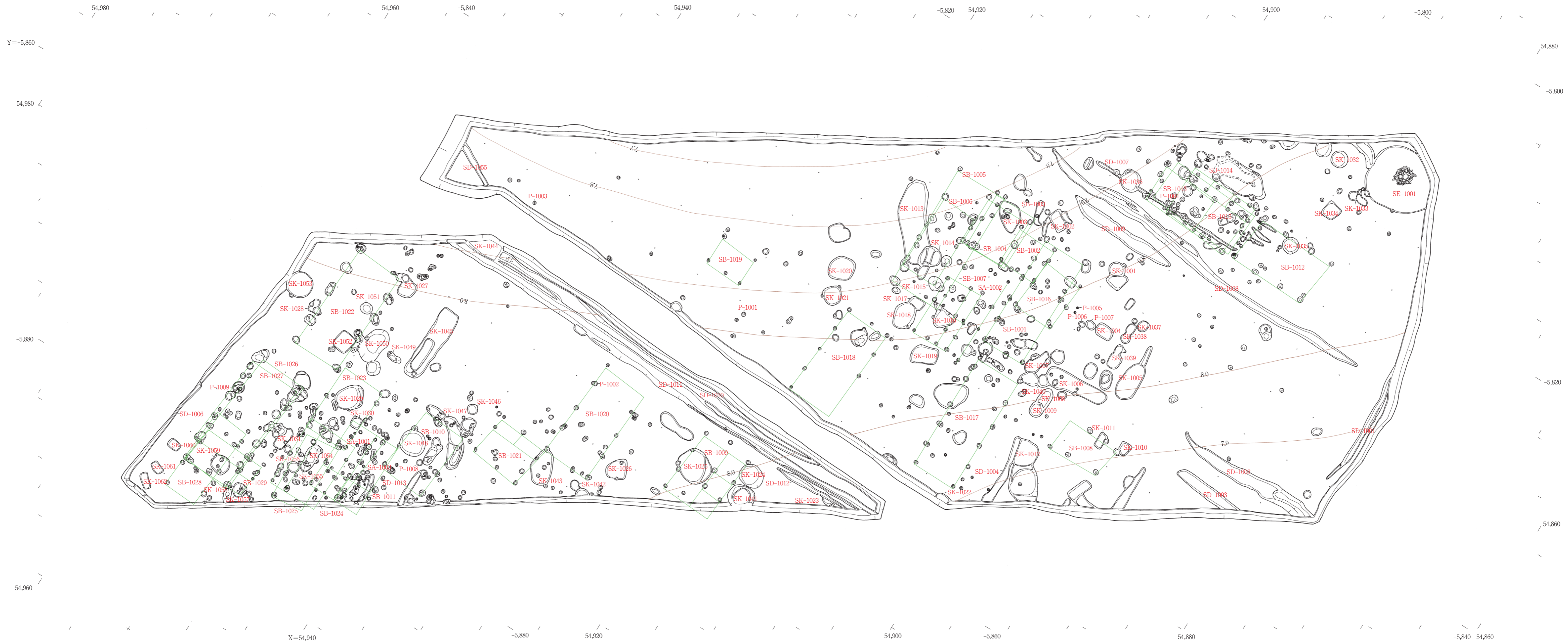
2004年3月19日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

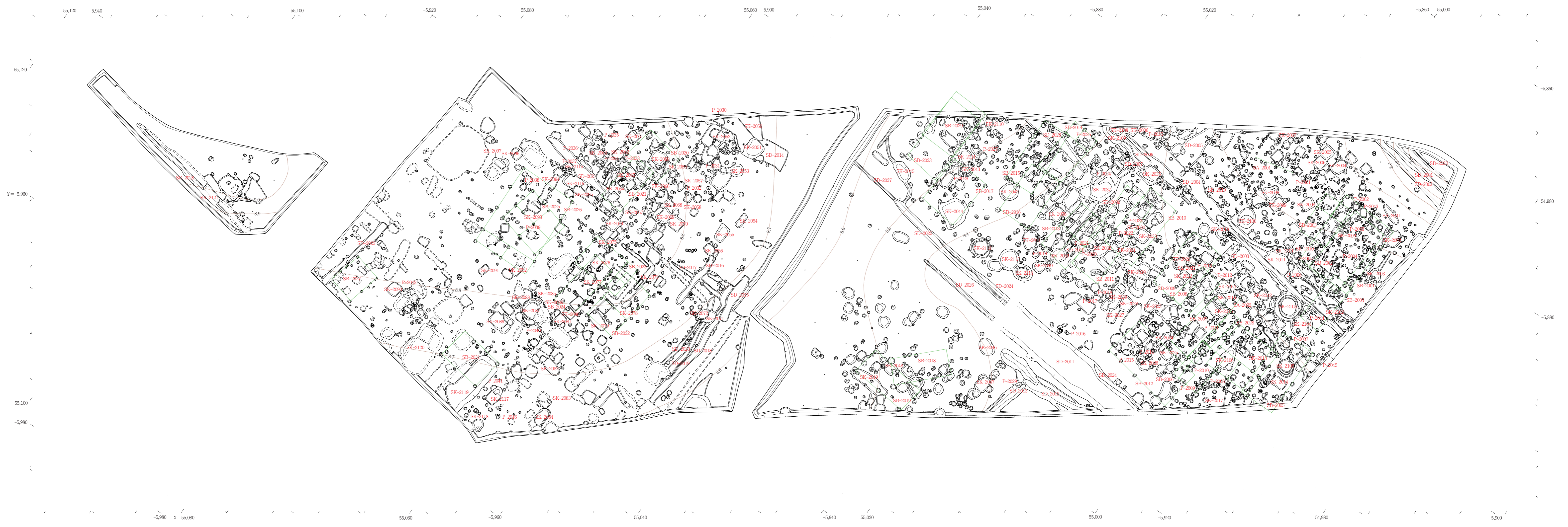
高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 川北印刷株式会社

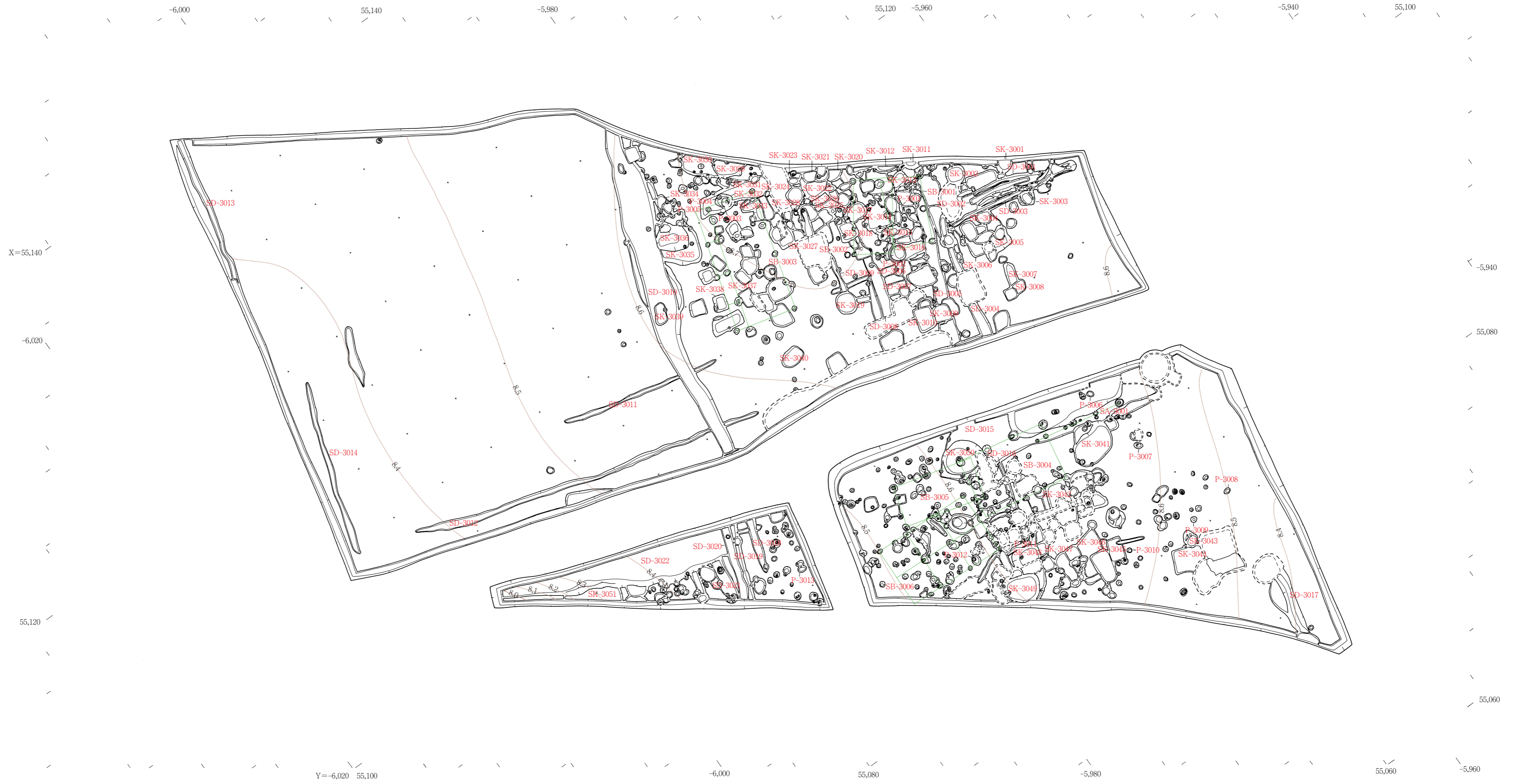


付図1 京間遺跡第I調査地区遺構平面図(S=1/200)

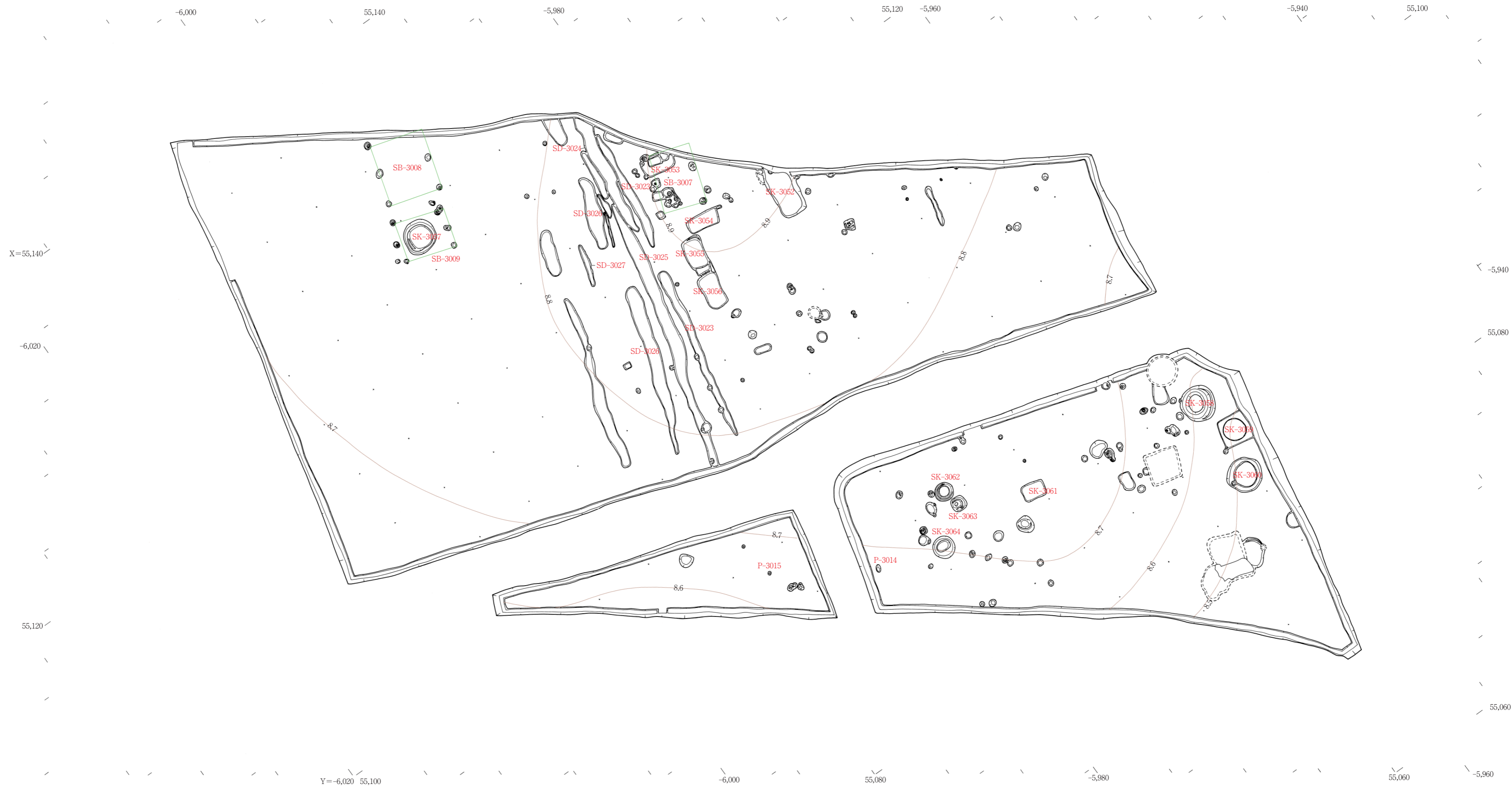


付図2 京間遺跡第Ⅱ調査地区遺構平面図(S=1/200)





付図3 京間遺跡第Ⅲ調査地区中世遺構平面図(S=1/200)



付図4 京間遺跡第Ⅲ調査地区近世以降遺構平面図(S=1/200)